

Sons of Skull—Rider

怪傑忍者猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

未確認生命体を殲滅。

そのお題目の元、行動を起こそうとした自衛隊の対未確認生命体過激派の研究拠点に、未確認生命体が押し寄せる。

救助の為、仮面ライダー達が現場に向かう。

また遅れてしまいました。

次は今月中にあげられると良いなあ。

黒子のバスケ×マスカレイドスタイル×仮面ライダーSPIRITSと
TSと言う多重クロスオーバー。

新シリーズ第七話。

このシリーズでは、色々新キャラクターが増えます。

後、この作中に出て来る各種組織は架空の存在であり、平成仮面ライダーTV及び劇場版で登場した組織を下敷きにした、怪傑忍者猫の創作です。

現実及び実在の組織関係者とは、名称が似ていたとしても一切関係ありません。

なお、この話は黒子のバスケと仮面ライダーSPIRITSの登場人物に、マスカレイドスタイルと言う同人TRPGをベースにした独自設定を付加した二次三次創作となります。

その為、原作の登場人物と家族設定などに改変があります。

また仮面ライダーの解釈にも、私家設定が前面に出てきます。

他にも作者設定のオリジナルキャラクターも何人か出てきますので、そういうものがお嫌いな方はこのままbrowserbackをしてください。

キャラクター改変がお嫌いな方も同様に願います。

尚、この話はmixi、pixivにも掲載しています。

目次

First chapter

episode 01 灰色バツタ | 1

episode 02 影薄い牙 | 11

episode 03 中間子は加速する | 20

episode 04 獣は餌を乞う | 31

episode 05 朝焼けの拳星 | 39

episode 06 疾風の記憶 | 51

Ex01 クウガとアギト

Exepisode 01-A 敗北 | 62

Exepisode 01-B 決意 | 75

Exepisode 01-C 新生 | 91

Second chapter メダルと勇気と

episode 01 零れ落ちる君 | 106

episode 02 合宿開始 | 118

episode 03 欲望のメダル | 129

episode 04 異形の実、果物武者 | 141

episode 05 新生とメダルと | 155

episode 06 合流、そして一触即発 | 168

episode 07 疾風の子供達 | 183

episode 08 灰色の真実と絆と | 197

episode 09 過去と未来と、今日と | 214

episode 10 脱出。そして時は進む。 | 228

Thread capture Let's Go! Maske

dRider's!!

予兆	382
蠢動	366
Fourth chapter TOKYO GUARDIAN	
episode 02 F 電王	361
episode 02 E ビースト	357
episode 02 D 555	349
episode 02 C キバ	346
episode 02 B クウガ	344
episode 02 A アギト	341
Ex 02 序奏と間奏	
15. そして日常に還る。	336
14. 正義の味方	330
13. ショッカーグリードの最後	325
12. 仮面ライダーの相棒	315
11. hurry up!	309
10. Revenge.	301
09. どん底より	297
08. 最悪の誕生	290
07. 思い出の味	284
06. 始まりの時代	278
05. 再び1971年へ	273
04. 時間の名残と奪還の為に	266
03. 変わり果てた世界で	257
02. 1971年、そして	253
01. 201X年3月11日、午後	247

殺到 急轉 克服 前觸 朱影

464 447 429 414 399

First chapter
episode 01 灰色バツタ

二〇うん年前、俺達の住む日本、いや世界は未曾有の危機つて奴に晒されていたそうだ。

否だつて、俺まだ生まれてなかったからそんなの良く判らねえ、大人からの受け売りつて奴だ。

とにかく、世界はバダンつて奴らに攻撃されて、日本はそいつらの前線基地にされそうになつてたんだとき。

でも、そうならなかったのは、日本を守ってくれた人達がいたからだ。

あ？ アメリカ軍？ 馬鹿じゃねえの？ アメリカ軍は、バダンが最初に一斉攻撃した時に軍事基地の殆どを潰されてマトモに機能してなかったし、最後の頃には、日本全土を核兵器で焼き払つてバダンを倒すつもりだったらしいぞ？

流石に国連から嚴重注意を食らつたらしいけど、あつちの軍人のまともにバダンとやり合わなかった面子は、未だに「核兵器使えば良かった」なんてほざいてるらしいけどな。

話は戻すけど、そうやつて俺達の爺さん婆さん、当時ガキだったお袋達の世代を守ってくれたのは、仮面ライダーつて人達と、Saving Project Incorporated with masked Rider on Immortal Soul、別名『バダンハンター』ことSPIRITS隊だよ。

あ、なんで細かく知ってるつて？ 尊敬してるからだよ決まってるじゃねえか。

あ？、ブラックサン、な。あの特撮は、仮面ライダーを見たその筋の人達が作ったらしいぞ。

おっちゃん達曰く、怪人がそれっぽいのはともかく、「仮面ライダー一〇人を一人に集約するとあなるのか」つて揃つて頭抱えてたのが印象的だったつけ。

あそこまでぶっ飛んで……たかどろか俺は知らないが、とにかく日本、いや世界は仮面ライダーつて人達と、SPIRITS隊によって救われたんだ。

……何だよ、俺がヒーロー語っちゃ悪いかよ。

まあ、俺が憧れてるのは仮面ライダーじゃなくつて、スカルライダーの方だけだな。

あ？ 特撮じゃねえよ、バダンと戦つて、今も平和の為に戦つてる正義の味方だぞ!?

パチツと目が開くと、薄青い東京の空が見える。

どうやら、青峰大輝に殴られ少し意識が飛んでいたらしい。

「だあ、ダイキの奴、何考えてんだよ、殴つて放置して、普通の奴だと低体温症で救急車だぞ、全く」

そうぼやきながら、コーンロウと言う敵つい頭の青年、いや少年は、一〇分程前に殴られた頬を撫でつつ起き上がり胡座を搔いた。

その少年の背後に、かざりと音を立てて近付く者がいる。

気が付いていないと思つているその影は、ニンマリと笑つて大振りなUSBメモリのようなものを取り出した。

だが、そのスイッチを入れる前に、胡座を搔いたままの彼は振り向くことなくこう言い放つた。

「よう、やっと来たかよ、黄瀬涼太のストーカーさんよ」

「!？」

驚くその人物を、少年——灰崎祥吾は肩越しに振り返つてにっこ笑つて見せた。

そこに立っていたのは、ある意味祥吾の予想通りの人間だった。

所謂良いトコのお嬢さんで、よく言えば控えめ、ぶっちゃければ地味な、クラス委員でもやってそうな優等生らしい女の子。

でも、眼鏡越しのその瞳は、何処か常軌を逸した色を帯びていた。

「最近、噂になってたんだよな、モデルのキセリヨのフアンの女の子の間で怪我人が出てるつてのと、対戦校の選手で黄瀬とマッチアップしたり接触のあった奴が、何者かに襲われて選手生命に不安の残るよう

な怪我をしてるって」

「そ、それは」

「後、海常の選手が話してるの聞いたぜ？」

怪我してるフアンの子が、必ず一人の女の子に絡んでイチャモン付けてたってよ。

つまり、それあんただろ？」

ズバリと言い切られ、少女に動揺が走る。

どっこらせと立ち上がり、祥吾はその子が握り締めるメモリを見て眉を顰めた。

骸骨を思わせる装飾のそれに、祥吾は舌打ちを隠せない。

「T-Oメモリか。またアブねえもんに手を出しやがって。

おら、寄越せよそれ。んでこれからは、リョータの事を純粹に応援してやれ」

「何よ、あんた、黄瀬君の足を踏んだ癖に！」

「おう、踏んだぜ。

そうすりゃ、お前さんが来ると思ったからよ」

祥吾の言葉に、少女ははつとなる。

目の前の如何にもDQNな不良が、自分を填めたと言う事実に変更で気付いたのだ。

「あんた、一体何者なの！」

「あー、お節焼きだよ、只のな」

立ち上がり、近付いて来る「黄瀬君に怪我させた相手」に、少女は怒りの形相も激しく喚き散らした。

「いい気にならないでよね！」

こいつを使えば、私は無敵なんだから！」

「あ、バカー！」

BAT!

ガイアウイスパーと共に、袖口に隠れていた手首の生体コネクターにメモリを刺した少女の姿は、見る見るうちに腕に皮膜を持つ怪人に変わった。

姿が変わった事で更に気が高ぶったのか、少女だったものは勝ち誇

り牙を剥いて笑った。

「ククク、リョータ君の足を踏んだお前の足を、私が踏み潰して上げる。」

リョータ君を踏んだんだもの、当然よね！」

「だあ！」

あーあ、完全に中毒になってやがる。

お前、自分が何やってんのか、判ってんのかよ」

「なあに、今更命乞い？」

「ハッ、まさか」

数歩手前で立ち止まり、『キセキの成り損ない』と呼ばれる少年は鼻を鳴らしつつこう言った。

「お前、お前がやってる事が公になった時、リョータの迷惑になるとは思わない訳か？」

「どうしてそんな話になるのよ、私はリョータ君の為に！」

「対戦相手、しかも負けた相手の選手が怪我した、それもキセリヨのファンの女が手を下したってなった時、仲間を怪我させられたチームの奴らに恨まれるのは確実にキセリヨだ。」

あんた良いのかよ、あんたの軽率な行動で、リョータは公式戦に出られなくなる事になるかも知れねえんだがよ」

「何でそんな話になるのよ！」

悪いのはリョータ君にぶつかった方じゃない！ あの綺麗な体に傷作る奴の方が悪いのよ！」

「同じように応援している女の子が、怪人物に襲われて怪我したって知ったら、リョータはその子達を心配すると思うし、女の子に怪我させた奴の事を怒ると思わないのか？」

「あんな下品で、自分勝手な人達が怪我したからって、リョータ君が気にする訳ないじゃない。」

現に、今あの人達が来てない事に、リョータ君は気付いてないし気にもしてないわ」

打てば響くような怪物女——バットドーパントの言葉に、祥吾は溜息が止まらない。

自分の言葉がブーメランである事に、彼女は一切気付いていないのだろうか。

「そりゃ、お前さんもだろう?..」

「何ですって?..」

「だから、リョータはあなたの事なんざ知らないだろうし、あなたと目が合って笑い掛けた事があったとしても、そりゃ唯のフアンサービス、あなたに特別な思いがあつてやった事じゃねえよ」

「!?」

祥吾の言葉に、バットドーパントは一瞬身を竦ませ、そしてぎつと殺意と共に彼を睨み付けた。

「何だ、判つてたのか」

「煩い! 五月蠅い! ウルサイうるさいウルサイ!!」

叫ぶと同時に、ドーパントは右腕を振り翳し、腕に潜めていた短剣を伸ばした。

間髪飛び退いた祥吾の足元を、長さ五〇センチ程の刃が抉る。

見た目にそぐわぬ身軽さで、一気に五メートルほど後方へと逃れた祥吾は、ジャージの下から大振りな何かを取り出した。

「まったく、判つててやってる馬鹿には、お仕置きが必要だよなあ、まったくよお」

「アンタ、」

祥吾の腹部に当てられたそれは、音を立てて巻き付き、ベルトの様に固定される。

そして、反対の手に握られているのは、バットドーパントが使ったものよりはスリムで、薄緑色のしかし同じようなものだった。

それを見て、バットドーパントは鼻で笑った。

「ナニヨ、あなたもお仲間ジャナイ」

「ふざけんな、コウモリ女。俺をお前ら犯罪者と一緒にすんな」

HOPPER!

「俺あ、『仮面ライダー』だよ。

変身!」

腰に当てたベルト——ロストドライバーにメモリを挿すと、右手を

目の前に翳し、左手でメモリをスロットごと倒して起動させる。

一瞬類に文様が浮かび、それを覆うようにスーツに包まれる。

メタリックなライトグリーン、胸部と手足には独特なライン——あの一瞬を見ていた人間なら、そのラインと頬に浮かんでいた文様が酷似している事に気付いただろう——が走っている。

そして東部は赤い複眼と角にも見える触覚、そして昆虫らしく見せる顎——クラツシャーと言う姿に、バットドーパントは戸惑ったように後退る。

「何よあんた、一体何のドーパントよ!」

「ドーパントじゃねえよ、俺は『仮面ライダー』、

『仮面ライダーホッパー』だよ」

そう言うと、祥吾、いやライダーは一瞬で距離を詰める。

掴まるまいと、腕のソードを振り回したバットドーパントは、普段は使わないようにしている殺人音波を吐き出そうとした。

だが、至近距離で吐き出された音波を、ライダーは飛び上がりドーパントの背後に降り立つ事で交わす。

「な!?!」

「人に来られちゃ不味いから、手早く済ませさせて貰うわ」

HOPPER! MAXIMUMDRIVE!

ドーパントがあつと思う間も無く、ライダーの放った短いスイングからの鋭い回し蹴りが左手首に食い込んだ。

そこは、ガイアメモリの生体コネクタのある位置。

インパクトと同時に、バチツと火花が飛んでドーパントからメモリは飛び出し、それと同時に砕け散った。

変身が解け、強制排出に伴うショックで倒れ掛かった少女を、ライダーは慌てて抱き止める。

「だー、中毒症状出てたから、ショックで気絶したか。

いいか、このまま病院担ぎ込めば。えーっと、祥吾です、マルタイ確保、メモリは潰しました」

『了解、待機し取る面子すぐ行かせるさかい、祥ちゃんはそこから離れとき』

「うっす」

ライブモードで待機させていたビートルフォンで連絡を済ませると、ライダーはそのまま適当な木の根元に少女を横たえ、そのままメモリの力で数百メートルをジャンプで一氣に移動し、その場を離れた。

競技場の傍にある有料駐輪場から、祥吾は一台のバイクを押し出していた。

前後二色に染められたこのバイクは、誕生日に母親の上司（と言うには遥かに上の方の存在だったが）から贈られたものだ。勿論、公道を走れるよう、きちんと車検に通されてるし、祥吾自身中型自動二輪の免許を取っている。（と言うかほんの数日前に取った。実技の方は、車両テストコースを利用して散々練習しているので、技術だけならセミプロクラスである。）

さあ走り出そうとした祥吾の前に、見た目にカラフルなバイクが三台止まる。

真っ先にヘルメットを脱いだ青年を見て、祥吾はぱつと笑顔になった。

「兄ちゃんー!」

「祥吾、怪我は無いか?」

「ッてか、どうした、その頬?!」

慌てたように叫んだのは、続いてヘルメットを脱いだトライアル仕様のバイクに乗った青年だった。

その声を聞いて、はたツと祥吾は昔馴染みに殴られた事を思い出し、兄と呼んだ青年を恐る恐る見た。

（あちゃあ、心配そうにしている、ついでに怒ってるー!）

「これは、拳だな、ついでに言うと、今回のマルタイのものじゃないな」
「そうなのか、閃」

三番目にメットを脱いだ青年の言葉に、祥吾は頭を抱えなくなる。

こう言う分析が得意なのだ、彼は。

「一応、曲がりなりにも女の子、特に武術をやってるって報告は無かつ

たし、ドーパント状態で殴られてたら、ここにいないよ」

「祥吾、」

「あー、その、マルタイを誘き寄せる為に、悪役（ヒール）を演じてた結果鵜呑みにした中学時代のチームメイトに、仕返しに行くんだと勘違いされて殴られました。はい」

祥吾の報告に、『兄達』は一樣に渋い顔になる。

中学生の頃、見た目と授業や部活をさぼりがちだと言う事で不良のレッテルを貼られた事を、兄達はもの凄く怒っていた。

そもそも、祥吾の『サボリ』は、急に伸びた手足の成長痛と、某企業で働く科学者である彼の母を強引にヘッドハントしようとする、一部企業からの拉致誘拐未遂の結果である。

チンピラめいた相手や、そう言う風体の連中にこずかい稼ぎとして「連れて来い」と言われたその辺の不良などとのいざこざを、喧嘩と片付けられた訳である。

また、母の職場の人間に童顔や年齢不詳の女性が多い——彼の母自身、今年32歳だが20代で通る若さだ——所為で、彼が女性を引つ掛けて歩いていると勘違いした奴らもいる。実際は、荷物持ちの報酬として食事を奢って貰っていただけなのだが。

そう言うこちらの事情も知らない癖に、しかも風評と主将の都合だけで退部を言い渡した事を知った兄貴分達が、得物を持って学校に突貫しようとしたのを祥吾は必死に止めたのだ。いや、この三人だけならともかく、他の学校にいる幼馴染の面々までぶち切れた——とある兄弟に関しては、揃って家に置いている多節棍を引つ掴んでいた——為、祥吾は完全に血の気が引いていた。

色々言いたげにしている二人と困った表情の『弟』に、最初にヘルメットを脱いだ青年がこう言った。

「こんなところで、立ち話をしても寒いだけだ。

祥吾、『TOKIO』まで行くよ、ついて来れるかい?」

「大丈夫、ここ二、三日は宿泊先のホテルと、店とを往復して母ちゃんに会ってたし」

『弟』の言葉に頷いて、三人はヘルメットを被る。

急いで、祥吾もヘルメットを被る。

四人のヘルメットには、それぞれ大きさは違うが同じエンブレムが入っている。

矢印と炎に包まれた地球、その下に『SPIRITS』と入っているそれを、知っている人間は少なくなっている筈である。

走り出して間も無く、祥吾の携帯電話に着信が入った。

P | P | . P . P P P |

「うっす」

『祥吾』

「兄ちゃん?」

『ごめんな、危ない事させて。』

父さんが帰って来たら、俺が謝るから』

「何言ってるんだよ、俺がやるって言ったんだから、怒られる時は俺も一緒だよ!」

俺だって、『スカルライダーの息子達(Sons of Skull Rider)』の一人だけ、兄ちゃん」

ハンズフリーの電話に向かって、祥吾は誇らしげにそう告げた。

二五年前、『BADAN戦役』と呼ばれる改造人間の軍団による未曾有の大規模戦闘があった。

それに対峙したのは、たった一〇人の改造人間『仮面ライダー』と、彼らを支援するべく結成された二五〇〇人の『SPIRITS隊』。

仮面ライダーは二五年を経た今日に至るまで、異次元に存在するBADAN大首領との戦闘より未帰還である。

以来、世界の紛争地域、又は大企業や犯罪結社の犯罪行為や違法行為の中から、人々を救い続けた存在がある。

漆黒のライダースーツとプロテクターに身を包み、白くドクロを染め抜いたヘルメットを被り、漆黒の大型バイクで現れるその人物を、人々は十一人目の仮面ライダー、『Skull Rider(スカルライダー)』と呼んだ。

だが、そのスカルライダーもここ二年消息を絶っている。

彼が、近年度々報告される『時空破断装置による時空間の傷』の調査をしていたと言う情報はあがあるが、それ以外は何も判っていないのが実情である。

そのスカルライダーに救い出され、育てられた子供達がいる。

上は大学三回生、下は小学生と言う子供達の中で、人ならぬ力を得た者または曰くありげな品を手にした者を、『スカルライダーの息子達(Sons of Skull Rider)』と呼ぶようになったのは、つい最近の事である。

現在『スカルライダーの息子達(Sons of Skull Rider)』、又は『仮面ライダー』を名乗っているのは十九歳から十六歳の八人である。

気が付けば、一人火の気のない部屋で震えて膝を抱えていた。

『父の友』だったと言う奇妙な存在は、俺の命を繋ごうと必死に何処からか手に入れたらしい菓子パンなどを運んで来ていた。

だが、そうやって俺の為に食事を運んだそいつの後をつけて、『正義の味方』は俺の前に現れた。

俺は、半分人間じゃない。

俺の父親は『オンケンハ』で、母親との間に子供、つまり俺を作った。

にんげんとのあいだにじょうをつうじたから、父は親族に殺され、まものとのあいだにふじょうのこをなしたから、母は正義の味方に殺された。

にたにたと粘着質な笑みを浮かべた男の顔に、俺は思い出す。

こいつは仇だった。

あの日、俺を物陰に隠した母をまるで鹿狩りをするハンターのように罠り殺した、自称神の代理人だった。

「その命、神に還しなさい！」

そう言つて、俺に変な形の銃を向けた男の、常軌を逸した輝きを放つ目に、俺はここで死ぬのだと全てを諦めようとした。

だけど。

「巫山戯てんじゃねえぞ、この殺人狂が！」

砕け散るガラスの向こうから、伸びた黒い腕は俺を抱き抱え、振り切られた黒い足が、男を壁際まで吹っ飛ばした。

何時の間にか昇っていた満月の光が、俺を抱き上げた存在の頭部だろう場所にくつきりと描かれた髑髏を浮かび上がらせていた。

これが、俺黛千尋と養父とが出会った晩の話だ。

半年振りの東京、しかし現在ある種の学校行事の真っ只中なので、行動の自由は無いに等しい。

一応保護者からの申し入れがあれば、宿泊先への送迎を条件に試合

後自由行動が許される。

と言う訳で、黛千尋は親類に呼び出されたと言う風体で監督に見送られ、『親類のお姉さん』の運転する軽自動車で宿舍から離れた。

『母』の申し入れで、親族の法事と称して外出し、明日の朝試合直前に合流する予定である。

実際は、日本警察からの『依頼』で特別任務に参加するのだが。

「ごめんなさいね、千尋君。まさかこんなに多重発生するなんて思わなかったものだから」

明るいヘアマニキュアが映える髪型の、ちよつと元気なOLと言ったイメージの美人がハンドルを握りながらそう言うのに、千尋は後部座席に転がされているランチバスケットを引き寄せながら「いいえ」と答えた。

何しろ、弟分などわざわざ自分から立候補してドーパント摘発に出ているのだ、自分も自分の向きに対応するのが筋と言う奴だ。

幾ら自分大好きマイペースとは言え、兄貴分達三人に睨まれるのは勘弁願いたい。

バスケットを開き、溜息と共に千尋は、クッションの中で寝息を立てている相手を指で弾く。

「ふいふい」

「寝過ぎだぞ、キバット五世」

ふよふよと浮かび上がったその姿は、こうもり形のガジェットのように見えるだろう。

だが、こいつはれつきとした生命体で、しかも『魔族』と呼ばれる存在である。

千尋の亡き実父の友人であり、父方の親族とのごたごたを養父と共に片付けてくれた相手である。

尤も、千尋からすると、ちよつとうつとおしい所も無い訳では無いのだが。

「q（。d。）pブーブーブー 千尋が遅いのが悪い。」

ところで、学校の方はどうだ？

祥吾をいじめた奴に捕まったって、以前言っただけだったか？」

「ああ、赤司か。」

まあ、やたらと絡まれるわ無理難題吹っ掛けられるわで、ラノベ的非日常を満喫させて貰っているよ」

「?。(。D。 ;)アラマツ、お前ねえ」

ふわりと肩に乗ったキバットをそのままに、千尋はダツシユボードから出したタブレットPCを起動させた。

そこに並ぶ情報を目で追う千尋に、運転を続ける女性が補足情報を伝える。

「発見時、全員心身衰弱状態で、精密検査で吸命牙に拠るものであると確認されたそうよ。」

被害者は、何れも十代後半から二十代、ついでに言うなら、ここ最近、ウインターカップを見に来ていた事が判っているわ」

「?。(。D。ノ)ノウワツ 男?。」

「幸いと言うか、残念ながらと言うか、襲われてるのは女の子。」

そうね、『キセキの世代』って言ったかしら、あの子達目当てに来ていたらしいわ」

「あー、なるほど、美少年にのぼせ上がっている女性の、溢れんばかりのライフエナジーを狙った訳か」

洛山の主将様を始め、昨年中学バスケ界を蹂躪し尽くして、今年高校バスケ界に進学して来た元帝光中学バスケ部、通称『キセキの世代』は、悪人面だの色黒だのとこき下ろされる青峰大輝ですら、美形に分類出来るほど顔の造形が良い。

黄瀬涼太に至っては、現役学生モデルで何時練習してるんだと言う気になる。(尤も、海常高に通う弟分の話では、バスケ始めて初めての敗北とやらを味わって以来、モデル業を減らして練習していたそうだが)

話を戻すと、当然のようにキセキファンと称する女どもが増える訳で、洛山でも公式非公式問わず、赤司様ファンクラブとやらが雨後の筍よろしく乱立したぐらいだ。

「なあ、千尋、そんなにいるなら、俺もちよつと (人D、*)オネガイ」

「馬鹿。そう言う問題じゃないだろう。見ろよ、もう五人も病院に担ぎ込まれてるし、一人は緊急搬送先がよりにもよって城南大学付属病院だ。」

あそこに担ぎ込まれたって事は、結構不味い状態で発見されたって事だ。そんな矢先に、同じようにライフエナジーを吸われた人間が見付かったら、大騒ぎじゃ終わらないぞ」

「ブウ——q(、ε、)——!!」

「そうね、我慢して頂戴、キバット五世。」

その代わり、海斗君にまたお菓子を作って貰うから」

女性の言葉に、やはりと思いつつ千尋は視線を動かす。

「海斗達、戻っていたんですか?」

「ええ、こんな事態だしね、休ませて上げたいのにつて、会長も困っておられたわ」

女性の溜息混じりの言葉に、千尋もそこはかたなく頭が痛むのを感じる。

まあ、当の本人は、弟まで参加させた捕物である以上自分が倍以上動くのは当然と思っている節があるから、きつとこれっぽちも気にしていないのだろうが。

そんなところまで養父に似なくて良いと、心の中でツツコミを入れてから千尋はタブレットPCの電源を落とした。

作戦開始は、夕刻過ぎてからになる。

それまでちよつと休んでおこうと思っただのだ。

午後七時、如何に街灯やイルミネーションで明るいとは言えずつかり日が暮れた街中を、集団で闊歩している絶対に学生だろう集団を見下ろし、黛千尋は本日何度目かの溜息を吐いた。

このクソ寒い年末の、とつぷり日も暮れた時間に何歩き回ってるんだか。

高架橋を歩きながら、千尋は思わず毒づいていた。

「こうやってうろついて、襲われたんならまあ自業自得だよなあ」

「全くだ。」(、ε、)「ヤレヤレ」

だが、そう言つて放置する訳にもいかないから、『素晴らしき青空の会』も『D&P』も、S. A. U. Lに協力要請を出したんだろうさ」玩具つばい姿に反して、キバツトは寒がつて千尋のダウンジャケットの中に入り込んで暖を取っている。

もそもそと動いて、ジャケツトに隙間を作る『後見人』を手で押さえると、千尋はゆっくり歩き続ける。

そのまま二股に分かれているところまで来て、急に千尋は目的地から離れる方に小走りで向かった。

「ゞ（・ム・、）オイオイ、千尋、何処に行くんだ」
「静かに！」

階段から駆け下り、物陰に潜んだ千尋が息まで殺してじっとする。果たして、それまで彼らがいた高架橋の上から、数人の少年の声があった。

「腹減つたなあ、牛丼食おうぜ、牛丼」

「あんたはそればかりね！ 少しは静かになさい！

でも征ちゃん、どうしてここへ？」

「ああ、この辺りに千尋がいるような気がしたんだが」

「えー、黛さん、親類んとこの法事に行つてるんでしょ？」

聞こえて来た声に、どっと汗が噴出すのが判る。

わいわいと騒ぐ声は徐々に遠ざかるが、それに連れて、千尋はずると階段の影に座り込んでしまった。

一体何だと言うのか、あの面倒な手続きはどうした、お前ら！ あれか、赤司か、赤司の権力か!? やい、洛山高校、赤司の親からドンだけ寄付貰つたんだ、こん畜生！

腹の底で一気に突つ込む千尋に、キバツトが「（； ㊦。）ヤベツ!?!」とその額にこつんとぶつかつて来た。

「大変だ、千尋！」

あの連中、俺達が行こうとしていた方向に向かつてる！ アワワワワ（（。㊦。；（（）ワワワワツ」

「げ!?!」

何してくれてんだ、あんの犬とお釜と筋肉と厨二病は！」

大き過ぎるイレギュラーに頭を抑えた千尋は、だが見覚えのある自動販売機ににっと笑った。

「キバット、《メダル》はあるか？」

「(。・ー・)ン？ (*。ロ。*) ハッ!!

あるぞ、ほらこれ」

何処からとも無く鈍く光るメダルを取り出したキバットから、受け取った千尋は「休止中」と張り紙のされた自販機にそのメダルを投下し、赤い見慣れない缶のボタンを押した。

男は上機嫌だった。

最近、自分好みの《餌》が、この辺りをよく闊歩しているからだ。

男の好みの餌とは、自分はとても可愛らしく誰であつても自分の言う事を聞き入れてくれるのが当たり前と言う、肉体と精神の成長のバランスが取れていないタイプの女性。

しかも、十代半ばから二十代頭の、若い女達だ。

こう言う、色気づいて浮かれた女共からから頂くライフエナジーが、男の好物だった。

良くは知らないが、男が縄張りとは定めた界限の近くにある大きな建物で、日中行われてる騒ぎにやって来た女達が、終わった後名残を惜しんでいるのかこの辺りまでうろついているのだ。

男は、そう言う女達で食事をしているのだ。

傍目には、ちよつと金回りの良さげな大学生か、何処かの金持ちのボンボンの様に見えるこの男こそ、秘かにこの界限で起こっている、女子高生女子大生昏倒事件の犯人である。

最近、一族の《王(キング)》が代替わりをした所為か、食事を取るにも気を使うようになった。

今度の王は、馬鹿げた事に人間との共存を目指すのだそうだ。

ありえない。大体自分達より劣る生き物と、どうやって共存すると言うのか？

「……心配するなよ、人間だつて等身大の蜘蛛と共存しようとは思わないよ。」

それが人食い蜘蛛なら、尚更な」

「何だど?」

誰もいない筈の暗がりからの声に、男は思わず飛び上がった。滲み出すように現れた青年に、男は吐き出すようにこう言った。

「ち、幽霊か!? 脅かしやがって」

「……」

男の言葉に、千尋のこめかみがひくつと引き攣る。

某厨二主将から強要され、自身も面白がって身に付けた技術だったが、まさか曲がりなりにも『魔族』と呼ばれる立場の存在に、幽霊と間違われる日が来るとは思わなかった。

「ほら、消えな!」

俺は、これからダイナーの時間だ。野垂れ死んで、行き場も無くしてる様な野郎に用は無いよ」

「……キバット」

「(; . . | . .) ンー まあ、犯人確保が『無理』なら撃破も止む無しだから。

(# . ∇ .) b 逝ッテヨシって事で、ガブつと!」

千尋の懐から飛び出したキバットの姿に、立ち去ろうとした男はぎよつとなる。

「キバット族だど!」

小僧、まさかお前!」

「……変身」

キバット五世によって吹き込まれた魔皇力によって、千尋の手に、頬にステンドグラスのような文様が浮かび、それを覆い隠すように魔法金属製の鎖が身体に巻き付き、そして赤と黒と銀の甲冑へと変わった。

その姿に、男の表情が歪む。

「魔皇甲冑だど!」

貴様、『王』の犬か!」

「いいや?」

あえて言うなら、骸骨ライダーの息子、仮面ライダーさ」

そう言うなり、千尋、いや仮面ライダーは男に向かって走り出す。怯んだ男は、蜘蛛の怪物——スパイダーファンガイアの本性を現し、ライダーを止めようと粘着液塗れの糸を吐いた。

だが、ひらりとそれを飛び避け、ライダーはじつと蜘蛛の魔族を見据える。

複眼状の仮面・キバ・ペルソナの光が増し、スパイダーファンガイアの背中にある古傷を看破する。

「ふうん、腰に刺し傷の後か、『素晴らしき青空の会』に襲われて、九死に一生つてところかな?」

「貴様、まさかトウルーアイ持ちか!」

「そうさ、これは俺の、父親からの欲しくも無かった遺産だ」

振り回される鉤爪をかわして、ライダーのミドルキックが古傷の残る部位に食い込む。

悲鳴と共に裏路地を転がった蜘蛛は、何かに気付いて叫んだ。それは悪足掻きにして、最後の虚勢だったが。

「お、思い出した、お前、シユライクファンガイアの残した合いの子だな!

第一のKnightだった癖に、人間に現を抜かした腑抜け野郎が!

その言葉が終わるや否や、ぎしりつと空気が凍る。

「(。D。)」がおー 構う事は無い、こいつは『有罪』だ。 やっちまえー!

「ああ、言われなくても」

「ウエイクアップ!」

不思議な笛の音と共に、光害で薄明るかった空が漆黒の闇の閉ざされ、恐ろしいほど大きな三日月が浮かぶ。

高く舞い上がったライダーの右脚の拘束具、ヘルズゲートが音を立てて開放され、そのまま急降下による重力と落下エネルギー、そして爆発的に放出される魔皇力を乗せたキックがスパイダーファンガイアを捕らえた。

インパクトの瞬間、『キバの紋章』に取り込まれた蜘蛛男は一気に結

晶化し、粉々に砕け散った。

ゆつくりと立ち上がるライダーの目の前へ、金属製の小鳥が降りて来た。

それはライダーの手の上に降りると、カチンと音を立てて三五〇ミリリットル缶と同じ姿に変わった。

「（。ㇿ。）ホウ どうやら四人が警戒範囲を越えたらしいな！」

「良かった、巻き込まれたからって死んだり怪我するような連中じゃないけど、見られてたら説明が面倒臭いから」

そうぼやきながら、黛千尋は魔王甲冑を脱ぐ。

甲冑が霧散するのを見届けて、千尋はジャケットのポケットから携帯電話を取り出す。

それは、普段学校で使っているものと違って、ちよつと大降りでカラフルなものだった。

「もしもし、千尋です。」

目標撃破です。これから帰還します」

『おう、お疲れさん。兄が回ってるから、拾って貰えば良いぜ。』

確かポイントFだろ？ 後10分ほどで兄いのシトロエンがそっち行くから』

『寒かったやろ、豚汁と一緒に待つとるで』

「了解」

話し終え携帯をポケットに戻すと、待つてましたとばかりにキバツトが千尋の懐に潜り込む。

「こら、冷たい」

「（。ε・ゝ・）ムー 俺も寒かったんだ」

そう言うなり、懐で眠り始めた『後見人』に小さく嘆息して、千尋はそのまま歩き出した。

とつとと迎えと合流して、暖かい豚汁を食べたいと思ったのだ。

忘れられない光景がある。

周囲を埋め尽くす赤い十字仮面を従えた、髑髏ライダーの姿。

「言った筈だ。次は無いと。」

本日この時間を持って、お前達はSPIRITS隊の捜査及び壊滅対象だ。

逃げても良い、抗っても良い。だがその子供だけは置いて行きやがれ」

「黙れ、何がSPIRITS隊だ！

唯の人間が、我々進化した人類にっ」

自分をこれまでですつと黙って、爬虫類の様な目で見ていた集団の、ライダーらしい人間が灰色の異形の姿に変わると、それにつられるように男達が次々と灰色の怪人に変わり、一人集団の前に出ていた髑髏ライダーに襲い掛かった。

息を呑む俺の目の前で、その人物はアスファルトを抉り鉄板を紙の様に引き裂く怪人達を、その攻撃を全て受け流し全員投げ飛ばしてのけた。

「ばっかじゃねえか、こいつら」

「言ってやるな、哀れだから」

「無知にも程がある」

「全くです、我々の隊長の事を知らないなんて」

動け無くなった怪人達を拘束しながら、十字仮面の男達が呆れたと言わんばかりにぼやいている。

俺は両親と観光バスに乗っていて、『王』を探している《スマートブレイン》社が、手取り早く対象を選抜する為に起こした事故に巻き込まれた事。

奴らの探している王——『オルフェノクの王』を宿した子供は、その能力故にどんな最悪の事態にあっても死亡する事は有り得ないので、そう言う大惨事に生き延びた子供を選出する為、そして自分達の手元に置けるよう天涯孤独にする為、《スマートブレイン》社はそう言

う大事故を世界中で起こしていた事。

大した武装をしていないように見えた、あの髑髏のライダーが『Skull Rider』、或いは『十一人目の仮面ライダー』と呼ばれている事。

そう言った事を知るのは、その人に引き取られて間も無くの事だった。

福田総合との試合を無事勝ち抜き、競技場から学校に帰ろうとした海常高校の面々の中で、複雑そうな面持ちで会場周囲の雑木林を見ている少年がいる。

海常高校二年、中村真也は常に無くそわそわしているのを、同級生と共にレギュラー入りしている早川充洋に見咎められた。

「なかむ（あ）、どうかしたのか？」

「あ、いや、大した事じゃ」

そう言いつつ、真也はジャージのポケットに片手を入れたまま動こうとしない。

ポケットの中には、バイブモードにしている携帯電話が突っ込んである。

「どうした、早川、中村。移動するぞ」

「こぼ（い）先輩、なかむ（あ）が何だか気分わ（う）そうで！」

動かない二年生を気にしたらしい三年センターの先輩に、真也が応じる前に悪気なく同級生が大声で答える。

早川の、地声の大きさもあいまって何事かその他のレギュラー達まで寄って来るのを目にして、真也は眼鏡を避けて目頭を押さえていた。実際のところ、真也は灰崎祥吾からの連絡待ちをしていたのだ。

以前、チームメイトにはぼかして話していたが、真也と祥吾は幼馴染みであった。

今回の事件を、皆に相談したのは真也本人だった。

事態に気付いたのは、IHと夏休みが終わり、二学期が始まって一月経つかどうかと言う頃だった。

最初に見たのは、所謂女生徒のいじめ現場と言った場面だった。

見かねて通りすがりを装って声を掛けたところ、女生徒達は蜘蛛の子を散らすように逃げ出し、後には思い詰めた表情の他校生らしい少女が残された。

助けた少女の方も、礼は言ったものの表情が暗いまま帰ってしまっただ。

そんな事があった数日後、県内でも有数の強豪校との練習試合があった。

ベンチスタートだった真也は、たまたま偶然だが、あの日の少女が席を取れなかった人々でゴった返す出入り口の隙間から、こちらを覗き込んでいるのに気付いた。

何しろ、その日は練習試合とは言え、スタメンで黄瀬涼太が出ると言う情報が出回った為にいわゆる『黄瀬ファン』の女の子達が大笑して——平日なのに、学校をさぼったとしか思えない子も沢山——来ていた。

だから、その時真也は「熱心なファン（残念）なんだなあ」とだけ思っていたのだ。

だが、その認識を微修正する気になったのは第3Qに入っただけだった。

相手チームのDFを抜こうとした黄瀬が、その相手ともつれ込んで転んだのだが、その時たまたま相手の下敷きになったのだ。

その瞬間の、黄瀬ファンの女の子達の悲鳴、いや罵倒と言うか絶叫と言うかで、思わず試合が止まったぐらいである。

この時、それなりに黄瀬から「お願い」をされている海常生の女生徒は小さく悲鳴を上げるに止めていたが、他校から来た自称『ファン』達は聞くに耐えない罵詈雑言を撒き散らしていた。

そして、そんな体育館の中を凝視していた少女が、何かを握り絞めている事に真也は気付いた。

尤も、それが犯罪組織が売り捌いているT—Oメモリであると判ったのは、それから更に半月後の事になる。

それから一週間後、あの試合で黄瀬をこかせて下敷きしたあの選手が、暴漢に襲われ入院したと言うニュースが飛び込んで来た。

その時は「不幸だなあ」と、チームで話し合っていたのだが。

だが、それから立て続けに、今度は見覚えのある他校の女生徒が暴漢に襲われるという事件が起きた。

そして最初の事件から約二ヶ月後、怪人が他校生の派手な化粧にブランドものの鞆を持った女生徒を襲っているところを、他校に進学した兄弟分——ぶっちゃけてしまえば祥吾だ——と共に目撃したのだ。

俺達に驚いた怪人は、気絶した女生徒を放り出して逃げた。

その時に真也は見たのだ、変身を解除した怪人の後ろ姿が、あの時のいじめられていた少女に変わるのを。

それが切っ掛けで、兄達に相談したところそのまま警視庁の未確認生命体及び超常犯罪対策班、通称《S. A. U. L》の案件として、持ち込まれる事になったのだ。

ガイアメモリによる犯行と言う事で、容疑者捕縛に名乗りを上げたのは祥吾だった。

あいつが、気に入って手にしたのがバツタの力を宿した《HOPP ER》のメモリとロストドライバーであり、同い年の奴からメモリブレイクを出来る奴が良いと言われて、祥吾に決まったのだ。

正直なところ、中学時代のあれこれや他校生である事を考え、最初は海常高校の生徒である真也が名乗りを上げたのだが。

「いや、真也兄（あに）いはこれからも学校通わなきやいけねえんだし、俺は今回これっきりだ。

リョータの事は未だに好きになれねえけど、兄いや兄いのチームの人には可愛い後輩ってやつじゃん、そいつが勘違い女の所為で試合に出れなくなるの、嫌だろ？」

そう言っぴらと手を振った弟分に、申し訳なく思いつつ真也は今回の担当を譲ったのだが。

まさか、ウインターカップ全国大会の会場で、ものの見事に悪役（ヒール）と化した弟分を目の当たりにする事になるとは、思っても見なかったのだ。

「どうした、そろそろ移動するぞ？」

「ああ、笠松、中村がな」

弟分に足を踏まれた、一年エースを気遣っていた主将まで来るに至って、真也はどう言い抜けようかと内心冷汗塗れになっていた。

そこに、携帯が振動したのでこれ幸いと真也は皆に断り、持っていたやや古い型の携帯を開いて耳に当てた。

「はい、真也です」

一瞬、目を見開いた真也は、だが、短くやり取りすると電話を閉じて監督を呼んだ。

先に、試合後親類と合流すると伝えられていた監督の方は、「お、連絡が来たか、明日ちゃんと学校へ来いよ」と言って、他の部員に移動する事を伝えた。

「おい、中村」

「すみません、今日親類で集まる事になってて。」

大丈夫、明日ちゃんと間に合うように送って貰う事になってますから」

三年生からの問いをそう流すと、真也は早足でその場を離れた。

「親類って、あいつ」

「なかむ（あ）は、子供のこ（お）に二親（ふたおや）亡くしたそうだから（あ）。でも、あま（い）詳しい事は話してくんないっす」

「そう、だったのか」

早川の言葉に、三年生は複雑な表情で真也の背を見送った。
真也は携帯で指示された、競技場近くの地下駐車場へとやって来た。

不自然に駐車の数が少ない、指定されたフロアに入ってきた真也の前に、カツンとヒールを鳴らして一人の女が現れた。

OLと言うには派手な化粧に、離れていても判るほど強い香水の匂いに、無意識に真也は眉を顰（ひそ）めた。

「いらっしやい、来てくれて嬉しいわ」

「来なかったら、先輩後輩全員に危害を加えると、言ってきたのはそちらでしょう？」

貼り付けたような営業スマイルを、真はバツサリ切り捨てる。

「大体、どうせ貴方は通常営業だから麻痺してるんでしょうが、携帯番号は立派な個人情報ですよ。一体何処から盗んだんですか？」

「あら、武内さんって仰ったかしら？」

「この間お酒を飲んだ時に、携帯から拝借したの。こんな美人との時間を、たかだか電話番号一つで楽しめたんですもの。彼にとつても悪い取引ではなかったと思うけど？」

「巫山戯ないで下さい、あの人うちの部の監督だけど、同時に海常高校の教職員ですよ。個人情報漏洩で叩かれたら、どうしてくれるんです。」

大体監督から貰ったんじゃないかと、勝手に携帯から抜いたんでしょうに」

「あら、何か困るかしら？」

大丈夫、貴方が私達に付いて来てくれれば何も問題ないでしょ？」
「謹んでお断りします。」

と言うか、あれだけ全世界で叩かれまくったのに、まだ懲りないんですね、貴方方《スマートブレイン社》は」

真也の揶揄に、女は事も無げに片手を振る。

「あら、我が社は真つ当な会社よ？」

同族の繁栄を願う、真面目な組織なのに酷い事言うのね」

「その同族と言うのが人間の死に損ないで、同族を増やす為に全世界でテロ活動を繰り返して、SPIRITS隊に睨まれたんでしょう」

「SPIRITS隊？ ふん、貴方、あんな組織を信じてるの？」

あからさまな女の侮蔑に、真也の片眉が上がる。

「どう言う、意味でしょう」

「あなた、子供だから知らないでしょうけど、昔BADANって組織が世界侵攻をしたの。」

BADANは、『仮面ライダー』って言う自身が生み出した反乱分子によって滅びたけど、それでもそれなりの数の残党は残ったわ。

その残党が作ったのが、『ホークアイ・ホールディングス』って言う会社よ。」

あそこの飼犬やってる組織なんて、何の信用」

「そうじゃなくても馬鹿っぽいのに、無知なの晒すと余計に男に逃げられるから止めた方が良くよ、オバさん」

「おぼ!?!」

目を白黒させる女に、真也は大きく溜息を吐いてみせると些か気分を害した様子でこう言った。

「貴方方の工作で親を殺され、そのまま拉致られるところだったのを SPIRITS 隊に助けられ、その総隊長の保護下で育った俺に SPIRITS 隊を悪く言う時点で、貴方終わってますよ。」

それから、《ホークアイ・ホールディングス》の悪口もね。あそこの人事厚生課の人間には大変お世話になったんだ、それこそ実の伯父や伯母のようによね。

大体、BADAN を倒した仮面ライダーの定義からして間違ってる。

それに、あんたの一番の勘違いは、SPIRITS 隊は《ホークアイ・ホールディングス》から援助を受けているけど、あそこの御用組織って訳じゃない。SPIRITS 隊は元々、BADAN と戦う仮面ライダーを支援する為に結成された国際組織だ。

《スマートブレイン社》での常識なら外で言わない方が良くよ、知ってる人間からは失笑ものだから」

真也の言葉に、女は一瞬怯んだが相手が一人である事を強みとして、最後通牒を突き付けようとした。

それが彼女の仕事であり、《オルフェノク》の為になると上司からも言われたからだ。

「戯言はもういいわ。」

お前には、私達に付いて来る以外の選択肢は無いはずよ!」

女の言葉に弾かれるように、物陰に潜んでいたらしい男達がバラバラつと五人現れる。

その連中は示威行動として、真也の目の前で灰色の怪人と化した。その姿を見ながら、真也は大きく眉を顰めた。

「茸にサボテン、烏賊とカタツムリに魚……飛魚かな?」

高校生一人に、数の暴力で押し切ろうと言う事ですか?」

判っていたけど、本当に下衆ですね、貴方方」

「お黙りなさい。一応釘を刺しておいたから、S・A・U・Lには通報してないでしょう？」

これだけの数の大人と、どう戦うつもりかしら」

勝ち誇る女を、僅かな憐憫と怒りを滲ませ真也は睨む。

「ああ、S・A・U・Lにも義兄弟（きょうだい）達にも何も言わなかったよ。

でも、俺があんた達に会うのに、何も準備していないと思われたのは」

Battle Mode!

「不愉快だ！」

在らぬ方向からの電子音声に、驚き狼狽えた茸とサボテンの怪人が突然何かに弾かれたように数メートル吹き飛んだ。

あつと思つた《スマートブレイン社》社員達の目の前に現れたのは、車輪を背負つた人型ロボットだった。

それに取り除かれた怪人達の中で、一番真也の傍にいたかたつむり

——スネイルオルフェノクが光弾に撃ち抜かれる。

「ぎゃあ!？」

「な、何が!？」

「お、お前、それは一〇年前に盗まれたオートバジンとフォンバスターだど!？」

「おい、こんな事聞いてない!！」

燃え落ちる仲間の姿に、呆然としている怪人達と女の前で、機械人形（オートバジン）を従え携帯電話を変形させた銃を構えた真也が、眼鏡越しに目を細め『敵』を睨み付けた。

「ええ、貴方方から逃げ出した《オルフェノク》が、保護した養父に託したものですよ。

幸いと言うか、どう言う訳か俺はこれを使えるんだ。

あんた達に会うに当たって、武装する位の対策は当然でしょう?」

そして、オートバジンから受け取ったアタッシュケースから、ベルト状のコアシステムを出して身に付けた真也は、携帯に戻したマルチ

デバイスにキーナンバーを打ち込んだ。

pipipi

Standing by

「変身！」

フォトンブラッドのラインが身体を包み、真也はギアシステム《555》を纏う。

「小僧、お前は」

「俺は仮面ライダー555（ファイズ）。

『スカルライダーの息子達（Sons of Skull Rider）の一人だ』

ライダーの言葉に、女はカツとなった様子で叫び、梟の怪人（オウルオルフェノク）の本性を現した。

「この裏切り者を殺しておしまい！」

「あんた達に、裏切り者呼ばわりされる義理はないんだけどな」

飛び掛ってくる飛魚の怪人（フライングフィッシュオルフェノク）を軽くないなすと、続いて飛び掛ろうとする槍烏賊の怪人（スクイッドオルフェノク）をオートバジンに任せて梟女に迫った。

間近に迫るライダーに、女は焦って鉤爪を振り回すが残念ながら素人丸出しの動きでしかなく、ライダーは簡単にその腕を掴むと巻き込むように床へと投げ付けた。

そのまま、梟女（オウルオルフェノク）に当身を入れようとしたその瞬間、

「小僧、動くな！」

動けばこの人間のガキどもの命はない！」

ダミ声に振り返ったライダーは、そこで先程オートバジンに跳ね飛ばされたサボテンの怪人（カクタスオルフェノク）が二人の少年を引き据えており、茸の怪人（トードスツールオルフェノク）が棍棒で小柄な少年の顎を持ち上げる。

そこにいるのは、二十分ばかり前に別れた同級生と上級生だった。

「!?（小堀先輩、早川!）」

「あの骸骨野郎の息子だなんて言ってたんだ、こいつら殺される訳には

「いかないだろう？」

灰色の茸怪人の影の中で、優男風の男があざ笑う。

動きを止めたライダーを、ココぞとばかりに梟女が殴り倒す。

激しい火花と共に、ソルメタルという人工金属の装甲に三本の傷が走り、ライダーは堪らず床を転がった。

「なかむ（あ）!?!」

「中村!?!」

「うふふ、舐めた真似してくれたわねえ。

大丈夫、貴方ならきつと私達の仲間になれるわ。

あの子達も仲間に入れてあげるから、安心なさいね」

「くっ」

逆転劇に舞い上がる梟女は、まだ立ち上がれないライダーの首を引き裂こうと、鉤爪を見せ付けるように振り上げた。

だが、その振り上げた鉤爪に、何かが進し爪をへし折った。

はつとするライダーの背後で、「ギャー!」「何だこいつ!?!」と悲鳴が上がる。

それが部活仲間の二人を捕らえた連中だと気付いたライダーは、オートバジンに二人の保護を指示し、唯一の武器を壊され狼狽える梟女をパンチングユニットで殴り付けた。

悲鳴と共に、灰を撒き散らしながら吹っ飛んだ梟女を振り返ることなく、ライダーは何かに追い回され逃げ惑う四人に向き直る。

全長一五センチ程の赤、黒、緑の何かに啄かれ、噛み付かれる怪人達に向き直ると、一見するとゴツめの腕時計の様なものを取り出し、腕に取り付けスイッチを入れる。

Start Up!

電子音と同時に、胸部装甲が開き頭部の丸いカメラ部分のカラーリングが黄色から赤に変わり、その直後ライダーの姿が消える。

あつと思つた次の瞬間、凄まじい音と共に怪人達が爆ぜ、灰となって舞い散る。

Time Out, Reformation

ゆつくりと立ち上がる555の姿に、梟女は怯えて逃げ出そうとし

た。

だが、その足に何かが当たり、彼女は無様にアスファルトの上に転がった。

必死で立ち上がろうとした彼女の肩を掴み、己に向き直らせてライダーはこう言った。

「あんたの上司に言って下さい。」

次に俺の周囲に居る人間に手を出したら、《スマートブレイン社》そのものを潰すと。

今度は、以前のように一部署だけ切り捨てて逃げるなんて、蜥蜴みたいな真似はさせないと」

人間の姿に戻った女は、化粧が崩れた泣き顔で何度も頷き、ハイヒールが脱げたのも構わずそのままよろける様に非常口へと逃げて行った。

その背中を黙って見送る仮面ライダー555、いや中村真也に早川充弘と小堀浩志がそつと声を掛けた。

「なかむ（あ）……その、」

「事情を聞かせてくれないか、中村。」

個人の事情なのは重々承知しているが、それでも、先輩として、同じ海常高校バスケット部の仲間として、俺達はお前の力になれないか？」

その言葉に、強化服を解除しオートバジンをバイク形態に変更させた真也は、本当に困ったように二人を振り返った。

そんな彼の周囲を、黒と緑のミニチュアに見えるもの、プラモンスター達がはしやぐように飛び回った。

テレビを見て、テロ絡みのニュースが流れると未だに背中の古傷が痛む。

後遺症とかじゃなく、あの日を思い出すから痛むのだ。

あれは、小学校を卒業してすぐだった。

父は考古学者で、あの日発掘中の父を訪ねて、母と弟と三人でカリブ海へ向かった。

カリブ海のあちこちに残っている、大航海時代の海賊達の拠点の跡地を発掘する学術隊に参加している父に会うのは、かれこれ半年振りだった。

俺も小学二年生だった弟も、それぞれ証書や成績表を父に見て貰って、それぞれ頭を撫でられた。

その夕刻近くになって、発掘隊のキャンプを謎の武装部隊が占拠した。

連中が狙っていたのは、父がその現場で掘り出した品物だった。

カリブに海賊が彷徨（うろつ）いていた時代に持ち込まれ、海賊都市が地震で崩壊した際に失われた財宝の中に含まれていたと言うそれを奪う為に、武装集団は無抵抗の学者や逃げようとした人夫達を切り刻み、容赦なく撃ち殺した。

……あの連中が、後腐れを消す為に全員殺した後発掘現場を爆破し、「謎の爆発で全員死亡」と言う筋書きを作っていたのだと言う話を聞いたのは、結構後になってからだだったけど。

そして、俺達親子のテントにもそいつらは雪崩込み、父の制止を笑いながら無視した連中はその場の全てをぶち壊す為にマシンガンをぶっ放し、そこから立ち去った。

誰も動かなくなったそこで、俺だけが辛うじて生きていた。

父と自分の血で真っ赤に染まった手で、もがいているうちに触れたのが父達の発掘品であり、武装集団が探していたもの、巨大ファントム《ジャバウォック》を宿したビーストドライバーだった。

『小僧、力が欲しいか?』

今にして思えば、言葉面は諸に悪魔の勧誘だったが、あの時家族を失い死に掛けていた自分にとって、《ジャバウオック》の言葉に抗う理由は一つもなかったのだ。

俺の血——正確には、ライフエナジーと呼ばれる生体エネルギーらしい——を代価に封印が解けた《ジャバウオック》の力で、俺は襲撃者達を追い掛けた。

父の、母の、弟の敵討ちの為に。

その、襲撃者がフアントムを研究材料として集めようとしていた財団Xと言うけつたいな組織の雇った連中であり、そいつらを追い掛けて来たSPIRITS隊に唯一の生存者として保護されたのは、そいつらの半数はぶちのめしたものの、多勢に無勢で追い詰められたその時だった。

放った三体のプラモンスターの内、赤い鳥型のレッドガルーダが戻って来た。

訴えるように周囲を飛び回る、赤い一五センチ程のそれを手に乗せる。

試合も終わり、敗戦で愚図っていた一年エースが落ち着いたのを見計らい、福井健介は監督に別行動を申し出て、動こうとしていたところで身内からの連絡を受けたのだ。

「何とかなかったか。」

「しかし、オートバジンが飛び出したって、たいっちゃんから連絡来た時にはどうしようかと思っただぜ」

「ぺちぺちと音を立てて、小さな羽根を畳んだそれをジャージのポケットに仕舞いながら、少年は大きく肩を竦める。」

大きな利かん坊と自由人二人を抱え、何とかWCベスト8に食い込んだ——長い付き合いの主将は、「大元締めが何ゆうとんじやい」と嘆くだろうが——ものの、創設二年目のチームにしてやられたのはかなり悔しいと思っていたところへの緊急連絡で、取り敢えず手持ちのプラモンスター達を放ったのだ。

「やれやれと思っているところで、見覚えのある一年生マネージャー

が走って来た。

「福井先輩、ちよつと聞きたい事があると主将が」

「ああん？」

振り返ろうとした健介は、ポケットの中の忠実なファミリアの警告にぴたつと動きを止めた。

「どうしました、先輩」

「おう、ところでお前、モアラが何だって？」

「え？」

思わずと言った様子で聞き返したその少年に、健介は肩越しに三白眼を細めて睨み付ける。

見た目は、今年入ってきた後輩の筈。

だが改めて相手を見た途端、健介には『敵』にしか見る事が出来なかった。

「あの、もあらって」

「うちのモミアゴリラが判らない？」

お前、何処の奴だ？

いや、何処の『未確認生命体』で、誰の差金で俺の前に現れた？」

健介の言葉に、それまできよんとしていた高校生の顔が、にたりと形容しがたい笑顔になる。

「あれえ、ちゃんと化けたのに、変だなあ」

「まあ、俺も一瞬騙されたけど、俺のファミリアは騙されなかったよ。

って言うか、ほんと《ホークアイ・ホールディングス》の技術部ばねえよ」

ちよろりと、健介の肩に乗った赤い鳥型ゴーレムに、少年の姿を取った何者かは大きく肩を竦めてみせた。

「ふう、何だ、こんな事なら普通に襲えば良かったや。

メンド臭く、ニンゲンのフリする必要なかったのにさあ」

そう言いながら、少年の姿は歪み、赤黒い鎧と骸骨の寄せ合わせのような姿に変わる。

その姿に、健介はぺろつと口の端を舐めた。

「お前、ファントムか」

「そうだよ、俺はファントムのレギオン様さ。」

この辺に魔法使いがいるって聞いたから、どんな奴か、面を拝みに来たんだよ」

「あーそうかよ、で？」

俺の後輩はどうしたよ？ 無事なんだろうな？」

「あ？ ああ、あいつね。」

俺としては食っちゃってもいいかと思ってたんだけど、ドレイク様の命令でさあ、大事にするなって言われたから姿とちよろつと魔力を頂いただけだよ。

それでこれはお願いなんだけど、死んでくれない？」

怪人の言葉に、健介は更に目を細めて自身のスポーツバックを抱え直した。

「おいおい、いきなりぶつ飛んだ事言ってるじゃねえぞ化物。」

なんで俺が死ななきゃならねえんだ、ざけんなバーロー」

「ええ？」

だって、俺達的には魔法使いなんて邪魔臭えんだもの。

だったら死んで貰えば丸く収まるだろ？」

「お前、おエライから大事にするなって言われたんじゃねえの？」

「だあって、お前程度なら簡単に殺せるし？」

魔法使いつて言うには、大した魔力も感じないしさあ」

ケタケタと笑うファントムに、綺麗にぶち切れた顔で健介はバッグから取り出した指輪を、右手の中指に詰め腹部に翳（かぎ）した。

次の瞬間、「Driver on!」と言う音声と共に、彼の腰にメタルブラックのベルトが現れる。

はっとなるファントムに向かって、綺麗な笑顔で健介は言い放つ。

「悪かったな、魔力が少なくて。」

だからお前、俺のジャバウオックの餌になって貰うぜ。

変身！」

リングをバックル横のシリンダーに差し込むと、健介は一気に回す。

バックル部分が、観音開きに開きそこに黒と白銀の龍に似た顔が現

れた。

同時にバツクルから飛び出した魔法陣を突き抜け、健介は『仮面ライダービースト』へと変身した。

「なに!？」

「時間的には、ちよつと早いデイナーかな？」

何でも良いや、俺も魔力補充で魔法石飲み込むの飽きたし、試合に負けてちよつと虫の居所悪かったし。

何より、お前の姿は不愉快なんだよ!」

そう言うなり、ライダーは新たなリングを嵌めて再びシリンダーを回す。

J a b b e r w o c k y , F l a m e , F l a m e , C l o a k G o !

バツクルからの音声と共に魔法陣が通り抜け、ライダーの右肩に炎をデザインしたマントが翻る。

「おら、喰らえ!」

振るつた右腕から撃ち出された火炎弾を、レギオンは慌てて取り出した薙刀で切り捨て飛び下がる。

「うわわ、こんなの聞いてない!」

「俺が知ったことか!」

おら、大人しく食われろ!」

「冗談じゃない、こいつらと遊んでよ、俺帰る!」

「あ、こらメインディッシュ、逃げんじゃねえよ!」

バラバラつと何かを散蒔(ばらま)くと、ファントムは影に溶けるように姿を消した。

追い掛けようとしたライダーの前に、魔石から生まれた下級ファントム(グール)が三体、耳障りな唸り声を上げながら起き上がった。

「ちい、雑魚が!」

ああもう、一気に片付けちまおう!」

そうぼやくと、魔方阵から柄に変な飾りのあるレイピア状の武器を取り出した。

そしてその柄の、回転ドラムに似た部分を手で弾く。

カラカラつと回転したそこに、サイコロの様に四つの点が表示される。

「おっしゃあ、セイバーストライク、行けえ！」

レイピア、いやダイスサーベルを振るうと、銀色に光る八本足と翼を持つ竜の形をしたエネルギーの塊が四体、グールに向かって飛び出した。

エネルギー弾に貫かれた三体は炎を上げて燃え上がり、そして小さな魔力の固まりになりそのままバツクルに吸い込まれた。

「はい、おしまいっ」と

魔力を吸収して、変身を解いた健介の耳に、「おーい」と聞き慣れた低音が届いた。

暫くすると、建物の陰からのつそりと、中学からの腐れ縁であるバスケ部部长が顔を出した。

「おお、福井ここに居ったか」

「あ？ どうしたモアラ」

健介の言葉に、「儂は人間じゃと言うに」と肩を落とした相手は、気を取り直してこう切り出した。

「もうええいわい、ところで福井、一年が貧血を起こしたんじやが」

「ああん？」

あ、そうかあのフロントム野郎」

健介のぼやきに、モアラ、もとい岡村建一は眉間に深く皺を寄せた。「やっぱり、怪異が原因かい。」

つい先ほどまでピンピンしとったのが、いきなり真っ青な顔で座り込むんでどうした事かと思っと思ったんじやが」

「おう、あいつの姿と魔力、要するに生体エネルギーを掠め取ったって言うってた。」

どんな状態だ、一年の奴」

「一応、お前のおやつ焼き菓子食わせたら顔色が戻ったんじやが」
「勝手に食わせるなって言いたいけど、今回は仕方ねえなあ。」

で、残りは？」

聞き返されて、岡村は目を逸らす。

マネージャーが落ち着いた途端、岡村の手から残りの焼き菓子を奪って、駄菓子を食べ尽くし腹を空かせた紫原敦が全て食べてしまったのだ。

その仕草で、大体悟った健介は、取り敢えず相棒の腰をどついておく。

「あいた!？」

「勘弁しろよ、人の非常食。」

今回下級ファントムの魔力食ったけど、それでも足りないって気配してるのに」

「おお。そう言えば文句言うところのう」

そう言いながら、岡村がビーストドライバーを見るのに、健介はそう言えばと相棒を見る。

岡村は、母方に山伏の血が流れているとかで、厳つい外見に似合わず勘が鋭く、体調に左右されるが霊視等が出来る場合がある。

その能力の延長か、岡村には健介にも希にしか聞こえないビーストドライバーからの声、つまり封印されている《ジャバウオック》の言葉を取り取る事が出来るのだ。

「一応聞くけど、何て言ってる?」

「そうじゃのう、繰り返し三つの言葉を叫んどるわい。」

『不味い』、『薄い』、『物足りん』とな」

「あー、やっぱり?」

がつくりと肩を落とし、健介は指輪を外した。

ドライバーが消えるのを見届けた岡村は、踵を返そうとした長年の相棒に一応の確認を兼ねて声を掛けた。

「これから養い親のところへ行くんじゃないかな?」

「おう、祖父さん祖母さんも亡くなっちゃった今じゃ、寮が閉まる年末は元々こつちに戻る予定だったしな。」

監督には最初に話しておいたし、荷物はとっくに送ったしで身軽なもんさ。

始業式前には戻るから、皆にはよろしく言っといてくれ」

「おお、義兄（おにい）さんによろしくな」

「おうよ、モアラもご両親によろしく言っといてくれな！」

「じゃから儂人間じゃと言うに！」と言う繰り言を続けて、岡村は立ち去る福井を見送った。

彼が建物の向こうに消えてから、岡村は大きく溜息を吐いた。

「何か、嫌な空気じゃなあ。」

福井めも隠しよるから判り難いが、もしや怪異がまたぞろ大きな騒ぎを起こしよるのかもしれない。

骸骨ライダーの悴達と言うたか、福井の何かしら動くのかのう」

それだけ呟き、岡村は後輩達の方へと向かった。

最初の出会いは、小学生の頃。

弟と一緒に通っていた星心大輪拳と、兄弟流派である赤心少林拳の、関東支部同士の交流会だった。

弟だと言う、何人かの子供達を連れ来たあいつは、同い年——但し生まれ月の関係で、相手の方は一学年上だったが——だが既に赤心少林拳のエース格であった。

そんなあいつ等の事を、めちやくちや可愛がっていたあいつの親父は、ライバルである星心大輪拳の選手達——つまり俺達だ——の事もとても可愛がってくれた。

あいつが『弟』と呼んでいた連中の過半数が、所謂事件被害者でおかつ身寄りの居ない奴らで、そいつ自身父一人子一人、しかも世界中飛び回っている父親の帰りを待ち続けていると知ったのは知り合って二年目、師匠や世話役の大人達が話しているのを偶然耳にしたかった。

だからと言って、手を抜くつもりはサラサラ無かったが、その内バスケに出会った俺は比重を拳法からバスケに移して行ったので、その分あいつとの縁も少しづつ減って行った。

尤も、高校受験当日、生徒会役員として受験生の誘導をする彼の姿を発見し、互いに奇縁だと笑ったのだ。

再び交流を始めたその矢先に、あいつの父親が事故に巻き込まれて、生死不明——いや、その時は生存は絶望的と言う知らせが飛び込んできた。

取り敢えず、事情を知りたくて向かった奴の自宅で、知り合って初めて、あいつが声を荒げるのを聞いた。

「父は生きています！」

貴方方の都合で、俺の父を殺さないで下さい！」

その場にいた背広の大人達の内、あいつの言葉を「樂觀が過ぎる」だの、「事實は受け入れない」となどと言っていた連中は、見覚えのある飯屋の兄ちゃん達が玄関から押し出していた。

あいつ自身の事は、金髪に茶色の瞳の優男が慰めていた。

その人物が、あいつ、滝海斗の父のほぼ唯一の上司であり、後々色んな理由でお世話になる《ホークアイ・ホールディングス》の会長だと知るのは、それから間も無く。

俺と弟が、『ホロスコープス』と名乗る連中に関わりを持ってしまった後。

簡易アストロドライバーと言う、オーバーテクノロジーを手にして四苦八苦する俺を、先にオルタリングと言う代物を手に入れていた、海斗が助けてくれた時からである。

WC（ウィンターカップ）最終日。

秀徳高校バスケ部は、準決勝で洛山高校に敗れ、海常高校との三位決定戦を征して三位の成績を収めた。

その後、応援してくれた二軍も含めた全部員で観戦した洛山高校対誠凛高校の試合に、色々と煽られるものを感じつつしかしこれで高校バスケは終わりなんだなあとも思いつつながら、荷物を纏めた宮地清志は後輩達に声掛けしつつバスが待つ昇降口へ向かおうとしていた。

だがそんな中、先に外へ出た筈の弟、宮地裕也が眉を顰めながら走って来た。

「兄貴」

「おう、どうした裕也、バスまだ来てねえのか？」

「いや、バスは来ている、二軍の連中から先に乗せてる。

それが兄貴」

一旦言い淀んだ裕也は、兄の傍まで来て周囲に聞こえないよう耳打ちした。

「兄貴、澤崎がいた！」

「何だど?! 見間違いないのか!?!」

「俺があの子を見間違うかよ！」

競技場の反対側を歩いてた、横に居た奴は見た事無い奴だったけど、何か何処かのお偉いっぽかった」

勢い込んでそう言う弟に、清志は顎に手を当て考える。

澤崎と言うのは、昨年まで秀徳高校の数学教師をしていた、澤崎彩萌と言う女教師だ。

教師になりたて故の真面目さで、生徒の相談を良く聞いてくれる優しいお姉さんみたいな先生。そんな評判の女教師の真の姿は、カルト組織に傾倒し人間から一步踏み外した、カルトの工作員であった。

『ホロスコープス』と言うそのカルトは、『宇宙へ行く人類の代表を選出する』と言う事をお題目に、ゾディアーツスイッチと言う代物をばら撒き、怪人を増やし騒ぎを起こしていた。

その連中の主張によると、スイッチを育てラストワンを超える事が出来た者を十二人集める事で、宇宙の果てにいますと言うオーバードに会いに行く権利を、手に入れる事が出来るらしい。

その騒ぎに、バスケでも拳法でも伸び悩んでいた裕也が巻き込まれたのだ。

彼女に言葉巧みに丸め込まれた裕也は、ゾディアーツスイッチで猫犬座の怪人、ハウンドゾディアーツになってしまったのだ。

その騒ぎを収めるに当たって、ちょうど拳法でのライバル——と言ってもその頃には道場へはあまり通わなくなっていたのだが——であった滝海斗とその仲間の力を借りて、又海斗の父が秘匿していたオーバーテクノロジーを利用したのだ。

その後、化けの皮を剥がされた彼女は、S・A・U・L（対未確認生命体対策班）によって表向きは実家の都合と言う名目で学校を辞め、当局に拘束された筈なのだが。

「おい、あの女が出所したなんて話、俺は聞いてねえぞ?!」

「俺もだよ。だけど兄貴、あの××（ピー）女なら、看守だまくらかして逃げるくらい簡単かも」

物騒な弟の頭を一発叩き、しかし有り得そうな話に頭が痛い清志は眉間を抑える。

この九ヶ月ばかり、変人後輩どもに悩まされて来たものの、プライベートにおいては平和な日々が続いていた事を痛感しつつ、清志は手持ちの携帯を弟に投げ渡し、大きめなスポーツバックに突っ込んでおいた小振りなアタッシュケースを取り出した。

「兄貴！」

「お前はそれで海斗に連絡しろ、俺はあの女が何してるのか確かめてくる！」

「そんな、危ねえよ兄貴、松坂のあんちゃんに又どやされちまうよ!」

「そんな無理しねえよ！」

それより、あのイカレ共に手出しされたら後輩共が危ないんだ、取り敢えず行つて来る！」

「兄貴、ああもう、大坪さんにぐらい言つて行けよ、もう!!」

走り去る兄を見送った裕也が、一年の問題児（レギュラー）二人の不在に気付くのは、それから五分後の事であった。

その頃、高尾和成はエース様事緑間真太郎に付き合ひ、競技場周囲の自販機の場所を訪ね歩いている真つ最中であつた。

それと言うのも、今日のおは朝で蟹座は二位だったものの、そのラッキーアイテムが『黒い自販機から出した缶』であつたのだ。

自宅周辺の、黒つぼく塗られた自販機で入手したコーヒー缶で、試合は過ぎたものの、帰り際になつて観客達のざわめきの中から『黒い自販機』を聞き取つた緑間が、実物を探しに出てしまつたのだ。

「しーんちゃん、そろそろバスの時間だよ、戻ろうぜえ？」

「先に戻ればいいのかよ。」

俺は監督に、わがまま二回使用で、自宅への直帰許可を貰っている」ズンズン進む緑間の背後で、和成はそつと溜息を吐いた。

おは朝占いのピンポイント振りに、驚くと同時に寒気がする。

よもやこちらの事を看破しているのではないかと、疑うくらいの精度である。

和成は、ジャージのポケットに突っ込んだ、本日の蠍座のラッキーアイテムであるメダルをぐつと握り込んだ。

競技場を大きく回り込むうちに、見えて来た『黒い自販機』に和成はやつぱりと、相棒に見えないように額を抑えた。

やはりと言うか、想像通りそこで『使用出来ません』の張り紙を付けて突つ立っているのは、和成の予想通り鴻上フアウンデーション謹製

の『ライドベンダー』だった。

所謂自販機状態の『マシンベンダーモード』で、確かにこいつに普通に小銭を入れても何も出てこないし普通の人には使えないからこそその『使用出来ません』の張り紙なのだが、緑間は電源が入っている事に気付いて、何とか中の缶を出そうとしている。

「えーと、真ちゃん、出ないみたいだから諦めたら？」

「何を言う、俺は人事を尽くすのだよ」

「あー、はいはい」

実際の話、和成の持つメダル——セルメダルを使えば、ライドベンダー内の缶（正確には缶型小型ドロイド、通称カンドロイド）を取り出す事は可能なのだ。

だが、夏にやはりファストフード型のガジェットがラッキーアイテムだった時に、フードロイドを持ち出した結果『兄』達に寄って集って叱られた——あの時は、一番鷹揚な長兄にまで叱られたのだ——為、二の足を踏んでいる状態なのだ。

その時、自販機前でござこそし続ける緑間に向かって、通り過ぎようとした男女連れの、女性の方が声を掛けてきた。

「あら君、秀徳生なの？」

大会なら先ほど終わったでしょう？

中谷先生は何してらっしゃるのかしら、こんなところに生徒を置き去りにして」

立ち止まってそう言った女性は、二十代半ばくらいに見えた。

隣を歩いてきた男は、興味なさげに、しかし何かを測るようにギロリとこちらを見て来た。

その視線に、和成が眉を顰める向こうでは、緑間と女性との会話が續いていた。

「監督には、許可を取っています。」

自分はラッキーアイテムを入手する為に、今この自販機から缶を取り出そうとしているところなのですが」

「缶って、あれ、この自販機？」

駄目よ君、これは普通のお金じゃ使えないのよ」

「？」

「どう言う事でしょうか」

カシヤツと眼鏡を押し上げた緑間に、女はくすくすと笑って上着のポケットから何かを取り出した。

その手に乗っているのは、五百円玉より一回り大きい鈍色のメダルで、緑間の背後から首を伸ばした和成は、それが自分が持っているセルメダルと同じものだと思わす、思わず小さく息を飲んだ。

「この自販機はね、ライドベンダーと言う特殊なものでね、お金じゃ動かないの。」

ついでに言うと、この機械の中に入っているのも飲み物とかじゃなくて、一般人には用の無いものよ。

「それでもいるの？」

「いります、俺にとつて、人事を尽くす為にこの自販機の中の缶が必要なんです」

そう言った緑間にむかって、笑いながら「それなら」と言った女は、小首を傾げながらこう続けた。

「この後、私達のお話を聞いてくれるなら、このメダルを進呈しても良くてよ」

「それは」

「真ちゃん、メダルなら俺が持つてる、だからさっさと缶を出して帰ろう！」

女に頷こうとした緑間の腕を掴んで引き戻すと、和成はそのまま自分のジャージのポケットから取り出したメダルをライドベンダーに投入し、手近なボタンを押して一缶取り出した。

「高尾!?!」

「このメダルは、蠍座のラッキーマイテム！」

二枚しか持ってないから、一缶だけな、手に入れたんだから帰ろうぜ、真ちゃん！」

「あら、そんなに慌てなくても良いでしょう、高尾和成くん。」

私達、貴方の為人（ひととなり）を、緑間真太郎くんに聞きたかったですか？

勿論、緑間くん自身のお話も聞きたいけれど、ねえ」

缶を緑間の手に押し付け、走り出そうとした和成は、女の言葉と、そして何時の間にか周囲に増えた黒服の男たちを『鷹の目』で見出し立ち竦むしかなかった。

事態は飲み込めないものの、その場の空気が急速に不穏になるのを悟り、緑間はカシヤリと眼鏡のフレームを押し上げる。

警戒心顕（あらわ）に立ち竦む高校生二人に、女が口を開こうとしたその時だ。

「人の後輩に何してやがる！」

と言う怒声と共に、手に小型のアタツシユケースを掴んだ宮地清志が走り込んで来た。

清志を見た途端、女はあからさまに顔を顰めた。

清志の方も、元々吊り上がっていた眉を更に吊り上げ、女を指さし吐き捨てるように言い放つ。

「てめえ、やつぱり澤崎か！」

「宮地清志、ち、邪魔臭い。」

そう言えばバスケ部だったわね、お前！」

そう叫んだ女の周囲に、バラバラつと黒衣の男達が現れ、そのまま仮面を被った忍者のような姿に変わる。

「何!?!」

「こいつら、人間じゃ、ない!?!」

「ダスタードって奴らだ、雑魚だけど、それなりにタフで硬いんだよ!」

そう唸った清志は、緑間の手にカンドロイドが握られているのを認めると、ちらつと和成に視線を走らせこう言った。

「カンドロイド出してるって事は、高尾、まだメダルあるか！」

「はい、もう一枚」

「だったらそれで移動しろ、いいな！」

「あ、はい！」

ハツとなった和成は、もう一枚をライドベンダーに放り込む。

すると、突然動き出した自販機は、緑間が呆然とする間に二輪車形

態に変形する。

変形が終わり、アイドリング状態になったバイクモードのライダーベ
ンダーに、和成は緑間の手を引き自身がハンドルを掴む。

「た、高尾!？」

「真ちゃん捕まってる！」

飛ばすから！」

「たかおー！ー！ー！ー！ー!？」

前輪をロックしたままエンジンを吹かし、そのまま円を書くように
後輪を振って方向転換させると、和成は一気にライドベンダーを走ら
せる。

馬力で前輪が浮き上がった為に、緑間から悲鳴が上がり腰に継り付
かれるが、それに構わず和成はバイクを直進させた。

それを見送るより先に、清志はアタッシュケースから出した簡易ア
ストロドライバーを腰に当てた。

顔を歪める女——澤崎彩萌の背後で、壮年の男が興味の薄い顔でこ
う言った。

「トラブルかね？」

「ええ、ちよつと。」

でも想定内ですわ、彼ら個人と接触する事の方が想定外でしたか
ら。

今日のところは引き上げたいんですけど、彼が邪魔ですわね」

そう笑うと、澤崎は何処からとも無く黒い卵くらいのものを取り出
した。

それに斜めについているボタンを、澤崎はにんまりと言う擬音が聞
こえそうな顔で押し込んだ。

次の瞬間、巻き起こった暗い紫色の輝きが治まると、そこには蠍を
模ったヘッドパーツを着けた黒衣の怪人が立っていた。

これが、澤崎の『ホロスコープス』幹部スコピオンゾディアーツ
としての姿である。

清志の方も、ばつと両腕を広げ拳法の型を取りつつ、ドライバーに
設置されているスイッチを押し込む。

Ready!

「変身！」

青い輝きに飲み込まれ、清志は光の球体が変わって、周囲のダスター達を薙ぎ倒す。

そして元の位置に戻り光が収まると、真つ青な姿で宮地清志、いや仮面ライダーメテオが見栄を切る。

「仮面ライダーメテオ。」

取り敢えず、大人しく捕まるんなら良し、そうじゃないなら。

「メエら全員、轢く！」

「相変わらず物騒なこと。」

大人しくしていて頂戴、私達もあなたの無駄吠えに付き合うほど暇じゃないの！」

スコープオンゾディアーツの命令で、新しく湧き出したダスター達がメテオ目掛けて殺到する。

「雑魚どもが、ぶった切られたい奴から前へ出る！」

S a t u r n n ! R e a d y !

迎え撃つライダーは、右腕に並ぶスイッチの一つを押し込み、右拳に湧き上がった光輪で襲い掛かる忍者モドキ達を薙ぎ払う。

ダスター達の襲撃の合間を縫うように、スコープオンゾディアーツも光線を放ちライダーに手傷を与えようとする。

そうやって両陣営が戦う間に、澤崎の隣にいた男はその場を離れ、軽く鼻を鳴らした。

「ふん、あれがこの世界の仮面ライダーとは、な。」

若造どころか、只の餓鬼ではないか。

こんな小童に手古摺るような組織と、さて手を組んでも良いものか」

そう嘯きながら、男は物陰に入り込むと、そのまま消えていった。

同刻、S・A・U・Lのメインサーバー室で、研究員でありGーユニットの指揮官兼主任オペレーターでもある弱音羽久警部補は、S・A・U・Lの唯一の上官である警視総監と共にディスプレイ上に広

がる地図を見ている最中であつた。

その大型ディスプレイに小さなウィンドウが開き、電子音声とは思えない静かな『声』が警視総監に呼び掛けてきたのだ。

「新條警視総監、時空震を感知しました。」

振動の周期、経過時間共に、現在都内各所で感知されているものと同じです」

「そうか。」

『二年前』との共通点は？」

警視総監の声に、ディスプレイが分割され小さめの画面側にぎつと数式が流れた後、『声』は言葉を続けた。

「残念ながら、『二年前』との共通項は少なく、関連性は低いと思われます。」

不安定かつ、活性不活性を繰り返すあの『傷』と違い、こちらは数秒間安定してゲート状態を維持した後完全消失しています。

その事から、何者かの完全制御下にある『裂け目』であると、現状判断しています」

「そうか。」

弱音くん、Gーユニット責任者とS・A・U・Lの全員に私の名前を招集を掛けてくれ。

未確認生命体や財団Xより、厄介な存在が現れたかも知れない」

「は、はいー」

長い髪を靡かせながら走って行く女性警部補を見送り、警視総監は再びディスプレイを見上げる。

そのディスプレイ上には東京都二三区の白地図が映され、そこには赤い点が散らばっている。

何箇所か、点が集中している場所に眉を顰めつつ画面を睨み付ける警視総監に、『声』が質問を投げ掛ける。

まるで、古くからの友人のようなその遣り取りに、弱音羽久はそこにいたら驚いたかも知れない。

「何か、お気に掛かる事がありますか、警視総監」

「K」、今は俺達だけだ、そんなに畏まらないでくれ」

「では新條さん、やはり高校に点が集中している事が気になるのですね」

「ああ、それもあいつが関わった子供が、通っている学校ばかりだ。そうじゃなくても、未確認絡みであいつの倅を始めとして、結構な人数を関わらせちまつてるのに」

ガリガリつと、白いものが混じり始めている頭を？く相手に、《K》と呼ばれた方は静かにこう返す。

「仕方がありません、あの子達は『スカルライダーの息子達』(Son of Skull-Rider)と言う称号に、誇りと希望を持っています。

一号を始めZXまでのライダー達が未だ未帰還であり、そして十一番目と言われたスカルライダーもまた消息不明の現在、彼の大義の継承者であると言う事実は、彼らの心の支えでもありません。

そうである以上、私達に出来るのは警察権力を持って、彼らの戦いを援助する事ぐらいです。

人間の心を取り戻したシヨッカー北米支部長が、その組織力を持つて破棄された基地に取り残された改造人間達に救いの手を差し伸べるように。SPIRITS隊が未だに彼の生還を信じ、搜索と調査を続けているように」

「あー……。」

やっぱり、柄にもない地位には着くもんじゃねえな。

あいつが出世を蹴った理由が判ったぜ、全く。

行ってくるよ、《K》。これからの事を部下どもに話して来なきやな。

二五年前と、同じ事にしない為に」

「はい、いつてらっしゃい、新條さん」

サーバー本体に向かって手を振ると、新條強警視総監はサーバー室を後にした。

「……。」

仕方がありません。

新條さん、あなたの望みを叶えるには、現在の地位と権力が必要で

した。

滝さんの望みの為には、FBIで有り続ける事は出来なかった。

それだけの事だったんです」

そう呟き、警視庁の超大型サーバー《K》はディスプレイの電源を落とし検索作業に入った。

学校帰り、誰とも知れない人間に捕まって、真っ白な病院みたいな部屋で痛い注射を何本もされて、良く判らない薬を一杯飲まされて。俺は、変な力に目覚めた。でも。

俺を攫ってこんな力を持たせた大人達は、俺を《失敗作》と言って『処分』しようとした。

怖かった。家族が恋しくて悲しかった。

もう一度、リコちゃんに会いたかった。

「そこまでだ、犯罪者共！」

子供にそんな事やらかして、只で済むと思うなよクソが！」

壁を突き破って、現れたのは黒い姿の髑髏。

いや、髑髏が染め抜かれた黒いヘルメットに、黒一色の——ライダースーツと言う言葉は、後から教えて貰った——人が、メスを持つたり注射器を持った大人達を吹き飛ばした。

そして、処置台に縛り付けられていた俺を抱き上げたその人の、『昔』が俺には見えただ。

夕日の照らす、荒れ果てた岩山。

周囲には沢山倒れた黒い姿の人々——じゃないかもしれない。だって、人間は煙を出して溶けたりしない！——の中で、立っている人が居る。

その人が見詰める先で、鳥のような牛のような怪物に向かって、赤い目に黒い姿の人間が二人、プロレスのダブルドロップキックよろしく同時に蹴りを繰り返していた。

高々と吹っ飛び爆発するその怪物と、立ち去る二人組を見ていると誰かの声があった。

ごめんな。

ごめん、本郷。ごめん、一文字。

俺が無力だから、俺が無能だから、犯罪被害者のお前らを戦わせちまってる。

ごめん、ごめん、ごめん……。

その声は背後からで、そうやって男の人は泣いていた。でも涙は見えなくて、傷だらけの両の拳が、真っ白になるぐらい握り締められていた。

能力発動で、凍り付いていたらしい俺を見ていた骸骨の人は、ヘルメットのシールドを上げてこう言った。

「悪かったな、坊主。なんか怖いもの見せちゃったな、ごめんよ？」俺を見つめる瞳は、見てしまった《昔》と違って、ずっと優しく光っていた。

ウィンターカップ（WC）が終わって三日。

この日はお正月で、さすがの誠凛高校バスケット部も、正月三が日は全面休業である。

誠凛高校二年、日向順平は家族と新年の挨拶を交わしお年玉を貰った後、大股で自宅を後にした。

一月二日には、部活の仲間や後輩達とお参りに行く事になっていて、三日からは実家の理容店が営業を始めるし、何より昨日から帰って来ている『兄』に会う為に、順平は出掛けて行った。

彼の足が向けたのは、お台場の端に位置するとある総合商社のビル……の一階にある、『休業』の札が下がった小料理屋《TOKIO》である。

まあ、予想もしなかった光景である。

引き戸を開けたら、銀髪の青年が高校の後輩に飛び蹴りを決めており、その向こうでライバル校の一年が笑い転げているだなんて。

ぽかんとしたのはもの数秒で、順平は慌てて更に後輩に掴み掛ろうとした青年を引き離そうとして、左右から伸びた腕に引き止められた。

振り返ると、眉を下げた中村真也と、やや不機嫌そうな宮地裕也の二人が立っていた。

「真也、裕也もどうして」

「いや、あれは火神が悪いし」

「あいつ、最近人の言葉鵜呑みにするの酷くなつてないか？」

幾ら何でも、幼馴染みの性格忘れて、人からの又聞き信じるのは良くねえよ」

「え？」

順平の反応に、真也と裕也は顔を見合わせる。

そこに言葉を割り込ませたのは、奥の厨房から顔を出した裕也の兄、宮地清志だった。

「何してやがる、ちったあ手伝え一年共！」

それから、二年共、順平が来たんなら取り敢えず二階行かせろ、空達の手伝いさせろ」

「うっす！」

「はい！」

「はい！」

「判りました、ほら、順平」

「行ってこい、会長さん11時にこっち来るつてよ！」

「うえ、本気（マジ）か!? もう30分もねえじゃん！」

同級生二人に押し出されるようにして、順平は店の小上がりの奥にある少し狭目の階段を駆け上がった。

この小料理屋は、小上がりの座敷席二つにカウンター席一〇席と言う小ぢんまりとした店だが、実は二階に五〇畳敷の宴会場が設置されている。

タネを明かせば、小料理屋の隣にある喫茶店の二階部分も、宴会場に含んでいる為だ。

元々、この小料理屋《TOKIO》は、「気が向いた時に日本料理が食べたい」と言う《ホークアイ・ホールディングス》会長の鶴の一声——平たく言えば、仕事に忙殺されてストレス過多で死に掛けた会長の、慰安の為に開店した店である。

一時期は、世界中の支社を飛び回っていた会長に従い、店舗が転々としていた小料理屋《TOKIO》だが、二年前からはここ日本支社での営業が続いている。

切っ掛けこそ、会長の慰安だったが現在は板前の腕が社内で噂にな

り、すっかり人事厚生課直属部門として知られるようになっていた。そんな謂れの店故に、部署によつてはこの店で歓送迎会をするところもあり、それで日本で固定出店するに当たつて、わざわざ宴会場を用意したのである。

二階に上がり、短い廊下を進んで襖を開くと、今年中学に上がったぐらいだろう何人かの子供と、二十歳前後の女性陣が宴会用の長机のセッティングを行っていた。

奥の物置兼配膳室から、追加のテーブルやビールやジュースの詰まったケースを運び込んでいる青年達に、順平は足早に近付いた。

「上嶋さん、空さん、閃さん、あけましておめでとうございます！」
「お、順平！」

順平の声に最初に気が付き振り返つたのは、焦げ茶の髪に緑がかつた瞳の香山閃と言う青年だ。

ドイツ人とのハーフだと言う彼は、しかし物心ついてずっと日本で暮らしている事もありメンタルも行動規範もめつきり日本人である。親から貰つたドイツ人名を、省略している所為もあるのかもしれない。

その隣で、一杯にビールの詰まつたケースを四つ抱えて歩いていた青年が立ち止まる。

彼が、空——一文字空である。童顔で、身長的には順平よりやや低い彼は、しかし一〇〇〇ccバイクを軽々担ぎ上げる剛力持ちでもある。

そして、バインダー片手に周囲に指示出ししていた、二〇代後半らしい青年がへにやつと笑つて、傍に来た順平の頭を撫でる。

彼は人事厚生課飲食部門の部門長で、小料理屋《TOKIO》の店長でもある上嶋繁である。

「おーおー、おめでとさんなあ。
そう言えば、順平ちゃんはこないだの大会、優勝したんやったなあ、偉かつたなあ」

「ああ、聞いた聞いた、一回ぐらい見に行きたかつたんだけど、結局行けずじまいだったからなあ」

「仕方がないよ、俺達S・A・U・Lに動員掛けられてたし、終わった頃には試合終わってる時間だったし」

上嶋の言葉に、空と閃が苦笑いになる。

自身が、後方待機の非戦闘員枠である事は判っているものの、しかし『兄』達にはほぼ聾棧敷に置かれたと言う事実は寂しいと言うか、何となく順平は不満を感じて眉を顰めてしまう。

それを察して、ケースを下ろした空が順平の頭をもしやぐるように撫でる。

「うわ!？」

「そんな顔すんなよ、俺達は、本当はお前ら年下面子までS・A・U・LやSPIRITS隊関連に巻き込みたくないんだからな。

おら、そろそろ下から料理が上がって来るから、悪いがあつちで手を洗って運ぶの手伝ってくれ。今日は支社長さん達も来るから、大掛かりになるそうだから」

「はい」

そう言つて、片手をひらひらさせる空に一礼して、順平は洗面所へ向かった。

三〇分後、あの後一気に人間が増えて、料理も並べられ、また新年会に参加する人間も一気にやって来た。

全員が席に着き、コップを持ったところで、上座の人物が乾杯の音頭を取った。

「旧年中はご苦労様。今年もまた宜しく頼むよ。

じゃあ乾杯！」

「「「「「乾杯!」「「「「「」

上座に座る金髪に茶色い瞳の青年は、しかし慣れた様子で胡座を掻き、コップに入った冷酒を口に運んでいる。

この人物が、《ホークアイ・ホールディングス》会長アラン・ホークアイである。

乾杯が終われば、所謂無礼講と言う事で、三々五々参加者達は友人知人で固まって飲んでいる。

順平達未成年達も、大半が顔見知り——ほんの数日前まで、ウィンターカップ(WC)で顔を突き合わせた面子が何人もいる——なので、自然学校生活や先輩後輩同級生の話になった。

「え、真也、学校の人間に話したのか？」

「お前ずつと黙っておくって言ったろ？」

「文句は《スマートブレイン社》に言って下さい。あの連中とやり合っているところを見られちゃって。」

「取り敢えず、《T O K I O》に来て貰って、大まかなところは話したんですが」

「じゃあ、お前さんも逃げられた訳？」

「多勢に無勢だったからな。畜生め。」

「お前も、雑魚押し付けられて逃げられたんだろ？」

「あれ、狡いよな、パカパカ増やしやがって」

「じゃあ、お前の方は無事終わったんだな」

「ひろ兄もだろ？」

「あ、こらキバット、お前の分それだろ、人の唐揚げ取るんじゃないやねえよ！」

「お膳を食べながら喋る、中村真也、宮地裕也、福井健介、宮地清志、黛千尋に灰崎祥吾の会話を耳にして、順平は頭が痛い。」

「その向こう側で、高校の後輩である火神大我が、『兄』に何やら叱られている様子で眉を下げている。」

「流星に、来た時の騒ぎもあって、気になった順平は二人の傍へ移動する事にした。」

「祥吾が、明るいところが苦手でその所為で目付きが悪いと言われてたのは、お前も覚えているよね、大我」

「うす」

「お前も、お父さんの仕事関連で危ない目にあつた事は何度もあつたし、《ホークアイ・ホールディングス》所属の研究者と言う事で、灰崎のお母さんが何度もテロや誘拐の対象にされていたのも、覚えているよね」

「うす」

返事する度に、190センチの後輩が一生懸命小さくならうとして
いるのが判る。

『兄』、滝海斗はと言うと、お膳に箸を付けつつ、淡々と説教(?)を
続けている。

「お友達の話を聞いて、相手に共感するのが悪いとは言わない。でも、
本人に確認せず、それで決めつけて会った途端責めるのは、兄さん間
違ってるって思うんだ。」

お前がアメリカに行っている間、お前が元気にしてるかずっと祥吾
は心配していたし、帰って来たのに学校が違う所為で殆ど顔を合わせ
られなかったって、寂しがっていたのに」

「うっ、ごめん、なさい」

「謝る相手が違うよ、大我。ベビールームからの付き合いの幼馴染に、
謝らなきゃ駄目だろう?」

俺は、今回の事では間に入ったりしないよ、自分で祥吾に謝りなき
い。祥吾にも、お前を蹴った事を謝るように言っている。

でも、先に謝るのは、事情を確かめずにあの子に暴言を放ったお前
だ。いいね」

「うす」

「返事」

「は、はい」

思ってもみなかった状況に、口を挟み損ねた順平に声を掛けたの
は、秀徳高校一年の高尾和成だった。

「いやあ、日向さんもこの関係者だったんすね!」

「お、おう、ええつと、高尾、だったな」

「いやん、ここでは和成って呼んで下さいよ、俺も順平さんって呼びま
すから!」

けたけた笑う年下に、一瞬ムツとなるがそこに目を瞑って事の次第
の説明を請うと、和成は頭を軽く掻いてこう答えた。

「あ?、祥ちゃん帝光中の出身でしょ? それで黒子から火神の奴、祥
ちゃんがサボリ魔だの不良だの彼女寝とっただの色々言われたらし
いんですよね!」

実際は、成長痛で保健室で寝てたり、お袋さん関連でブラック企業に誘拐されそうになって学校の内外逃げ回ってたり、お袋さんやその同僚の人のお供してただけだったらしいけど。

でも、キセキとその仲間だった黒子や真ちゃんは、祥ちゃんの事不良だつて決めつけて他の部員の不祥事も祥ちゃんがやったつて話にされちゃつて、強制退部させたらしいんですよ。

祥ちゃん、赤心少林拳の門下生だから、一般人と喧嘩とかする訳無いのよねー。

うちの宮地先輩が、最初真ちゃんに当たりキツかったの、それもあつたらしいんですよー」

言外に「無いわー」と言う空気を漂わせた和成は、自分を見て来る一年上のライバル校主将を見返し、こう締めくくった。

「で、火神が黒子に聞いたまんま、「不良になって見損なつた」つて言つたんで、怒つた祥ちゃんが火神を蹴つたんですよ」

「そんな事があつたのか」

「つて言うか、順平さん、あんまりこつちに来ないんですか?」

「俺、家族がいるから基本自宅暮らしだし、中学時代は身体作りの為に学校とジムの往復に等しかつたから」

溜息と共に順平が答えると、一瞬憧憬を目に掠めて和成はかららつと笑つた。

その、和成の瞬間の間に気付き、順平は己の失言に内心舌打ちする。

この小料理屋《TOKIO》に出入りする未成年の過半数は、事件事故で家族を失つた者達だ。何人かは親族に身を寄せた者もいるが、殆どは海斗の父である《滝和也》を保護者、あるいは身元保証人として暮らしている。单身攫われた自分が、この中では特殊ケースなのだという事を、順平は失念していたのだ。

そこに、パシャつと言う音がした。

思わず振り返ると、カメラを抱えた少年が笑っている。

この子は、姉と二人、両親を亡くして親族の遺産争いに巻き込まれたところを滝和也に保護された、詩島剛と言う少年だ。

この春高校に上がる彼は、兄貴分から譲つて貰つた一眼レフカメラ

を抱えて、臨時カメラマンを勤めているらしい。

「えへへ、ダメだよ、兄ちゃん達、お正月からそんな辛気臭い顔しちやさー!」

「剛?」

「あはは、ちよつとさつきの騒ぎを教えて上げてただけだよーん。

ところで剛、志望校は当然秀徳高校(うち)だよね?」

和成の言葉に、剛はポリポリと頬を掻いた。

「うーん、迷ってるんだよねー、秀徳も良いんだけど、学力的には桐皇も悪くないし、新設校の誠凛も気になるし。それに誠凛は、大我兄でも入れたし」

「こら、誤解すんな、あいつは確かに成績シヤレにならねえけど、うちの学校決して偏差値低くないからな?」

「て言うかももう受験秒読みじゃん!」

何やってんの、お前!」

弟分に、和成の意識が移ったのを幸いと、順平はお手洗いにいくと告げて席を立った。

宴会場を出て、階段近くのお手洗いで用を済ました順平の耳に、誰かが話す声がした。

「佐久間君から連絡が来たよ。

一月の第一月曜日付で、滝和也の監視任務は正式に君、一文字空に委任される事になる」

「はあ、やっとなつすか」

アラン・ホークアイの声は何処か不満げで、空の方の声は待ちくたびれたと言いたげであった。

「全く、義父(おやじ)が事故ってもう二年、俺が名乗り出てすら一年ですよ?」

あいつら何考えてんだか。

どうせ見張りがいるんだから、やるって言う人間に任せりやいいのに」

「そう言う問題じゃないよ、君は未成年だからね」

ホークアイ会長の声に、順平もそれはそうだと思う。

滝和也、順平にとって命の恩人であり第二の父のような存在である彼は、FBI捜査官を退職し表の肩書きは《ホークアイ・ホールディングス》会長秘書であったが、実際はSPIRITS隊を率いて世界中の紛争地や危険地帯に埋伏する犯罪組織の摘発と、壊滅に勤しんでいた。

その父の一部とは言え仕事を引き継ぐとなれば、二〇歳になっていない『兄』に話を回すのはある意味おかしいのではないかと思った。だが。

「冗談じゃない。

あいつら、海斗にあんたの見張りと最終時の暗殺をさせる気満々だった癖に、俺が名乗り出たら尻込みするって、おかしいじゃねえか」

「空君」

「海斗にとって、あんたは父親の恩人で、実の祖父でもあるんだ。

あいつに祖父殺しなんかさせねえよ」

「空君、それは」

「あいつら、海斗があんたを一度倒す事が出来た『滝和也の息子』で『仮面ライダー』だから、『マミーゼネラル』の監視暗殺任務をさせようとしたんだ。

俺は、滝海斗、いや仮面ライダーアギトの相棒、仮面ライダークウガだ。能力的にあいつに劣るところなんかない。

未成年？ 俺と同じ年の海斗にやらせようとしたんだ、言わせねえよ」

二人の話し声を聞きながら、順平は能力制御の訓練中に見てしまった、記憶の一欠けを思い出した。

何処かのビルの屋上で、あの時見た青年が倒れ伏すミイラのような存在の手を掴んでいる。

事切れる寸前の怪人は、青年を見て笑ったような気配がした。

「ああ、滝、くん。私は、もう、死んでいたんだね……」

その言葉とともに、怪人は灰と化して砕け散り、彼は手に残ったものを握り締めて慟哭した。

「松本先輩、松本先輩、松本先輩!!」

——ごめんなさい、ごめんなさい!

——俺はまたしくじってしまった、また助けられなかった!

——本郷、一文字に続いて貴方まで!

誰もいなくなつたそこで、彼の嘆きは風に吹き流されて行つた。

沈み掛けた順平の思考は、しかしあつげらかんとした兄貴分の声で打ち消された。

「なーんて、シリアスに言つたけど、今更会長が人類社会裏切る訳ないし、義父（おやじ）が戻つて来ない訳無いし。」

単に疑心暗鬼で海斗を人身御供にしようつて爺い共に、嫌がらせしてやりたいだけだよね、俺は」

「本当に、君はいい性格に育っちゃつたねえ。『名は体を顕す』つて言うけど、一文字君の名前を貰つた所為で、こんな愉快犯になつちやつたのかねえ」

会長さんの、何だか沈んだような声に兄貴分の笑い声が重なる。

「それは、当人に会つてみなきや判らないけどさ!

取り敢えず、『仮面ライダー』が見張つてゐるつて事になれば、お偉いも静かになるでしょ?」

「やれやれ。本当にどうしたものかねえ、この子は」

笑い声を立てて上がつて来た誰かが、トイレを軽くノックした。

「順平、今の話は他の連中には黙つてろよ、宮地達とか騒ぐからさ。」

あと、終わつてんなら出てくれるか? 冷えてトイレ行きてえ」

「うわわ、はい!」

場所が変わる一瞬、目が合った兄貴分の顔は悪戯に成功した時のにこやかさと、何かを決めた時の真剣さが同居する《男の顔》をしていた。

EX01 クウガとアギト

Exeplisode01—A 敗北

二〇一X年、五月。

前年初冬に発生した、九郎ヶ岳遺跡発掘隊壊滅事件を皮切りに起こった、未確認生命体による連続殺人事件。

事態を重く見た新條強警視総監によって、長年準備を進められていた未確認生命体事件対策班、通称《S・A・U・L》が正式に設立され、国際警察機構（I・C・P・O）及び国連直属組織である《SPIRITS（Saving Project Incorporated）》
Soul》隊との間に提携が持たれた。

専用装備であるG—ユニットを用いて、《S・A・U・L》は未確認生命体G群、公称『グロンギ』の殺人行動を抑え被害の拡大を抑えようとした。

しかし、かつての『改造人間』にも劣らぬ破壊力で暴れ回る『グロンギ』に、《S・A・U・L》は早々に戦略の見直しをしなければならなくなつた。

そんな《S・A・U・L》側に、降つて沸いたように救援者が現れた。

金色の二本の角、赤い目紅い身体の二人の戦士。

それは、先に九郎ヶ岳の遺跡で発見された二つのオーパーツ《アークル》を用いて、滝海斗と一文字空が古代超戦士クウガとなつた姿だった。

彼らの協力によって、G—ユニットの改良及び『グロンギ』と言う種の研究を進め始めた《S・A・U・L》は、若干ながら戦闘で優位に立てるようになって来た。

だが、まだ撃破出来るのは『クウガ』のみと言う状況であった。

だがこの日、現れた未確認生命体は、『グロンギ』ではなく又これまで情報が集められて来た如何なる種族とも違う、全く新たな存在であ

り。

『こちら、Gユニット〇一二(まるいちに)、救急車の手配をお願いしますー!』

「こちら《S. A. U. L》中央管制室(センターコール)、どうしました?」

『新型未確認生命体出現、戦闘状態になった未確認生命体3-Aが大破により戦闘不能、救援に入った未確認生命体3-Bが中破後暴走、死傷者は出ませんでした、双方とも動けません!』

管制室に響いた、Gユニットオペレーターの悲鳴じみた声に、その場の対策班全員が凍り付く。

Gユニット、G-3ではまだ無理のある、『グロンギ』怪人体との格闘戦を軽々とこなし、爆炎の中に飛び込み逃げ遅れた人間を数人抱えて数十メートルから飛び降りる、そんな事を可能とする文字通り超人である未確認生命体3号、それが二人共倒れたというのだから。

その頃、ほぼ同じ報告を受け取る人間がいた。

それは、『ホークアイ・ホールディングス』日本支社東京本部の会議室で、定例会議を行っている幹部達に齎された凶報だった。

「会議中失礼致します、会長、海斗君と空ちゃんが!」

「何事だ、バラランガ」

長い黒髪を纏めたツーピース姿の女性が、髪が崩れたまま肩で息をして駆け込んで来たのを、一番端に座っていた如何にも気難しそうな男が咎め立てる。

だが、それに向かって、声を掛けたのは上座近くで議事を進めていた人物だ。

「バラランガ、今日が定例会議である事は判っている筈だ。

その会議を中断せねばならない事態が起こったのか?」

「申し訳ありません、社長、でも、でも海斗君と空ちゃんが、これまでとは全く違う、新たな未確認生命体の攻撃で、負傷して病院に搬送されたと《S. A. U. L》から連絡が」

その言葉に、上座の金髪の青年が顔色を真っ青にして椅子を蹴っ

た。

滅多に取り乱さない会長の様子に、会議室の三分の一が驚く中、古参の上級幹部達が立ち上がる。

「バラランガ、搬送先はー!」

「城南大学付属病院です」

「会長、人事厚生課の上嶋に状況の確認に行かせます。」

トニオ、夏川に連絡して、医薬品部に緊急要請に対応出来るよう在庫確認を急がせる。マツコイは、警備部に招集を掛ける」

指示を出し、自分に向き直る部下達を見て、アラン・ホークアイは何かを振り切るように蹴った椅子に座り直した。

「上嶋君には、詳しい話を聞いて、こちらに報告するよう伝えたまえ。」

医薬品部と警備部は高橋くんの指示通りにしてくれ、中村くん、悪いが最優先項目を上げてくれるかね、そこから片付けてゆこう」

「はい、会長」

会長の言葉を受け、幹部の二人が急いで会議室から出て行き、バラランガと呼ばれた女性も、そのまま会議室を後にした。恐らく、大学病院に向かう上嶋繁に同行するのだろう。

事態を良く知らない幹部達が不安に思うほど、会社の最高権力者と古参幹部達の空気は刺々しく、殺気立ったものとなっていた。

会議が終わったのは、報告から二時間後だった。

会議室を出るなり、アラン・ホークアイは待機していた車に乗り、城南大学付属病院へと向かった。

「上嶋君から連絡が来てるわ、読み上げましょうか?」

共に乗り込んだ、会長秘書の中でも一番フランクな通称『王女』が、報告書を入れたノートPCを抱えて聞くのに向かって、「頼めるかい?」と返す。

その答えに、先に用意していたテキストを呼び出し、要点だけ『王女』は読み上げた。

「空の方は、高圧電流による全身の軽度火傷と頸椎捻挫、右腕前腕及び右手人差し指、中指第一骨、及び左下腿頸骨に単純骨折。病院収容後

に興奮状態でそのまま職員を振り切り飛び出して行こうとした為、現在鎮静剤を投与されているわ。

海斗の方は、左胸部に直径三センチの貫通傷、左鎖骨の骨折と上半身を中心に、二十箇所以上の打撲痕とそれが原因の腹部筋挫傷も確認されてるわ。後、アークルの損壊、及び機能停止も確認されたとの事。それから、海斗は収容されてから今まで、一度も意識が戻ってないって」

「そうか。」

それで、どう言う状況で、どんな未確認生命体に襲われたのかの報告は？」

「ええ、これまで報告されていた《G群（グロンギ）》、《F群（ファンガイア）》、《L群（レジエンドルガ）》、《O群（オルフェノク）》、《I群（イマジン）》のどれにも該当しない、全く知らない存在だったって……あら、永瀬の報告だわ、これ」

「永瀬君？」

彼は確か、今日は子供達と」

不意に上がった、人事厚生課飲食部門の社員の名前から芋づる式に思い出した今日の予定に、アラン・ホークアイの白色人種の美男だが出身が良く判らないと言われた顔が、新たな怒りに引き攣れる。

永瀬知治は、試験休みに入った中学生達と学校の創立記念日で休みだった小学生達を連れて、今日は上野の博物館見学へ行っている筈だったのだ。

そして、一文字空は《S・A・U・L》の武装開発の協力に行っており、滝海斗は永瀬を手伝い弟分達の引率に行っていたのだ。

ならば、子供達の、そして博物館を訪れていたであろう多くの人々の前に、その新たな未確認生命体が現れたと言う事になる。

そんな事態となれば、海斗と言う少年が飛び出して行かない筈が無かった。

彼は、「目の前で見知った人が、無為に殺されるのを黙って見ていられなかった」から、《アークル》を手にしたのだから。

辿り着いた病院の、関係者以外立ち入り禁止とされた病棟の最も奥

の集中治療室（ICU）に、滝海斗と一文字空とは收容されていた。が、アラン・ホークアイが訪れたちようどその時、室内でちよつとした騒ぎが起こっていた。

鎮静剤を大量投与されている筈の空が、点滴を引き抜きICUを飛び出そうとしていたのだ。

看護師や医者、付き添っていた上嶋、永瀬の二人も加わりベッドに押し戻そうとするものの、何処にそんな力がと思うほどの勢いで振り切り、外へ出ようとする。

その騒ぎに、治療室に駆け込んだアラン・ホークアイは興奮状態で周囲が目に入っていない様子の空の顎を掴み、無理やり自身と目を合わせさせた。

金髪の青年に目の奥を覗き込まれたその途端、あれほど荒れ狂っていた空の身体からふっと力が抜け、そのままズルズルと崩れるように座り込むのを、慌てて看護師や男達がベッドに戻す。

やっと興奮状態から解放された為か、真つ白な顔で眠りに落ちた空の頬を撫でてやってから、ホークアイ会長はその横であれだけ大騒ぎが起きたにも関わらずずっと眠っている、人工呼吸器に顔半分を覆われた少年の方に向き直った。

繋がった検査機器は、ごくごく低い数値で彼の命が維持されている事を表している。

見た目苦しんでいる様子は無いが、直接ではないとは言え医療関係者として検査機器が表示している数値の意味が判る人間には、今の海斗の状態が決して楽観視出来るものではないと判った。

「ありがとうございます、Mr. ホークアイ、ですが今のは一体」「若い頃に覚えた隠し芸ですよ。」

普段、掛かるような子じやないのにあつさり落ちたと言う事は、この子自体かなり精神的には弱っていたと言う事ですね」

担当医にそう告げると、アラン・ホークアイはガラス越しに廊下からこちらを見ている、数人の子供達を見出した。

灰崎祥吾に高尾和成、詩島剛と滝天馬の四人が、今にも泣き出しそうな顔で張り付いているのだ。

「永瀬君、あの四人は」

「あ、すみません、二人が搬送される時に、一緒に救急車に乗って来ちゃったんです。」

「帰ろうって言ったんですけど、四人とも動いてくれなくて」

「いや、責めている訳じゃない、この子達だけだったのかい？」

「続いての問い掛けに答えたのは、ホークアイの前に来た上嶋繁の方である。」

「いや、博物館には、この子らの友達の子等もおったそうですが、その子等は親御さんに迎えに来て貰いました。」

バラランガさんには、その子ら全員が無事家に着いたかの確認作業をして貰つとります、あん人に今の海斗君も空ちゃんも見せられませんかから。」

「こん子らは、灰崎女史が今やっぱり薬品部で捕まってこちらに来れなくて」

上嶋の言葉に、ああと思ってしまう。

バラランガは、彼らの養父を恋い慕ったものの「恋愛対象に見る事が出来ない」と振られた過去がある。

それでも彼を慕い、彼の養い子達の面倒をまめに見ていた女性だ。

その彼女にとって、二人の痛ましい状況を見続けるのは、充分過ぎる拷問であろう。

ここにいる中学生四人は、今ICUで眠る滝海斗と一文字空の弟——祥吾は物心付く前から、和成は小学生の低学年から、天馬は物心がつくかどうかと言う頃で、剛も幼稚園児の頃に両親を失い姉共々引き取られて以来だ——として育って来た。

昨年の二月に、養父である滝和也が爆発事故現場から謎の失踪を遂げており、以来二人と彼らの同級生であるもう一人の三人を生活の軸として生きて来たのだ。

滝家の養子である天馬はともかく、祥吾には《ホークアイ・ホールディングス》で研究員をしている母がおり、和成には両親の死後引き取ってくれた叔母夫婦がいる。剛にも四歳違いの姉が居る。

だが、養父不在の今、やっぱり彼らの心の支えは兄達であったのだ。

その内の二人が『未確認生命体』に、それもこれまでとは違う、初めて現れた存在の攻撃に倒れたのだ。

四人がどれだけ恐怖を、心細さを覚えた事か、想像する事も出来なかった。

ICUから出て来たアラン・ホークアイに、真っ先に抱き付いたのは四人の中で一番年下になる天馬だった。

赤い髪に緑の瞳の、あからさまに日本人ではない風貌の少年はぼろぼろ涙を溢しながら、『会長さん』に縋り付いた。

「会長さん、海斗兄ちゃんも、空兄ちゃんも大丈夫だよね」

「大丈夫だよ、天馬君、二人とも、今眠ってるから、ね」

「でも、空兄ちゃん、三回も注射されてたのに、それでもお医者さん跳ね飛ばして飛び出そうとしてたし」

小さなデジタルカメラを握り締めるようにして胸に押し付け、震える声でそう呟いたのは剛だ。

昨夜、兄達から贈られた小型デジカメで出先の風景を撮るのだと、剛が嬉しそうに報告していたのを思い出す。

その横で、今にも座り込みそうなのを祥吾に支えられていた和成が、泣きながらこう言った。

「どうしよう、会長さん、兄ちゃん達、死なせ掛けたの、俺だ」

「和成君？」

「あいつ、俺に向かって、槍みたいなの振り下ろそうとしたんだ！」

「落ち着け、カズー！」

そのまま泣き崩れるのを、祥吾が何とか支えるが無理があると感じたアラン・ホークアイの判断で、彼らはその病棟のエレベーターホールへと移動した。

関係者以外立ち入り禁止と言う事で、人気の無いエレベーターホールのソファアールに子供達を座らせると、上嶋と長瀬の二人が持ち込んでいたらしい魔法瓶からココアを出し、四人に配る。

「祥吾君、さっきの和成君の言葉は本当かい？」

「カズの所為じゃない、カズに襲い掛かった、あのクラゲのお化けが悪いんだ」

手の中の紙コップの中身を飲み干すと、祥吾は博物館が立ち並ぶ公園の中を、皆で歩いていた時の事を思い出した。

あの時、恐竜の特別展示を見て、きやいきやい騒ぎながら公園に出て、何処かお弁当を広げられる場所で、少し遅くなつたお昼ご飯を食べようと言う話になった。

参加出来なかつた何人かの兄弟達の土産を何処で買うか、次は何処の展示を見るかで、皆盛り上がりつつあったそこへ、最初に現れたのはグロンギだった。

烏賊の怪人らしいそれは、何かにぶつかると爆発する墨の塊を吐き散らしながら、周囲にいる家族連れを襲おうとした。親子連れを襲う事を、『ゲゲル』にしていた個体だったらしい。

男女二人連れをスルーし、殊更小さな子供を連れた大人を狙って、烏賊怪人は突進して来た。

物陰で変身した海斗が、烏賊型グロンギを押さえ込んでいる間に、永瀬は子供達と周囲の家族連れに声を掛け、避難誘導を始めた。

和成と祥吾も、背丈が大きい事とバスケと格闘技で鍛えた腹式呼吸の賜物である声で、周囲の人間に避難するよう声を掛け続けた。

暫くして、見慣れないオートバイに跨ったもう一人のクウガ、警察に行っていた空が駆けつけ、二人の連携によって元々近接戦が不得手だったらしい怪人は、鏡合わせの様な絶妙のダブルキックを食らって爆発した。

ここで、一瞬の気の緩みが生じたのかもしれない。

音も無く舞い降りた、クラゲを思わせる怪人はそのままの勢いで貫かんと、槍のように伸ばした触手をクウガの活躍に手を叩いていた高尾和成の頭上に向けていたのだ。

それは、本当にとつきの事で、間一髪で怪人に気付いた永瀬が、和成を抱えて横に飛び退いたのだ。

触手が掠めた瞬間に走った電撃に、思わず呻いた永瀬に気が付いたか付かないか、そこは判らないが怪人の触手が再び和成を狙う。

それを阻止しようと、飛び出そうとした空の方に、突然の雷撃が

襲ったのだ。

耳をつんざく落雷音と共に、小さく放電しながら崩れ落ちた『クウガ』の姿に、周囲の多くの人々が凍り付いたその中、もう一人の『クウガ』である海斗の方が伸ばされた触手を掴み、引きちぎった。

だが次の瞬間、飾りのように揺れていた触手の一本が、海斗の胸を貫いたのだ。

膝を付いた海斗を、クラゲ型の未確認生命体は踵で蹴り付ける。

ゴキリと言う音が、不思議なほど響いた。

そのまま、首の周りに下がる触手でメツタ刺しにしようとした怪人に、何とか起き上がった空の方が飛びつき、引き離しにかかったから海斗は針鼠にはならず済んだがかなりの数の打撃を受け、そしてそのうちの一本が『アークル』の中心を貫いた。

超人としての装甲が剥がれ落ちつつ倒れた海斗を目の当たりにして、空の姿に異変が起きた。

装甲の端に放電が張り付いたようになってしまった次の瞬間、それは金色の装飾に変わり、真っ赤だった装甲そのものが黒く染まったのだ。

「うあああああー！！」

絶叫と共に、クウガは怪人を殴り付け、蹴り付ける。

普段の、海斗と練武している時のような流麗さの欠片もない、荒々しい攻撃に和成も、祥吾も、カメラを向けていた剛も、天馬も、そして腕を押さえながら立ち上がった永瀬も声が出ない。

そうしているうちに、五人は気付いた。

赤から黒へと、クウガの複眼（コンパウンドアイズ）が点滅し始めている事に。そして黒くなる度、クウガの、空の様子が狂気じみている事に。

触手を筆（むし）られ、片腕を引きちぎられ、クラゲ型の新怪人は再び雷撃を落とそうとして、その顔面を拳でへしやげるほどに殴られた。

そして、そのまま怪人の顔面を掴んだクウガが、歩道のコンクリートへ叩きつけようとした次の瞬間だった。

「ソ……ソ？」

か細い声だったが、それこそ雷に打たれたように動きを止め、複眼を赤に戻したたクウガが、ぎこちなく首を動かした。

その先で、倒れていた海斗が顔を上げていた。

その時になって、やっと身体の自由を取り戻したかのように、祥吾が兄の元に走り出した。

クウガの動きが止まったのを好機と、怪人はクウガを振り払い何処ともなく逃げ出した。

そして、意識がそのまま落ちたらしいクウガも、その場に崩れ落ちた。

その直後、現場の異様さに手が出せず、避難誘導を優先していた《S. A. U. L》の連絡で到着した救急車によって、二人は城南大学付属病院へと搬送されたのである。

語られた内容を、ここに着くまでに上げられていた報告書と頭の中で照らし合わせつつ、アラン・ホークアイは溜息を吐いた。

では、空の骨折は跳ね上がった能力に身体が付いてこれずに、自らで負ってしまったものだったのだろうか。

《アークル》と超古代文明人リント、そしてグロンギに関する研究はまだまだ初歩の部分で行き詰まっている状態だ。理由は勿論、昨年の九郎ヶ岳遺跡発掘隊壊滅事件で研究者の殆どが命を落とした所為だ。

何が彼ら二人に起こっているのか、そして今日の事件当日どんな不具合が起こったのか、全く判らない状態である。

変身状態の二人を、《S. A. U. L》と《ホークアイ・ホルディングス》、《SPIRITS》隊の合同医療班による検査を行った事があったが、その時も二人の運動能力と、そのエネルギー源が《アークル》である事しか解らなかつたのだ。

「あいつ、確かにカズの事狙ってたけど、海斗兄ちゃんが傍に来たら、兄ちゃんの事を集中的に襲いやがってっ」

「そうだったのかい」

祥吾の言葉に、重々しく頷いた現状身元保証人を務める大人に向

かって、剛が口を開いた。

無意識に弄っていたカメラに、何かを見付けられたらしい。

「あの時、気が動転して、俺殆ど写真撮れなかったんだけど、一枚だけ怪人の写真撮れた。」

こいつ、今気付いたけど、何か羽根着いてない？」

そう言っつて、彼が差し出した小型デジカメの画面に、小さいが確かに鎧を着た骸骨がクラゲを被ったような姿が写っており、その胸元に羽飾りのようなものが見えた。

その羽飾りに、アラン・ホークアイの眉がひくりと動いた。

だが、それを子供達に悟らせぬように表情を緩め、彼は全員に立つように言った。

「これからは、お医者さんに任せよう。」

大丈夫、うちの会社からも薬も人材も送るから、絶対二人とも元気になるからね」

「せやな、お店に帰ろう、そろそろ松坂がご飯作って待つとる筈やから、な」

ホークアイ会長に続き、上嶋からもそう言われ、子供達は立ち上がると何度もICUの方を振り返りつつ、エレベーターに乗り込んだ。

そして、迎いの車に乗って以降も子供達は誰も口を開かず、重苦しい空気のまま彼らは城南大学付属病院を後にした。

同刻、同じく重苦しい空気に包まれていたのは警視庁のとある会議室の内部だった。

《S. A. U. L》の職員と警察幹部、そして警視総監を交えた緊急会議が行われていたのだ。

彼らの前に置かれているのは、一見すると子供のおもちやのように見えるが、実際は今回の事件において回収された、破損した滝海斗所持の《アークル》である。

本来、所持者の神経組織に接続され絶対外れない筈のこれが外れたと言う事に、《S. A. U. L》の研究者達は動揺を隠せなかった。

「つまり、未確認生命体に即対応出来る人材が、一人減ったと言う事で

すな」

「それは！」

「未だに戦果らしい戦果を出せないG―ユニットと、新たな未確認生命体に敗北した未確認生命体3号か。」

「この先どうしたものか」

幹部の一人のやれやれと言いたげな言葉に、思わず「S. A. U. L」側の人間が声を上げる。

だが、他の人間が続けて零した身も蓋もない言葉に「S. A. U. L」所属の人間は押し黙り、それに勢い付いた他の捜査課の人間がこれみよがしにG―3と『クウガ』をこき下ろそうとした、その時だった。

「そうだ、『未確認生命体事件対策班』の戦力は現在が落ちた。」

では、一般捜査課、及び警邏課で未確認生命体に対する対策を如何に取るかと言う話になるのだが、諸君らに何らかの腹案は、当然あるのだろうか。

それもなく、只此処に負傷者を笑い対応しきれない部署への誹謗中傷の為にだけ来た、などとは言えないな」

静かに、だが拒否を許さぬ声音が、その場の全員に投げ掛けられる。「そもそも、G―ユニットの本来の運用目的は、過去の『BADAN戦役』に類似した事件が発生した際に増援が到着するまでの間、単独での避難誘導及び警邏に付かねばならない警官の身体保護である。」

武装はあくまでも、一般市民保護の為のものであり、戦闘特化されたVシステムと同じではない、未確認生命体第三号のデータを参考に強化を進めてはいるが、耐久力と運動能力が中心だ。

戦闘目的の装備に、オペレーターシステムを必要とすると思うかね。

現場での被害者の取りこぼしを無くす為、そして出現した未確認生命体の情報を集めるためのものだ」

打って変わって静まり返った会議室に、警視総監の淡々とした言葉が続く。

「S. A. U. L」は、軍隊ではない。警察機構の一部門である。

だからこそG―ユニットは各警察署の要請を受け、出動する事となる。その運用も、本来は各署のSWATチームとの連携を取る事を基本戦略としていたのだ。

未確認生命体三号が人類の味方になる、言わば嘗てBADANと戦った十人の改造人間と同じ立場の存在が現れる事は、一切想定されていなかったのだ。

ならば、やるべき事は見えて来ないかね？」

静まり返り、或いは下を向き、汗を拭う警察官僚達に、嘗ては特殊部署に所属し現場を駆けずり回った経験を持つ現警視總監ははつきりと言いつつ切った。

「何度でも言おう、《S・A・U・L》は軍隊ではない。

未確認生命体を撃破すればそれで終わりではない、一般市民を守り、次の犯行を極小に抑える為に情報を集め、解析し備える為の部署である。

諸君らには、それを念頭に置いた議論を願いたい」

先程とまではまた質の違う重苦しさだが、会議室を包み込む。

すっかり黙りこくってしまった参加者達を眺めつつ、新條強警視總監はネクタイを締め直した。

小料理屋『T O K I O』に到着する頃には、空はすっかり茜色に染まっていた。

中学生四人を伴い、アラン・ホークアイが『本日臨時休業』の張り紙がされた店内に足を踏み込むと、休業にも関わらず店内は人で一杯だった。

尤も、その大半は中高生とらしい未成年ばかりであった。

連絡を受けて、都内の学校に通っている子供——滝和也を保護者としている少年達が集まっているのだ。

無論、全員ではなく、遠方に進学したものや家族が居るものは来ていない状態だったが、それでも狭い店内で座っている不安そうな顔の少年達は一斉にアラン・ホークアイと帰って来た子供達の方を見た。

「祥吾、和、剛、天馬！」

「！」

「閃兄ちゃん！」

「剛！」

「姉ちゃん！」

奥で、他の少年と話していた少年が立ち上がると、滝天馬が走って行って少年に抱き着いた。

その横で、同じく立ち上がった姉に詩島剛が駆け寄った。

泣き出した天馬の、赤い髪を撫でてやる少年に、何も言わず高尾和成も抱き着きに行った。

この少年の名前は香山閃と言い、滝海斗、一文字空と同一年であり、ドイツ人とのハーフの少年である。

テロ事件で、テロリストの協力者という汚名を着せられ殺されたジャーナリストの遺児であり、そのテロ集団の少年兵に引き込まれ掛けたところを、滝和也に救い出されたと言う重い過去を持つ。

だが、大勢の子供とお人好しとも言える周囲の大人のお陰で、閃は年よりも鷹揚な性格に育っている。まあ、本人は「そんな事は無い」と言っているのだが。

その向こうで、カウンター席のストールから立ち上がった女性二人がいる。

彼女達も、滝和也の保護され、その庇護下で育った女性達だ。赤い髪が重音徹子、茶髪を肩より短いショートカットにしているのが榊芽衣子だ。

女子大生である二人は、今日は講義の後レポート作成の為二人で図書館に籠っていたのだ。

「会長さん、海斗と空は？」

「暫くは入院だね、二人とも骨折をしているから、暫くは安静にして貰わなきゃね。」

大丈夫、二人とも格闘技をしているんだ、基礎体力は優れているからね」

「そう、ですか」

「そうね、骨折してるんなら、縛り付けてでも休ませなきゃ！」

あの二人、すぐ動き出そうとするんだから！」

アラン・ホークアイの言葉に、芽衣子は両手を胸のところで握り、徹子が周囲に聞かせるように返答する。

本当は、二人とも今すぐ病院に向かいたいのだが、海斗と空の立場上、おそらく正面から病院に向かっても、「そんな入院患者はいません」と、門前払いを受ける事が判っていた。

少なくとも、『未確認生命体3号』の身元は報道規制されており、彼らの身内であり、彼らに守られた立場であるが故にその正体を知った芽衣子達は、しかしそれ故に今ジレンマに陥っているのだ。

そこに、店の厨房から三人の男性が大皿を抱えて出て来た。長身の青年が、この店の板前である松坂昌樹、彼よりちよつと背が低く筋肉質なのが設備管理の山崎達弥、二人のちよつと中間ぐらいの体格の青年が仕入れ担当の国府田汰介である。この三人に、上嶋繁、永瀬知治を加えた五人が、この小料理屋《TOKIO》の従業員である。

「おらおら、チビ共、飯だぞ！」

「腹が空いてちゃ、良い考えなんて浮かばないからな！」

「小料理屋《TOKIO》裏メニュー、爆弾握りと卵焼き、唐揚げだぞ

!

お腹一杯にしてしつかり寝ないと、海斗も空も心配するぞ！」
そう言いながら、三人は手にした大皿を小上がりのテーブルに並べた。

「そうだね、皆食べよう」

ホークアイ会長の声に背を押されるように、子供達は三々五々大皿のお握りに手を伸ばした。

その頃、《S. A. U. L》(未確認生命体事件対策班)の研究室の一つでは、女性研究員がディスプレイを睨みながらキーボードを叩いていた。

その、没頭していて周囲に気付かない女性の頬に、ぺたりと冷たいものが押し付けられる。

「あひゃ!？」

「休憩ぐらい入れろ、焼き切れるぞ?」

「京一郎」

女性が振り返ると、彼女に良く似た面差しの青年が、缶コーヒーを差し出していた。

女性の方は弱音羽久、男の方は本音京一郎と言う。二人は従兄妹同士であり、進学先は真逆だったのに就職したら一緒の部署になったと言う、中々の奇縁の持ち主である。

従妹に甘めのカフェオレを渡し、自身はブラックコーヒーを口に含んだ本音は、ディスプレイに表示されているものに眉を顰めた。

そこに映し出されているのは、かなり拡大されているが怪人と未確認生命体3号の戦闘の光景であった。

「おい、羽久、これは」

「公園内に設置されている、防犯カメラの映像よ。」

ちよつと位置が悪かったけど、何とか一部始終を捉えていたカメラがあったの」

そう言った二歳下の従妹に、知らず本音は溜息を溢す。

本来、G―ユニットの開発者及びオペレーターとして採用された弱

音羽久は、やはり研究者としての性なのか熱心に未確認生命体についても研究している。

「G—ユニットの点検でも、しているのかと思ったら」

「それもしてるわよ？」

ただ、判った事があるの、これを見て」

そう言うと、弱音は何か打ち込みリターンキーを押した。

すると、静止している画像に重なったフィルターのようなものによって、怪人の頭上に光の輪のようなものが見えるようになった。

それは、まるで天使の輪のようで、それを頂く怪人の姿とのミスマッチぶりに、本音は思いつ切り眉を顰めた。

「何だこりゃ？」

怪物の頭に輪つか？ ひでえコラを見たな」

「カラージュじやないわ。この怪人のエネルギー放射状態を極強いものだけ拾って、可視光線で表現させるとこうなったの。」

まあ、似ているからこのエネルギー態を仮称として『エンジェルハイロウ』としておくけど。

これを見て、3—Bに落雷が落ちた瞬間」

マウスでクリックされ映し出された動画の中で、光の輪が一瞬輝いたその次の瞬間に、3—B号へ落雷が落ちていた。

また、触手が3—A号を貫き、滅多打ちにした時も、光輪は瞬くように光を放っていた。

「これは……、この天使の輪モドキが、こいつの力の源、か？」

「こいつ一体だけだから、まだ断言は難しいわね。」

でも、これの外見特徴から、ちよつと気になる情報は見つけたの」

「外見特徴？」

「こいつ、天使の輪と一緒に、羽根も付いてるのよ、ほら」

そう言いながら、弱音は画像を二枚切り出し、それぞれを拡大する。それは怪人の背中と胸元の映像で、胸元のは羽根を意匠化した飾り物、背中にはまるで某食品会社のマスコットのような小さな一對の羽根が着いていた。

「……これが、どうした？」

「これ、一八年前の海難事故のレポートなの。」

ここにあるのよ、SPIRITS隊の砲撃で消滅した、奇妙な存在。こいつが消滅した際、羽根のようなものが散らばったって記述が」

「一八年前？」

ああ、瀬戸内海のフェリーボートが異常発生した嵐で座礁したあれか？

他の場所は晴れ渡ってたのに、その船の周囲一キロ範囲だけ大嵐だったって言う。

あれ、レジエンドルガの仕業じゃなかったのか？」

「公式には、未だに原因不明よ？」

ただ、SPIRITS隊が動いた以上は異常事態に違いないって、話になっただけで。

その理由が、それこそ『未確認』生命体だったとすれば、公表されなかった理由にならないかしら」

従妹の顔をまじまじと見て、本音は再びディスプレイに目を落とした。

今の部署に入り、すっかり常識が通用しない世界がある事を痛感して来てはいたのだが。

「それ、レポートに纏めるのか？」

「勿論、そこからGーユニットの改善策とかもひねり出さなきゃね」

「手伝おうか？」

「プリントしてからお願い。」

取り敢えず、京一郎は身体休めて頂戴、当分の間は三号の救援は望むべくもないんだから」

「お前こそ、Gー3が出勤するのに、オペレーターが潰れてて動けませんでしたは笑えねえぞ？」

「判ってるわ」

そう言い合うと、体育会系と理系の従兄妹は、休憩とリフレッシュの為に研究室を後にした。

夜一〇時を過ぎる頃、アラン・ホークアイを乗せた《ホークアイ・

ホールディングス》の社用車は、警視庁へ向けて走っていた。

無論、目的は警視総監新條強に会う為だ。

アラン・ホークアイと新條強の間には、元々繋がりらしい繋がりは無かった。

そこを繋いだのは、現在行方不明である滝和也である。

FBIを退職し、I. C. P. O (国際警察機構)の特命を受けた形で《ホークアイ・ホールディングス》会長秘書——実際は、SPIRITS隊長として、世界中を飛び回っていたのだが——を勤めていた滝に、SPIRITS隊へのコネクションを求めて新條が接触して来て以来の繋がりである。

そこからアラン・ホークアイとも繋がる事となり、以来《ホークアイ・ホールディングス》と《S. A. U. L》は密かに技術提携するようになったのだ。

そして、昨年十一月から《クウガ》として少年二人が戦い始めて以降は、SPIRITS隊に隠れるようにしつつもより積極的に提携してきたのだ。しかし。

「会長、この先工事の為、迂回路に入ります」

現在次席秘書を務める、通称『クイン・ビー』の声に頷いたアラン・ホークアイは、だが周囲の風景に軽く眉を顰めた。

横に乗る、今回の護衛を買って出た《ホークアイ・ホールディングス》社長中村史也は、前を向いたまま運転席にいる古参部下に一言言った。

「夏川、適当なところで止めろ。態々お出ましのようだからな」

「はい」

時間的にまだまだ交通量が多い筈の、しかし全く人も車も姿の無い六車線道路の真ん中で、防弾仕様のリンカーンが停車する。

すると、それを待ち構えていたように十数人が車を囲んだ。

背広姿がいるかと思うと、見るからにチンピラと言う風情の男もいる。彼らは全員、腐った魚よろしく生気の無い目をしている。

「アラン・ホークアイ、出て来い」

人垣の後ろに立つ、一見エリートサラリーマン風の男が芝居がかつ

た身振りと共に大声で呼ばれる。

少なくとも、この集団のリーダーらしい男の無礼な様子に、中村が拳を固めるのを制してアラン・ホークアイは車外に出た。

彼の背後を固めるように、女性秘書と社長も車から降りて来るのを見て、リーダー格の男が唇を歪めるようにして笑う。

どうやら、単独移動している事を突き止め、功を焦って襲撃したらしいが本人は既に成功した気になっているようで、随分とテンションが高い。

「何事だい？」

交通制限までして、何をしたいのか聞かせて貰えるのだろうか？

私こう見えても、公私共に多忙なのだけけどね」

「気にする事は無い、今日ここでお前さんの仕事は全て終わる。

後の事は心配要らないさ、我が《スマートブレイン》が全て引き継いでやるから、死に損ないはとつとあの世に帰ればいい」

男の言葉に、秘書はふつと鼻で嗤い、社長の方は完全にガラクタを見る目で、大きな身振りで喋る男を見た。

アラン・ホークアイはと言えば、あからさまに肩を竦め、見た目よりもおめでたい思考の持ち主を見た。

「ふうん？」

随分大きく出たねえ、私の会社を、高々長くて数十年で灰になる、否下手すれば一〇年後に全滅しているかもしれない『本物の死に損ない』（オルフェノク）が引き継ぐ？」

止めてくれないかね、大体世界各国で事故を起こしている、しかも使途不明金が莫大な《スマートブレイン》社なんかと関わるなんて、世界中の取引先からドン引きされてしまうじゃないかね」

「は、何とでも言えればいい。

ここで貴様と、社長である中村史也を殺せば、後はM&Aに持ち込むだけの事さ。

改造人間だか何だか知らないが、BADAN残党が何時までも人間の上に胡坐掻くんじやないよ」

「ああら、随分な人。

つまり、あなたなのね、ここ最近うちのおちびさん達に変なちよつかい出して、海斗君と空君に叩きのめされていた変質者の親玉って」秘書の言葉に、男の顔がぎしりと歪む。

ああ、そう言う事かと言う空気になった標的に、男は唾を散らして喚いた。

「五月蠅い五月蠅い！」

改造人間と言っても、特に力も無い、後方支援型だから生き残った屑の癖に、偉そうに！

さあ、奴を殺せ！

アラン・ホークアイの首を取った奴にはボーナスを出すぞ！」

男の言葉に、ざわつと周囲の男達が色めき立つのが判った。

その男達の前に、中村史也が前に出た。

「中村君、済まないがあのリーダーと何人かは残しておいて貰えるかな？」

色々言つてやりたい事があるんだ」

「了解しました、会長」

「会長、新條警視總監には、予定よりやや遅れるとお伝えすればよろしいですか？」

「ああ、そうしてくれると助かるよ、何しろこちらから捻じ込んだ面会だからね」

「ちい、余裕のつもりか、ならば」

男が指示を飛ばそうとした、その時だった。

無言で構えを取った社長と呼ばれた男が、右側に伸ばした両腕をゆっくりと左へと回し、力を込めるように握り込む。

そう、仮面ライダー二号を知る者なら、彼の変身ポーズをほぼ同じと判つただろう。

事実、彼の腰には、仮面ライダーと同じベルトが現れていたのだから。

戸惑う集団の前で、中村史也の姿が変わってゆく。だが、仮面ライダーそっくりになったところで終わり、では無かった。

仮面ライダーそっくりに変わったと思った次の瞬間、身を翻したと

同時にその広い背中がマントに包まれる。

あつと思つた時には、彼の姿は紅い甲冑に包まれていた。

その姿に、見覚えが合つたらしい取り巻きの中の誰かが、呻くようにその名を呼んだ。

「よ、ヨロイ元帥だ、デストロンの」

「はずれ。」

中村君は、ヨロイ大佐と言ってね、元々私の右腕だった人でね。

色々あつて、彼のデッドコピーがヨロイ元帥になったんだよ。馬鹿な事してくれるだろう？

彼の理性や判断力を削つて、闘争心と嫉妬心を強めたおかげで、ヨロイ元帥は組織にとつて唯のお荷物に成り下がったのだから」

アラン・ホークアイの、ほとほと困つたと言いたげな声に、苦虫を噛み潰した顔でリーダーが突撃を命じる。

その声に従い、《ヨロイ大佐》の周囲にいた七人が灰色の甲冑を纏つた怪人——オルフェノクの本性を露にして飛び掛る。

だが、彼らを腕の一振りで弾き飛ばすと、《ヨロイ大佐》は裂帛の気合と共にアスファルトを叩いた。

そして一瞬を置いて、更に組み付こうとした七人は甲冑ごと砕け、灰となつて散らばつた。

「なん、だど!？」

「お見事お見事、さすが正調《甲羅崩し》は派手でカッコいいねえ」
ぺちぺちと、気の抜けた拍手がする。

「何だ、何が起こつた」

「だから、これが正調《甲羅崩し》。」

硬い装甲や、外骨格を持つ存在に、超振動を叩き付ける事で装甲毎粉碎する技だよ。

ヨロイ元帥君は、色々劣化させられてたから出来なくなつてしまつたのだよねえ、この技」

飄々と語る標的の声に、顔を向けなおしたエリートもどきの男は、そこに異様なものを見出した。

それは、男の頭上高く——街灯の灯を透かし、ふわふわと浮かんで

いた。

白い笑い仮面に、包帯に包まれたミイラのような姿のその存在に、その場の全員が面食らった表情になる。

「き、貴様、まさか、アラン・ホーク、アイ？」

「この姿の時には、また別の名前があるんだ。覚えられるかどうかは判らないけど、一応名乗っておこうか？」

ひらひらと舞い降りたそれに、ヨロイ大佐と女性秘書が跪き、臣下の礼を取る。

「私は、かつてシヨツカー北米支部長を務めた大幹部、マミーゼネラル。

ご覧のとおり、完全後方支援型の参謀タイプの改造人間だ。死神博士や地獄大使とは、まあまあの関係を作ってたのだけどね、ゾル君とは一切馬が合わなかったねえ」

ケラケラと、笑っているそれはエリート風の男を揶揄するように言葉が続ける。

「まあ、地獄大使も死神博士にもあった事だけど、それでもゾル大佐の虚栄心から来る軍資金の無駄遣いは、三人の中でもひどくてねえ。

だから、彼が仮面ライダー二号に倒された時は、正直清々したねえ」
「き、きき、ま、その姿、は」

「君が言ったじゃないか、BADANの残党、改造人間と。

中村君が見せたんだ、私も見せてあげようと思っただけの話さ。
勿論、それだけが理由じゃないけど？」

ふらふら、ケタケタと笑い続ける笑い仮面に、エリートを自負する男は内心の薄気味悪さを押し殺して命じた。それが、自殺行為だと気付かず。

「~~~~~黙れ！」

もういい、あの男を殺せ！」

男が叫んだその次の瞬間、オルフェノク化した周囲の人間は、全員命令した男に飛び掛った。

あつと言う間に、部下だった筈の面々に切り付けられ、殴られた男は、事態が判らないと言う顔のまま虫の息でアスファルトに転がっ

た。

その男の目の前で、白いミイラがゆらゆら笑う。

伸びた包帯が、まるで吹流しのように靡いている。

「言っただろう？」

私は完全後方支援型で、参謀タイプの改造人間だって。

はつきり言えば私の戦闘力なんてごみだ、再改造されても、人間の銃弾一発で倒された程度でね。

だから、何事かある時には、必ず戦闘力のある部下に付き添って貰って、戦闘時には相手の戦力を活用するようにしているのだよ。

特に、階級特権を信じてる人間で、部下にこれっぽっちも敬意を持たれてない人間と会う時は、わざと本性を出して最悪に備えるようにしているんだよ。

そちらの戦力を何時でも取り込めるよう、下準備をして、ね？」

ひらひらと、糸の捻れた西洋風のように舞う姿は、声無き嘲笑を男の耳元に降らせる。

あはあははっアハハハ、あはははアハハ

逆上を安っぽいと見下す、嘲笑（サウンドオブサイレンス）が男のなけなしの自尊心を、根こそぎ踏みにじりに掛かる。

「~~~~っ！」

この、真正銘化け物が!!」

虫の息であっても身体を起こし、アナグマ怪人（バジャーオルフェノク）の本性を顕（あらわ）にして目の前で揺れる白い怪人に飛び掛ったのは、《スマートブレイン》社エリート社員の最後の矜持だったか。

だが、伸ばした指が包帯の一本に触れる前に、彼の心臓を鋭いレイピアが貫いた。

あっと思っただアナグマの怪人が見たものは、青い蜂の女怪人が彼の身体からレイピアを引き抜き、付いてもいない血糊を何かで拭いているところであった。

「愚か者。」

私の目の前で、マミーゼネラル様に手を上げる？

愚か過ぎて、遊んでやる気にもなれないわ。

そうじゃなくてもこっちは忙しいの、とつとと消えて頂戴」

吐き捨てるような声は、先ほどまできつちりとしたツーピース姿でアラン・ホークアイの傍に控えていた、毅然とした女性秘書の声に違いなかった。

身の丈に合わない野望を抱いた男が、二度目の最後に見たものは、元の人型に戻ったマミーゼネラルが、彼を一瞥することなく車に戻る、その背中だった。

同じ頃、《ホークアイ・ホールディングス》所有のマンションの一室で、高尾和成はごろりと何度目か判らない寝返りを打っていた。

大人達と、義兄である香山閃に促され、元々泊まる予定であった滝家の子供部屋に広げられた布団で横になったものの、日中の事と入院中の兄達の事が心配で、寝付く事が出来ないでいるのだ。

だが、ふつと視線を上げた拍子に、和成はこの部屋の主である灰崎祥吾の姿が無い事に気が付いた。

祥吾は、それこそ乳飲み子の頃からこの家に何度も預けられた事もあつて、自宅よりこちらの家で暮らす事の方が長い人間である。

小学生の頃は、それこそ完全に滝家の家長を實の父と信じており、自分と父と兄は何で苗字が違うのかと、延々悩んでいた過去すらある。

今では、そんな事は些細な事と割り切つてしまい、滝家に自室がある事にも何の疑問も疑念も無い奴に育ってしまったている。

その、この部屋の主がいなくなり、廊下に繋がる扉が薄く開いているのに気付いて、和成は起き上がった。

滝家は広い。

かつては子供だけに二〇人近く居た事もあり、アラン・ホークアイの好意でマンション最上階のワンフロア三軒分を、一軒分に纏めたのだ。尤も、今はそのうちの一軒分を区切り、女性陣用の区画に別け直しているが、結局元々のリビングやダイニングの方に女性陣も皆集まって来る。

その滝家には、養父である滝和也の部屋は二箇所ある。

一つは、玄関横にある、父の寝室。もう一つは、フロアのほぼ真ん中にある、父の書斎である。

寝室が玄関のすぐ横なのは、夜間侵入者に備える為、書斎がフロアの真ん中にあるのは、貴重な資料やこれまでの事件についての父独自の記録を収めている為。但し、書斎には同時に、父の愛用する武器や防具類も安全装置こそ掛けられているがそのまま収められている。

その書斎の前に、祥吾が立っていた。

「おい、何やってんだよ、そこ父さんの書斎じゃんか！」

「ばー！ 声がでかいってー！」

傍に来た兄弟分の口を押さえ、祥吾はしーっと指を自分の口に押し当てた。

「何してんのさ、いきなりいなくなるからびっくりしたじゃん！」

「まさか、起きると思わなかったんだよ。」

それより部屋帰ってろよ、俺も用事終わらせたら戻るし？」

「用事って？」

和成の問いに、祥吾は説明するのも面倒とばかりに部屋に入る。

慌てて追い掛けた和成は、壁の四面を書架で囲まれた書斎に入っ

た。
その書架の一面に向き、祥吾は書架の一部に手を伸ばす。本棚の一部に隠されているボタンを弄り、祥吾は書架の後ろに隠されている棚を開いた。

そこには、滝和也が犯罪結社から押収したり、研究者に託された幾つかの特殊機器やオーパーツに等しいものがざっと10種類ほど収められている。

その中の、二つ並べて置かれている小振りなトランク二つに、祥吾は迷うことなく手を伸ばした。

一つは、赤い色が目を引く奇妙なホルダー付きのプレートを収めたもので、もう一つは幾つもの一〇センチほどの大振りなUSBメモリに似たものが、ざっと二〇数本収まっている。

その、カラフルなボディに飾り文字でアルファベットが入っているメモリの上で、暫く迷ったように手を翳していた祥吾は、薄緑色でH

と入っているメモリを取り出した。

「祥ちゃん、それって」

「なあ、カズ、父ちゃんの話、覚えてるか？」

言われて和成が思い出したのは、食後にビールでほんのりと紅くなった養父が、集まった子供達に何度も話していた事だ。

『敵は、鉄で身体を置き換えた、様々な動植物の力を持たされた怪物達。』

普通に銃弾を打ち込んでも、けろりとしてやがる。

そんな怪物達と戦ったのが仮面ライダー、飛蝗（バッタ）の力を与えられた、風の戦士達だ』

『軽く跳んで数十メートルの崖を飛び越え、ライダーパンチは鉄板を穿ち、ライダーキックで怪物達は砕け散った。』

彼らは、そうやってたくさんの人達を守ったんだ』

何度も何度も、酔うたび繰り返されるその話に、辟易して自室に籠る者もいたが、祥吾は海斗と共に何十回と無く繰り返されるその話を、飽きる事無く聞いてきた。

そして、和成は、祥吾が手にしたものの正体を思い出す。

それは、養父が和成を救い出した際に壊滅させた、財団Xの研究室にあった『地球』の記憶を封じ込めたガジェット、ガイアメモリ『T-1』シリーズとその力を引き出す為の装置であるロストドライバーだった。

「祥ちゃん、まさか!？」

「……空兄と、海斗兄ちゃんの前は、俺が取る。」

この、『HOPPER』のメモリで！」

祥吾が掴んだ『HOPPER』のメモリ。

それは、『バッタの記憶』が収められたガイアメモリであった。

すっかり深夜と言った時間、巡回の看護師が立ち去った集中治療室（ICU）に、すっと入り込む影がある。

入って来た影は、二つ並んだベッドの上で眠る少年を暫く見詰めた後、静かに頭を垂れた。

「すまない、二人とも。」

「こんな事になる前に、俺は覚悟を決めるべきだった」
そう言つて、彼はすつと取り出した。パスケースのようなものを翳した。

しかし、ケースに変化は無く、その事実にも更に彼は歯を食い縛る。
「やっぱり、動かしようの無い事件、かよ。」

お前らが《アンノウン》に襲われるのは、『電王』でも覆せないのか。
……でも、この先、お前達の助けには、なれる！」

そう噛み締めるように呟くと、影は身を翻しICUの扉に手を掛けた。

「もう、悩まない。」

俺に出来る事をやる、考えながら動くのが、元々俺のスタイルだ！
そう言つて、彼が開いた扉の先は有り得ない光景だった。

ここは、地上数十メートルの建物の中のドアの筈なのに、開いた先には地平線まで広がる砂漠と、そこに延びた線路の上に停車する白い列車とがあつたからだ。

その、赤い砂漠に踏み込んだ存在を、迎える影がある。

一人は、朱い姿の狼を思わせる未確認生命体。

もう一人は、車掌らしい制服制帽の人物だ。

「心は決まったか、香山閃」

「ああ。」

契約しよう、ウォルフイ。内容は俺とお前、どちらかが死ぬまで、一緒に戦う、だ」

「セン、それはっ」

『ウォルフイ』と呼ばれたウルファイマジンは、述べられた契約内容にあからさまに動揺する。

だが、車掌らしい姿の男は、まっすぐ少年——香山閃に、ベルト状のものを差し出した。

「今日この時、このデンオウベルトを受け取った時点で、お前さんはこのデンライナー二号車の専属電王だ。」

覚悟は、いいか？」

「ああ、考えなきやいけない事があるなら、走りながら決めろさ。

なってやるよ、時の守護者、《電王》に！」

閃の言葉に、狼型イマジンは困ったような、何かに悩んでいるような空気を纏ったまま傍に寄って来た。

そんな、困惑を隠せないイマジンの手を掴み、閃はにと笑って見せた。

「悪いな、付き合って貰うぜ？」

でも、その代わりに何でお前さんの世界が消えたのか、その調査手伝ってやるからさ」

そう笑った閃の顔は、小料理屋で弟分達に見せたものとは違う、険しさと己に向けた怒りの滲んだものであった。

明け方に、来客は帰っていった。

取り敢えず警視総監室の出口まで、来客を見送った新條強は、そのまま疲れたように来客用の三人掛けソファの方へ身体を投げ出した。

すると、彼の上着のポケットが振動を伝える。

震えるスマホを取り出し、新條は疲れた顔のままその画面に目を落とした。

『お疲れ様です。業務時間まで仮眠を取られては？』

「ああ、《K》、そうするつもりだよ」

画面を見ながらそう言った新條に、まるでその言葉が聞こえているように画面に再び文章が並ぶ。

『昨日の会議も含め、当面の間はG—ユニット出動時には各署のSWATチームへ出動待機を掛ける事となります。』

各G—ユニットメンバーにも通達しましたが、一部混乱しているチームがありました。

現在は、全チーム落ち着きを取り戻しています』

「そうか。」

なあ、《K》、お前はアラン・ホークアイの事、どう思っている？」

新條の声に答えるのに、今度は数分のラグが出る。

スマホへメッセージを出している相手は、今この室内の彼の声を拾い、『会話』しているのだ。

新條が会話している相手は、《S. A. U. L》(未確認生命体事件対策班)の超大型サーバーに組み込まれている《K》と言う名の人格プログラムである。

尤も、《K》は単純な会話プログラムではなく、独立してタスクを回すことも可能な特殊プログラム——と、言う事になっている。

『アラン・ホークアイ、いえ正式にはマミーゼネラルとされた人物は、本来は国際警察機構(I. C. P. O)に所属しFBI捜査官滝和也の短期間とは言え指導教官を勤めた人物です。』

優秀である事には、疑念を挟む余地はありません』

「ああ、ごめんごめん、そう言うんじゃないくて。」

技術提供を増やすから、G-3を改善しろって言うてきたらどう？

その事をどう思うかって事さ」

返ってきた答えは、短いものだった。

『親馬鹿でしよう。』

あの方からすれば、滝海斗と一文字空は孫でもおかしくありませんが』

「あー、やっぱりそうなるか」

ペたりと、ソファアのクッションに頭を預け、新條は溜息を漏らす。

マミーゼネラルの前身は、I. C. P. O所属捜査官だった、松本蓮と言う人物だ。

台湾マフィアとの麻薬絡みの捜査中にマフィア側に捕まり——どうやら、何かしら台湾警察側に恨みを買っていた松本捜査官が、マフィアに売られたというのが真相らしい——新たな麻薬の被検体にされて心身ともにぼろぼろにされたところをショッカーに連れ渡され、ミイラ型怪人に改造されたらしい。

改造後は、資金獲得と人材と物量獲得の為に辣腕を振るい、それこそ一時期はアメリカ合衆国やヨーロッパにおいて莫大なコネクションを形成し、組織としてのショッカーを裏側から支え切っていた人物だったのだ。

その彼が、何ゆえ組織を裏切り仮面ライダーに付いたのか。その理由を、彼は笑って答えようとはしない。

考えられるのは、魂のない人形状態になる予定が再生処置のミスで、入らない筈の魂が戻ってしまった。若しくは、再生処置の際に、以前施されていた組織への忠誠心や洗脳と言ったものが剥がれて自我が生じてしまったか。

どちらにしろ、I. C. P. O捜査官としての人格を取り戻したマミーゼネラルは、かつての部下や組織を手中に収めるや、SPIRIT S隊を最後方から支援し抜いたのである。

尤も、その素性が割れた後も、彼があまり知られていなかったとは

言えシヨツカーの元大幹部であった事に脅威や疑念を持つ人間は絶えず、そう言った人間達への保険として滝和也はFBIを退職し、肩書き上は秘書として、内実は国連及びI. C. P. Oからの刺客として『ホークアイ・ホールディングス』に入ったのだ。

勿論、アラン・ホークアイ、マミーゼネラルが洗脳を得意とする参謀型改造人間である事から、滝和也が洗脳され裏切る事を懸念する声もあつた。

それに向かつて、二人は同時に言い放つたのだ。

「彼の、洗脳の解けやすさを馬鹿にしているね？」

「この人を、前回倒したのは俺だ、ライダーじゃない」

そして、佐久間ケン本部長の強力な後押しもあり、滝和也の名目上の転職は成立したのである。

勿論、佐久間本部長の方はと言うと、FBI側からの横槍を気にせず、滝に部隊を率いての治安活動をして貰う為の、体裁の良い口実でしかなかったのであるが。

それから、早二十二年。

四年後に息子が授かつて以来、滝和也はあらゆる場所で行き場を失つた子供を引き取り、育てていった。

彼が連れ帰る子供達を、アラン・ホークアイは自身の力の及ぶ限り後ろ盾となつて支援し、彼らの成長を見守り続けた。

本当に、実の親子のように、二人は協力し子供達に未来を与えようとしていた。

暖かいご飯を食べ、暖かい家で暮らし、思い描いた未来の為に勉強する。

そんな、普通の家庭に育つた子供なら当然に与えられる、『普通の生活』をそしてそこから繋がる『普通の未来』を。

だが。

昨年初冬、きつと誰よりも非凡だが平々凡々に生きる事を二人に願われていた嫡男が、目の前で怪人(グロンギ)に襲われた人々を救おうと古代遺跡から発見された『アークル』(オーパーツ)を手に取り、同じく彼と兄弟同然に育てられた一文字空がもう一つの『アークル』

を掴み。

未確認生命体第三号A体、B体と呼称される彼らを、新條の元に連れて来たのはアラン・ホークアイだった。

「勘違いしないでくれたまえ。」

彼らは、人助けをしているだけだ。僅かばかりの功名心とかはあるかもしれないが、それでも彼らは自分達が手にした力で、出来る事をしている。

だから、S・A・U・Lには彼らに僅かで良い、協力してくれないだろうか？

嘗て、SPIRITS隊が仮面ライダーを支援したように。

勿論、こちらが無理難題を捻じ込むんだ、それなりに見返りは用意するとも」

父不在の今、後見人を務める年齢不詳の白人の言葉に、二人は驚き困った顔を隠さなかった。

だが、新條はその言葉を受け入れた。

二人——城南大学考古学科九郎ヶ岳遺跡研究室が解析した古代文字によると、《クウガ》と言ったらしい——の戦闘力が、未だに未確認生命体の攻撃を受け流すのが精一杯だったGユニットの、機能強化の参考になればと言う欲も確かにあった。

が、彼ら二人が人類の味方だと言う事実が、単純に嬉しかったのだ。嘗て、世界を守りまた現在も未だBADAN大首領と戦闘を継続しているだろう、『仮面ライダー』の再来の様であったから。

但し、一つ見落としがあった事を、新條警視總監は今回の事で理解せざるを得なかった。

それは、彼ら二人は嘗ての仮面ライダーのような、多少の負傷にも怯まぬ改造人間ではなく、未だ高校生の生身の人間であると言う事実であった。

《K》との会話のうちに寝落ちて、うつらうつらと仮眠を取っていた警視總監を叩き起こしたのは、この二時間後。

始業寸前に掛かってきた、一本の電話であった。

それは城南大学付属病院の集中治療室(ICU)から、眠っている

筈の一文字空が姿を消したと言う、緊急連絡であった。

午前八時、小料理屋《TOKIO》に掛かった悲鳴のようなその電話を受け取ったのは、早めに昼の仕込をするべく店に出勤した松坂昌樹だった。

「チョツ、バラランガさん、落ち着いて、キー落として、電話が壊れる！」

『空ちゃんがないの！』

私がお手洗いに行つて、看護師さんが巡回したほんの少しの間に、ベッドからいなくなつちやつたの！』

受話器越しでも響き渡る女性の金切り声に、丁度店の勝手口を開いた上嶋繁が驚きを隠さず声を上げる。

松坂の方は、これ幸いと受話器を上嶋に差し出した。

「何や何や、何事かいな？」

「あー、ちようど良かった、代わつてリーダー、バラランガさんから空ちゃんがいなくなつたつて。

俺、社長に連絡するから、バラランガさん落ち着かせて！」

「何やて、ホンマか!？」

店の電話を上嶋に渡すと、松坂は私物のスマホを取り出した。

数回のコールで、目的の相手は出てくれた。が、既に空の失踪は会社が届いていたようで、電話の向こう側でざわざわとざわめいているのが聞こえる。

指示出しをしていたらしい中村史也は、連絡してきた人事厚生課の部下にこう命じた。

『取り敢えず、警備班の人間が搜索を始めている。』

申し訳ないが、上嶋と山咲に滝家の方の様子を見に行つて貰えないだろうか』

「分かりました、兄いに来て、リーダーの方の電話が終わつたら行つて貰います」

『忙しいと思うが、頼む』

溜息と共にスマホの通話を終わらせた松坂は、ちようどそこに入つ

て来た三人に向き直った。

その三〇分後に、中学生二人が朝早くから飛び出している事が判り、小料理屋《TOKIO》は上を下へのてんやわんやに陥ってしまったのだが。

朝九時過ぎ、灰崎祥吾と高尾和成の二人は、昨日の公園近くに来ていた。

本当は公園に入りたかったのだが、昨日の今日で公園の出入り口は場所によつては封鎖されており、空いているところには警官が立っている為、子供二人が入ったとなれば保護者を呼ばれかねない。

二人は、取り敢えず現場近くの人の少なそうな場所を探して、ゆっくり歩いていた。

本音から言えば、祥吾は和成を同行させるつもりは無かったのだが、

「連れて行かないなら、中村さん達に電話してやる！」

それに、あの時あのクラゲ怪人が狙ったのは俺と海斗兄ちゃんだった、俺が一緒の方があいつが出て来る確率は上がる！」

と言つて、一歩も引かない兄弟分に折れる事になったのだ。

今、祥吾は後ろに視線を向けている和成の手を引き、ゆつくりと細い路地を歩いていた。

高尾和成は、小学二年生の頃に海外赴任中の家族と共に、《財団X》の仕組んだ集団拉致に巻き込まれ、実験で遠視能力を持たされた過去がある。

元々空間認識能力が高く、脳内で見た光景を俯瞰図にする事が出来る『鷹の目（ホークアイ）』を持っていた彼に目を付け、更に遠くを見る能力を持たせ、その後彼自身の脳を取り出し戦略兵器に組み込む計画を進めていたのだ。

絶望させ、組織に忠誠を誓わせる為に和成の目の前で家族を惨殺し、無気力になった彼を手術台に載せたその時、SPIRITS隊による一斉摘発が始まり、保護された和成は滝和也の元で三年間治療を受けた後、連絡を受けた叔母夫婦の元に引き取られたのだ。

当初は無気力で、大人達に怯え逃げ惑っていた和成だったが、同じような過去を持つ子供達に揉みくしゃにされて暮らす内に、元の快活で笑い上戸な性格を取り戻した。

勿論、滝家嫡男の海斗と、空、閃の三人に構われ、可愛がられて祥吾の兄弟のように扱われて、三年間を過ごして来たのだ。

だからこそ、今和成は己の持つ能力をフル活用して周囲を見ていた。

『鷹の目』と、遠視能力（リモートビューイング）の同時発動によって、自分達の周囲100mに異変がないかを見ているのだ。

そんな和成の視界に、入って来る筈のない姿があった。

「え!?!」

「居たのか和!?!」

「違う、空兄いがある!」

嘘、病院で寝てるんじゃないの!?!」

「何だつて!?!」

思わず顔を見合わせ、「こつち!」と指差した方へと二人は走り出した。

直線距離でほぼ70m、二人が駆け付けた時には、コンクリートタイルの歩道の上で座り込む一文字空の傍には、真つ青な警察の武装バイクが止まり、白バイ隊員の服装の青年が警察無線で何やら連絡しているところであった。

恐らく、回復しきつてはいないのだろう真つ青な顔色の義兄に、二人は必死に駆け寄った。

空の方は、目を開いているものの今一つ意識がはつきりしていない様子で、警官の声掛けに反応していなかった。

「兄ちゃん!」

「空兄い!」

駆け寄って来た中高生と思しい二人組に、《S. A. U. L》（未確認生命体事件対策班）所属のG―ユニット装着員本音京一郎は怪訝そうに片眉を上げた。

一応今日は土曜日で、学生が歩いていてもおかしくはないが、この

近辺の公共施設は昨日の未確認生命体事件の為に軒並み臨時休業中。
かてて加えて、未確認生命体3―Bを『兄』と呼ぶ事で、京一郎は
取り敢えず本部に問い合わせようと無線のスイッチに手を掛けた。
その次の瞬間。

「祥ちゃん、上!!」

「こな糞!」

和成の声に、祥吾は待機状態のスタックフォンを頭上へ投げた。

釣られて見上げた京一郎の目に、クワガタムシ型の小型機械（ド
ローン）を串刺しにした槍のような触手を持った、クラゲを被った髑
髏のような怪人がゆっくり降りて来ようとしていた。

「こちら、本音!」

《S. A. U. L》中央管制室（センターコール）、G―ユニット出
動要請!

未確認生命体出現、要救護者、要保護者あり、うわ!?

無線機に、甲高いノイズが走ったと思った次の瞬間ぶつんと音を立
てて電源が落ちた。

慌てる青年と兄弟達を背に、祥吾はロストドライバーを腰に当て吠
えた。

「クラゲ野郎、覚悟しろ!」

HOPPER!

「変身!」

メモリスロットに《HOPPER》のガイアメモリを刺し、起動さ
せた祥吾の身体をメタリックなライトグリーンのスーツが覆い、赤い
複眼に大きな顎（クラッシャー）を持つ存在に変わった。

そのまま、びっくりするような脚力で飛び上がった祥吾――《HO
PPER》は、踵落としの要領で未確認生命体の頭部を狙う。

それをぬるりと言う感じに避けた怪人は、《HOPPER》を無視し
て空の傍にいる和成へと触手を伸ばす。

「舐めんなあ!」

その触手の根元目掛け、《HOPPER》は空中で身を捻って、回し
蹴りを放つ。

ぶんつと、風を切った音と共に触手が爆ぜ、怪人が始めて《HOPPER》を睨み付けた。

手近な建物の庇（ひさし）の上を足場に、《HOPPER》は再び飛び上がる体勢を作る。

未確認生命体3号に勝るとも劣らない、トンでも戦闘を目の当たりにして呆然とする警官の横で、蹲っていた青年が身じろぐ。

「これは一体……」

「ぐっ、……祥、逃げろ、駄目だ、そいつ」

「空兄い!」

「……ア!? 祥ちゃん、上にいる、逃げて!!」

「へ!」

ぐわ!」

義兄を支えようとした和成が、『視界』に入った影に悲鳴を上げた。

それに反応する前に、背後から肩から腰へと入った衝撃に弾かれ、

《HOPPER》は路地のアスファルトに叩き付けられた。

息が詰まっているらしい《HOPPER》がそれでも顔を上げると、

クラゲ型怪人を庇うように猫型猛獣の顔を持つ怪人が、両手持ちの大

剣を構えて浮かんでいた。

「ふ、ふえ、た!」

「マジか……」

蒼褪める和成の横で、本音京一郎は携帯火器を握り締めて歯を食い縛る。

その二人を背に庇うように、一文字空は立ち上がった。

ふら付きながらも、両足を踏ん張って立位を取った空は、両手を差

し伸べて構えを取った。

「許さない。」

弟を襲ったお前らを、海斗を傷付けた貴様を!」

変身!

黒い旋風に包まれたその姿は、昨日と同じ黒い装甲に金の装飾の付いたものであった。

ただ、不安定な空気が漂うその姿は、時折バチツと放電のようなも

のが身体のあちこちから漏れていた。

「空兄い」

「おい、あいつなんかおかしいぞ、変に力が漏れてるって言うか」

本音の声が漏れるや否や、黒い存在は一気に飛び上がりクラゲ怪人へと殴り掛かる。

だが、まるでクラゲの怪人を守るように前に出た豹頭の怪人が、唐竹割りの要領で大剣を振り下ろすのを紙一重で躲し、その刀身の側面へ拳を打ち込んだ。

「邪魔あ!!」

ガキン!

繰り出した、静電気を帯びたような拳が、かなりの厚みと幅を持った大剣を折り砕く。

一瞬怪人は怯んだが、残った柄の部分で《クウガ》を殴り飛ばし、距離を取ると折れた大剣を頭上に差し上げた。

一瞬怪人の頭頂部が光ったように見えると、折れた剣が元の姿を取り戻す。

その姿に、本音京一郎は昨夜従妹と話した事を思い出し、まさかと息を飲んだ。

クラゲを被った骸骨の方には、何とか立ち上がった《HOPPER》が再び飛び上がって、短い空中戦を挑んでいた。

が、触手を伸ばしたクラゲ怪人が、《HOPPER》を捉え己の手元へと引き寄せる。

だが、《HOPPER》はクラッシャーを開き、そのギミックで触手を食い破って拘束を解いた。

悲鳴を上げるクラゲを突き放し、一旦街灯の上に降りた《HOPPER》は、メモリスロットからガイアメモリを引き抜くと、ベルトの脇にあるもう一つのスロットに差し込み叩いた。

HOPPER! MAXIMUMDRIVE!

「喰らえ、ライダーキックー!」

飛蝗（バッタ）の跳躍力で高く飛び上がり、《HOPPER》はエネルギーを纏った必殺の一撃を骸骨クラゲの土手っ腹に喰い込ませた。

ぎいいいええええあああ！

耳障りな悲鳴と共に、ビルの壁面に叩き付けられたクラゲ怪人が崩れ落ちる。

だが、その怪人を《クウガ》を振り払った豹頭の怪人が攫って、見せ付けるように空中に逃げる。

あつと思つた時には、再び豹頭の怪人の頭頂部が輝いて、骸骨クラゲ怪人は何事も無かつたように起き上がった。

その姿に、《HOPPER》も警官も和成も息を呑む。

「嘘、だろ、絶対効いてた筈なのに！」

「あの猫耳野郎が回復させたんだ、さつきから頭の天辺が光ってやがるのは、超常能力を使つてるに違いない！」

取り敢えず逃げろ、俺達じゃ埒が開かねえ……おい、3号B体!」

傍にいる学生を抱え、周囲に声を掛けて退避させようとした本音は、複眼（コンパウンドアイズ）を赤から黒へと点滅させている——しかもだんだん黒くなっている時間が長くなっている——《クウガ》に声が跳ねる。

何も聞こえず、唯怪人達にしか目が行っていないらしい《クウガ》は、そのまま真っ直ぐ怪人二体へと飛び掛ろうとする。

その時だった。

未だに能力発動中の和成が、気付いて警告を発するより早くそれは天から豹頭怪人を捕らえ、そのままアスファルトに叩き付けた。

一瞬何かの紋様が広がり、その衝撃波が丸く路面を抉った。

怪人の頭上にある光輪が、裸眼でも形状がはつきり判るほど強く輝くと、そのまま全身から網膜を焼くほどの輝きを放ち消え失せた。

その後立っているのは、《クウガ》に似た、しかし黒いボディと金色の角の存在だった。

「なん、だ？」

呆然とする警官と少年の目の前で、新たな存在はゆっくりと構えを取る。

その存在に向かって、宙に浮かぶ骸骨クラゲが、まるで怯えるように、威嚇するように叫んだ。

「ア、ああ、ああ嗚呼アああああ嗚呼ああ!!
アギト、あぎと、AGITOオオオお!!」

その絶叫と共に、クラゲは雷雲を呼んで落雷を連発で発生させる。間近に落ちる落雷に、《HOPPER》は転がって直撃しないように逃れ、本音は銃を放り出して傍にいる人間を庇った。

その銃を拾った《クウガ》が、怪人に銃口を向けた。その瞬間、黒地に金の装飾を帯びていたその姿が、目も覚めるような緑に変わった。

持っていた銃も、まるで《クウガ》の持ち物だったように、大振りなボウガンに姿が変わった。

ボシユツと、炸裂音が響いたと思った途端、見えない矢に射抜かれクラゲ怪人が路上に落ちる。

よろける様に立ち上がった骸骨クラゲに、赤い装甲に戻った《クウガ》と乱入者が同時に飛び出した。

最後の足掻きと、怪人が繰り出した触手を乱入者と《クウガ》は、まるで鏡合わせの様な動きで弾く。

その動きに、《HOPPER》は茫然と眩いた。

「あれ……海斗、兄ちゃん?」

「あ!!」

兄弟分の声に、はっとなった和成も顔を上げる。

繰り出される触手を弾き、距離を詰めた二人は怪人の両腕を取ると、頭上へ捻りを掛けながらぶん投げた。

錐揉む様に舞い上がった怪人のがら空きの胴に、それぞれ違う紋様とエネルギーを纏った蹴りが、二方向から叩き込まれた。

声にならない絶叫を上げ、光輪を輝かせて骸骨クラゲの怪人は消滅した。

同時に路上へ着地した二人から、解けるように装甲が剥がれそのまま折り重なるように座り込んだ。

「空兄いー!」

「兄ちゃんー!」

「だあ、落ち着けお前ら!」

安心しろ、二人とも寝てるだけだから」

今まで、ほぼ腰が抜けていた状態の和成と、メモリを抜いて変身を解いた祥吾とが這うようにして二人に寄って行くのを、先に二人に駆け寄り脈と呼吸を確かめた本音がそう言っていて、取り繕おうとするのを押し留める。

座り込んで、そのまま横倒しになって気を失った滝海斗の胸を枕に、一文字空はくーかー軒を搔いて眠り込んでいた。

そんな二人の姿に、気が抜けた様子でへたり込む少年二人と、どう対応したものかと途方に暮れる警察官の耳に、やっとパトカーのサイレンが聞こえてきた。

救急車を呼ばれて、弟二人と共に——高尾和成は腰が抜けていた為、灰崎祥吾はガイアメモリを使っていたとは言え、怪人とガチで殴り合った為——滝海斗と一文字空は再び城南大学付属病院へと担ぎ込まれた。

尤も、三時間近く繰り広げられた精密検査の結果は、和成に眼精疲労、祥吾に二、三箇所 of 打撲が出来ていたのと疲労が出ていた事を除けば、医者がカルテをぶん投げる程度には健康であった。

全身に何箇所も骨折を作っていた筈の空は、輝（ひび）どころか折れた痕跡一つ残っていない状態だったし、海斗に至っては、昨日の数値は一体どんな冗談だったのかと言うほど、全くの健康体であった。

但し、海斗の腰には壊れて失われたアークルの代わりに、全く新しいベルト状の物体——オルタリングだと、海斗は答えた——が現れていた。

検査の間、海斗と空の二人は二人が姿を消した事で完全にパニック状態だったバラランガと、入院した二人の着替えを持って来て事態を知って同じくパニック状態だった灰崎梓——祥吾の母である——の二人に、涙ながらに説教されていた。

勿論、養父の書斎から機材を持ち出した祥吾と、その事を大人に伝えなかった和成も横並びで叱られた。

そんな、女声二部合唱状態のお説教が廊下まで漏れる中、やっと病

院へやって来たアラン・ホークアイに同じく病院に確認に足を運んでいた山咲達弥が一礼と共に報告を入れる。

「空が脱走した二時間後に、瞬間移動するように海斗の姿が消えたそうです。」

その場を目撃した看護師によると、海斗が消える寸前に目が開いたとの事なんです。」

「何か、あったのかね?」

「はあ、看護師によると、目を開いて『アンノウンが弟を襲ってる』って呟いた途端、消えたそうなんです。」

「アンノウン? Unknownと言う事かね?」

Unknownと言えば、不明、不詳、未見、そして未詳を表す言葉である。

まるで全て含めたような言葉である、海斗の腰に現れた新たなベルトの事も含めて、判らない事が多過ぎる状態であるのだから。

「Unknownねえ。」

言い得て妙と言うか、しかしまだまだ情報が少ないね。

そう言えば、例の怪人は、黒い姿の海斗君に向かって、『アギト』と叫んだそうだよ」

「アギト? 顎って事じゃないですよね」

首を捻る、元工作班所属の戦闘員に頷いて見せると、元シヨツカー北米支部長は言葉を続ける。

「ああ、きつと何かの意味があるんだろう。」

その意味を知る為にも、私達は情報を集めなくてはならない。

あの新たな未確認生命体の事も、海斗君の身体に起こっている事も、空君の持つアークルの事も、『クウガ』と呼ばれた古代超戦士の事も、私達にはまだまだ知らない事ばかりなのだから」

「はい、マミー様。」

いえ、アラン会長」

アラン・ホークアイの言葉に、山咲は頭を下げる。

その彼を従えたまま、ホークアイは処置室へと足を向けた。

回復した二人と、無茶をした中学生二人を叱って、抱き締めてやる

為に。

Second chapter メダルと勇気と
episode 01 零れ落ちる君

俺は、記憶にたくさん穴が開いているらしい。
らしいと言うのは、俺には良く判らないからだ。

医者の話では、記憶に穴がある事に違和感がないのも、それに不自由を感じないのも、異常の証拠らしいが良く判らない。

覚えている事と言えば、身体の中に何か冷たいものが二つ入り込んだ事ぐらいだろうか。

ああそう言えば、あれから妙に腹が空くようになって食事が量が増えた事と、余程の事がない限りバスケット以外の事に興味が向かなくなってきたくらいだろうか。

俺はそんなに困ってないけど、そう言う周囲にいる連中は皆困った顔になる。

……そう言えば、こいつ等誰だったかな？

そう言った後、兄貴分だと言う三歳上の小柄な兄ちゃんに正座させられ、三時間に渡って山積みアルバムと共に『兄弟』の顔と名前を覚えさせられた。正直死ぬかと思った。

「息子の為に、申し訳ありません」

「馬鹿な事を言うんじゃない、火神君。」

今回はどう考えたって、大我君は被害者だ。しかも、完全に無関係だったにも拘らず、だよ。

滝君が、取り敢えず《鴻上ファウンデーション》への警告をSPIRITS隊越しに出してはいるんだが、向こうものらくらした対応しか返してこなくてねえ」

《ホークアイ・ホールディングス》会長であるアラン・ホークアイは、深々と頭を下げるアメリカL.A支社の営業部長にそう言ってコーヒーを勧めた。

アメリカ支社総括である高橋俊からの急な連絡で、会長である彼が

L・Aへ来た時には、事態は問題ばかり残して形ばかりの収束を見せていた。

最初は現金輸送車狙いの強盗、と見られたその事件は、実はとある個人美術館から《鴻上フアウンデーション》が買い取った品を運ぶ為に用立てた警備保障のワゴン車を、その品を強奪するべく犯罪結社——《財団X》の武装部隊が襲ったのである。

問題は、その事件が起こったのが、住宅街に点在するストリートバスケコートですぐ傍で。

そしてバスケ仲間を待っていた、火神大我の目の前で起こった事だった。

武装集団を目の当たりにした時点で、大我がコートから逃げられなかった理由は唯一つ、そのコートは全面金網張りで、唯一の出入り口の前で事件が起きていたからだ。

咄嗟に出来た事は、武装集団に見つからないよう植え込みの陰に隠れて、携帯電話で警察を呼ぶ事ぐらいだった。しかし。

そうしているうちに、警備員らしい人間と犯罪者が揉み合い奪い合った三〇センチ程の円盤が宙を舞い、コートの中に飛び込んだ。

コンクリートの床の上で跳ねたそれは二つに割れると、内側に納められていた一〇枚のメダル——紫と薄紫、赤紫の三色があった——が飛び散り、そのうちの紫と薄紫の二枚が大我の胸に飛び込んだのだ。

双方は奪い合うようにメダルを拾い、そして数が足りない事に気付いて探し回るうちに、植え込みの中で呆然と座り込む大我を見付けた。

彼の中にメダルが入った事を悟った両陣営は、今度は大我を連れ去ろうと揉めている所に、彼の電話で駆け付けた警官に気付き逃げ出したのである。——正確には、その後ろから来た《ホークアイ・ホールディングス》の人間から、であったが。

その時来ていたのは、営業部のベガとギリーラだった。二人は、大我の携帯電話が緊急通報を発した事から、近い事を理由に様子を見に来たのだ。勿論、最悪の場合はベガが格闘戦を行い、ギリーラは敵に毒鱗分を薄く撒いて周囲に助けを求める予定であった。

声を掛けても反応の無い大我に、警官が無理やり引き立てようとしたところをベガが身分証明と色々説明している間に、ギリーラが会社の医療部に運ぶ手筈を整え。

そして残されていた円盤状のケースから、事態が判った——《鴻上ファウンデーション》からその円盤と大我の引き渡し要求が来たから——高橋総括からの連絡で、まず相手側にふざけるなの一喝の後アラン・ホークアイは出張先からL・A支社へと駆け込んだのである。

「現状、精密検査で大我君の体内にメダル状の異物が存在している事、それが何かしら脳神経に負荷を掛けている為に記憶と感情の欠落を生じている事が判明していますが、これを物理的に摘出する事は不可能です。

M・R・Iで位置を確認しても、自然に体内を移動してしまうのです。まるで、メダル状の物体が摘出される事を察知して逃げているみたいで。

それも、心臓や脳、肝臓と言った切開した後、回復に時間の掛かる場所ばかり狙って動いている」

運び込まれた大我を診察した医師は、汗を拭いっつ険しい表情を浮かべる会社の最高権力者に説明した。

「苦勞様。

この得体の知れない物質については、《鴻上ファウンデーション》にきちんとした説明をして貰うでしょう。

うちの社員の子供を、誘拐しようとした理由は絶対、このふざけた代物の所為に違いないのだから」

部下を労わりつつも、アラン・ホークアイは迂闊な事をした《鴻上ファウンデーション》とその会長に対する怒りで、ぎりぎりを持っていた報告書を握り潰していた。

それが、四年前、大我が小学六年生の冬に起きた事件であった。

あれから兄弟分になった相手とも喧嘩になったり、バスケット以外には非常に意識散漫になったりを繰り返すうちに、火神大我は日本に戻る事になった。表向きは父親の仕事の都合だったが、実際は大我的治療

の為である。

尤も、情報を出し洩る《鴻上フアウンデーション》と、子供を実験動物扱いする気かと激怒する《ホークアイ・ホールディングス》の二年間に及ぶ折衝と言う名の睨み合いと情報の殴り合いの果てに、大我の生体データを定期的に提出する見返りとして、メダルとそれに関連する未確認生命体、『グリード』の情報を渡して貰う事になったのである。

そうして日本で治療を始めたものの、状況としては可もなく不可もなくと言った状態で、中々進展しないが悪化もしないと言う日々であった。

その間に、大我の周囲では色んな事が起きていたが、聞かされても何一つ彼の琴線に触れる事はなく、全て聞き流すに任せている状態であった。

幼馴染みであり、兄弟同然だった滝海斗天馬兄弟の父が行方不明になった事も、海斗とやはり兄代わりだった一文字空がオーパーツによつて未確認生命体3号こと『クウガ』になった事も、それが元で生死の境をさまよつた事も、全て大我の意識の上を滑っていったのだ。当然ながら、大我のこの反応に怒り狂つたものは何人かいた。

特に、付き合いの長い宮地兄弟に、滝家で暮らした時間が長い中村真也も、表情にこそ出さないが黛千尋も大我の反応に不快を示したり、女性陣も眉を顰めた。親族に引き取られて滝家から離れた、福井健介や高尾和成だつて良い顔をしなかった。

だが、その状況でも海斗は辛抱強く大我に声を掛け、まともに暮らせるよう気遣い続けた。

そんなある日の事、言い出したのは香山閃と詩島剛の二人だった。

「大我の意識散漫を改善させるには、これしかないと思う」

「バスケットボールをさせてあげたら、大我兄ちゃんましになるんじゃない?」

「バスケやってる間は、俺の事思い出せてたものー!」

二人によると、近所のバスケットコートで軽く閃とloniを行ったところ、剛の名前が普通に出て来たし閃が兄貴分である事も普通に判つ

「うん、それも一週間、他校（よそ）はベンチレギュラー主体だけど、うちは人数少ないから全員でどうぞって！」

しかも、参加出来る人は三年の人も来てくれるんですって！」

はしやぎ回る幼馴染みでもあるカントクに、日向順平は眩暈に似たものを感じて額を押さえる。

無論、横で何かしら駄洒落を言おうとした中学からの腐れ縁に、「だあほ」と突っ込みを入れながら、だ。

洛山高校からの提案で、しかも参加校は優勝校の誠凜（うち）以外は全てキセキ獲得校となれば、穿った事を考えたくなる。

誠凜のエースは現在、火神大我とその相棒である黒子テツヤとなっている。

その黒子は、中学時代帝光中学の『幻の六人目』と呼ばれる存在だった。

天才である『キセキの世代』の傍にいて、自身も挫折と絶望を見た黒子は、彼らを見返すべく進学しそこでキセキと肩を並べうる大我と出会った。

『キセキの世代』と笑ってもう一度バスケットをしたい。

気持ちには判らないでもないが、黒子の思い込んだら一直線な発想が最近微妙に思えるようになった順平は、同時にキセキの世代と帝光中学への不信感を煽ぶらせるようになっていた。

特に、灰崎祥吾への「バスケット部を追い出された才能のある不良」と言う評価に、それ故に半ば親戚と化した少年と結び付かず、正月に顛末を聞かされ驚いたのだが。

とにかく、勝負以上に『キセキの世代』に拘る黒子と、彼に引きずられていく気がしてならない大我の姿に不安を漠然と抱えていたところへ、洛山——と言う事は赤司征十郎だろう——からの合同合宿のお誘いに、順平は我知らず腹の辺りを押さえていた。

【RIDERBROTHERS】

順：誰がいるかー？

まゆゆ：勘弁してつかあさい、俺引退したじゃん！ モウヤダ

(、3)っ(っ)

ケンケン：いや、まあほぼ内定してるようなもんとは言え、どうだよ、これ！(。皿)キーツ

ユーヤ：兄貴は大窪さんに付き合うから出るって言ってる。て言うか金持ち怖い。(；)皿(；)ガクガクブルブル

シヨウ：何すか、えらく荒れてませんか？

カズ君：あー、祥ちゃんそこには話し行っていないんだ。」(皿)「ヤレヤレ

真也：ああ、六校合同合宿だからな、福田総合には話し行っていないだろうな。

シヨウ：ファツ!? (。皿、)!?

順：この様子だと、秀徳と陽泉は参加確定ですね？ 真也、海常は？

真也：うちもだ。笠松先輩も、息抜きに参加するって言ってる。黄瀬の面倒見る最後の機会だしな。森山先輩は、女の子が少ないから行かないって言ってましたけど(?!?)フツ

カズ君：それ、息抜きになるんすか？(。|、ω|)ンー…

ユーヤ：あれだろ、面倒見る⇨躰⇨プロレス技(ゝ・ー・)ドヤ！

真也：ほぼ合ってます。

シヨウ：リョータア(；；)ぐぬぬ…

順：誠凜も参加です。カントクが張り切ってるんで、不参加っていう選択肢は最初からありません チーン：「80」<—

ケンケン：?(。皿ノ)ノウワツア! 死ぬな、順!

まゆゆ：ここで、ちよつとお前らの耳に入りたい事がある。

カズ君：(。皿)ノアイ?

まゆゆ：お前ら、この合宿赤司が企画したって思ってるだろう?

ケンケン：え、違うの(。皿、)エー?

ユーヤ：こんなフザケタ計画、誰が立てたっての?

まゆゆ：DS企画って言う会社が、全面バックアップしてくれるんだと。

まゆゆ：赤司の親父さん関係らしいが、赤司自身は聞いた事が無い相手だそうだ。

シヨウ：セイジユーローが知らない親父さん関係って事は、ここ一年くらいで関係持った相手かもしれないねえ。

カズ君：祥ちゃん？

シヨウ：あいつ、何だかんだで親父さんの仕事関係の人間の顔は、パーティとかでしっかり見てるって豪語してたし。

真也：何だかきな臭いなあ。確か、最近S・A・U・Lから何か情報来てませんでしたか？

ケンケン：え、そういや何か……。

ユーヤ：あ、今兄貴がメール見付けた。時空震警報？

シヨウ：ああ、年末から結構、都内で時空震らしい妙な電波だか振動だかが起きてるから、注意しろって奴だろ？

カズ君：時空震。

まゆゆ：時空震、か。

そら：弱音さんの話じゃ、親父の時のあの大規模なもんじゃなくて、まるつきりドアを開け閉めしてるみたいなものらしい。だからこそ、怖いんだがな。

順：空兄い？

ケンケン：空!?

そら：よう、ピコピコなってるから見た。学校関連なら何も言う事無かったんだが、話がそっちに行ったから口挟んだ。

ユーヤ：兄貴が、どう言う事だって言ってる。

そら：小規模で、しかも完全制御されて一定時間開いてるって事は、それを人為的に制御してるって事だ。

真也：そんな技術、スマブレには無かったと思います。

ケンケン：大規模儀式魔法なら出来なくもないけど、その為には相当量の人や生贄がいると思う。

シヨウ：い、いけにえ ファツ!? (。D。、っ

ケンケン：人間は呪文詠唱、パソコンのOSの代わりだな。生贄は、パソコンを動かす電源の代わりだと思えば大体合ってる。

まゆゆ：その理屈で言えば、魔族の方もレジェンドルガ辺りならありそうだけど、奴ら関連は多分禁呪扱いで俺はどうしようもないな。
カズ君：財団Xは、もしかすると……。

順：クオークスやネクロオーバー、アストロスイッチに手を出している奴らだ、何持つててもおかしくは無いが。

ユーヤ：ああ、もう止め止め！ 合宿の方に話を戻そうぜ！

そら：そうだな。時空震とかの方は暫く俺と海斗、閃で調べる事になってる。

シヨウ：兄い、俺も手伝おうか？

真也：祥吾、確か最近東海地方でS・A・U・Lの出勤増えてないか？

そら：そうだよ、この間もグロンギの封印地見付かったそうじゃないか。

順：(。D。)(エツ

カズ君：(。(D。(え!?

まゆゆ：(。(。(。(オコダヨ!!

ケンケン：(#。(D。(ゴルア!!

ユーヤ：軽トラで轆いてパイナップル投げる！by兄貴

真也：祥吾……。

シヨウ：いや、俺待機の方が多からね！ G-3X結構やるからね！

そら：ああ、東海地区のG-3Xって言うところあの刀剣兄弟か。

シヨウ：そうそう、正宗さんと兼定さん。

カズ君：え、仮面ライダーより弱いって定評のG-3が!?(。(。(ε。(エー

。(エー

シヨウ：G-3はな。今主力になってるG-3Xは、強度も火力もG-3よりずっと高いんだぞ？

ケンケン：あ、俺東北支部で聞いたことあるわ、東海の正宗さん元マル暴で、弟さん機動隊から警視總監に直接引き抜かれた剛の者だった。二人して警察内の武道大会総舐めにして、必ず兄弟で頂上決戦してたって。

まゆゆ：そしてその二人を相手にして、一本勝ちしたのが俺達の親父だがな！

ユーヤ：ファッ!? (。D。、)

順：何、だと!?

ケンケン：そうだった。親父マジ親父。

カズ君：キャ—— (#。ロ。#)——ツ!!

シヨー：流石父ちゃん！そこに痺れる！

真也：憧れるう！ ヒヤッホー、(。▽。)(ノ(ノ(。A。)(、(。▽。)(ノーウ♪

カイト：何やってんの、お前達。

急な通達から五日後、誠凜高校バスケット部の面々は、新造と思しい貨客船に乗っていた。

何でも、合宿は東京湾の外にあるとある島に新設された、複合宿泊施設で行われるのだと言う。

例の《DS企画》と言う会社が作った施設で、今回プレオープンのこの施設を格安に使用させてくれる代わりに、最終日にアンケートを取らせて欲しいと言う話だった。

しかし、気になった一部の者達は、それぞれのコネでその《DS企画》について調べてみたものの、つい最近出来た会社である事と、正体不明の資金源を持つ事しか判らなかつた。にも拘らず、他の企業に異様な支持を受けているこの会社に、少年達は眉を顰めずにはいられなかつた。

尤も、それは極一握りで、他の少年達は、新造船とこれから向かう新設の宿泊施設に舞い上がっていた。

「はー、何処も彼処もぴかぴかだな」

「流石新造船だよねえ」

「先輩、先輩こつち！ ゲームコーナーがあるっす！」

「うるせえ、黄瀬！ 静かにしねえか！」

「真ちゃん、こつち！ お汁粉売ってる！」

「ふむ、中々いけるのだよ」

わいわい言っているバスケット仲間達を、何となく見ていた日向順平の横に、何時もの様に無言で立つ影がある。

「キャプテン」

「うおー。黒子か！」

「はい、黒子は僕です。火神君を見ませんでしたか？」

言われて、順平は首を傾げた。

「食堂にいないのか？」

「食堂でカツ丼と親子丼と照り焼き豚丼を食べているところは見たんですが、その後黄瀬君達に話し掛けられているうちに姿が見えなくなっ」

淡々と言う後輩に、順平は頭を抑える。

後輩の友人関係が内々に籠り気味なのはともかく、曲がりなりにも相棒を見失うのはどう言う事か、影が薄いのはお前のアイデンティティで、あの大柄を見失うのはおかしいとか、喉元まで出掛かったのを噛み殺すと、順平は周囲でやはり船の内部を見回っている仲間達に集合を掛けた。

「……あれ？」

貨客船の車両エリアのどん詰まりで、火神大我は瞬（まばた）きをした。

確か、先程まで自分は食堂で、値段の割りに大盛りだった丼三杯を食べていた筈なのだが。

首を傾げながら、大我は目の前の大型トラックを見上げた。

何の変哲も無い、おそらくは物資輸送用の冷凍車と言う奴だ。金属製のパネルで囲まれた荷台に、だが大我はいやに気が引かれた。

その荷台の扉に、大我が手を伸ばしたその時だった。

「アー、火神、こんな所にいたのか！」

「……オロオロ（；；；；；；；；；；；；；；；）オロオロ」

そう声を掛けつつ、駆け寄ってきたのは上級生の水戸部小金井のコンビだった。

あつと思う間も無く、二人は大我の手を取り、そのまま客室（キャ

ビン）へ上がる階段へと引っ張った。

「（凸、凸、凸アタフタ凸凸、凸凸）」

「だめだよ、火神。船が動いてる間は、バスを停めてる所にはは入っちゃ駄目なんだぞ！」

それに急にいなくなるから、皆探しているからな！」

「え、あ、すみません？」

ぐいぐい引っ張られつつ、大我は駐車エリアから出る寸前に、もう一度だけトラックを振り返った。

何となくだが、彼は貨客船のエンジン音に紛れて、何か聞こえたように思えたのだ。

そう、まるで硬貨を何枚も落としている様な音と、それと一緒に微妙に笑う声だ。

子供達から、《DS企画》と言う会社について調べて欲しいと頼まれ、国府田汰介はネットを浚ってみる事にした。

現在の職分は小料理屋『TOKIO』の仕入れ担当だが、国府田は元々シヨッカー北米支部の情報収集班の人間であった。

まあ、戦闘員としては中くらいの戦闘力しかないものの目端が利き小器用なところを買われて、地獄大使のところからマミーゼネラルに引き抜かれた経歴の持ち主である。

だが、それなりにパソコンの使用に慣れ、ちよつとしたクラツキングにも自信のある（リーダーにばれたらおやつ抜きなのだが）国府田は、《DS企画》と言う会社のネットワークに手を焼いていた。

思い悩んで、恥を忍んで秘書課の夏川浩之に協力を頼む事にした国府田は、社内でも1, 2を争うハッカーと共に会社のネットを覗いた。

そして、そこが営業実体の無い形骸会社であり、裏ホームページの壁紙に書かれた世界地図に留まる鷲のマークに気付いたところで、二人は回線からパソコンを切り離し、本体ごとHDを叩き壊していた。

「ひ、浩さん、今のー」

「いや、おかしい、今うち以外にシヨッカーの人間なんて残ってる筈が無いんだ。たまさかいたとしても、アラン様以外に組織を維持出来るほどの財力も、運営力もある筈は無いんだー」

夏川はそう叫んだが、彼もそして国府田も、一つの可能性に背筋を冷たくしていた。

彼らが考えていた事はただ一つ。

異次元に存在する大首領が、こちらに手を伸ばしたのではないかが、ある事を思い出し、国府田は一見自分と同世代の幹部を振り返った。

「でも、浩さん、あのマーク、俺達の知ってるものと少し、形が違いましたね」

「汰介、子供達に、合宿先に行く際にガジェットを持って行くように言ってくれ、俺は、今見たものを会長に報告する」

「浩さん、それって!」

「俺達が知っている、大首領ではないかもしれない。」

でも、大首領に等しい存在が、シヨツカーを標榜する組織を作っているかもしれない。これは、会長の耳に入れておくべきだと俺は思う。

何より、お前気が付いてなかったみたいだが、表の方の営業先の会社、幾つか《財団X》のダミー会社があった。

この時点で、充分過ぎるくらい警戒対象だ」

「うわあ、気が付かなかった、どれだ!」

そう言いつつ頭を掻き巻る国府田の肩を叩き、夏川は部屋から出て行った。

国府田の方も、溜息を吐くと叩き壊したパソコンを資源ごみ入れの中に放り込み、新しいパソコンを発注する為の伝票を取り出した。

高校生達を乗せた貨客船が辿り着いたのは、勝義島と言うところだった。

島としては、伊豆諸島の中に含まれる小さな島らしいが、その中に競技会も開催出来るような規模のアリーナと同じくらいの運動場、軽く学校一つを収容出来る規模のホテルとを併設した合宿所が建てられていた。

「でけえ」

「?。(。D。ノ)ノウワツ、すっげ、すっげ!」

「流石は新設だなあ」

スタッフの案内で、ホテルのロビーへ入った少年達はそれぞれ荷物を抱え、学校毎に固まった。

各学校とも、レギュラー以外の三年生は参加していないし、次期レギュラーの中でも参加していない生徒は多い。尚、誠凜バスケット部の木吉鉄平も、膝の治療の為に渡米している為今回の合宿には参加していない。

監督達から、今日は昼食後顔合わせを兼ねたミニゲームを行う事、明日からは午前中各校で基礎練習を行い、午後はミニゲームか各ポジ

シヨン毎に練習を行う事、最終日に混成チームに拠るトーナメントを行う事が伝えられた。

やはり、定期的に新チーム移行前と言う事もあり、各校とも基礎の充実と個人技の向上を目標としている様子である。

監督達——代表で話していたのは、誠凜の監督である相田リコだ——に向かつて、これは秀徳の二年生が手を挙げた。

「午前中は基礎だけですか？」

「だとするとちよつと……」

「何言ってるの、皆ちゃんと教科書持って来てるでしょ？」

午前中朝食の後二時間勉強して、その後基礎練よ？

勉強は学生の本分なんだから、疎かになんてしないわよ！」

リコの言葉に、一部の者——主に青い髪や黄色い髪の持ち主が不服そうに唸るが、元帝光中主将に睨まれ口を押さえる。

その向こう側で、火神大我はすうつと白くなっていた。

一際大柄な後輩のその反応に、副主将である伊月俊はまさかと思いつつ声を掛けた。

「火神、どうした？」

「えっと、教科書、持って来なかった、つす」

えつと言う上級生、？（ノ、▽、*）アチャーと言う顔の同級生（一部やったと言う顔の馬鹿が二名ほど）、そして。

「火神くうん、私勉強会あるから教科書持って来いって言ったわよね？」

「う、うす」

につこり笑った次の瞬間、リコの見事なキャメルクラッチが決まって、大我の英語交じりの悲鳴が響いた。

その様子を尻目に、それぞれ一旦宿泊する部屋に荷物を置き、少し早めの昼食を摂る事になったが、そこに待ったが掛かった。

振り返れば、洛山の白金監督が穏やかにこう言っただけ。

「今回は、各校との交流と三年生への送別会も兼ねている。

折角の機会だ、各校混合の部屋割りをしようと思っっているよ」

大人達が、白金監督の言葉に頷くのを見て、一部が我が意を得たり

と得意げな顔を作り、上級生達が渋面を造る。

だが、続いた言葉に表情が引き攣つたのはその連中だった。

「ただし、朝の練習に関しては、それぞれノルマ分の勉強を終わらせ提出した部屋の者から参加して良い。」

尚、同室の者が全員終わるまで、その部屋は一切参加を認めない。代筆、他者の丸写しは持つての外、その日一日ボールに触れると思うな。

ああ、それと真面目にバスケットをするつもりが無い者、ここまで来て練習をサボる者とか居るとは思わないが、そういう行動を取った者のいる部屋も練習参加禁止だ。

あくまでもここで行うのは、バスケットボールの合宿だ。同窓会旅行と勘違いしないようにな」

監督の言葉に、一部の者が戦慄する——桐皇と海常、誠凜には筋金入りに勉強が出来ない者がいるのだ——中、それぞれ用意された箱の中から札を引いて部屋へと向かう。

その時、福井健介が何かしらしていたのに気付いたのは、彼と長い付き合いである岡村建一だけであった。

205号室には火神大我、日向順平、宮地清志、黛千尋。

206号室には高尾和成、中村真也、宮地裕也、福井健介。

「見事に固まったなあ」

同じ学校の面子と分かれ、部屋に向かいながら真也が言うと、文庫本に目を落としたまま千尋が言った。

「健介が弄つたんだらう？」

「ばれたか」

悪びれもせず、舌を出す幼馴染みに一同はそれぞれ呆れた表情になる。

「おいおい」

「いや、大我が成績悪いって聞いてたからさ、清志も千尋も成績良いんだろ、順手伝ってやれよ」

けろりと言われ、名指しされた面子が溜息を溢す。

その向こうで、ドナドナされる子牛のように俯いて歩く大我に、カラカラ笑いつつ和成が肩を叩いた。

「そう落ち込むなって、あ、教科書だけどき、夕方には届くってさ」「え?」

「どう言う事だ、高尾」

「今、永瀬さんにメール送ったら、祥ちゃんがコアボイルダーの水上高速航行パーツ（スプラッシュヤー）の受け取りでこっち戻ってるんだって、ついでだからテスト兼ねて持って来てくれるってさ」

ひらひらと振られた携帯には、メールが表示されている。

どうやら、監督達の話の間に送ったらしい後輩を、宮地兄弟が左右から殴る。

そうやって騒ぎながら歩く面々を、後ろから恨めしげに見ている何人かがいたが、彼らは特に気にしていなかった。

昼食は、併設されたレストランでのバイキング形式だった。

流石に、自分達で作れと言うものでは無かった為、某二校のメンバーは胸を撫で下ろしていたが。

思い思い席につき、食事を取っていた中で、その騒ぎは起きた。

誠凜高校の一年部員である福田寛が、食事の後スマホを覗いている事に気付いた黒子テツヤが画面を覗き込むと、それは所謂雑談用大型掲示板、通称ザツチャンと呼ばれるものだった。

そこで開かれていたスレッドは、【伝説】ライダー隊活動報告スレP a r t 1 1 3 【新生】と表示されていた。

「ライダー隊、ですか?」

「?。(。D。ノ)ノウワツ!」

思わず飛び上がった福田の声に、周囲が何事かと視線を向ける。

福田の手から、ひよいつとスマホを取り上げたのは青峰大輝だった。

「ああ? かめんらいだあ?」

「うまいのか、それ」

「違うつすよ、青峰っち。それ昔の特撮ドラマつすよ」

唐揚げを齧りつつの言葉に、訂正を入れたのは黄瀬涼太だった。

『仮面ライダーBLACK』と言う、正義の為に戦うヒーローのTVドラマが一〇年程前にあったのだ。尤も、黄瀬も青峰も、それぞれキッズモデルとバスケの練習とで見た事が無かったが。

そのままふーんと、スマフォを眺める青峰の腹に無言で掌底（イグナイト）をぶち込もうとする黒子を、近くで食事を取っていた伊月が慌てて静止する。

普段ならまあ、まず口で静止するのだが、食堂でしかも食べている最中の人間の鳩尾に一撃は、衛生的にも食欲的にも頂けないからだ。

その向こう側で、訝しそうに顎に指を当てるのは赤司征十郎だ。

「仮面ライダー？」

「そんなものがあつたのかい？」

「あら、征ちゃん知らなかったのね？」

仮面ライダーブラックと言うのが正式な名前だね、結構かつこ良かったのよ？」

そう笑つたのは、実淵玲央である。

おねえのキャツと言う反応に、周囲が思わず黙り込む。

だが、それに向かって、福田は「違います」と反論した。

「あの、そのスレは違うんです、特撮じゃなくて、その、」

「もしかして、福田さん、都市伝説の方ですか、それとも追っかけですか!？」

福田に向かって、こう問い掛けたのは桐皇学園高校一年の桜井良だった。

普段謝つてばかりの後輩の反応に、桐皇の上級生が目丸くする中、福田は胸を張ってこう言った。

「俺、クウガとアギトの追っかけなんだ！」

去年、地下鉄で起きた未確認事件で助けて貰って以来のファンですか!？」

「ええ!? よく無事でしたね!？」

僕は都市伝説メインですけど、時々追っかけも見てるんです!

スカルライダーに子供の頃誘拐され掛けたのを助けて貰って以来、

あの人の情報が出てないかずっと気になって！」

食堂のこここで、ぐふつとか、んぐつと言う声が漏れる。

千尋はそつと何気なさを装って水を飲み、健介は相棒の体格を壁に咽ているのを隠し、宮路兄弟は揃って食べていたパスタをつつかえさせ、真也は思わずチャーハンを運んでいた手を止め、順平は目の前にいた小金井慎二に口に含んでいた味噌汁を吹き、高尾は逆に味噌汁で咽返って胸を叩いた。

(おっふ、流石養父(おやじ))

(身近な奴が語るの聞くの、結構利く!)

(いや、判ってた、判ってたけど!)

(つうか、海斗さんと空さん、それ何時の事っすか!?)

(知ってたけど、身近にいたよ、ライダー隊)

(だああああ! 後輩にまさかの救助者!!)

(待ってお願い、こつちにも心の準備ってもんが!)

「あの、どう言う事ですか?」

無音でもがく面子に気付かず、首を捻ったまま問い掛ける黒子に答えたのは、これまで黙っていた海常高校の小堀浩志だった。

『『ライダー隊活動報告』スレと言われているのは、近年起きている未確認生命体と呼ばれる存在が起こしている事件と、彼らと戦っている警視庁対未確認生命体事件対策班S・A・U・L、そしてS・A・U・Lに協力している『仮面ライダー』と呼ばれている八人の謎の人物の目撃談をメインに挙げているスレッドだよ。稀に、二五年前の体験談を挙げる人もあるけどな。こいつの別名が『追っかけスレ』だ。

それと『疾風の都市伝説』スレの方は、二五年前のバダン戦役に始まって、現代まで人々を助けている『仮面ライダー』について検証するのがメインだ。そこで一番語られているのが、『伝説』と呼ばれるバダン戦役の時に戦った一〇人と共に戦い、二年前から現れた『新生』が現れる直前まで戦っていたとされる、スカルライダーだ。

スカルライダーに関しては、同時にSPIRITS隊スレも見ると判り易いかもな」

「小堀?」

さらさらとこう答えたチームメイトに、笠松幸男森山由孝とが目を丸くする。

今までの付き合いで、小堀がそういうものに興味を持っている事など聞いた事が無かったからだ。

勿論、小堀が『仮面ライダー』に興味を持つようになったのは、年末の後輩である中村真也とスマートブレイン社とのいざこざに巻き込まれてからの事だ。たまたまネットで、中村——555の画像を見掛けて、探しているうちにザツチャンに辿り着いたのだ。

小堀の言葉に、興味を示したのはこう言う事には興味がなさげに見える今吉翔一だった。

お代わりを取りに行っていたらしい様子の今吉は、鰻巻き卵やフライ、サラダの乗った皿を片手に、青峰の手にあるスマホオを取り上げ、福田に戻してやった。

「ほう？」

そんなにスレあったんか。なんや、ザツチャンも侮れんな」

「今吉先輩、仮面ライダーに興味あったんですか、すいません！」

「わしやない、お父(と)んが仮面ライダー二号の熱狂的なファンでな。

……まあ、一昔に比べたら、あんまりわしらに話さんなったさかい、案外張りついとんかも知れへんなあ」

後輩に糸目を更に細めて苦笑いすると、今吉は元の席へと戻った。

それを切っ掛けに、皆三々五々食事に、或いは仲間内での話しに戻っていった。

だから、この騒ぎの中一切話しに加わる事無く、そして食事途中でぼんやりと窓の向こうに広がる施設を眺めていた火神大我に、誰も気付いていなかった。

彼の耳には、ずっとチャリチャリとメダルが立てる音が、薄く細く届き続けていた。

ほぼ同刻、お台場の一角に、巨大な車両が姿を現していた。

『コアボイルダー』と呼ばれる灰崎祥吾が愛車としていたバイクには、三つの強化装備が用意されており、今海に向かって方向転換しよ

うとしているのは、それらの運搬用大型車両である『リボルキャリア』である。

上部ハッチもユニット収納部のハッチも全開にしたその上で、もしも用にドライスーツを着込み、その上から風除けとして大振りなライダージャケットを羽織った祥吾が、山崎達弥と『コアボイルダー』に水上高速航行パーツ（スプラッシュヤー）を装着させている。

因みに、コーンロウは元々清潔好きな彼には頭が痒くなる時点で、長々とするものじゃないと言う判断を下されとうの昔に解き、中学生頃よりやや短いぐらいに切り揃えられている。

「和君からの電話で割り出した距離なら、こいつが巡航速度（クルージングスピード）で行って帰って来ても多少はエネルギーが残る計算だ。」

ただ、何が起こるか判らないから、緊急用の通信機は落としてくれるなよ?」

「わーてるって!」

しかし、大我の奴、海斗兄ちゃんが入れてくれた教材、丸々鞆から抜くか?!」

ジャケットの上から背負った、防水性のデイパツクのベルトを直しながら祥吾は溜息を吐く。

大我の家の掃除や買い物は、彼が学校に行っている間に大学や事件の合間を縫って滝海斗が行っている。

今回の合宿に関しては、他の面子から聞いていた事もあり、一週間の着替えと一緒にきちんと教材もボストンバッグに入れて海斗が用意していたのだが、どうやらおやつを詰め込むに当たって、教材を詰めた袋を抜いたらしい。

学校関係者には、バスケット以外に気が回らないバスケット馬鹿で通っているが、その実態は謎のアーティファクトの所為で軽度の記憶障害と注意散漫を患っている。

義兄の読み通り、高校入ってから思いつきバスケットボールをプレイしている所為か、以前ほどひどい失敗や友人関係の失敗も減っている。まあ、同時に患っている食欲過多もそれなりに騒ぎになっ

いるのだが。

今回の『忘れ物』は、合宿で勉強する事を忘れ、食欲過多からおやつを買い足した結果であるようだ。

幼馴染みの状況は兄から何度も説明され、実際に会った反応でおかしい事を理解した祥吾は早く彼が回復する事だけ願っている。

何しろ相手は、オムツ引きずっている頃から社内のベビールームと一緒に並んで寝て、海斗や空にあやされて育ったのだ。大我が父親の赴任についてアメリカに行った時には、それこそ目玉が解けそうなくらい泣いて泣いて、義兄達が慌てるくらい大泣きしたのだ。

だからこそ、中二の時戻って来た彼から始めて会ったかのような反応を返された時には、事情を聞いていたから手は出なかったものの、大我の前で大泣きしてしまったくらいで。……まあ、ちようどすったもんだで義兄が怪我したり、部活を強制退部させられたりと言う事もあつて精神的に追い詰められていた所為も多分あつたのだろう。

「ああ、間に合った。

祥ちゃん、これもつて行きや」

「しげさん？」

息を切らして、上嶋繁が『リボルキャリア』に走って来た。

山崎に手伝って貰って車体に上がった上嶋は、片手に下げていた保温弁当箱を祥吾に差し出した。

受け取ってびっくりしている祥吾に向かって、上嶋はにっこり笑つてこう告げた。

「向こうに着いたら、中のお握りと豚汁食べたらええで。

まだまだ冬や、風も水も冷たいさかい、これで身体暖めて帰っておいで」

「うわあ、ありがとうしげさん。

じゃあ、テスト兼ねて行ってくるね、サキさん、しげさん」

弁当箱を一見燃料（ヒュール）タンクの小物入れに納めると、祥吾は愛車に跨りヘルメットを被った。

前輪部分を倒して、パーツのフローターに埋没させたような感じになった『コアボイルダー』を、キャリアに設置されたカタパルトに乗

せると、上嶋と山崎はキャリアから降りた。

短いカウントダウンの後、圧縮ガスによって海上に射出された『コアボイルダー』は、フローターで海面を滑ると、物凄い勢いで『うみほたる』の方角に向かって突進した。

目的地は、『うみほたる』を越え、東京湾を抜けた先の伊豆諸島である。

フェリーでこの勝義島に来た貨物の大半は、ホテルの地下駐車場に入った。

搬入口であるのは確かだが、一台だけその更に奥にある大きな二重扉の奥へと入って行った。

それは、船の中で火神大我が近付こうとした、あの大型トラックだった。

暗闇の底で、ジャラジャラと音がする。

鈍色のメダルの山の中から、一見すると赤い金属籠手が覗いているようだが、その指が動いているのを見れば誰しも驚くだろう。

その赤い羽根を模した装飾を施された籠手は、メダルの中から這い出すと何かを探るように宙を掻いた。

「何だ、この気配。」

レアンでもルーズでもない、ドロウでもリンクでもない。

俺達以外のグリード？

まあ、錬金術師共が俺達だけしか造らなかつたとは限らないしな」
そう呟くと、宙に浮き上がった籠手——いや右腕は、そのまま闇の向こうへと消えていった。

後には、棺に一杯のメダルが、静かに残されていた。

大騒ぎのミニゲームで、午後は終始した。

ここぞとばかりに、コートを駆けずり回る一部バスケット馬鹿達に溜息を隠せない先輩や同級生達がいる一方、誠凜の相田リコや桐皇の桃井さつき、その他情報収集を目的としている面子が、青峰大輝や火神大我の動きを目を皿のようにして追い掛けている。

それに追従しようとした黄瀬涼太の方は、足の負傷が治りたてである事から先輩であり元主将である笠松幸男から、駄目出し（物理）を食らっていた。

「あーあ、あいつら一週間この調子かね？」

「取り敢えず大我——火神はそのつもりじゃないか？」

楽しみのあまり、教科書持って来るの忘れるくらいだし？」

「勘弁してくれ、お陰でリコが殺気立ってて」

1ゲーム終えて、コートから出た宮地裕也のぼやきに、同じく汗を拭った中村真也が苦笑う。

それに向かつて、これは本気で額を押さえつつ日向順平がぼやく。

三人が揃って見るのは、体育館の中に3面取られたコートの中でも、今自分達が抜けたコートの方だ。

そこでは、キセキの世代五人と火神、高尾、笠松、桜井良、氷室辰也とが、ボールを奪い合っていた。

その右隣のコートでは、各校の三年の半数と実淵玲央、根武谷永吉、葉山小太郎とでゲームしている。——誠凜の木吉鉄平と霧崎第一の花宮真が参加していない為、『無冠の五将』が揃わなかった事を、誰よりも三人が残念がっていた。

残りのコートでは、誠凜の一、二年生達を相手に、残りの三年や二年生がゲームに興じている。

それをコートの外から眺めるのは、やはり交代してコートから出た福井健介と黛千尋だ。

「おーおー、元気だなあ、皆」

「わざわざこんな時期に行われる合宿に、好き好んで参加する時点で判るだろ？」

「じゃあ、ちい…いや黛もその口か？」

「違うわい、赤司に参加しろって言われたんだよ」

「ふうん？」

ウィンターカップ以来、びっくりするぐらい素直になった赤毛の後輩に絆（ほだ）されたって、キバットが言ってたぞ？」

スポーツドリンクを飲もうとして、健介の言葉に千尋は思いつ切り咽返る。

無表情な義兄弟の、慌てふためく姿にこっそり笑いを噛み殺す。そんな遠方暮らしの（尤も、大学からは再び同じ屋根の下で暮らす事になるのだが）相手にぎっと一睨みした千尋は、しかし昇降口にチラつく影に、慌てて腰を上げた。

いきなり駆け出した相手に、健介も慌てて走って閉じられている扉へ向かった。

見た目よりは軽いアルミの扉を開くと、千尋は首を突き出し周囲を見回す。

しかし、冷たい潮風が吹き抜ける景観用の植え込みが広がる外に、動く影は何も無かった。

「さっみー！」

「何してんですか、黛さん！」

「あー、濟まない、何か誰か覗き込んでるような気がしたんだが、気の所為だった」

出入り口の傍にいた面々が、急に吹き込んだ寒風に悲鳴を上げる。

それは無表情に謝った千尋に、そつと傍に寄った健介が声を潜めて問い掛ける。

「どうした？」

何か変な気配がしたが」

「お前も気が付いたか。」

一瞬キバツトが出て来たのかと思っただけ、気配が違い過ぎて覗いてみたんだが、気付かれたらしい。逃げられた。

何だろいな、魔力っぽい気配だったが、魔族のどれとも気配が違った」

「そうか。《ファントム》でも魔族でもないって言うけど……、父さんの遺品をひっくり返せば何か出てきそうなんだけど、今は無理だなあ」

そう言う健介の亡き実父は、カリブ海の歴史を研究していた考古学者だったが、同時にオカルト的な文物を回収し研究するオカルト研究者でもあった。

但し、そこからトンデモ学説に飛躍するのではなく、当時の風俗文化を知る為の手段の一つとして研究していた真面目な人である。

尤も、そういう文物に『本物』が混ざっていた事に、気が付いていなかったが故に悲劇に巻き込まれてしまったのだが。

しかし、話している二人の前を、ゲームが終わったのにそのまま続けようとするのを、笑顔のリコの命令で引きずり出された面子が通り

過ぎる。

その中にいた大我とすれ違ったその瞬間、考えていた二人が顔を跳ね上げた。

「健介」

「おう、俺も感じた。

大我から漏れてる気配に似てるんだ、あれ」

思わぬ事態に、二人は早くこのゲームが終わって欲しいと思った。話し合わねばならない事が出来たのだ。

夕食までの一時、風呂に入ったり娯楽室として開放されたロビーやカラオケルームで集まったりして、それぞれ時間を潰していた。

そんな中、千尋と健介、裕也と真也の四人はホテルを抜け出し手近な海岸へと向かった。

本当は、受取人である大我と呼んだ本人である和成も一緒に行く筈だったのだが、二人ともチームメイトに捕まって抜け出せなかったのだ。

同じ理由で清志と順平も動けず、取り敢えず半数だけで動く事になったのだ。因みに、裕也の方は兄の影に隠れる形で抜け出していた。

まあ、大我や和成が動けば、二人を探しに『キセキの世代』の面々が追い掛けて来る可能性が出て来るし、本音として祥吾——灰崎祥吾と『キセキの世代』を会わせたくない一同としては、割合都合のいい面子になった。

念の為、「散歩に出る」と監督達には根回ししてから、四人は建物の外へと出た。

五時を過ぎると、空は赤を過ぎて紫色になっていた。

四人が海岸に付く頃、暗くなった海に光が点る。それはあつと言う間に近付き、大型水上バイクが砂浜へと上がった。

「祥吾——」

「大丈夫か——」

裕也と真也の声に、返った言葉は「きつぷ—————!!」と言う

絶叫だった。

「こら、ホテルの連中に聞こえるって」

「いや寒い！」

日中気温上がってたからって海の上舐めてた寒い！

二月の海はねえ！ 俺舐めてた、飛沫冷たい！

一月に兄ちゃん達と富士山ツーリングに行った時、雨ん中突っ切ったのと同じ位寒い！」

歯の根が合わず、がちがち震えるしかない祥吾に、取り敢えず溜息吐きつつ真也が缶コーヒーを差し出す。

水上高速航行パーツ（スプラッシュヤー）を使うと聞いて、何となく寒いだろうと考え買い込んでおいたものであった。

それを受け取ったものの、祥吾の悴（かじか）んだ手ではプルタブを引き起こせず、仕方なく裕也が開けてやる。それを舌を火傷しつつ呑むのを見て、頭を掻きつつ千尋が切り出した。

「お前、その状態で向こうまで帰れるか？」

「うー、実は自信ない……。」

こんなに寒いって思わなかったし、意外に波高くて進むの大変だったし」

よくよく見れば、祥吾が愛用しているバイク用ヘルメットに、うっすらと塩とも氷ともつかない結晶が付いている。

「止めておいた方が良くねえか？」

好い加減日も暮れちまったし、何よりちよつと協力して欲しい事があるんだが、良いか？

ガイアメモリ他にも持って来てないか？」

「あー、確かに五、六本持って来てるけど、何？」

健介にそう答えた祥吾に、続けて言ったのは千尋である。

「取り敢えず、今夜は俺達のところを紛れ込んで泊まれ。」

夜中の間に相談したい事がある。大我に係（かかわ）って来る事だ」
「！」

判った。取り敢えずコアボイルダーを隠して、しげさんに連絡して」と

四人に協力して貰って、海岸近くの茂みに車体を隠すと、祥吾は持って来ていた《INVISIBLE》のメモリを使って透明になって、そつとホテルの中に潜り込んだ。

健介と裕也に付いて部屋に入ると、二人がロックするのを確認してから、祥吾はロストドライバーからメモリを抜いた。

「だあ、うっかり哨戒用に持つてるの、そのままにしたのが役に立つとはなあ」

「他に何持って来てるんだ？」

裕也に問われ、祥吾はライダージャケットの内側に作り付けてある、防水仕様のメモリホルダーを開いた。

そこには、彼らが良く見るライトグリーンの《HOPPER》メモリと、使用している《INVISIBLE》が収まっていたらしい空間の他に四本、収められていた。

「えーっと、加速用の《LIGHTNING》、応急処置用の《DOCTOR》、それと情報検索用に《BOOK》と《COMPUTE》だ。未確認と向かい合う時は《COMPUTE》が便利で、単純に現場検証とかは《BOOK》じゃないと大変なんだ」

それぞれ、黄色、白地に赤いライン、青と白のボーダーと銀色に金色の飾り文字が入ったメモリを出して見せる。

その応えに、健介が身を乗り出す。

「後で、千尋達にもこっちに来させるから、その時《BOOK》の力が借りたい。良いか？」

「判った」

「あ、そういやそろそろ飯だ。」

「適当に何か飯、持って来てやろうか？」

「あ、お握りと豚汁なら、こん中にあるんですよ、しげさんが持たせてくれた奴。」

「明日の朝食の時に、お願いして良いっすか？」

そうやって、火神大我の教科書類を入れた防水デイパック以外に手に提げていた、丸っこい保温弁当箱を見せると、「おお」と言う表情に二人はなる。

小料理屋『T O K I O』の店主であり、人事厚生課飲食部門の部長と言う肩書きを持つ上嶋繁は、気さくなのを通り越して「世話好きなおぼちゃん」と言うのが正しい印象の人物だ。

彼ら滝和也に庇護されて育った面々と言えば、頼りないぐらい物静かに見える彼の、細やかな気遣いに支えられてきたのだ。

それでも、この食事が全てビュツフエ方式であると聞いている二人としては、何か持って来てやりたいと言うのが人情で。

「まあ、ちよつと待つてろ、唐揚げ辺りがめて来るから。」

この部屋シャワーあるから……つと、着替えが無いか」

健介がそう言ったその瞬間、ドアをこんこんつとノックされた。

ドキツと、飛び上がった三人に、陽気な声が掛かった。

「健、いや福井先輩俺でつす！」

開けて下さい」

「あ、カズか」

ドアのロックを外すと、滑り込むように和成が入る。

祥吾とハイタッチして無事を喜ぶと、和成は手にしていたものを差し出した。

「ちー兄いから、祥ちゃん泊まるって聞いたから、これ！」

シャツとトレパンは、宮地さんが貸してくれた、多めに持って来てるからつて、パンツは、コンビニで買ってきた、何とかLあったからちよつときつかもしいけど一晩これで我慢してよ、何だったら夜の内に洗ってシャワー室に干しとくとかさ」

「うわ、悪いな。後で清兄いにもお礼言わなきや」

「じゃあ、確かそこに据付のバスタオルあったから、それ使つてシャワー浴びとけ。」

俺達は飯食つてくる、この部屋には鍵掛けとく。

まあ大丈夫だとは思うけど、他の連中に見られると不味いからな」
「そりゃあもお、不審者として警察呼ばれちまう」

からから笑って手を振る、幼い頃からの友人を置いて、三人は夕食を食べに食堂へ向かった。

この部屋と、隣の205号室の面子が集まったのは、それから二時間後だった。

夕食の後で、一部の人間が馬鹿騒ぎを起こして——自由時間だからと、これからバスケをしに行こうとしたのだ——、監督や上級生に揃って叱られると言う騒ぎが起こった為だ。

当然のように叱責組にいた大我はと言うと、相田リコの流れるようなソバットからの腕菱十字を喰らい、再び英語交じりの悲鳴を上げていた。

「取り敢えず、順、大我と一緒に部屋に居ろ。」

俺と宮地兄は、隣でちよつと話し合ってくるからな」

わいわいと騒がしい最中、黛千尋は片思いの相手に後輩の見張りを重々頼み込まれていた、優勝高主将と言う肩書き持ちの弟分に声を掛けた。

「あ、そう言えば祥吾が来たんでしたっけ」

「ああ、少し話し合う事があるのと、早春の海は寒過ぎたらしくてな、震え上がってたから今晚健介達の部屋に泊めて、明日明るくなつてから帰すそうだ。」

そう言う訳だから、隠蔽工作手伝ってくれ。こう言う又何だが、大我の奴、悪気無く他の奴等に祥吾の事喋っちまいそうだから」

「あー、了解です。じゃあ、教科書貰つて、あいつに勉強させときます」
「任せる」

さらつと手を振り合うと、順平はぐったり肩を落とす頭半分高い後輩を引つ張つて、今晚から泊まる予定の部屋へと向かった。

二人を見送つた千尋が206号室に入ると、そこでは皆が食堂から持ち帰った唐揚げや肉団子を齧っている祥吾を挟んで、すでに宮地兄弟と和成、真也と健介とが車座に座っていた。

音も無く入って来た千尋に、面々がギクツと顔を上げる中、けろりとした様子で笑つたのは祥吾であった。

この面子の中で、彼が一番千尋との付き合いが長い事もある。

「千尋兄い、扉すり抜けんなよ」

「生憎だが、会いの子（ハーフ）の俺には霧化も物質透過も出来んと、

何度も言っている。

単に、お前達が気が付かなかったのを俺の所為みたいに言うな」
そう言って座る千尋に場所を譲ると、ベッドに腰を下ろしつつ健介が話を切り出した。

「今回、祥吾を引き止めたのは晩冬のしかも夜の海を走らせる事に俺らが躊躇した事と、午後のミニゲーム中に俺と千尋が、妙な気配を察知したからだ」

「妙な気配？」

あ、もしかして、急に体育館の扉を開けたあれっすか？」

和成の言葉に、他の面々もあつと言う顔になる。

祥吾の方は、健介と千尋が感じたという点で微妙な顔になった。

彼らの大半は勘が鋭いのだが、その中でも二人は魔力系——兄三人に言わせると多少の差異はあるが『オルタフォース』の一種であり、序(ついで)に言うところ『仮面ライダー』を名乗っている面子は全員、何かしらその恩恵を受けているらしい——のエネルギーを察知する事に長けているからだ。

そして、千尋が彼の不安を裏付けた。

「あの時感じたのは、魔族ともファントムとも違う気配で、ついでに言えば、大我から時々漏れてくる気配に似ているんだ」

「大我の？」

その言葉に、宮地兄弟は首を捻ったが、真也と和成は一樣に顔を顰めた。

「それは……」

「あの、『鴻上ファウンデーション』が集めてた何とかって奴、こいつに関わるものだろ!？」

そう言って、和成が自身の荷物から取り出したのは数枚のセルメダルだった。

皆からの差し入れを食べ終えた祥吾が、自身の上着を取ってそのポケットからちよつとした腕時計ぐらいのものを取り出し腕に嵌めた。これは、簡易ガイアメモリドライバである。

本来、ガイアメモリは『生体コネクタ』と呼ばれるフィルターか、ド

ライターと呼ばれる装置によって起動する。

ただ、そのどちらの場合も怪人態、若しくは超人体と呼ばれる変身を行う事によって、メモリに封じ込められている特殊能力——それらは一様に『ガジェット』と呼称されている——を使用出来るようになってる。

この簡易ドライバーは、『ホークアイ・ホールディングス』の研究者達によって開発されたものであり、変身する事無く『ガジェット』を使用出来る装置である。

尤も、これを使用する際には会話はともかく余り激しい動きは取れなくなる為、安全地帯での使用を祥吾は大人達から耳に蝸が連なる勢いで言い聞かされている。

その簡易ドライバーに『BOOK』のメモリを刺して、祥吾は目を閉じた。

「ガジェット『地球（ほし）の本棚』起動。

キーワードを挙げてくれ」

「まずは『魔力』、『魔族以外』、『ファントム以外』」

千尋の言葉に、真也が付け足す。

「そうだな、『メダル状の物体』、それと……」

「そうだ、『欲望の増減』！」

閃兄ちゃんが言った、大我はバスケットへの意欲や食欲は過剰なのに、他の事は意識から消えるようだった

和成の言葉で、目を閉じた祥吾がびくっと反応した。

「一つヒットした。

でも、くそ、まだロックが掛かって読めねえ……あれ？

もう一冊？ 【欲望のメダル】？」

祥吾の呟きに、慌てて何人かがスマフォのボイスレコードアプリを起動させた。

「【欲望のメダル】」

八百年前、錬金術師の集団が行なった、人造生命体を作り出す実験の過程で誕生した魔法物質。

人間の果てしない『欲望』を、エネルギーとして固体化した物体で

あり、純粹にエネルギーだけの『セルメダル』、様々な生物種の欲望を元に作り出された『コアメダル』とに別けられる。

コアメダルは十枚一組で生み出され、そこから一枚欠損させる事によって擬似生命体『G R E E D』を生み出す。

……これ以上はページを捲れねえ、何かまだキーワードがいるっほいな」

そう言いながら、祥吾はドライバーからメモリを抜いた。

大きく息を吐く祥吾を労わるように、その銀色の頭を撫でてやりつつ、健介が口を開いた。

「そうか、だが判った事がある。

つまり、大我の体内に入ったという二枚のメダルは、その『コアメダル』と言う事になる」

「だとすると、あの時俺達を感じたのはコアメダルの気配と言う事になるのか」

千尋の言葉に、六人はそれぞれ考え込んでいった。

その頃、206号室から遠く離れた112号室。

そこでは、所謂『キセキの世代』が六人——女の子である桃井さつきは、相田リコと荒木雅子と一緒にいる為、こちらには来ていない——集まっていた。

「うー、福ちゃんが構ってくれないー」

ポリポリ持ち込んだまいう棒を齧りつつ、すねた声上がる。

「火神君と一緒に部屋が良かったです……」

影に隠れるように、恨みがましい声上がる。

「籤引きの結果だ、致し方あるまい」

「そう言うんなら、眼鏡かチャカチャ言わすなよ、(。△。)ウゼエ」

緑の少年へ、青の少年が突っ込みを入れる。

このツンデレ朴念仁が、高校のチームメイトにデレまくっているのは同中仲間では有名な話である。

「お前達、集まって第一声がそれか？」

「まあ確かに、てつきり学校毎の部屋割りになるとばっかり思っ

たっす」

呆れたようにそう言った赤い髪の少年に、心持ち沈んだ顔で黄色い紙の少年が答える。

そこへ、青い髪の少年が思い出したようにこう声を掛けた。

「そう言えば赤司、何で福田総合は呼ばなかったんだ？」

「！　な、青峰っち、何でショーゴ君なんか呼ぶんすか!？」

「……福田総合は、この週末に創立記念日が掛かっていて、その時に学校行事があるので参加出来ないと、顧問の先生からお断りが来たんだ。同じように、学校行事などの理由で参加辞退をした学校は他にもある。」

決して、灰崎がいるから声を掛けなかった訳じゃない」

赤い髪の少年——赤司征十郎の答えに、青い髪の少年——青峰大輝はがりがりつと頭を掻いた。

そんな彼を見て、元相棒で現ライバルの相棒である黒子テツヤが不思議そうに首を傾げる。

「どうしました、青峰君、何か悪いものでも拾い食いしましたか？」

「おい、テツお前な」

「と言うか、峰ちんどしたの?？」

まいう棒を咥えたままの紫原敦がそう聞き、眼鏡を押さえたまま緑間真太郎もこちらを見るに当たって、青峰は更に頭を掻いた。

あの日、青峰は見たのだ。

自分が殴ってしまった、嘗てのチームメイトの隠していただろう姿。

『T-10メモリか。またアブねえもん手に手を出しやがって。』

おら、寄越せよそれ。んでこれからは、リョータの事を純粹に応援してやれ』

『おう、踏んだぜ。』

そうすりゃ、お前さんが来ると思ったからよ』

『俺あ、『仮面ライダー』だよ』

メタリックライトグリーンのスーツに、昆虫を思わせるヘルメットのその姿で、蝙蝠の化け物と化した女子高生を倒したその雄姿を。

朝日と共に、事態は急変した。

出勤して来た、《ホークアイ・ホールディングス》会長であるアラン・ホークアイの前に、突然ばらばらつと二〇人程の黒覆面に全身黒タイツの人間が駆け寄り、そしてその後ろから二体の異形がのっそりと歩いて来た。

悲鳴を上げる、一般従業員を避難させるよう秘書に伝えると、会長はゆっくりと闖入者の前に立った。その後ろに、迎えに来ていた夏川浩之と年若く見える女性秘書を待機させて、である。

「どちら様かな？」

今日は、こんな朝早くからのアポは受けていないのだがね？」

「ふん、我等に会いに来るのが筋であろう貴様が何時までも来ないかな、来てやったまでの事」

そう言っ過ぎてちぎちぎと牙を鳴らしたのは、蜘蛛型の怪人である。

その横で、同じくふんぞり返るのは蝙蝠型の怪人である。

そのどちらも、アラン・ホークアイは知っている。

蜘蛛男に蝙蝠男、ショツカーの極初期の怪人であり、どちらも改造されたての《仮面ライダー》本郷猛に倒された存在である。

若干の改装は受けているようだが、アランの目にはどちらも大して変わった様には見えなかった。

「私が？ 君達に？」

はて、何処の何方（どなた）か判らない、しかも何処にいるのか判らない相手に会いに来てと言われてもねえ？」

アランの言葉に、蜘蛛男の方はいらつと来た様子だが、蝙蝠男の方が冷静に言葉を続ける。

「戯言はもういい。」

貴様もショツカーの人間ならば、こちらに協力するのが筋と言うものではないか？」

「ショツカー？」

ああ、そんな組織もあったねえ。

でもこの世界では、三五年も前に潰れて無くなった組織だよ。

私達は《ホークアイ・ホールディングス》、こう見えても北米に本社を置くサイバネティクスとバイオケミカルの世界企業でね」

そう言った会長は、うつすらと苦笑を浮かべた。

それは、出処を間違えた道化を見るように。

「残念だけれど、『世界征服』なんて古臭いお題目に付き合うほど、私達は暇じゃないんだよ?」

「ええい、黙って聞いていれば!」

大人しく付いて来い、貴様もショットカーの改造人間なら、我等大ショットカーに忠誠を誓え!」

蜘蛛男がそう叫び、アラン・ホークアイに向かって糸を吐き出した。

ちよつとやそつとの刃物では切れない筈の粘糸は、自信満々に吐いた蜘蛛男の目の前で風を切って飛んで来た何かに斬り飛ばされた。

あつと思つたは一瞬で、黒尽くめの男達——戦闘員を跳ね飛ばし、二台のバイクがアラン・ホークアイを庇うように停まった。

一人は、赤いアーマーに金色の角の《仮面ライダークウガ》、もう一人は、黒いアーマーに同じく金色の角の《仮面ライダーアギト》。

《ホークアイ・ホールディングス》の社屋ビルから、息を吞んで事態を伺っていただろう社員達の歓声上がる。

その声を聞きつつ、蝙蝠男は戸惑つたように呻いた。

「ぐ、グロンギ?」

いや、お前達が報告にあつたこの世界の仮面ライダーか!」

「……マジか、過去の亡霊じゃないよなあ」

「少なくとも、こんな朝日が燦々と射しているところに現れる亡霊は嫌だな。」

夏川さん、『お嬢』、会長をお願いします!」

敵の途惑いを聞き流し、ボソツと呟いたクウガに答えつつ、アギトは後ろで待機していた会長秘書達に声を掛ける。

「判った!」

「二人とも、負けたら基礎練増やしてやるんだから!」

「ライダー、頼むよ」

部下二人に庇われつつ、後方へと下がる会長を追い継ろうとした戦闘員達が、数人纏めて薙ぎ倒される。

それを見て、ぎちぎち牙を鳴らして蜘蛛男が飛び出す。

「この、高々人間モドキが、我等改造人間に勝てると思うか!!」

「それはそのまま返してやるぜ、大昔に仮面ライダーに倒されて劣化再生繰り返したやられ役が!」

受けて立ったのはクウガの方だ。

アギトの方は、相棒の暴言に額を押さえつつ、しかし格闘戦用に腕の皮膜を小さくした蝙蝠男から目を離さない。

「ふん、『仮面ライダー』一号以降のライダーがいないこの世界で、ぼつと出て来たお前達が、我等大シヨツカーに勝てると思うのか?」

「勝つさ。」

俺達は、『伝説』の十人ライダーがBADAN大首領と戦い続けている間、彼らの帰る場所を護る為に戦い続けた『Skull Rider』（スカルライダー）の後継者なんだからな」

聞き慣れないライダーの名に、一瞬虚を衝かれた蝙蝠男の顔面にアギトの拳が減り込んだ。

同じ頃、勝義島のホテルの中でも異変は起こっていた。

夕べ、お握りと豚汁が入っていた容器に朝食を詰めて持って来た206号室の面々は、ベッドルームに隠れていた兄弟分が険しい表情で大振りの携帯——スタックフォンを睨み付けるのを見た。

「祥吾?」

「あ、皆、ちよつと確認してくれるか?」

今、『TOKIO』に掛けたら店にもしげさんにも繋がらなくて」

灰崎祥吾の言葉に、高尾和成、中村真也、宮地裕也、福井健介の四人も自身の携帯やスマホを取り出し、アンテナが立っていない事を確かめ眉を顰めた。

「これは……」

「これ、他の連中まだ気付いてないか」

「みたいだな、外だまだ騒いでる様子が無いから」

真也が呻（うめ）く横で、裕也と健介が廊下側を伺う。

和成は、思い出したようにこう祥吾に聞いた。

「祥ちゃん、携帯が入らない時用に、山さんから通信機渡されてない？

ほら、大昔のトランシーバーみたいな奴」

「あ、そうか、シヨツカフォンならー！」

そう言いつつ、祥吾が取り出したのは500mlペットボトルくらいの大きさがある、古びた携帯電話状のもの——昔の携帯無線機を取り出した。

電源を入れ、プッシュボタンではなくねじ式のチューナーを回して電波を捕らえようとした祥吾は、だが急にクリアに入って来た音声に手を止めた。

『先遣隊よりゼロ少佐へ、マミー・ゼネラルは我らへの恭順を拒否、現在クウガ、アギトと交戦中です』

『ゼロより先遣隊、仮面ライダーもどきを撃破し、傲慢なるマミー・ゼネラルを捕らえよ。』

こちらは予定通り、これより選出試験を実行する』

ここまで聞いた時点で、パチつと真也が電源を落とした。

驚く面々に、真也は向こうにこちらが聞いていたのを悟らせない為だと言った。

「こちらが聴いたと言う事は、こちらの音声に向こうに聞こえる可能性もあるだろう？」

「あー！」

皆が顔を見合わせた、その時だった。

何の前触れもなく、世界が上下に揺れた。

最低でも三〇センチは跳ね上げられ、落ちた気がする。

「わあー！」

「うわっ!?!」

「ひいっ!?!」

「ぎゃっ」

「おおっとー！」

思わず座り込んだ和成と真也、座っていたベッドから転げ落ちた祥

吾に押されて祐也も倒れ込み、一人健介だけが揺れを凌いで多々良を踏んだ。

当然のように、扉越しにも判るほどの悲鳴がそここで上がっており、そして少年達の不安を煽るように館内放送が掛かった。

『只今、地震が発生しました。』

館内の宿泊者は、身の回りの物を持って、落ち着いて体育館へ移動して下さい』

それを聞いて、五人はそれぞれの顔を見合わせた。

「どう思う?」

「あの通信聞いた後だと、何とも言えないが取り敢えず学校の連中と合流した方が良いと思う」

裕也の言葉に、健介が眉を顰めつつそう言う。

それに向かつて、これは思いつ切り引き攣った顔で和成が問う。

「でも、隣りの皆には、さっきのどう伝えるんですか?」

「ばーか、その為のプラモンスター達であり、フードロイドにカンドロイド、メモリガジェットだろうが!」

祥吾、俺達は体育館へ行く、お前は飯食ったらコアボイルダーで一旦向こうに戻れ!

上手く行くなら、海斗達に知らせて、あいつらと一緒に救援に来てくれ!」

「判った!」

「あ、祥吾、ショッカフォン貸してくれ、多分携帯が使えないから、これで連絡取らせてくれ!」

「判った、裕也兄い」

投げ渡されたペットボトル大の機器を、掴んで自分のスポーツバッグに押し込むと、宮地裕也は他の三人と共に廊下へと飛び出した。

四人が体育館に辿り着くと、彼らを追うように三階にいた面々が駆け込んで来た。

部活仲間の無事を確認しようと、四人はチームで固まっている場所へと分かれた。

幸いと言うか、チームメイトは全員居たものの、誠凜の女生徒監督以外の監督達の姿が見えなかった。

大人の不在と、突然の地震とに不安が募る中、集合が掛かって一分が過ぎて、『キセキの世代』を初めとする落ち着きのない面子がざわめき始めた、ちょうどその時だった。

ばんつと、叩き付けるようにして扉を開き、中に入って来たのは監督達の誰でもなく、蠅螂の化け物だった。

最初、何が入って来たのか、そこに居た過半数は判らなかった。

だが、桜井良と福田寛が悲鳴を上げ、そして今吉翔一と福井健介、岡村建一、宮地清志とがほぼ同時に叫んだ。曰く、
「外に逃げろー！」

と。

真つ先に、後方の扉に取り付き開け放つたのは中村真也と日向順平の二人で、同時に外を見た高尾和成が、喉を潰さんばかりに叫んだ。

「ホテルに向かっちゃ駄目だ、扉の方に変な奴らが居る！」

その声に弾かれるように、高校生達はそれぞれ学校毎に固まり、裏山へと走り出した。

それが、入って来た蠅螂の怪人の思惑通りだったとは、露とも知らず。

「こちらゼロ少佐。被検体共がフィールドに散った。

これより、『戦極ドライバー』の適性検査と運用実験を開始する。

くれぐれも即死させるんじゃないぞ？ 奴らの中から、『仮面ライ

ダー』共への牽制と捨石を見出さねばならんのだからな」

戦闘員の差し出した通信機でそう指示を飛ばすと、蠅螂怪人は姿を三〇代くらいの男性に変えた。

宮地清志が、そして秀徳の一年生コンビが男を見れば、或いはあつと言ったかもしれない。

WC中のあの日、女怪人と同行していた男が、服装は違うがそこに居ただけから。

秀徳高校の六人は、海岸線をなぞるように走っていた。

大回りになるが、港に向かおうと決めたのは宮地兄で、大坪泰介と木村信介も賛成したからだ。

その事に、緑間真太郎はやや眉を顰めたが、黙ってついて走った。だが、その行く手を遮るように、黒い全身つなぎに白く骸骨を染め抜いた格好の人間がばらばらっと一〇人ほど現れた。

警告を出そうとした緑間の目の前で、速度を上げた宮路兄弟が見るからに不審者の集団へ飛び掛った。

あつと思つた緑間が、二人を引き戻そうとしたが、それを大坪と木村が引き止め、三人を庇うように高尾和成が前に立った。

「な、宮地さん、裕也先輩!」

「馬鹿、緑間、前が出るな!」

「宮地達に任せておけ!」

「何を?」

先輩達の発言に目を剥いた緑間だったが、次の瞬間、怪鳥音の二重奏に動きが止まった。

大昔のカンフー映画の主人公よろしく、鋭い気合と共に飛び込んだ二人は、流れるような動きで三人つつ纏めて蹴り飛ばした。

「アチョー!」

「セイ! ハア!」

怒涛の勢いで戦闘員を薙ぎ倒す二人に、眼鏡をカチャカチャ上げ下げしながら状況を見守るしかない緑間に、状況に関わらず和成は吹き出していた。

「高尾」

「痛いって、大丈夫、宮地さん達二人とも星心大輪拳って言う拳法の使い手なんだよ」

「実は、宮地達はこう言う荒事に慣れてるんだ。

俺達が二年の時に、ああ言う奴らが秀徳で事件を起こしてな」
「当時の三年生と、宮地とで解決に持ち込んだんだ」

思いもよらない言葉に、目を見開き振り返る一年エースに、大坪は苦笑と共にこう告げた。

「無事に帰る事が出来たら、話してやろう。」

《ゾディアーツ》と名乗った怪人と戦った俺達の先輩と、宮地の雄姿についてな」

きよとんとしている『相棒』の様子に、状況にも拘らず笑ってしまった和成の手元に、黒塗りのカブトムシ型ガジェットが飛び込んで来たのはその瞬間だった。

誠凜高校は、十二人いる事から動きが鈍くなった事は否めなかった。

だが、後ろから迫る戦闘員の動きに、日向順平は苦く口を引き絞った。

向こうが、何処かへ追い込もうしている事に気付いたからだ。

「日向君、これって」

「奴ら、俺達をこっちへ追い込みたいみたいだな。

でも、こんな所に何が」

そう相田リコと共に話しつつ走っていた順平は、その目の前に広がる、見慣れない樹木に足を止めた。

主将が止まった事で、行き過ぎかけた面子も慌てて戻った。

彼らの目の前で枝を広げるのは、彼らの誰も見た事が無い、異様な空気を纏った一本の樹木だった。

「これは一体……」

「これ、見た事が無い」

「何か、林檎みたいな気もするけど……」

「葉っぱは似てるけど、でも、あんな赤黒い実が生るかなあって、水戸部が言ってる」

「うん？ 何だろう、これ」

皆が木を見上げる中、『鷲の目（イーグル・アイ）』で広範囲を見ていた伊月俊が、その気の根元から奇妙なものを拾い上げた。

縦長い文庫本みたいなそれには、何かを差し込むような色々が付いている上に、刀のような動く突起がくっ付いている。

「伊月、どうした？」

「いや、これを見付けたんだ。

は、大きな木の下で大きく従う、k t k r！」

「何も来てねえよ、ダアホ！」

……って、これは」

土田聡史が、木の根元に蹲った伊月に声を掛ける。

それに向かって駄洒落を返した長い付き合いの副部長に、突っ込みと張り手を入れた順平は、相手の手に掴まれたものに一瞬眉を顰めていた。

これに良く似たものを、順平は何度も見て来たからだ。

例えば、

一年下の灰崎祥吾が使用している、ロストドライバー。

同級生である中村真也が使っている、555ギアとコアシステム。

三年生である黛千尋のキバットベルト、福井健介のビーストドライバー、宮地清志の簡易アストロドライバー。

そして、『兄』である香山閃のターミナルバックル、一文字空のアイクル、滝海斗のオルタリング。

「あら、何かあったの、伊月君、順平」

「何だかこれって」

リコが近付き、河原浩一が首を捻る横で、あつと声を上げたのは福田だった。

「まるで仮面ライダーのベルトみたいだ。

でも、何だかこれだけじゃあ駄目なような気がする」

「何やってんだ、にげんじゃねえのか？」

「あの、これなんでしょう」

途中で、力尽き掛けた黒子テツヤを背負っていた火神大我が、人だかりを作る仲間達の元に近付いた。

大我の背から降りて、プレートのようなものを覗き込む黒子は、困ったように首を傾げる先輩方を見回し、その中で唯一人、険しい目でそれを睨む主将に気付いた。

「主将、これが何か判るんですか？」

「判ると言うか、もしかしたらと思ってるだけだ。

フクの言う通り、どうも何か足りないみたいだが」

いた一二人を撫でるように見た。

「ふむ。一番良さげな人間は、曰く付きか。となると、次点のお前さんが使うのが一番だろうね」

「ああ!？」

指差され、順平は思わず声を荒げていた。

それに便乗と言うより、我慢出来なくなった様子で小金井慎二が叫んだ。

「ちよつと、おじさん、いきなり何だよ！

日向に何させるつもりなんだよ！」

「おじさんかあ、ちよーつと傷付いちやうなあ……。

あー、何って言われると、まあ俺としては一応こちらの心積もりがあるのではあるけど、一応大シヨツカーって連中に命令されて、その戦極ドライバーとロックシードの使い方を説明しに来たのさ」

「大シヨツカー!？」

部員の大半は首を捻ったが、福田と、そして順平は目を剥いた。

「それって、二五年前に滅びた筈じゃあ」

「ああ、そいつらとは別物だよ。何しろ、次元異動して世界征服しているそうだからね」

福田の呟きに、何事も無かったように返した男を、大半の者は胡乱なものを見たような顔になったが、順平は合宿前のLINEを思い出し、こう言う事かと舌打ちしそうになるのを辛うじて噛み殺した。

そして、ある意味火神大我以上のバスケ馬鹿である黒子が、事態に切れた様子で叫んだ。

「馬鹿馬鹿しい、大体何ですか、シヨツカーとかドライバーとか、僕達はバスケの合宿に来たのに、何であんな得体の知れない連中相手にドロケイしなくちゃいけないんですか！

あいつらは何なんですか、監督、朝は勉強って言っていたじゃないですか、」

リコへ食って掛かろうとした黒子を、福田と河原が止めようとした、その時だった。

とんと、軽い音を立てて黒子の胸に一本の羽毛が生えた。いや、何

処からともなく投げ付けられた羽毛状のナイフが突き立ったのだ。

「「黒子?」「」」

「黒子君!!」

崩れる様に座り込む黒子に、部員達が駆け寄るもののナイフが心臓を貫いている為、誰の目にも危険で触る事が出来ない。

そして、それまで走って来た方から、のっそりと鳥型の化け物と、鎧を着けた猫のような怪人が先程とはカツコウの違う黒ずくめの集団を率いて現れた。

黒子が崩れ落ちているのを見て、指揮官らしい猫怪人が肩を竦めた。

「あーあもう、少佐からは簡単に殺すなって言われてんのに、こいつは！」

まあ良いか、事故つてあるし、一番底辺そうな奴だし、無問題（モウマンタイ）！って事で」

「何がモウマンタイだ、問題大有りだわ、ダアホー！」

そう怒鳴るや、順平は手にした板状のガジェット——戦極ドライバーを腹部に当てた。

その途端、音を立てて腰に巻きついたそれが固定されたのを確認して、順平は興味深げに自分を見る男に視線を向けた。

「おいあんた、この後どうすれば良い！」

「ふう、躊躇なく着けるね、少年。」

ロックを開いてドライバーに取り付け、カッティングブレードで起動させるだけさ。簡単だろう?」

そう言われて、順平はロックの横に付いたボタンを押し込み、「変身！」と叫んだ。

ドライバー正面にある窪みにロックを取り付け、シリンドラーを押し込んだその瞬間、順平は怒涛のような情報とエネルギーに押し包まれ、押し流されそうになった。自己暗示で制御している筈のサイコメトリー能力が、何故か起動して戦極ドライバーと錠前——オレンジロックシールドに込められていた色々な人間の思惟や感情、情報の一切合財が流れ込んだのだ。

その、悪意と悲しみと、崩壊に至った幾つもの文明と悲嘆と怨嗟の『声』に、順平が押し潰され取り込まれ掛けたその時だった。

しつかりしろ、リコちゃんを守るんだらう？

がっしりとした手が、両肩を支えるのが判った。

黒いライダーズグロブの手に、自分を支えてくれた人が誰か気付く。能力の制御が甘かった時期、唯一人隔離室の内側に入って来て、頭を撫でてくれた人だった。

リコちゃんだけじゃねえ、仲間を守ろうって思ってたそれを手にしたんだらう？

大丈夫、例えその力が悪意から生まれたんだとしても、それを正しい事に使う事が出来ればそれで良いんだ。

その声が、流れ込む情報の中から優しさと思いやり、未来への祈りを導き出す。

まるで、順平を支えるように。

そうする事が出来る奴が、仮面ライダーなんだからな。

その言葉に背を押されるように、順平はカッティングブレードを弾いた。

オレンジアーム！

ソイヤ！

花道、オンステージ！

頭上に現れた巨大なオレンジのような代物が被さって来たと思ったら全身を特殊スーツが包み、巨大オレンジは展開してアーマーとなった。

「フウ！

起動させたかあ。まあ、予定通りだね、じゃあ一緒に来て貰おうかな？」

「ぎげんな、誰がお前らの言いなりになるか！

うちの部員に手出した事、後悔させてやらあ！」

右手の中に現れた刀——大橙丸を握り直すと、順平は一年トリオを引き倒そうとした黒ずくめ——ダスタードの一人を斬り捨てた。

そのまま乱闘になるのを、部員達は呆然と眺めていた。

理解が追い付かない事もあるが、ナイフが突き立ってしまった黒子をどうやって運ぶか、何処に運ぶかが思い至らない上に、事態が理解の斜め上に展開されてしまった為に身動きが取れなくなったのだ。それでも、何とか意識を切り替えた伊月が、投げ出された順平のボストンバッグを掴みながら周囲に声を掛けた。

「とにかく、距離を取りつつ何時でもダッシュ出来るように皆構えて！」

火神、黒子を運んで、一年、二人の荷物を持ってやってくれ！」

「はい！」

「うっす！」

副主将の声に、ベンチトリオが荷物を掴み、大我も目を閉じたままの小柄な相棒を所謂お姫様抱っこで抱え上げようとした、その時だった。

その相棒の胸の上、羽根型ナイフを撫でながら、宙に浮いた箆手が不機嫌そうにぼやいた。

「何処のどいつだよ、俺のメダル勝手に使いやがったの。」

ドロウでもリンクでも、落とし前付けさせてやる」

「キヤエエエエエエエエ！シャベッタアアアアアア!!」

跳ね上がった大我の悲鳴は、その周囲で行なわれていた戦闘が思わず止まるほど、甲高くかつ殺人音波並みの破壊力と共に周囲に響いた。

誠凛高校バスケット部が、正体不明な植物の元で怪人達と遭遇していた丁度その頃。

別々に体育館を脱していた他の高校グループも、やはり得体の知れない植物のところまで、怪人と遭遇していた。

洛山高校の面々も、赤黒い実の生った木の下で、ファンガイアとミイラの出来損ないのような人型の存在に襲われていた。

鰐を思わせるそれは、ミイラモドキを従え高校生五人を包囲した。

「はいはい、誰が戦極ドライバーを使うのかなー？」

誰でも良いけど、大人しく付いてこいよー、ゴネられるの面倒だしー」

間延びした喋りに、他校に進学した元チームメイトを連想して、赤司征十郎は不愉快そうに目を細める。

そこへ、黛千尋がヘラヘラ喋る鰐型怪人——クロコダイルファンガイアに向かって、無表情にこう問い掛けた。

「お前がここに居るのは、KINGの意向か？」

それとも、独断か？」

「ああん？」

KINGなんて知るか、あんな腰抜け、こっちからお断りだよ。餌と共存なんてさ、ばっかじゃない？」

俺ちゃんは、俺ちゃんの判断で大シヨツカーに参加したの。人間は食い放題、あつちのノルマさえ守れば何してても良いなんて最高じゃん！」

ケラケラと笑う鰐の怪人に、千尋は嘆息を隠さなかった。

「大シヨツカー、ねえ。……ああ、だからDS企画な訳か。

赤司、親父さんともないペテンに掛けられたようだな」

「どう言う意味です、黛先輩」

掴み掛かろうとするミイラもどきを蹴り上げると、千尋は二年生三人に最年少の主将を守るように言い置き、首元まで上げていたファスナーを下ろした。

普段、部活以外ではライトノベルを読んでいる姿しか見ていなかった二年生達が、驚きを隠さず彼を見る。

「つまり、どんな話を聞かされたか知らないが、営業実態のない、やぐぎのダミー会社に肩入れしちまったんだよ。」

そして、こいつ等の目的は、多分飛び抜けた能力を持つてると目された、『キセキの世代』の拉致だろうよ。

キバット！」

千尋の胸元から飛び出したキバット五世の姿に、周囲が言葉を失う。

高校生達は、空飛ぶおもちゃのように見えるキバットの姿に。

そして怪人の方は、影の薄い千尋がキバット族を従えている事実

に。

「おい、千尋、いいのか!? アワワワワ(。；)(ワワワワツ」

「良いも悪いも、後二、三週間で別れる後輩に怪我させたなんて海斗に抜けてみる、説教オールナイトで利くか? どうせ、大学は東京で早々会わねえんだ、ここで派手に咬ましておくさ」

親友の忘れ形見の言葉に嘆息して、キバット五世は差し出された左手に噛み付いた。

ガブツ

「変身！」

噛まれた場所から、心臓そして顔へとステンドグラスのような紋様が走る。

爆発的に膨れ上がった魔皇力が、鎖となって千尋を包み込んだ次の瞬間、魔法金属製の鎧と化した。

その姿に、ファンガイアは不愉快そうに吐き捨てた。

「ちっ、混ざり物の半端者の癖に、『王の鎧』を着てるなんて。」

お前か、KINGが飼ってる処刑役は！」

「変な言いがかりは止して貰おうかな。」

俺は『仮面ライダー』、何処の氏族(クラン)にも所属してない正義の味方って奴なんぞね」

「ほごけー」

怪人がそう言うなり、一斉に飛び掛かって来たミイラもどき共を千尋——仮面ライダーキバは一瞬で薙ぎ払い、爪を伸ばし腕を振り上げた怪人を迎え討った。

「かっけー、黛さんヒーローみてえ！」

「何なんだ、こりゃ」

葉山小太郎は、目の前で始まった即興のヒーローショーに歓声を上げる。が、隣で見えていた根部谷永吉の方は、事態を飲み込めずぼかんとするしかない。

同じく、絶句しながらも年下の主将を実淵玲央は庇い。

そして赤司は、黙って戦極ドライバーとメロンロックシードを握り締めていた。

ほぼ同刻。

B a n a n a !

ソイヤ!

K n i g h t o f S p e a r !!

戦極ドライバーを手にした氷室辰也が、バナナロックシードを使って変身して、ここぞとばかりに大暴れしていた。

無論、彼一人ではいなしきれないザコ敵が他の陽泉の面子の前に流れて来るが、それらは身長二メートル組がその辺で拾った丸太で叩きのめす。

その状態を眺め、福井健介は嘆息を隠さない。

「こーのエレヤンめ、ここぞとばかりに暴れやがって」

「怪我をせんとええんじやがのう」

丸太を片手に、同じく溜息を隠せないのは岡村建一だ。

初めて使う装備、初めて触ったギミックにも拘らず、イキイキと暴れる美貌の爆弾男に上級生二人はそこはかたなく頭痛を覚える。

それを同じく眺めつつ、ポテチをちびちび齧りつつそこそこイラついた様子で紫原敦が呟いた。

「何で、こんな事してるし。」

あいつ等ただのエキストラだろうに、何で俺達逃げてんの、馬鹿じゃね？」

「敦一、これがエキストラアルか？」

こいつ等、どうやってもマスク剥げないアルよ？」

それに答えたのは、留学生の劉偉だ。

流れて来て、どげしつと殴ったグールの一人を捕まえ、紫原に首とマスクが皮膚が同化して剥ぎようが無い事を見せた。

思わず食べ掛けのポテチを落としそうになった紫原の様子に、再び溜息が出そうになったその次の瞬間、何かに気付いた岡村が健介を庇った。

咄嗟に盾にした丸太が、ぎくぎくつと三つに斬り飛ばされるのを見て、思わず劉が叫んだ。

「氷室！こつち、雑魚よりこつちアル！」

「え!？」

「あーいいよ、そのままだ。」

こつちのドライバー不適合者は、餌にして良いって言われてんだ、おとなしく食われてよ。つてお前もいたのかよ、古の魔法使い」

「その不愉快な声。手前、レギオンかよ！」

健介の声に、ゆらりと頭蓋骨に何か翼竜と鎧を組み合わせたような姿の怪人が現れる。

へらへらとしたその態度に、健介の額に青筋が切れる。

年末の騒ぎの時に、健介からグールを盾に逃げた相手であった。

怪人の方は、大きな身振りで肩を竦めた。

「あーあ、面倒臭いなあ、お前、大ショッカーに入らないよねえ。」

あいつだけ確保して、こいつ等皆殺しで良いかなあ？」

「てつめー！」

ケラケラ笑う相手にぶち切れたのを隠さず、健介はジャージのポケットから二つの指輪を取り出した。

その様子に、岡村が慌てて声を掛け、落ち着かせようとする。

「福井、落ち着けい！」

激したまんまじや、相手の思う壺じや！」

「バッキヤロー、俺は切れてる位がちょうど良いんだよ！」

Driver on!

腰に現れたメタルブラックのベルトに、戦っていた氷室が反応する。

「今日こそ逃がさねえからな、変身！」

観音開きに開いたバックル部分から、飛び出し展開した魔法陣を突き抜け、健介は『仮面ライダービースト』へと変身する。

その姿に、思わず顎を落としそうになる劉と目を見開く紫原を背に庇い、岡村が敢えて声を掛ける。

「福井、無理はするな！」

「心配すんな、こっちは一足先のランチタイムにしゃれ込むだけだ！」

そう言い放つや、健介はダイスサーベルを構えた。

古の魔法使いに向かって、フアントム・レギオンは笑い声を立てつつ薙刀（ハルメギド）を構えた。

『仮面ライダービースト』が、因縁の相手にメンチを切ったのと同様、海常高校バスケット部も怪人と戦闘員に囲まれていた。

その先頭に立っているのは、百足型のオルフェノクだった。

「あーあ、会社に言われて来たけど、何でこんな餓鬼共ごときに俺様が出張らなきゃならないんだよ。」

オラ、誰でも良いからとつとつそのドライバー使えよ。そしたら残り、『儀式』してこっちの仲間になれるか確認するからよ」

『スマートブレイン』から、来たのか」

怪人の影に浮かんだ、彼らと変わらないだろう年齢の若い、だがどう見ても世を拗ねていると思えない男が嗤う。

その男へ、眼鏡を押し上げながら中村真也が聞くと、男はケラケラ笑いながら肯定した。

「それがどうした？」

人間を超えた新人類、それが俺達オルフェノクだ。『スマートブレイン』社は、俺達の後ろ盾だが、それがどうした？」

「よく言うよ。」

唯の死に損ないで、長くても一〇年程で灰化して死んでしまう生命体モドキの癖に」

「お、おい、なかむ（あ）!?!」

毒を吐く真也に、早川充洋が顔を青くする。

普段は、物静かでそれなりに辛辣ではあるが次期副部長としてまめに部員の面倒を見る真也の、毒塗れの一言に笠松幸男と黄瀬涼太は目を丸くする。

センチピードオルフェノクの方は、あからさまに不愉快そうに真也を見た。

「何だとお」

「事実だろう。」

全く、単純に人類の敵やってるのかと思えば、更に酷い集団と手を組むなんて」

「このやろう、言わせておけばあ!?!」

手を伸ばし、真也を掴もうとした百足怪人の腕を、慌てて三年生の笠松と小堀浩志が遮ろうとした。

だが、その前に真也が握った携帯電話型のガジェット——フォンブラスターの光弾がその腕に二発、三発と突き刺さる。

「え!?!」

「! 貴様!」

驚く笠松の目の前で、真也は大振りなスポーツバッグの中に入れておいたコアシステムを引っ張り出すと腰に装着し、携帯モードに戻したマルチデバイスに起動コードを打ち込み、頭上に掲げた。

pipipi

standingby!

「変身!」

「貴様、貴様が裏切り者の記号持ちか!」

糞、何でギアユニットが俺達に逆らうんだよ!」

ソルメタル製の強化服に包まれた真也の姿に、百足の男が喚き散らす。

そんな相手から目を逸らさず、真也は小堀に隙を見て脱出するように告げると、パンチンググニットを構えた。

「な、中村先輩？」

「一体何が」

「笠松、しつかりしろ。黄瀬の手を離すな。」

早川、中村の荷物を持っていてやれ、良いな？」

「はい！」

「おい、小堀、」

「笠松、後だ」

事態について言い募ろうとした元主将に、元副主将は短くその言葉を止めた。

「せめて、息を吐ける状態になったら、中村を休ませてやれるぐらい状況が落ち着いたら、中村本人が話すと思う。」

それまでは待ってやってくれ。俺は、話してやれるほど詳しくない。色々調べたが、当事者より詳しくはないんだ」

「お、おう」

友人の言葉に、笠松は混乱しつつも状況を見守るしかない。

その横で、同じく混乱の極みにある黄瀬が、戦極ドライバーと赤黒い実から変化したブドウロックシードを握っていた。

各校の中で、ある意味一番危険だったのは桐皇学園バスケット部であった。彼らは、崖の様になった山道の途中に立ち塞がった奇妙な木の下で、仮面にお仕着せの集団と怪人に待ち伏せされたのだ。

事態が判らないまま、戦極ドライバーとマンゴーロックシードを手にした青峰大樹に向かって、飛蝗の化け物——ホッパーパントが気だるげにこう言い放った。

「つまらないでしょ、世の中全て。」

唯一の取り得のバスケットボールでも、全国大会の初戦で負けちゃって、バスケット選手としてのあんたの事、過去の人って言うてる人間も多いでしょ？

だから、そんなの全部捨てちゃって、大シヨツカーに来ると良いわよ？

ああ、後ろの女の子と、眼鏡の人、一芸持ちでしょ、役に立つから一緒に来てもいいわよ」

「な!?!」

女の声に、若松孝輔と諏佐佳典が顔を引き攣らせ、桜井良は貧血で真っ青になる。

だが、それに向かつては反論せず、今吉翔一はドライバーを握って固まっている最強と呼んだ後輩に、こう語り掛けた。

「青峰。お前がバスケを捨てるとは思わん。だがな、そのけつたいなもんを使うなら、一つだけ忘れんといてくれるか?」

「今吉先輩、何を仰るんですか」

目の前の事態で、一杯一杯になっている桃井さつきの目の前で、今吉はうつすらと開眼させてこう言った。

「昔な、そののみたい犯罪者共に、夢も希望も、人間としての尊厳も何もかも踏み躪られた拳句、そいつらと同じ外道になれ言われた人がおった。

せやけど、そんな人はそれを跳ね除けて、自分であり続ける為、他の同じような目に合わされる人の為に戦ったんや。

お前にそんな事まで要求せん、ただお前にとって何が大事かだけ忘れんといてくれ。

お前が青峰大輝である為に何が必要か、それだけ忘れんといてくれ」

「あらやだ愁嘆場?」

まあ良いけど。取り敢えず邪魔だから、その三人、崖から飛び降りてよ。ああ、大丈夫、一応スポーツマンでしょ、足挫くぐらいだから」

怪人がそう言うのと、マスカレイドドーパントがわきつと動いて三人に掴み掛かる。

あつと思つた時には、一番体重の軽い桜井の身体が、崖から宙へと投げ出されていた。

慌てて、黒服共を振り払い、後輩を助けようと飛び出したのは諏佐だった。

その状況に、若松と桃井の口から悲鳴が上がる。

「桜井！」

「諏佐さん!?!」

L I G H T N I N G !!

聞き慣れない音声に、一瞬高校生達が途惑い、同じく怪人も動きを止めた。

その次の瞬間、群がるマスカレイドドーパントを着地の衝撃で薙ぎ払い、一人の人物が降り立った。

ペールイエローのボディに、雷をデザイン化したらしいラインが飾るその人物の顔は、複眼とアンテナらしいものが目立つ仮面に覆われ誰か判らない。

両脇に桜井と諏佐を抱えていた『彼』は、桐皇バスケット部の面々に背を向けたまま二人を下がらせると、背中からでも判る程不機嫌にホットパードーパントを見た。

飛蝗女の方は、目の前の闖入者の腰に巻かれたものを見て、あからさまに機嫌を損ねたようだった。

「ロストドライブバーですって?」

お前は」

「T-Oか。『Exhibition』は奴らと手を組んだ、いや手下を派遣したって事か。」

まあ、ぶつ飛ばすだけなんだけどな」

そう嘯(うそぶ)くと、『彼』は何処からともかく、やや大振りなライトグリーンのUSBメモリを取り出した。

それを見て、ホットパードーパントが殺気立つ。

「T-O1《HOPPER》メモリ！」

貴様、仮面ライダーか！」

「はん、俺も有名になったな」

ロストドライブバーからペールイエローのメモリを抜くと、ライトグリーンのメモリをクールさせる。

HOPPER!

スロットに差し込み起動させると、「HOPPER!」のコールと共にその姿が変わっていく。

ライトグリーンにスーツが染まり、アーマーや手足を飾るラインがHを意匠化したものになる。

そして、つるつとした仮面が、飛蝗を思わせる顎つきのもになる。

その姿に、飛蝗女が顎をぎちぎち鳴らして威嚇する。

諏佐や若松、桃井はぽかんとその変容を見ていたが、今吉と桜井は小さく口を開いた。

「仮面、ライダー?」

「仮面ライダーHOPPER、本当に!」

そして青峰は、その背中に小さく呼び掛けていた。

「灰崎、お前」

その声にちよつとだけ反応したが、仮面ライダーは目の前の怪人から眼を離さない。

殺気立った飛蝗女の激で、マスカレイドドーパントが仮面ライダーに殺到する。

それに向かって、『仮面ライダーHOPPER』は大きく拳法の構えを取った。

火神大我は、目の前に浮かぶ赤い腕にすっかりへたり込んでいた。

腕の方は、未練がましくナイフを撫でた後、くいつと大我の顎を掴んだ。

「お前か、正体不明のメダルを持つてる奴。」

丁度良いお前、俺に手を貸せ。その代わり、この影の薄い奴の延命をしてやるよ」

「ふえい!」

腕の言葉に、顔を跳ね上げたのは相田リコだった。

彼女の目には、黒子テツヤはこのまま処置出来ずにいると後幾らも経たずに、心臓も呼吸も止まってしまおうと判っていた。

「あ、あんた、どうやって助けるって言うの!？」

「それは、こいつが俺の提案を呑んでからだ」

そう言うと、赤い籠手の右腕はぽかんとしている大我の鼻先に、戦極ドライバーに似たものを突き付けた。

それは、板状の本体にメダル状のものが入る、スロットが三つくつついた代物だった。

「な、何だ、これ?」

「メダルドライバーって言うんだ、こいつとこいつで、お前は《オーズ》になれ」

続けて右腕が差し出したのは、赤、黄、緑の三枚のメダルだった。

その三枚のメダルを見て、その場にいた高校生達はつい思った。

(赤司と黄瀬と緑間?)

「ファ!? オーズ!？」

「ああもう、ぐずぐずするな、こいつが死んでも良いのかよ!」

苛立った様子で大我にメダルとドライバーを持たせると、赤い腕は顎を掴んで190センチの巨体を立ち上がらせた。

目を白黒させている後輩を見兼ねて、伊月俊が前に出た。

「待ってくれ、火神の代わりに俺がそのオーズって言うのになる、だから」

「悪いが兄ちゃん、あんたじゃ駄目だ。それなりに欲望はあるようだが、こいつとじゃ比べ物にならないだよ」

(それに、こいつには俺達とは別だがコアメダルが入っている。何れ欲望の器として、利用する事が出来るだろうから、な)

誰にも聞かれないようにそう嘯き、赤い腕は大我の腰へドライバーを装着させメダルをスロットに押し込むと、円盤状のアイテムを差し出しこう言った。

「選べ。」

このままここにいる奴ら全員見殺しにしてお前も死ぬのと、オーズになってあの雑魚とヤミーを倒し、俺がメダルを集めるのを手伝うのと。

俺はどっちでも良いぞ。時間が掛かるのが面倒だが、お前に拘る必

要は無いらしいな。

それに、そのこの奴、そろそろ心臓が止まるが、良いのか、そいつが死んで」

言われて、大我は改めて地面に倒れ付す相棒を見た。

体力は人並み以下、大人しげな見た目を裏切る敬語を纏った毒舌、それでもバスケへの情熱は人一倍で、彼がいたから自分はあの時仲間を思う事が出来た、ゾーンの更に先を開く事が出来た。

「おい、俺がオーズって奴になれば、黒子を助けてくれるんだな」

「ああ、死なせない。ほら、やれ」

「火神！」

ダスタードを蹴散らしていた日向順平が、事態に気付いて声を上げる。

その声に振り返る事無く、大我はメダルドライバーの上に円盤——オースキヤナーを滑らせた。

「変身——」

タカ！ トラ！ バッター！

タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ！！

三つの光輪が、一つになって大我にぶつかり、その全身を黒地に赤、黄、緑のラインと鷹、虎、飛蝗を意匠化したマークが胸に入ったスーツに包まれる。

その姿を見て、何かに反応した様子で鳥型の怪物——フクロウヤミーが大我、オーズへと飛び掛った。

「うわわ!?!」

驚き振り回した腕に、ジャキンつと音を立てて大振りな鉤爪（クロウ）が現れる。

その爪先がフクロウヤミーの肩口に食い込み、羽根を撒き散らしつつ斬り割いた。

「何だよこいつ、こんな聞いてない！」

「やかましいわ、ダアホー！」

こつちだつて日常から切り離されてて、一杯一杯じゃい！」

そう叫ぶと、順平は戦極ドライバーのカツティングブレードを三回

弾いた。

膨れ上がるエネルギーに、山猫型怪人——リンクス・ゾディアーツは危険を感じ下がろうとした。だが。

ORANGESPARKING!!

「吹っ飛ばえええ!!」

順平が、無双セイバーと大橙丸の二振りを左右に薙ぎ払うと、斬撃が彼の周囲に居たダスタード数体を斬り払い、下がろうとした山猫怪人の尻尾を半ばで切り落とす。

悲鳴を上げて、山猫は逃げ出した。

「もう、ヤダ、何だよ、こんなの聞いてないってば!

お前、こいつ等始末しておいて!」

そう言い置き、怪人は黒い旋風に紛れて姿を消した。

後に残ったフクロウヤミーは、狂ったように吼えたと再び大我——オーズへと飛び掛った。

それにびびりつつも、大我は飛び掛ってくる大きな鳥に、再び鉤爪、トラクロウを構えた。

島のあちこちで、各校のバスケット部員達が怪人と戦闘員の集団に襲われていたその頃。

秀徳高校の面々は、宮地清志、裕也兄弟の奮闘で戦闘員の集団を何とかいなし、彼らは波打ち際近くの岩陰で息を吐いていた。

「つつかれたあ」

「一体一体は大した事無いのに、数が多いから面倒臭え」

大岩に凭れ、宮地兄弟は息を吐いている。

その二人に、高尾は朝方買い込んでいた自販機のスポーツドリンクを差し出した。

「虫の知らせで買つといたんですよ、どうぞ」

「悪い。でも、お前の分は？」

「大丈夫、まだ二本あります」

鞆の中を見せる後輩にほっとしつつ、清志は後輩にこう尋ねた。

「そーいや、ビートルフォンが来てなかったか？」

「それなんですけど、祥ちゃん、島から出られなかったらしくて」

「どう言うこった？」

裕也の言葉に、和成は先程飛んで来たものをポケットから取り出した。

「コアボイルダーが、隠してた場所から持ち出されて無くなった上に、その周囲を黒尽くめが彷徨（うろつ）いていたそうです。」

仕方がないから、参加学校の中で、唯一身内のいない桐皇の警護に入るって」

携帯モードのビートルフォンを開き、メモを開いて見せながら答えた和成に、格闘家兄弟はさもありませんと頷いた。

彼らからすると、ガジェットはサポート用しか持ち合わせがないものの事態に対応出来るが、やや人数の多い日向順平——まあ、バスケット調理以外ではやや頼りない火神大我を抱えてはいるが——がいる誠凛と、曲者揃いだ火力と言う点で完全に話にならない桐皇の二校が気に掛かってはいたのだ。

「そうか、祥吾があつちに回るなら、後は今吉が頭使うだろうから何ともなるな。

あいつはバスケット部追い出された後、ストバスの傍ら真面目に道場に出たそうだし」

「はっ！」

幾つか覚えのあるキーワードを聴き付け、緑間真太郎が顔を上げた。

その反応に、祐也が気付くがじっと沈黙し、その間に和成と清志が喋る。

大坪と木村の二人は、ある程度事情を知っている様子で、事態を観しているようである。

「あの、宮地さん、その祥吾と言うのは……」

「おう、うちのOBの弟でな、赤心少林拳と言う俺達が習ってた拳法の兄弟流派の中学生の部のエース格の奴だ。高尾の幼馴染みでもあるよな」

清志の説明に、ほっとしかけた緑間へ祐也が追撃を掛けた。

正直な話、入学当初から暫くの間、和成がクツション剤として機能するまでの緑間の奇行に、いい加減怒っていたのだ。

「兄貴達にバスケットを習って、意気揚々と部活に入ったら部活の空気はぎすぎすしてる、チームメイトは変人ばかり、揚句に不良呼ばわりされて部活から追い出されたそうさ。

あん時、俺達全員でお前ら帝光バスケット部に殴り込みを掛けてやろうかと思っただよな、お前ら何様だった」

「はっ！」

目をぱちくりさせる緑間に、和成は慌てて裕也を止めようとする。

だが、その和成を清志が止め、兄からの態度で話せと捉えた裕也は、はつきりと言った。

「灰崎祥吾は、俺達の先輩の弟で、俺達にとっても拳法の後輩だ。

お前らが不良だのサボりだの、女連れ回してるだのと言いがかりつけて追い出した奴は、伸びた手足の痛みで夜も眠れず、気まぐれなお袋さんの同僚に買い物に連れ回され、そしてそのお袋さんのヘッドハ

ンティング狙ってる連中から逃げ回ってた、唯の中学生だ」

「な!？」

目をぱちくりさせるのに向かって、慌てて和成がフォローを入れようとした。

「いや、あのね、祥ちゃん中学入る前150やっとなら超えた位だったのが、入学式から一月で一気に170近くまで伸びた所為で成長痛で苦しんでただよ、真ちゃん」

「で、保健室で勉強してたのをサボりと決め付けたんだな、お前ら」

「いや、裕也先輩」

「あいつが女と歩いていたというのは、八割はお袋さんの関係者、残りはいづつのフェミニストから来るお人好しの結果だよ。」

お袋さんの職場仲間の姐さん達、年齢不詳が多いからな。それに、お袋さん、世界企業の製薬部門で働いてる優秀な研究者だからな。

そのお袋さんのヘッドハントの交渉材料として、あいつを誘拐しようとしたBLACK企業の多かつた事。

お前ら、知らねえだろう?」

「そ、それは」

確かに、そんな事は聞いた事がない。

それでも、一応の反論を試みた緑間を、宮地兄弟は正論で殴り返す。

「あいつの素行については、赤司が」

「あいつの情報ソースが何か判ってて言うのか?」

「言っとくが、帝光の近隣の不良共に金ばら撒いて、あいつ襲わせたのは《AKASHI-BIOCHEMICAL》って言う会社でな、赤司んちの会社の系列だ。まあ、赤司本人は知らないだろうが、本当の事を大人共が教えると思うか?」

「っ、それは、それこそ、何で先輩方はそんな事を知っているんですか!」

「そりやお前、あいつの親父さんが、《AKASHI-BIOCHEMICAL》を摘発して、上層部総取替えに追い込んだからだよ」

「は? 父親って、あいつは母子家庭ですが」

これは、教師達の会話を漏れ聞いて知った事である。

だが、それに対して、二人はあっさりところ答えた。

「おお、血は繋がっちゃいないよ。」

でも、それお前、滝の親父さんに言ったらぶん投げられるじゃ利かねえぞ、あの人は俺達だって息子だって笑うんだからな」

「色々事情があつて、警察辞めて《ホークアイ・ホールディングス》の会長秘書やつてたんだけど、あまりに祥吾に対するあれこれが酷いつてんで、日本警察に協力要請して、《AKASHI-BIOCHEMICAL》の調査してついでに色々ぶっこ抜いたらしいからな」

「はあ!？」

「警察って言うか、父さんはアメリカFBIの捜査官で、ついでに言うとなんか辞めてませんよ、休職してる状態だから頻繁にFBIやICPOから協力要請受けるし、SPIRITS隊の人達が入りしてたんですから」

思わずと言った感じで口を挟んだ和成を、緑間はぼかんと言った顔で振り返る。

困ったように頭を掻く和成は、しかし弾かれたように顔を上げた。

「山の方から下りてくる、あれ、笠松さんと黄瀬、小堀さん、早川さん、後555!」

「マジか!？」

指差された方を振り仰げば、確かにきつい斜面を転がるような勢いで駆け下りる、ジャージの集団が見えた。

そして、彼らの背後を守るように、後ろを気にしながら走る強化服の人物が続いていた。

同じ頃。

黛千尋こと仮面ライダーキバは、キバット五世にフエッスルを吹かせていた。

「ウェイク・アップ!」

右脚を高く振り上げた、キバの右脚の鎖（カテナ）をキバットが断ち切つてそこに封じている『ヘルズゲート』を完全開放し、そしてそのまま天高く飛び上がる。

不思議な事に、青空が瞬く間に夜空に変わり、そのまま宙で釣り下がるように体勢を整えたキバは、一気に鰐型怪人へと蹴りを放つ。

恐ろしいほど巨大な三日月から飛来する、キバの蹴り技——ダークネスムーンブレイクは岩を抉りながら怪人を捕らえた。

ぎゃああああああああああああ!!

一気にステンドグラスを思わせる結晶体に変わったクロコダイルフアンガイアは、その直後に粉々に砕け散った。

それを見届けると、はあつと息を吐きながら千尋は魔皇甲冑を脱いだ。

再び広がった青空の下、彼の頭上をひらひらと舞う見た目はどう見ても玩具にしか見えないキバットの姿に、葉山小太郎ははしやぎ、根部谷永吉の方はぼかんと見詰めている。

実淵玲央の方はと言えば、影の薄い、しかし妙にキラクターが濃い先輩の知られざる一面と言うものを見て、言葉に詰まった様子だった。

そして、赤司征十郎は思い切って千尋に話し掛けた。

「黛先輩、あの、」

「移動するぞ、ここに居たって何にもならない。」

出来れば、何処かの学校、そうだな、せめて陽泉か海常、秀徳と合流するぞ」

だが、埃を払うと千尋は赤司が何か言う前にそう言って踵を返した。

その背中を、慌てて高校生達は追い駆ける。

「黛さん!」

「あ、おい、待ってくれよ」

「ちよつと、そんな急に」

「ぼおつとしていたら、またあいつらが来るぞ。」

残念だが、これは組織立った犯罪で、おそらくこの島自体奴らの領域（テリトリー）だ。俺一人連戦していたんじゃ、何れお前らに怪我をさせる事になる。俺としても、それは避けたいからな。

陽泉と海常、秀徳には俺と同じ仮面ライダーが居る。そいつらと共

闘出来れば、少しはましになる」

千尋の言葉に、二年生達は顔を見合わせる。

その言葉に、赤司はこう切り出した。

「戦力増強なら、ここに追加戦力があります。

おれも」

「止める！」

振り返って言葉を遮った、千尋の声に赤司も二年生達も驚いたように眼を見張った。

咄嗟に声を張り上げてしまった事に舌打ちし、千尋は額を押さえつつ言葉を選んだ。

「あー……、誤解するな、お前に戦うとかじゃなくて、それを使うのは止めておけて事だ」

「どう言う事ですか？」

これは、仮面ライダーの所謂ベルトなんでしよう？」

訝しそうに聞き返した一年生に、千尋は大きく溜息を吐きながらその手の中にある戦極ドライバーを指差し、こう続けた。

「そいつな、俺の直感がびりびり警報を発するんだよ。

順辺りに見せれば、何か判ると思うんだが、とにかくそれは使うな。

何か、大きな地雷が埋設されている気がして、さつきから落ち着かないんだ」

そう言うと、千尋は再び歩き出す。

顔を見合わせた二年生は、慌ててその背を追い駆け、赤司もやや不満を感じつつそれに続いた。

その、千尋の言葉を、肯定するかのような光景が、程なく五人の視界に飛び込んで来た。

黒い騎士のような姿の人物——仮面ライダービーストに襲い掛かる、髑髏と翼竜と鎧を組み合わせたような怪人と、バナナのような装飾と装甲を纏った人物を目撃したのだ。

「氷室——！」

「室ちゃんっ!?!」

「氷室、何で福井に襲い掛かってるあるかー!!」

「H A H A H A、強い奴が居るなら、戦うのは当然じゃないか。

さあ、福井さん、Come On！」

「カモンじゃねえよ、馬鹿野郎！畜生、こんな仕込がされてたなんて」

繰り返されるバナスピアーを避けつつ、それでも雑魚敵をダイスサーベルで切り払う福井健介事仮面ライダービーストを眺めて、骸骨と翼竜の骨で作られたようなファントム・レギオンは手を叩いて笑い転げる。

「いいねえ、実に良い感じに染まってくれた。

中々のコンプレックス持ちだったみたいだなあ、ああ楽しい」

「何の事じゃい、お前さん、何を知っとなんじゃ！」

岡村建一の声に、レギオンはくつくつと笑ってこう返した。

「だからあ、その戦極ドライバーには大シヨッカーの科学者とやらがちよつと手を加えていて、ヘルヘイムの果实に込められた悪徳をストレートに装着者に流し込むようになってるらしいんだよね。

その結果、装着者の中の不平不満コンプレックスを煽って、暴力的になるんだとさ」

「何じゃそりゃあ!？」

「いや、それただの日常」

「それはともかく、室ちんどうせならそつちの骸骨襲えし、福ちん殴つてどうすんの！」

頭を抱える上級生と、呆れるのを通り越して投げやりになった一年生エースの声に、しかし『エレガントヤンキー』とあだ名される二年生の方は、まるでその声が聞こえないようにスピアーで標的とした相手を追い回す。

三メートル程の崖の上から、その光景を目にして呆然とする洛山高校の面々を横目に、千尋はやはりと溜息を吐く。

「そう言う事か。どおりでぴりぴりすると思つたら。

察するところ、健介の奴が警告する前に、装着したな陽泉の二年S Gは」

「ま、黛さん」

表情こそ動かないものの、苦々しげにそう言うと、千尋はあたふたと頭上で飛び回る己の後見人でもある蝙蝠型の魔物を掴んだ。

「わ!? 千尋!?! (# 。 ㇿ) ゴルア!!」

「変身」

「黛先輩!」

再び魔皇甲冑(キバの鎧)を纏うと、千尋は一気に崖を飛び降りレギオンを殴ると見せ掛けた。

乱入者にレギオンが身を翻すと、それを良い事に怪人をスルーした仮面ライダーキバは、更に氷室辰也の横をすり抜けビーストの傍へ移った。

「ビースト!」

「キバ!」

そつちは大丈夫かよ」

「一応全員連れて来てる。

この頭に血が上ったのは引き受ける、お前はファントムを倒せ!」
「おう、ありがとよ!」

ぱんつと、小気味良い音を立ててタッチすると、キバは繰り出されたバナスパアーを掴み、ビーストはまだ態勢が崩れたままの骸骨怪人へと、ダイスサーベルを構えて突っ込んで行った。

海常と秀徳、洛山と陽泉が合流した丁度その頃、フクロウヤミーと火神大我こと仮面ライダーオーズの戦いもやっと決着が付こうとしていた。

オースキャナーを滑らせ、オーズは必殺技の体勢に入る。

SCANNINGCHARGE!

「おおらあああああ!」

バツタレックで高く飛び上がり宙空に生じた三つの『輪』を突き抜け、オーズは両足を揃えたキックをヤミーの胴体に叩き込んだ。

甲高い悲鳴を残し、フクロウヤミーは爆発した。その後には、チャラチャラと数十枚の鈍色のメダルが残った。

最後のダスタードを切り捨て、振り返った日向順平が見たものは、

変身を解いてそこにへたり込む大柄な一年エースと、先程まで宙に浮いていた『腕』を右手に着け、水色の髪に鮮やかな赤いメツシユを入れたもう一人のエースが、せつせとメダルを拾い集めているのを他の仲間達が呆然と眺めていると言う光景であった。

「何だ、これ」

「黒子？」

「ふん、まあまあか。俺以外の奴が、俺のセルメダルを使って作ったんだろうから、こんなものだろうな」

周囲に目もくれず、メダルを拾い続ける黒子テツヤである筈の相手に、上級生達がおずおずと声を掛けようとした、その時だった。

立ち上がった大我が、おもむろに黒子(?)の頭を片手で掴み、ぎりぎり握力を込めた。

「いででで、この野郎、痛いって」

「何やってんだよ、腕野郎！」

何で黒子に取り憑いてんだよ、あれか、お前が取り憑いてる間は生きてるとか、そう言う話かこの野郎！」

「その通りだよ、文句あるか、て言うか俺を腕と呼ぶんじゃねえ！」

俺はレイヴ！」

鳥系グリードのレイヴ様だ！」

「威張るんじゃねえよ、てか鴉(Raven)なのに赤いのかよ！」

「レイブンじゃねえ、レイヴだ！」

「やかましい！二人とも黙りやがれ、このダアホ共！」

そう言うのと、変身を解いた順平が二人の頭に拳を入れた。

大小二人のエースが、頭を押さえて痛みに呻く間に、事態を把握しきれず立ち尽くすしかなかった他の部員達が、三々五々集まって来た。

全員居る事を確認すると、頭を搔きつつ順平は監督を務める幼馴染みに向き直った。

「カントク、取り敢えず移動しよう。」

「ここじゃまた奴らが来ないとも限らない」

「それはそうだけど、彼をどうするの？」

相田リコが、困惑を隠し切れずに指差すのは、当然先程まで致命的な負傷をし、意識も無かった筈の後輩である。

それに向かつて、答えたのは痛みから立ち直った大我の方である。「大丈夫つす、こいつが取り憑いてる間はこいつが黒子を守る筈つす。そういう約束だからなあ、おい」

「つてえな、判ってるよ、その代わり、お前もメダル集め、手伝えよな」
「メダル吐き出す奴が居たら、そいつを優先的に倒せば文句無いだろう」

溜息混じり、ついでに黒子@レイヴの頭を撫でくり倒しながらの大我の言葉に、仲間達は顔を見合わせた。何と云うか、以前と印象が違う気がするのだ。

だが、それを追求する前に、外した戦極ドライバーを見ていた順平が何かに気付いた様子で声を上げた。

「こいつ」

それは、ドライバーの底辺に貼り付けられた、一見何かのシールのようだった。

だが、それがこのドライバーに取り付けたロックシード、或いはロックシードを生み出した『ヘルヘイムの木』——順平は、その名をまだ知らないが——に籠っていただろう悪想念、邪念、悪意と言ったものを増幅していたらしい事は察しが付いた。

何より、1センチ×2センチくらいのそのシールに描かれた、翼を広げた鷲が菱形っぽく描かれた地球儀に停まっていると言う凶案に、不吉さしか感じられない。

「おい、おっさん、これつてあれ、居ない?」

「主将?」

何すか、このシール。鷲のマーク? 大正製薬つすか?」

そう言うと、横から覗き込んだ大我がそのシールをぺりつと剥がした。

次の瞬間、パシユツと音を立ててそのシールは爆ぜた。

「わちちっ」

「大丈夫なの、火神君」

熱で手を振る大我に、慌てて相田リコが手当てをする。

後輩の無謀な行動に頭を抑えつつ、だがあのシールを剥がすと先程までの嫌な感じが消えた事から、あれを剥がせば暫くは問題が無いだろうと踏んだ順平は、取り敢えず外したドライバーを副主将である伊月俊が抱えていた自身のポストンバッグに突っ込んだ。

「日向、それ」

「また、奴らに襲われた時用だ。」

黒子以外は、怪我してないな？ 移動するぞ」

「移動って、何処行くのさ、日向！」

そう聞いてきた小金井慎二に、順平は山の方を指差した。

「山越えして、港まで行く。」

上手くすれば、夕方には救助隊が港に来ると思うし、最悪港にあった船を奪って脱出して手もある」

その言葉に、部員達は顔を見合わせる。

だが、先程の事を思えば、このまま留まる事は無理だと思う。

その為、皆言葉少なく歩き出した。

だが、一〇分程進んだところで誠凛高校の一同は、崖上からもつれ合って落ちて来る枯れ葉色とライトグリーンの固まりに行き当たった。

「「「うわわっ!?!」」」」

「仮面ライダー!?!」

部員達が驚き竦む中、枯れ葉色の飛蝗の怪人を蹴り上げたライトグリーン存在に、福田寛が声を上げた。

そして、一瞬で跳ね起き、必殺の体勢に入った仮面ライダーHOPPERの姿に、目を見開き大我は前に出た。

<HOPPER>! MAXIMUMDRIVE!!

「ガアアアアアアア!!」

「往生しろや、小母さん」

飛び掛かって来た飛蝗女に、仮面ライダーは短いスイングからの回し蹴りをその太股へと放った。

硬質な外骨格に、余りダメージを与えられないように見えたその蹴

りは、実は発砲を乗せて放たれていた。

結果、寧ろ固さがホッパードーパントの命取りとなり、彼女の内腿にあった生体コネクタは剽によって吹き飛び同時に吐き出されたT—Oメモリをライダーが受け止め、そのまま握り潰した。

「き、きさ、ま」

「ふん、過剰適応もメモリ中毒にも陥ってなかったか。

ひでえ話だ、冬に中毒になった嬢ちゃん、まだ通院してるそうだけ。悪いと思わねえのか？

ああ、思わないから、こんな物売り歩くんだったな」

変身が解け、強制解除の反動で動けないゴスロリスタイルの二〇代であろう女にそう嘯（うそぶ）くと、凍り付いたようにこちらをみる誠凛高校一同に気が付いた。

つい、動きを止めた部員達の中で、のっそりと動いたのは大我だった。

止める間もなく、HOPPERの前に立った大我は、あつと言う間にロストドライバーのメモリスロットを閉じてメモリを抜いた。

そして現れた、驚きで引き吊っている灰崎祥吾の顔を両手で包んでこう言った。

「祥、何時こんなに背伸びた？」

次の瞬間、大我のツートンカラーの頭にヘッドバットをお見舞いした祥吾を、周囲の人間は誰も止められなかった。

思わぬ『兄弟喧嘩』が勃発したちょうどその頃。

蜘蛛男、蝙蝠男と仮面ライダーアギト、クウガの戦いも終わろうとしていた。

「ふうん、異時空移動して、侵略ね、良い迷惑だった！」

「ぐお!？」

「そして、ショッカー怪人の反応を拾って、ここに来て、自分達に協力しろと言う事か。

何処から情報貰ったか見当付いてるけど、早合点が過ぎるな」

「ぐはー!」

アギトとクウガの容赦のない拳に、怪人達は焦りを隠せない。

彼らからすれば、『改造人間ではない』仮面ライダーもどきと、二人を侮っていた節は確かにあった。

だが、それ以上に彼らが見誤っていたのは彼らの戦歴と、それに伴う経験値である。

二人が戦って来たのは、グロンギとアンノウンだけではない。

イマジン、オルフェノク、ファンガイア、レジエンドルガ、最近ではゾディアーツにファントム、ドーパントまで、この三年足らずのうちには現在確認されている『未確認生命体』と総括されている存在全てと戦い勝利した二人を、「たかが人間」と舐めて掛かった二人の、そして大シヨツカーの失敗である。

「高校生を捕まえたのは何だ、若い労働力か？ あ？」

「は、四〇人程の餓鬼共で何の足しになる。」

あいつらは実験体だ、別の時空で手に入れた『Armored Rider』システムのな！」

「《スマートブレイン》社や財団X、寄生先は色々あつただろうに、何で《ホークアイ・ホールディングス》を狙う？」

拠点として乗っ取る為か？」

「寄生？ 馬鹿を言うな、我々の拠点はきちんとある、小島に偽装した立派なものかな！」

その言葉に、ライダー同士がアイコンタクトを取った事に、怪人達は気付かなかった。

次の瞬間、背中合わせになったアギトとクウガは、身を翻して相手取っていた怪人を入れ替えた。

あつと思つた時には、二人の放った鋭い蹴りが、二体のベルトに食い込んだ。

ぎゃああああ!!

うがああああ!!

二体は、悲鳴を残して爆発した。

変身を解いたクウガ——一文字空は、同じく素顔に戻ったアギト——滝海斗に向き直った。

「嫌過ぎる内容だな、まさかあの合宿を大シヨツカーとか言う連中が企画したなんて」

「それより俺は、蜘蛛男の言った『Armored Rider』と言うものが気になるな。」

察するところ、人間で尚且つある程度の身体能力を求められると言う事か。随分な連中だな」

そう話しているところで、《ホークアイ・ホールディングス》日本支社東京総本部の社屋ビルに避難していたアラン・ホークアイが二人の前に歩いて来た。

二人を労わりつつ、元シヨツカー大幹部は二人から聞いた情報に眉を顰めた。

「時空移動も然(さ)る事ながら、別時空で手に入れたガジェットのテストねえ。」

つまり、子供達を集めた『勝義島』とやらが、彼らの拠点と言う事だね。まあ、何か引つ掛かるネーミングの島だと思えば、そう言う事かい」

「急いで島に向かった方が良いと思います。確か、祥吾も大我の忘れ物を届けに行つて、朝になってから戻る予定になっていましたが」

海斗がそう答えた時だった。

配達用のスクーターで、物凄い勢いで走つて来た。

そこに乗っているのは、小料理屋『TOKIO』の板前である松坂昌樹だった。

「会長、それに海斗、空、大変だ、祥ちゃん達と連絡が付かない！」

「松坂さん!？」

急ブレーキを掛けて停まった松坂は、朝、食事が終わった辺りから店長である上嶋繁と山崎達弥とが何度も電話を掛けたのにずっと『電波が届かないか電源が入っていない』とアナウンスされ、最後にはシヨツカフォンを使ったのにも拘らず連絡が付かなかつたのだと伝えた。

その報告に、ホークアイ会長は秘書達に向き直った。

「夏川君、《王女》、至急当社所有の大型クルーザー二隻の出港準備を。」

子供達を保護する為、医療部にも連絡してくれ。松坂君、炊き出しの為山咲君と国府田君にこちらへ来るよう伝えてくれたまえ」

「判りました」

「任せて！」

そう言うと、秘書の男女は走って行った。

「海斗君、空君、準備が出来次第クルーザーで現地に向かってくれるかね？」

「はい！」

「当然！」

頷いた二人に頷き返し、アラン・ホークアイはビルへと向かった。連絡を入れる先は、山のようにあるからだ。

突発的に始まった、『兄弟』喧嘩から一〇分後。

「落ち着いたか、ダアホ共」

「へい」

灰崎祥吾と火神大我の二人は、誠凜高校主将日向順平の拳骨を喰らい、揃って草の上で正座していた。

その頃には、崖の上から桐皇学園の面々も降りて来ており、『仮面ライダーHOPPER』の正体にそれぞれ驚いていた。

まあ、純粹に驚いていた先輩同輩の中、狐に摘まれたような面差しで祥吾を見ていたのは、中学時代の同級生である桃井さつきだ。

かつて、何だかんだ言いつつ女子マネージャー達に親切だった祥吾を知りつつも、他校の不良に絡まれていた彼を見た事があり、また主将である赤司征十郎からの接触禁止を受け、彼から距離を置いていた桃井は一番複雑な思いを抱えていた。

また、情報戦を得意と自負していた彼女にとって、祥吾が仮面ライダーをしているなどと言う情報は欠片も拾った事が無く、それがまた彼女の困惑を深めていた。

その横で、青峰大輝は並んで他行の主将に説教されるかつてのチームメイトと現状で最高のライバルの姿に、名状しがたいもやつと感を抱えていた。

正直言つて、中学時代は一番自分に近い位置にいただろう灰崎と言う男と、ライバルである火神大我が仲が良いと言うだけで、何処か苛立つものを感じるのだ。

そんな、元同級生の思いを知ってか知らずか、祥吾はやつと自分を認識するようになった幼馴染みに笑顔を向けた。

「取り敢えず、良かったよ。火神のおじさんや、兄ちゃん達にも、後で知らせなきゃ」

「あー、うん。でも今は勝義島だっけ？」

「ここから脱出するのが先だよなあ。黒子も幾らレイヴが身体維持してるとは言え、早く病院に担ぎ込まなきゃだし」

「え？」

聞き返した祥吾は、大我が指差した方を見て思いつ切り吹き出した。

釣られて、そちらを見た青峰と桃井、そして桐皇バスケット部の面々は、そこで面倒臭そうに彼らを見る水色の頭に赤いメッシュが入った赤い瞳の少年に気が付いた。

「え？」

「テツ？」

「ああ？ 何だ手前ら、この身体の関係者か？」

これまで聞いた事も無い、粗い言葉を吐く『黒子テツヤ』に青峰と桃井が顔を引き攣らせた次の瞬間、その後頭部を容赦なく大我は張り倒す。

その行動に、驚く人々の前で二人の罵り合いが始まる。

「お前、もう少し目立たないように出来ねえのか、本当に！」

「うるせえな、俺の勝手だろうが！」

「カラスだからって大人しくしてろ、うるちよろしてたって、メダルなんか落ちてねえから！」

「だから俺様は鴉じゃねえって言ってんだろうが！」

「だからお前らは静かに出来ねえのか！ こんのダブルダアホ共！」

「うぎやー！」

「ぐがー！」

再びの拳骨に、凸凹コンビが沈没する横で、日向順平は桐皇の面々に頭を下げた。

殴られた場所をさすってやりつつ、祥吾が仕方が無いと言いたげに溜息を吐く。

「そう言えば、お前は順平兄ちゃんとは学校の先輩後輩としての付き合いしかないんだよな。」

兄ちゃん、うちでも指折りの鉄拳制裁派だし」

「え、ええっと、灰崎、は、キャプテンと知り合い、なの？」

そのやり取りに、おずおずと口を挟んだ誠凜一年の問いに、少し考えた後祥吾は順平の方を見た。

その視線に気付くと、本当に言い辛そうに順平は、自分と仮面ライダーとの関係をばらす事にした。

言い辛いのは勿論、昔の誘拐事件をあまり詳しく言いたくないからだが。

「あー、昔、な。犯罪事件に巻き込まれて、怪我した事があつただけど、その時助けてくれた人の義理の息子が灰崎で、その幼馴染が火神なんだそうさ。しよ、灰崎は、治療中に何度か会いに来てくれてな。

まあ、俺は火神とは面識無かつたんだ、こいつがアメリカに住んでいた頃の話だから」

「父ちゃんは、世界中で犯罪組織ぶっ壊して歩いたついでに、そいつらの所為で身寄り亡くしてる子供を大勢引き取ってるからなあ。

单身攫われた順平兄ちゃんは、レアなケースだつて兄ちゃん達言つてたし」

祥吾の言葉に、福田寛と桜井良の目の色が変わった。

彼らにしてみれば、そんな犯罪組織を粉碎して歩くような人間など、一人しか思い当たらなかつたからだ。

「あ、あの、日向さん、灰崎君、まさかと思うんですが、その、お父さんってまさか」

「疾風の都市伝説、十一人目の仮面ライダー、ですか？」

「あ？ 骸骨ライダー(Skull-Rider)つて祥の父ちゃんの異名だろ？」

USAじゃ『東海岸の百舌(Shrike of East Coast)』の方が、通りが良いらしいけどさ」

さらつと、大我の投げ込んだ爆弾にライダーファン二人が座り込む。

そして、普段糸目の今吉翔一が思わず目を開いて聞き返す。

「つまり、SPIRIS隊総隊長滝和也の、関係者なんかお前ら」「ういっす」

間髪入れずの返事に、今吉は思わず天を仰いだ。

何だかんだと言って、仮面ライダーに助けられた過去から少年仮面ライダー隊に所属し、BADAN戦役の折には仲間と一緒に被災者救

援に走り回り、それが縁で母と結婚したなどと言う経歴を持つ父が聞けば、どんな騒ぎになるか判ったものではない。

それ以上に、事態を知らなかったらしい誠凜桐皇両校の生徒達が、話題に置き去りにされてぼかんとまっているのに向かつて、引き攣るこめかみを押さえつつ今吉は声を張り上げ、後輩一同に移動する事を告げた。

「詳しい事は、安全圏に移動してから質問大会と行こうや。」

ここから動くで、さっきの飛蝗の怪人だったケバイおぼはんみたいなんがまた来られても困るし、他の学校の連中の事も気になるしな」

「ちよ、ちよつと待って下さい、今吉先輩。」

テツ君がこんな状態なのに、そんな訳の判らない状態で動くなんて」

金切り声で、三年生の言葉を遮ったのは桃井だった。

それに向かつて、宥めようと声を掛けたのは相田リコである。

現状として、事態に理解が追いついていないのは彼女も一緒だが、バスケット監督として部員を無事脱出させる事を第一義としている彼女は、足並みを乱そうとしている一年生を落ち着かせようとしたのだ。

「それらも含めて、安全な場所に行こうと言っているのよ、落ち着きなさい」

「第一、仮面ライダーが何だって言うんですか、学校じゃ不良だったくせに、学校の外で喧嘩ばかりしていたくせに、私達は何の関係もないじゃないですか！」

「馬鹿だなあ、関係ないのはその眼鏡やこっちの白い連中で、お前とそこの青黒いのは元凶じゃねえか、履き違えるなよ女」

「おい、レイヴー！」

だが、そんな彼女を言葉で張り倒したのは、彼女の思い人の姿をした赤い鴉だった。

レイヴは大我を顎で示すと、小馬鹿にしたような声でこう言い放った。

「俺は、こいつを探す間に、あの珍妙な連中が話しているのを聞いたか

らな。

『キセキの世代』なら、『Armored Rider』システムに適合するだろう。勝つ筈の消化試合に負けて、良い感じに歪んでいる筈の子供だ、ちよつと突いてやれば簡単にこちら側に転がるだろうだし。

上手く行けば、そいつらの学校仲間の中にも、不平不満を抱えた良い素体がいるかもしれないな。

で？ お前は『キセキの世代』に巻き込まれた他の人間に何を、ガフ!？」

皆まで言う前に、ほっそい体が吹っ飛んだ。

ぎよつとなつた周囲の中、事態を察したのは祥吾と大我の二人だけだった。

「マジか、テツヤの奴、自分にイグナイトかましやがった」

「何つうか、まさか心臓に刃物刺さった身体でやるとは思わなかったなあ。

おい、大丈夫かよ、黒子」

「……事態を把握しようと思って黙って聞いていれば、女の人に向かって何言っているんですか、このカラスは」

ぎりぎり顔を持ち上げたのは、何時もの水色の髪に瞳の、黒子テツヤであった。

だが、パチツと瞬きした途端、髪に一房赤いメッシュが走り、盛大に眉を顰めてレイヴが立ち上がる。

「まったく、精神力だけは褒めてやるが、人が生命力底上げして傷塞いでる状態だったのに、死ぬ気かこいつ。

一瞬落ちた所為で、皮膚の下で傷が開くところだったぜ」

「おいレイヴ、黒子は？」

「ああ？」

宿主なら、気絶したよ。死に掛けてた癖に、あんなボディブロウ放つは喰らうはで、二重の意味で余力使い果たしやがって」

「あー、テツヤらしいけど、おいマジか」

「死なせはしないから安心しろ、俺は義理堅いんだ」

「これっぽっちも信用出来ないけど、ちゃんと守れよ、黒子の事」

呆然としているさつきに向かって、メッシュ入りの水色頭を軽く叩いた大我は改めて向き直った。

「事態が判らなくて、顔見知りには八つ当たりしたいんだろうってのは判るが、今は我慢してくれねえか？」

俺もキャップも、戦力としては二の線で、経験値って意味では祥しか頼れないんだ。

こんな何が起こるか判らないところで、怪人に怯えながら現状の不安に当たり散らすのは唯の自殺行為だと思っただが、桃井はそう思わねえのか？」

「え、あ……」

「おい、火神、戦力って」

「あ？ 何だ、青峰、お前もキャプテンと同じもの持つてんのか」

思い切って話し掛けようとした青峰の、手の中にあるマンガローックシードと戦極ドライバーに気付いて、大我はドライバーをひっくり返し、順平のものと同じところに貼られたシールに眉を顰めて見せた。

ライバルとと思っている男の、青峰には良く判らない行動にいらつとなり、取り返そうとしたその手の先から更に取り上げたのは祥吾だった。

「こいつ、ドライバーだな」

「あ、祥、そのシール剥がしてくれ、キャプテンも剥がしてたから」

「これ……。なるほど、ショッカーの派生組織だから鷲のマーク、ね。趣味悪いぜつと」

ビツと剥ぐと、順平の時と同じく、パシユツとシールは爆ぜる。

グローブ故に火傷はしなかったが、手の中で瘤癩玉よろしく爆発したシールに、祥吾は更に眉を顰めた。

「嫌な感じだなあ、自爆かよ」

「キャプテンが言うには、こいつの所為でこの錠前みたいなのから普通より強い悪意とか毒電波みたいなの？」

そう言うのが出て、ウォーモンガーとか破壊魔？ そう言うのにな

るみたいだぜ」

大我の言葉に、真顔になったのは上級生達だ。

「ほんまか、日向」

「確証はありません、でも明らかに後付されたシールに見えましたし、さつき見掛けた奴の話しぶりだと、このドライバー自体はこことは異なる世界から持ち込まれたものらしいので」

そう言うのと、順平はちらりと祥吾を見た。

「それこそ安全を確保出来れば、祥、いや灰崎の持っている機材で簡単にですが解析して貰えるんですが」

「灰崎が？」

周囲の視線に、順平はどう言葉を繋げたものかと言葉に詰まる。

それに答えたのは、当の祥吾だった。

ロストドライバーから抜いていた、T-1《HOPPER》メモリを掲げて見せながら、こう自己紹介をした。

「あー、どうせ、後で判る事つすから、白状しときます。

俺は、警視庁対未確認生命体対策班通称《S・A・U・L》の民間協力者の一人で、世間で《仮面ライダーHOPPER》と呼称される『対ドールパント特命捜査官』と言う肩書き持ちです。尤も、これでもキヤリア三年なもんで、《未確認》と付く相手には大抵駆り出されてんですがね。

俺が使っているガジェットが、このガイアメモリって奴なんですけどね、こいつはメモリ一つ一つに『地球の記憶』って物が納められているんですよ。この中の、《COMPUSER》や《BOOK》を使えば、ちよつとした研究所で調べる程度の事なら一〇分程で判ります。

ただ、精度を求められると、やっぱりそれなりに解析時間が欲しいんで、三〇分絶対安全な箇所ですって条件を付けさせて下さい」

「そんな事が出来るのか？」

「俺は、《クウガ》や《アギト》と違って、ガジェットありきのライダーです、基本的に持っているT-1メモリの内容によりますが応用が利くんすよ」

桐皇三年生にそう答えると、祥吾は困ったように桃井の方を見た。

「俺の事、調べてもライダーだって判らなかつたって？」

そりゃあ、俺も曲りなりに警察関係者に数えられるし、《S. A. U. L》側ではライダーの素性は秘匿情報になるからな。

俺や他のライダーに関する情報は、専用回線からのアクセス以外じゃ弾かれるようになってるらしいから、一般人のサツキちゃんやセイジューローが調べても、何も出てこなかったと思うよ」

「あ」

「あー、梓小母さんを引き抜こうとした製薬会社が、お前を誘拐する為に近隣の不良窟（けしか）けてお前を学校から追い出そうとしたと言

う。
確か事態を知った小父さんが、日本警察に自力で捜査した事と犯人一ダースほど引つ括って持ち込んで、そのまま上層部総入れ替えに持ち込んだあの騒ぎか」

祥吾の言葉に、桃井と青峰があつとなつたその横で、あの当時の騒ぎを思い出し順平が額を押さえる。

その内容に、『滝和也』を知る三人が「あー」と思う。
それに向かつて、リコは手を叩いて意識を現実に戻した。

「ほらほら、移動しましょう、そうじゃなくても大人数なんですもの、こんな狭い道でまたあんな連中とぶつかったら怪我人が出ちゃうでしよー！」

「せやな、ほれ皆、動くで」

リコに続いて今吉も号令を出した為、学生達は漸く歩き出した。

山道を、港があるだろう方向へ歩き始めて二〇分程経った頃だろうか。

緩やかな下り道から、十一人の学生達が上がって来るのを伊月俊が見出した。

「日向、海常と秀徳が上がってくる！」

「え!？」

それを聞いて、祥吾は複雑そうな表情で列の後ろに回ろうとしたが、その腕を大我が掴んだ。

黄瀬涼太が皆まで言う前に、その身長との対比で更に彼を高く見せる小さな頭を、宮地清志が音を立てんばかりに握り込む。

それに向かつて、額を押さえた三年生が口を開くより先に、庇うつもりらしい中村真也が静止しようとする声を掛ける。

「キヨ先輩、一応これはうちの人員ですから、こっちに渡して下さい」
「ああ？」

こう言うのは口だけじゃ判らんとと思うぞ、真也」

「判ってますよ、あれだけ散々笠松先輩にしばかれて怒られても、部員以外には終ぞ改める気が無かったようですから。

ですが、来年度からは俺と早川と二人でチームを率いる立場になりますから、これからは他のチームの人間に突進したりさせないよう、徹底的に躡けますから」

「あれ？ 何か俺に死亡フラグが立った!？」

立てた親指を、びつと下に向けた真也の発言に黄瀬は蒼褪め、学校の先輩と同輩はおおっと感嘆の声を上げる。

だが、頭の痛みに握られた場所を摩りつつも、問題児（きせ）は祥吾に噛み付く事を止めようとしなない。

「大体、シヨーゴ君は合宿参加者じゃ無いっすよ！

それなのに何でこんな所にいるんすか！」

「ああ、黄瀬、それ、俺の所為。忘れ物持って来て貰ったんだ。

て言うか、もしかして真兄ちゃんにきー兄ちゃんにゆー兄ちゃん!?
うわ、俺本気で記憶おかしかったんだ!？」

だが、黄瀬にあつさりとそう言った大我は、そこに立つ面子の中から昔馴染みの顔を見出し、ツートンカラーな頭髪を思いつ切り掻き混ぜた。

190センチの大柄な優勝校のエースの反応に、はあ？ つとなる面々の中で、宮地裕也が大我に近付き、思いつ切りその頭をもしやぐった。

「こんの馬鹿野郎、やっと思い出したか。この三年間、こっちがどんな気持ちでいたと思ってるやがる！」

「あ、裕也手前、抜け駆け！」

そう言うなり、黄瀬を棄てた清志も、大我の頭をもさもさと撫で始める。

小学校二年までの極短い間ではあったが、星心大輪拳と赤心少林拳の交流試合の際、赤心のエースと言われた三人に弟として愛されていた大我の事を、宮地兄弟も可愛がっていたのだ。

ストレスなのか、高速で眼鏡のブリッジを上げ下げする某『キセキの世代』の攻城兵器と、他校上級生のその行動にぼかんとする黄色いモデル、先程からのアップダウンの激し過ぎる状況に付いて来れていない事が丸出しの各校の面々が見詰める中、眼鏡を掛け直した中村真也がぼんと大我の胸を叩いた。

「そうか、俺達が判るか。」

「……やつと言えるなあ。お帰り、大我」

「おう、こんな時に言う事でも無いと思うけど、ただいま、兄ちゃん」
「全くだ、何暢気に挨拶してやがる。」

この島から逃げんじゃねえのか、余裕か？」

ぶつきらぼうでくれた物言いに、「あん？」っと、振り返った宮路兄弟を初めとした上級生集団が見た先には、水色の髪に赤いメッシュを入れた黒子テツヤ（ ）が、つまらなさそうに足をぶらつかせて木の枝に座っている光景だった。

その光景に、誰かと言う誰何の声より、元同中の疑問の声より、一際大きな声で警告を出したのは和成だった。

「キバとビーストが戦って……あれ？」

これ、仮面ライダー？ 何でキバとビーストに襲い掛かってんの!?」

「高尾!？」

打って変わった、あせりまくった和成の声に、戸惑う面子の中で何人かが表情を険しくする。

「キバとビースト、ってことは洛山と陽泉だな」

「もしかすると、こいつを使った誰かが、暴走しちまつてるんじゃないかな」

唸った真也に、バッグに突っ込んでいた戦極ドライバーを取り出し

てこう言ったのは順平だ。

その言葉に、同じものを後輩が持っている他校の上級生達が、怪訝そうに順平を見る。

幼馴染みの警告に、先程の喧嘩の際に外していたロスドライバーとレモンイエローのメモリを手に、祥吾が少年達を振り返った。

「先輩方、俺、先行します。」

大人数になりますが、お願いします！」

「判った、気を付けて行けよ！」

清志の返答に頷き返すと、祥吾はドライバーを腰に巻き、手にしたメモリをコールさせた。

L I G H T N I N G !

「変身！」

頬に、雷をデザイン化したらしいラインが隈取のように入ったかと思うと、その全身をペールイエローの強化服が覆う。

その姿を、同中組がぽかんと眺める中、仮面ライダーは《L I G H T N I N G》メモリの力で、和成の指し示した方へと一気に突進した。その後ろで、大我がメダルドライバーを片手に、レイヴにもう片方の手を差し出していた。

「レイヴ、メダル！」

「本気か？ 逃げた方が良くないか？」

「メダル出す奴がいるかもしれないぞ？」

「はあ、まあ、いいか。無くすなよ」

ポンッと、投げ渡された三色のメダルをドライバーに差し込み、「変身！」っと、大我はスキヤナーを滑らせた。

タカ！ トラ！ バッタ！

タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ！！

突然の音声に、誠凜以外の学校の面々が振り返り、そして黒地に三原色が映える新たなライダーの出現に驚いた。

「は？ 何だ、こいつ」

「え？ まさか、大我？」

「こら、火神、お前！」

「多分、暴れてるのは辰也だと思う。祥にあいつの相手させるのは荷が重いと思うんで、行つてきます！」

そう言つて、姿勢を低くした大我（オーズ）の足が、バツタそのもののような形に変形する。と、思った次の瞬間、一気に数十メートルを一步で飛び越え、先行した仮面ライダーを追つて小さくなった。

ぽかんと、その姿を見送つた大半の生徒達の中で、曲がりなりにも『ライダー』の称号を背負つた面子の回復は早かつた。

「順、あれはどう言う事だ？」

「黛さんと福井さんが言つていた、火神の中の変な力つて奴です。確か、昨日祥吾が検索した何とかつて言う」

「ああ、『欲望のメダル』、か」

「どうも、黒子に取り憑いてる奴がそれに係わる存在らしいんですが。つて、あいつ、まさか火神を追つていったのか!？」

「日向、どうしよう、あいつはともかく、黒子は怪我してるのに!」

上級生へ説明している途中で、件の片腕怪人が憑依先の後輩共々いなくなっているのに気付いて、順平と副主将の伊月は蒼褪める。

額を押さえて唸つたのは少しのことで、次期主将と副主将である裕也と真也とが判断を下した。

「ここで雁首揃えてても仕方が無い、俺達も移動しよう」

「そうだな。人数は多いが、俺と清志さんとで警備しよう。カズ、一旦休め、代わりにフードロイド達に警戒させろ。お前、逃げ出してからずっと《鷹の目（ホークアイ）》を最大範囲で使っているだろう」

「っ、はい」

真也の言葉に一瞬詰まった和成が、観念したように目を閉じると、そのまま手探りでスポーツバッグの中からハンバーガー型のギミックと、『6』とナンバリングされた何かのスイッチを取り出した。

目を閉じ、開く様子の無い和成を気にして、緑間がその横に近付いたのを見て、これは大坪泰介が元主将として声を掛けた。

「緑間、どうやら高尾は今まで無理をして広範囲を見続けていたらしい。」

目を開けられるようになるまで、暫く手を引いてやれ」

「！わ、かりました」

「え!?!」

「高尾、お前もだ、無理しやがって。今は目を閉じてろ、俺達がいるから」

「あ、あはは、ありがとうございます」

緑間の返事を受けての、木村信介の声掛けに礼を言うと、和成は手探りでギミックにスイッチを差し込み、起動させた。

ハンバーガー型フードロイド『バガミール』は、和成の手の中から飛び降りると自走形態に変形して、先行するように細い山道を進んでいく。

その後ろを、学生達はおっかなびっくり歩き始めた。

何人かは、事態に対応出来るよう、それぞれの変身ツールを片手に握り締めながら。

氷室辰也の振り回すバナスピアーは、本人の喧嘩センスと、素人ゆえの無軌道さで仮面ライダーキバ事黛千尋の手を焼かせていた。

「くそ、こいつっ」

「あはははは、どうした、殺す気で来いよー！」

「馬鹿言え、そんな事出来るかっての」

そう、氷室の方はキバを殺すつもりで襲い掛かっているが、千尋の方は氷室を取り押さえ、腰から戦極ドライバを奪う事が目的で、彼を痛めつけたり傷付けたりなど論外なのだ。

だと言うのに、ドライバの細工によって戦闘意欲が異常高揚している当人は、相手の気遣いにお構いなく嬉々として襲い掛かっているのだ。

その様子を横目に、骸骨鎧の怪人がケラケラ笑う。

「あはは、いいねえ、歪んでるねえ、楽しいねえ」

「何が楽しいんだよ、糞が！」

ファントム・レギオンの物言いに、わらわらと増えていくグールをダイスサーベルで叩き斬りながら仮面ライダービースト事福井健介が怒鳴り返す。

彼らの背後では、合流した洛山、陽泉両校の生徒達が、じりじりと間合いを詰めようとするグール達と睨み合っていた。

その時だった。

HOPPER!

頭上で響いた電子音声に、あつと思つた次の瞬間にはライトグールの何者かがグール達を着地の衝撃で跳ね飛ばしていた。

舞い上がった土埃から、腕で目を庇っていた赤司征十郎が見たものは、着地の姿勢から跳ね上がるようにして二体のグールを蹴り飛ばし、その反動で姿勢を取り直した骸骨にも飛蝗にも見える人物だった。

その姿に、真つ先に声を掛けたのは陽泉主将、岡村建一だった。

健介と一緒に、彼の東京にいる『家族』に何度か会いに行った事の

ある彼は、そこにいる『仮面ライダー』が『弟』の一人である事を知っていた。

「お前さん、『HOPPER』じゃろ？ どうしてここにおるんじや!」「岡村さん、詳しい事は後で!」

そう言うなり、仮面ライダーHOPPERこと灰崎祥吾はそこにいる中で一番小柄な赤司に掴み掛かろうとしていたグールを殴り飛ばし、ペールイエローのメモリをコールさせて腰のMAXIMUMSLOTに指し叩いた。

L I G H T N I N G ! M A X I M U M D R I V E !!

「親父から聞いた、『伝説』ストロンガーの技!

エレクトリック、ファイヤー!!」

HOPPERの声に、キバとビーストが慌てて相手を振り払い、宙へと飛び上がった。

二人の行動に、反応が遅れたレギオンと氷室、そしてグール達はその後足元から流れた高圧電撃に悲鳴を上げた。

HOPPERの殴りつけた地面から、彼の前面に向かって扇状に数十万ボルトの電撃が放たれたのだ。

湿り気のある赤土だった為に、電撃は地面を焼き焦がしながら地面に足を付けていた面々を襲った。

下級ファントムであるグール達は次々と崩れ落ち、元となる魔石の欠片も電撃に耐え切れずに砕けた。

勿論、自身の正面側へ扇状に電撃を走らせる為に、何十回と無く練習を繰り返した祥吾がいる。

「があああつ!」

この、舐めた真似を、人間風情が!」

「はん、力を手にしたと思つて、他の人間見下すと碌な事が無いんだぜ、元人間さんよ。」

こちらら特命捜査官三年目、奢り昂ぶつて地獄に落ちた奴を引き摺り上げて、やらかした事を償わせるのがお仕事でね!」

がちがちと、骸骨の顎を鳴らすレギオンに向かって、赤心少林拳の構えを取りつつHOPPERが笑う。

「あだだだ……。あ、でも辰也を抑えたから、まあ良いか」

「おい、その声、おま、大我!?!」

HOPPERの言葉に、オーズ事火神大我は片手を上げて見せた。そのオーズを己が背中から振り落とし、殺気を纏ってArmor d Riderが立ち上がる。

「Hey! 良い度胸だ、勿論殺り合うつもりで現れたんだよな？」

「さあ! さあさあ!」

「落ち着けよ、辰也!」

オーズは、がんと殴って突っ掛かろうとした兄貴分を止めると、徐に戦極ドライバーに手をやった。

開いていたロックスードを閉じて外すと、アーマーが外れ、変形しバナナ型に変わって天空の謎空間へと収容されていた。

それと、そのまま崩れ落ちた氷室とをぽかんと眺める少年達の前へ、何かが空中から叩き落された。

思ったより小柄なその存在に、ライダー達は身構えるが、最初にその正体に気付いたのはオーズだった。

「レイヴ!」

「くそがあ!」

オーズ事大我の声に応える事無く、跳ね起きたレイヴ@黒子は頭上を見上げ唸った。

釣られて見上げた少年達は、そこにいる黒くて黄色い存在に文字通り息を止めた。

洛山の生徒が降りて来たのとは逆の崖の上に、何者かが立っている。

黒っぽく見えるのは、肉体の大半を黒っぽい包帯のようなものに包まれているからだ。黄色く見えるのは山吹色の毛並みの所為で、その存在は地上にいるレイヴ@黒子を見据え、くつくつと喉を鳴らして笑った。

「やあ、レイヴ。久し振りに会うけど、何か劣化の限りを尽くしてるよねえ。まあ、コアメダル一枚じゃ、そんなものかね?」

「へ、お前だっつかすつかすに劣化してるじゃないか、リンク。察する

ところ、自身のコアメダルは二、三枚つて所だろうかよ」

見下した相手の言葉に、カチンと来たのだろう。

猫型グリードは、セルメダルを数枚取り出した。

「はん、またオーズと組むんだ？」

『前』みたいにまた裏切られるがいいよ、今度は腕すら残らないかもしれないけどさ！」

「リンクー！」

言い捨てて、リンクと呼ばれた猫型グリードはメダルを生徒に向かってばら撒き姿を消した。

追い駆けようとしたレイヴ@黒子を自身の後ろに引き戻し、大我はメダルが撒かれた方へと頭を向けた。

撒かれたメダルは三枚、実淵玲央、葉山小太郎、根武谷永吉の『無冠の五将』と呼ばれている三人に向かった。

「させん！」

「このー！」

咄嗟に、キバこと千尋と、HOPPERこと祥吾とが跳び付きメダルを叩き落した。

だが、最後の一枚はカバーしようとしたビーストこと健介の手をすり抜け、実淵に飛び込もうとした。だが。

「実淵さん！」

「!? 征ちゃん!?!」

メダルは、実淵を庇った赤司に飛び込んでいた。

そのまま崩れ落ちるように座り込む年下の主将に、二年生達が慌てて駆け寄る。

「ひゅー、カッコいいね坊や。結果は変わらないと思うけどお？」

「レギオンー！」

再び手を叩いて笑うファントムに、ビーストはダイスサーベルを握り直す。

風を切るサーベルからぬるつと逃げて、骸骨鎧のファントムは笑い続ける。

「ほーら、出て来たよ。」

こちらとしてはゲートに使いたいのに、お前達中々折れてくれないなあ」

その言葉通り、座り込んだ赤司の背中から、ぬるりと白いものが現れた。

その姿はまるつきり、ホラー映画に出て来るミイラ男だった。だが、それは見る間に姿を変え、紅のライオンを思わせる姿になった。

そいつを見て、レイヴが舌打ちした。

「ライオンヤミー、ね。こりやまたプライドのたつかそうなのが出て来たな」

「レイヴ、どう言う事だよ！」

「セルメダルを人間に入れると、そいつの欲望に反応してヤミーが生まれるんだよ。こいつ、もう成体化するのか。こいつの親、かなり欲望が強いみたいだな」

立ち上がったライオンヤミーは、背伸びするように背を伸ばし、学生達を見回すとエコーが掛かった赤司そっくりな声でこう言い放った。曰く、

「ズガタカイゾ」

「ブフツ」

その言葉に、まず大我が吹き出し、その言葉に聞き覚えのある学生達が目を丸くし、ヤミーの親であるところの赤司はと言えば、赤面し小さくなっていた。

「スベテニカツ、ボクハタダシイ！」

「うわ!?!」

「うお！」

ぶんと、音を立てて振り回されたクロウを、HOPPERは飛び退き、オーズは自身のトラクロウで受け止めた。

ギヤリリツと、火花を散らしつつクロウを払い除けると、オーズはレイヴへ怒鳴った。

「おい、どうすればいいんだよ！」

「倒せ。それだけさ。」

大丈夫、こいつは宿主から離れて欲望を溜め込むタイプだから、倒

したからって宿主には何の支障も無いからな」

「あ、そうか。だったら心配ないか」

「く、黒子？」

先頃和解したと思っていた相手の口振りに、赤司は思わず目を白黒させるが、目の前の怪人に気を取られている状態の周囲は気付かない。

そして、トラクロウを構え直すオーズの横で、HOPPERは銀色に金色の飾り文字が入ったメモリを取り出し、HOPPERメモリと差し替えた。情報検索用メモリの《COMPUTER》だ。

途端に、HOPPERは白銀に金色のライン——よく見ると、そのラインそのものはIC回路を横に並べているように見える——が手足と胸部装甲を飾る姿に変わる。

複眼（ホークファインダー）が数回瞬くと、HOPPERから指示が飛ぶ。

「大我、奴の弱点は顎だ！」

「よおし！」

「ボクニサカラウモノハ、オヤデモコロス！」

そう叫ぶや、ライオンヤミーはかっと口を開き、立て続けに三発火炎弾を吐いた。

吐き出された瞬間はピンポン球くらいだったが、それは一気に膨らみバスケットボール大の火炎球と化して襲い掛かる。

オーズはそれを掻い潜ったが、メモリを入れ替えようとしたHOPPERは、間に合わないと踏んでそのまま前に飛び出した。その背後には、七人の学生達。

生身の学生達を庇い、爆炎三つを自らの拳で叩き払ったHOPPERは、しかし三発目を諸に正面から喰らった。——それも、10数キロプラスチック爆弾並みの爆発を受けて、流石にロストドライバーとメモリシステムも悲鳴を上げた。

結果、変身解除と共にHOPPERこと灰崎祥吾は、その場に崩れ落ちた。

全身から、ぶすぶすと煙を纏い横倒しになった人間を見て、紫原敦

と赤司征十郎の目が限界まで見開かれる。

「崎、ちん？」

「はーん？」

そこにいる筈の無い人物の姿に、元同級生二人は青褪める。

その横から、灰崎を担ぎ上げ後ろに下がらせたのは、キバこと千尋である。

「馬鹿野郎！」

どうしてメモリを《HOPPER》に戻さなかった！ 検索捜査用の《BOOK》と《COMPUSER》は装甲ぺらっぺらだろうに！「要救助者がいるのに、後ろに爆炎が抜けるかもしれない真似、出来ないでしょうが」

「！」

小さな囁き声だったが、赤司には聞こえた。

「俺は、《仮面ライダー》だ、この三年間《S. A. U. L》に協力してきた『スカルライダーの息子達 (Sons of Skull Rider)』の一人だ。

そうである以上、因縁があろうが無かろうが、危機的状況にある人間を危険に晒すなんて真似、出来ませんよ。

父ちゃんに、恥じるような事なんて、出来ないよ」

「ばーか、その前に海斗が泣く、天馬が怒るし剛が泣き喚くわい。

閃も呆れるだろうし、誰よりも空が切れるぞ、お前」

この場にはいない何人かの名を上げると、キバは痛みに引き攣る祥吾を後輩達の前に降ろした。

事態が見えない凸凹コンビはともかく、実淵は居室から体育館に移る際に鞆に突っ込んでいた未開封のミネラルウォーターでタオルを湿らし、それで祥吾の腫れて熱を持った頬を抑えた。

その横から、痛みに顔を顰める祥吾を、赤司は複雑怪奇に骨折した顔で見詰める。

「す、すいません、もう少ししたら自力で何とかするんで」

「大丈夫か、何じゃったら俺が運ぶが」

「そうしてくれ、《DOCTOR》は自分自身を治療する事は難しいん

にも知らないんだよ。

知らない機能を計算に入れて動くなんて出来るかよ！」

「け、聞かなかったのはお前だろ？」

「お前なあー！」

現状そつちのけで口論を始めた二人(?)の向こう側では、仮面ライダーキバがトゥルーアイを使ってファントム・レギオンを見ていた。

蝙蝠に見える複眼状の仮面キバ・ペルソナ越しに翼竜の骨と鎧を掛け合わせたような相手を見詰めた千尋は、それが所謂『式神』や『傀儡(くぐつ)』と言った存在で、本体ではない事を理解した。

「ビースト！」

そいつは本体じゃない、蹴散らせ！」

「な!？」

「ありや、ばれた」

キバからの指摘に、ケラケラと笑ったレギオンの声にぎつとビーストは睨み、握り締めたダイスサーベルにリングを押し当てダイスドラムを弾いた。

ガララつと、回ったドラムは5を示した。

「喰らえ、くそ骸骨が！」

横に振るうと、銀色に光る八本足と翼を持つ竜の形をしたエネルギーの塊が五体、更にグールを増やそうとしたレギオンの影に向かって飛び出した。

看破された事で戦意を無くしたのか、レギオンの影は至極楽しげにセイバーストライクの光弾を浴びて消滅した。

「畜生、舐めやがって」

「少なくとも、HOPPERの電撃トリックファイヤーモドキを喰らってダメージを受けていたようだからな、あの後傀儡に入れ替わったんだろう」

変身を解きつつ唸った健介に、同じく魔皇甲冑を脱いだ千尋が溜息と共にぼやく。

振り向いた二人の視線の先には、劉と紫原に引き分けられた状態の

大我とレイヴ@黒子の姿と、実淵に火傷を冷やして貰いつつ手持ちのファーストエイドから塗り薬を引っ張り出して塗り付けている祥吾の姿がある。

何とか、耐久性の高い特殊素材のライダースーツのお陰で、実際に火傷に至ったのは顔の一部と手の甲程度で済んだが、爆圧を身体で持ち堪えようとしたのが過負荷になったらしい。

軋む身体で何とか薬を塗り終えた祥吾の前に、もの言いたげに近づいて来たのは赤司だった。

「んあ？ どうした、セイジューロー」

「灰崎、お前は、ずっと、こんな風に戦っていたのか、こんな危険な事を、三年も」

「征ちゃん」

何か言おうとした実淵を、止めたのは千尋だった。

祥吾の方は、軽く頭を掻くところ切り出した。

「俺が、仮面ライダーになったのは、お前に強制退部を言いつかるほんの一週間前だ。

俺の兄ちゃんが、やっぱり高校生のうちからライダーやってて、未確認に負けた事があった。俺は、その敵を討ちたい一心でこいつを父ちゃんの部屋から持ち出した。

自画自賛じゃねえが、初陣としちゃまあまあだったと思うぜ、撃破には至らなかったけど、未確認の一体を一度は行動不能に追い込んだものよ」

そう言いつつ、祥吾が見ているのはT-1《HOPPER》メモリだ。

「敵は、鉄で身体を置き換えた、様々な動植物の力を持たされた怪物達。

普通に銃弾を打ち込んでも、けろりとしてやがる。

そんな怪物達と戦ったのが仮面ライダー、飛蝗の力を与えられた、風の戦士達だ」

夕食を食べながら、ビールを飲みながら、くしゃくしゃの笑顔で父が語った『伝説』の戦士達。

その言葉に憧れて、何時かそんな男になりたいと願い、そしてあの日仇討ちの為に掴んだ『力』だった。

多分、父には怒られるのだろう。それでも祥吾は、あの時倒れた兄の代わりに戦うと決め、全力で立ち向かった。

倒れた兄の為、あの日一緒にその場において泣いた和成や剛、天馬の為に。

「その後すぐ、《S. A. U. L》、警視庁の対未確認生命体対策班に登録される事になったから、もしあの時お前に退部を言い渡されなかったとしても、俺は早晚自主退部してた。

だから、お前が気にするような事なんざ何もねえよ」

そう言っつて、軽く手を振っつて見せた祥吾に、おずおずと大きな体を縮めるようにして言っつたのは、これまで黙っつていた紫原だった。

「でも、×ちゃん、中一からずつと、喧嘩なんかして無かつたじゃん。

不良に絡まれて、いなして逃げてたけど、喧嘩なんかしてなかつたじゃん。襲われてる奴抱えて逃げてても、自分自身喧嘩する事無かつたじゃん、なのに喧嘩してるから退部つて、俺何信じて良いのか判んなかつたし」

「ああ、そりゃあ困つたなあ」

そう言っつて、俯いた紫原の頭を撫でたのは、彼の先輩である福井健介である。

その向こう側で、溜息交じりに口を開いたのは黛千尋である。

「赤司、お前はこいつが喧嘩していると誰から聞いた？」

「それは、学校の上級生や、父の部下で身辺調査に詳しい人に聞いて」
「そうか。」

じゃあ、お前は自身で調べた訳じゃないんだな。

赤司。お前、自分に逆らうものは親でも殺すとか、物騒な事言っつていたようだが実際は親父さんの部下達に良いように使われたようだな。

祥吾のお袋さんは、とある世界企業で働いている研究員で、ついでに特許も幾つか持つている。そのお袋さんをヘッドハント、もしくは特許を買い上げる交渉材料としてこいつを誘拐するに当たつて、学校

から連れ出すより学外にいるのを連れて行く方が、実行側もリスクが低いだろうからな」

「ちー兄いー!」

顔色を変えて、止めようとした祥吾を察した岡村と健介が抑え込む。

同じく、「そんな場合ではない」と止めようとした実淵に、千尋は再び溜息を吐きつつことう続けた。

「実淵、悪いが俺は無事に戻れば、多分卒業式に出ずに《S・A・U・L》に出頭して、大学が始まるまでそっちに掛かり切りになる。

祥吾も、お前らと話が出来るのはこれが最後になる可能性が高い」「そんな、次の大会で」

言い募ろうとした赤司に、首を振って応えたのは健介だった。

「今回、たまたまWC参加校の生徒ヘストーカー行為を行っている人間が、禁制品のT-0ガイアメモリを使用している事が割れたから、ガイアメモリの専門家である祥にお鉢が回った。

そもそも、祥は一応バスケット部員だが、《S・A・U・L》への協力を優先している所為で本来はスタメンじゃなかったんだ。

福田総合の連中は、学校近くで起きた未確認事件に巻き込まれて、祥吾に助けられた事があったからこいつの事情をまるっと知ってるからな、《S・A・U・L》からの依頼を受けて、こいつをスタメンに突っ込んでくれたんだ。

こいつは、週二回部活に参加出来るかどうかで状態だからな、部活では二軍のプレイングコーチってのが本来の立場だ」

上級生の言葉に、何時ぞやのように両目をかっぴろげて見て来る赤司から、祥吾は氣拙い事この上なく目を逸らす。

それに、聊かの怒りを込めて問い質すのは紫原だ。

「じゃあ、試合の前に室ちゃんに喧嘩吹っ掛けたり、試合で黄瀬ちゃんの足踏んだり、あれは何だったのさ!？」

「あの兄ちゃんに喧嘩売ったのは、不良だって言う印象付けだ。

黄瀬の足を踏んだのは事故だったけど、会場にストーカーがいるのが判ってたから、向こうを釣る為に咄嗟に芝居を入れたんだ。

あのストーカー、要するにリョータに尽くしたいってのが捻じれて暴走した挙句に、あいつと試合中に接触した選手やそいつ視線でリョータに迷惑掛けてるファンとかに、メモリを使って暴力を振るってたんだ。

だから、衆人環視の中あれだけ悪態をつけて怪我までさせれば、確実に出てくると思った。事実、俺が一人になったところを、ホイホイ出て来てくれたしな」

「それ、どういう事っすか！」

一際大柄な元同級生へそう答えた時、噛み付くような一声が飛んだ。

振り返れば、金髪の少年が顔を赤くして、上級生二人に抑えられているところであった。

「リョータ」

「俺の周囲で、何か起きてたのは知ったっす、WCの途中で中村先輩からももう大丈夫って聞いて、でもそれにシヨーゴ君が関わってるなんて聞いて無いっす！」

「黄瀬、それは」

「『S. A. U. L』による、情報規制だよ。」

特に、お前みたいなスキャンダルめいた情報が流れたら拙そうな奴に、話せる訳ないだろう」

噛み付くように吠えた黄瀬に、眼鏡を直しつつ答えたのは、中村真也である。

彼らの後ろには、海常、秀徳、桐皇、そして誠凛の面々がいる。

まだ喚き合っていた誠凛の凸凹コンビは、走って来た主将に二人揃って鉄拳制裁を受けて沈没した。

一瞬言葉に詰まり、しかしそれでもと黄瀬は食らいっこうとする。

「だって、あんなこととか、その、」

「人の物だから欲しいとか、俺のもんだとか、色々言っていたじゃん」

黄瀬をフォローしようとした訳では無いだろうが、そう食い付いた紫原に答えたのは、彼の先輩である。

携帯を取り出し、動画を一つ再生して見せた健介に、これはげっそ

りした顔で祥吾が言う。

「健兄い、そのデータまだ持ってたの？ 機種変したじゃんか」

「皆で集まって、ウノやった時の罰ゲームを5W1Hで決めたら、『昼食時に学校で、部活仲間の前で厨二病を披露する』ってのになって、でぼろ負けした祥吾が実践したんだよね。偉いだろ、こいつ、クラスの奴に頼んで、ちゃんと撮影して貰ってたんだから」

「は!? 罰ゲーム!?!」

「崎ちーん」

「言うない、兄弟内ヒエラルキーNo.2の言葉には逆らえねえよ」

祥吾の言葉に、キセキの世代の一人っ子と兄四人は良く判らないと言う顔になったが、末っ子二人はあーと言う顔になった。

特に、姉二人にパシラれる事も少なくない黄瀬が。

「あ、あの、じゃあはーちゃんは不良でも何でもなくて、あのじゃあ何時かの試合をサボったのも」

「あ、あれか、成長痛で熱出してた時」

「女性陣が、祥が病院から行方不明になったって、号泣しながら帰って来て」

「うっかり空と閃が、近場の暴力団事務所壊滅させたあれか」

「あーあー、薬待ちで隣りのゲーセンで待ってたら、バスケット部の奴に拉致られたっての。」

しかも帰ってきたら五、六発殴られた痕があって、それ見てブチ切れた海斗見て、空と閃が我に帰ったって言う」

「確か、親父が帝光中に抗議したらのらくら逃げられて謝罪が無かったってんで、色々調べたら上層部が真っ黒だったってあれな」

「それだけじゃねえだろあの学校、それこそ小母さん引き抜きたいカス企業に金積まれて、祥吾が登下校中に何度も誘拐され掛けて遅刻したり何なりしてんのに、警察に届けずにあいつが悪いで済ましてんだよな」

「捜査の途中で、親父が別件に移っちゃったんで、警察がのたくらしちゃまって向こうに変な工作の時間与えちゃまったって話しな。それでも、理事会は全員懲戒免職になったそうだけど。」

会長さんに、捜査の不手際詫びに警視総監が来たって言うし」

「ああ、だから去年、帝光中は対外試合全自粛だったそうだしな」

「赤司んところは、子会社の暴走って事で、《ホークアイ・ホールディングス》には詫び入れたけど、灰崎家には書状一枚送って来なかったんで、会長があそこの取引の全面見直しを命じたっけな」

「だー！ ストップ、何を何処まで喋る気っすか、あんたらは！」

桃井の問いに、事情を知っている三年生十αが話の花を咲かせるのに、頭を抱えつつ祥吾は話を止めようとする。

その向こう側では、帝光中卒業生達が表現しようのない顔で、彼らをガン見している。

そんな面子の話の腰を折ったのは、鉄拳制裁から復活した大我だった。

「なあ、そう言うのは、ここから脱出してからゆっくり話そうぜ？」

ホークアイ会長が何か手を打ってくれてるのは判るけど、このまま助けて貰うのを待つって言うのは、却って危ない気がするしよ」

「かがみ？」

何時もなら、バスケか空腹を訴えるかの二択である大我の言葉に、チームメイトとキセキの面々が微妙な顔になる。

だが、それを受けて順平が、『身内』ではない三年生達に向き直る。「俺も、火神に同意見です。」

救援は必ず来ます、おそらく《S. A. U. L》は動き始めているでしょうし、俺や祥がお世話になった《ホークアイ・ホールディングス》は《S. A. U. L》とも『SPIRITS』隊とも関わりのある大企業ですから、俺達を助け出す為に何かしらの準備を進めてくれている筈です。

取り敢えず、この人数で休息のとれる場所、あるいは港に行きたいと思います」

「おい、それ、本気で言っているのか!？」

「本当に、救援が来ると?」

順平の言葉に食い付いたのは、諏佐佳典と笠松幸男の二人だ。

それに答えたのは、カバンの中から大振り旧式のトランシーバー

に似たものを取り出して見せた、宮地裕也だった。

「携帯やスマホのアンテナが立たなかった時用に、祥吾が身内に渡されてた特殊通信機なんだが、こいつがたまたまあの大シヨツカーとか言う連中が、東京に襲撃を掛けている通信を拾ったんだ。」

それに、祥吾は本来今朝早くにこつちを出て、向こうに戻ってる予定だったのにもう昼が近い。その意味でも、俺達の方へ様子見に来るのは確実だ」

「いいとこ」後三時間、いや二時間踏ん張れば必ずクウガとアギトが来る。そう言う意味でも、港で待機しようと思う。

当然、向こうも港で張ってるだろうが、な」

弟の言葉に宮地清志が付け足すと、仮面ライダーにカウントされる面子の表情が引き締まる。

そんな面々を一部は頼もしげに、大半は不安そうに見ていた。

港を一望出来る丘の上で、中村真也と宮地裕也とは高尾和成の護衛として偵察に出ていた。

目を休めた事を主張した和成が、偵察役を志願したのだ。

「骨戦闘員が二人一組で巡回してます。何か、使えそうな船は無いですね、ヨットとかクルーザーとか、みんなで乗れそうなサイズじゃないし。」

何より、戦闘員多過ぎワロタwww。

後、あれ何処の怪人かな、頭に蠍乗つけたのと青色で黄色いマントみたいな付けたのが、灰色の鳥みたいなのと話してるっぽい。周囲に、それぞれの部下っぽいに従えて目立つなあ」

「蠍だあ？ あの糞女、此処まで来てやがるのか、○○○○てやろうか」

「物騒だよ、裕也。」

「だけど、灰色の鳥、ねえ。あのおばさんも気の毒に、所詮は社畜って事か」

《遠視能力（リモートビューイング）》を『鷹の目（ホーク・アイ）』と同時発動させて、和成は港湾施設内で動く影を見ている。因みに、本来《遠視能力》は離れた場所にいる知人の視界を借りる能力だが、和成は訓練の結果鳥や動物の視界を借りる事が出来る。

今、和成は港にいる海鳥の視界をジャックしている状態である。ただ、やはり人間と鳥獣では脳の作りが違う為、長時間維持するのは難しい——動物の方が負荷に耐えられないのだ——事から、大量にいる鳥達をどんどん乗り換えて視界を維持している。

和成の言葉に、二人はそれぞれ因縁の相手がいる事を悟り胸の内を吐き出すと、疲れたように目を閉じた和成の手を引いて移動した。

合流を果たした高校生達は、港から直線距離で一二〇メートル程の位置にあった拓けた窪地で休んでいた。

襲われると守るのに難しい場所だったが、位置的にも広さ的にも、

ここしか四〇人余り居る彼らが集まって休める場所が無かったのだ。

偵察を出すにあたって、緑間真太郎を始め同年代や事情を知らない上級生達が反対したが、宮地清志、黛千尋、福井健介の三人が護衛役と行動を共にする事を条件に出る事を許した。

緑間は「高尾を危険に晒すなんて！」と、常になく逆上した面持ちで物騒と知られた上級生に詰め寄ったが、軽くいなされてしまった。

「危険に晒すのが嫌だから、真也と裕也をつけたんだ、それぐらい理解しろ！」

それと、こんな事は言いたくないが、和成はお前を無事に帰らせてやりたいから無理をしているんだ、大人しくしている！」

「宮地さん!?!」

「黛さん、俺も幾ら何でも三人でと言うのは」

眉を顰める年下の主将に、千尋は言葉が見付からない様子で目を細める。

納得がいかない様子の子の面子に、答えたのは健介だった。

「気持ちとしては、俺も千尋も、そして真也も和成と一緒にだ。だからこそ、後方支援要員の和成に出る事を許したんだ。」

お前らを全員、無事に家まで帰す。一人も欠ける事無く、家族の許に帰らせる。

仲間を、家族を失うなんて、一度で充分だ」

「福ちゃん?」

「俺は小六の時、考古学者やってた父親に家族で会いに行つて、その研究を奪いに来た強盗集団に家族皆殺しにされて、たった一人親父に保護された。俺と弟を可愛がってくれたキャンプの人間は、荷担ぎのおっちゃんに至るまで皆殺しにされた。」

尤も、《ジャバウオック》に出会わなきゃ、親父が来る前に俺も死んでたろうがな」

思わぬカミングアウトに、強制解除のシヨックから立ち直り神妙な顔で付いて来ていた氷室辰也を始め、劉偉、紫原敦と言った陽泉の

面々が黙り込む。ただ、中学からの付き合いである岡村健一だけは、静かに目を閉じた。

続いて口を開いたのは、ジャージの中に入り込んだキバット五世を突いていた千尋である。

「俺は、小学校に入るくらい、かな。」

俺の両親は、まあぶつちやければロミオとジュリエットを地で行くような状態で結婚して、子供を作った夫婦だった。普通と違って、親父はファンガイアの貴族の出で、お袋は《素晴らしき青空の会》の構成員を輩出している家で、オミソ扱いされた末娘だった。

結果的に両方の家から両親は殺され、俺は母方の人間に殺される寸前に、親父に助けられた」

「黛、さん？」

「(ε、;) ウーン… 千尋は、見た目は母親似だが、父親より魔力が強かったからなあ。それで存在がばれて、《QUEEN》の制裁を喰らったんだよ。父親のあいつは、敵わないまでも千尋と嫁を逃がす為に正面から討って出て、倒されたよ。」

母親の方は、元々符術師でそれで隠形を駆使して逃げてたんだけど、霊力が続かなくて隠れて休んでいる最中に襲われてな。その後俺が千尋と一緒に一週間逃げ回ったんだが、飯を探してた俺がつけられて殺し屋を隠れ家に連れ込む形になっちゃってなあ。

あの時滝が来なかったら、あの快樂殺人鬼に俺も千尋も殺されてたろうなあハア… (; | ω |) || 3」

あの時を思い出したのか、ジャージの下からキバットのうんざりしたと言いたげな声がある。

ハードどころではない、影の薄い先輩の過去に赤司征十郎と実渕玲央とは絶句している。

それに続いたのは、弟と後輩を送り出している清志だ。

他校の面々と違い、約一年半前に起きた事件の事もあり事情を知っている大坪泰介と木村信介の二人は、落ち着いて下級生の多い誠凛の面子を気遣っている。

「俺達兄弟は、拳法繋がりでこいつらと親しくなったが、それぞれの事

情は昔から聴いている。

真也は、事故の振りした観光バスへのテロで両親亡くして、スマートフォンブレイン社の研究所に拉致られ掛けたところを《SPIRITS 隊》に助けられたそうだ。

高尾の奴は、父親の赴任先で犯罪結社に誘拐されて、家族全員目の前で殺されて、自分自身も脳味噌抉り出される寸前で《SPIRITS 隊》に救出されたって曰くつきだ。

順……いや日向も似たような状況だったろう？」

「高尾や中村に比べれば、俺はめっちゃくちや運が良かった事になりませんね。」

「たまたま学校帰りに一人誘拐されて、些か怖い思いをして入院こそしたけど、自宅の家族は皆無事でしたし」

話を振られて、つい答えた日向順平は、幼馴染と中学からの腐れ縁、そして同級生と後輩からのもの言いたげな視線に曝された。

特に、相田リコの視線は火花が飛びそうだし、伊月俊の方は死んだ魚より死んだ目なのに怪光線を発しそうだった。

誠凛の光と影を省いた面々が、じわじわと主将への包囲網を狭めているその横で、所謂キセキと呼ばれた面子が元メンバーの灰色に詰め寄っていた。

「おい、じゃあお前もか、灰崎」

「その、ショーゴ君も、家族亡くしたんすか？」

「ギーちゃん、ストレート過ぎー！」

「確か、お前は母子家庭だったろう、その」

「崎ちゃん、もしかして」

「あ？ ああ？ お前ら何言ってるの？」

五人が言わんとする事がぴんと来なくて、首を捻る祥吾に代わって答えたのは、昼寝を始めてしまったレイヴ@黒子テツヤを背負った火神大我である。

因みに彼が何をしていたかと言えば、祥吾から借りた耐物理グローブを付けて、せっせと三つの戦極ドライバーに貼られた鷲マークのシールを剥がしているところだ。

「あー、祥は元々母子家庭。って言うか俺が聞いた話じゃ、祥が生まれる直前に祥の実の親？って人が事故で亡くなって保険金とか事故の賠償金とかが出て、お袋さんがちよつと金持ちになったんだと。」

そしたら、それを目当てにした馬鹿がお袋さんに付き纏った挙句、金は横取りするわ、家に住み着いてお袋さんに暴力振るうわとめっちゃくちな事してたって。挙句に、お袋さんの目の前で、アパートの二階からコンクリート目掛けて、まだ首も座ってなかった祥を投げたんだって」

「「「ええ!?!」」」

予想と斜め上の内容に、キセキ達及び、周囲の学生達が絶句する。

周囲の反応に気付かぬまま、大我の方は兄貴分や大人達が話していた事を思い出す。

「で、コンクリートに叩き付けられる寸前、滑り込みで祥を助けたのが滝の小父さんだったんだって。」

山崎さん言ってたもんな、急に持ってた書類入れ放り出して走り出すから何事かと思ったら、赤ん坊が落ちて来てて肝を潰したって。小父さんにしても良くあの時、間に合ったもんだって。

小父さん、傷まみれで祥抱えたまま、馬鹿がいるとこまで走って行ったと思ったら小母さんに祥を返して、逃げ出そうとしたその馬鹿を捕まえて、窓から片足掴んで逆さ吊りにしたんだってさ。で、命と引き換えに二度と小母さん達に関わらないって誓約書書かせて、破ったら死ぬより辛い思いさせるって念押しして追い出したんだって話だよ」

「「「オウフ」」」

「ただ、そのままだとその馬鹿が更に馬鹿引き連れて襲い掛かる恐れがあったから、小父さんがMr. ホークアイに掛け合って、会社の社宅に二人を匿ったんだってさ」

「ちよ、火神なんでそんな事知ってんの!?!」

「火神っち!?!」

チームメイトと黄瀬涼太の問いに、頬を掻きつつ大我は彼にとって

当たり前だった事を語る。

「え？」

だって、俺の親父、《ホークアイ・ホールディングス》の北米L・A支社の営業部長だもの。

俺んところ、お袋が入院してたから、俺殆ど会社のベビールームが自宅みたいになってたからなあ。小母さんが大学通いつつ働いてたんで、やっぱりベビールームにいる事が多かった様と一緒に、空兄ちゃん、海斗兄ちゃんに面倒見て貰ってたんだ。

幼稚園までは、四人兄弟だって本気で信じてたもんな」

「「「「……」」」」

「ごめん。でも、今までそんな事話した事無かったじゃん、なんでそんな」

思いも依らないどころか斜め上を極めた話に、キセキも上級生である小金井慎二も困り果てた顔になる。

それに向かつては、溜息と一緒に清志が答える。

「ああ、それな。」

こいつ、アメリカにいた時分に事件に巻き込まれてな、それが原因で結構深刻な記憶障害と注意力散漫を患ってたんだ。

特に、事件当時から二ヶ月分くらいしか記憶が残ってなくて、生活記憶は何とかあったものの関係者その他の顔と名前が判らなくなる事態でな。ついさつき迄、俺達の事も他校の先輩としか認識してなかったしな。

兄貴分がスパルタで名前覚えさせたけど、バスケットボール絡みじゃないとガンガン忘れるんだと。

氷室、覚えないか。バスケット以外の約束事、こいつ良くすっぱかさなかったか？」

顔色を変えていた氷室の顔が、あからさまに引き曇るのを見て、大我自身が頭を掻き「sorry」と呟いた。

時間経過と共に、じわじわと戻る記憶に、何でこんな事をと頭痛を覚えてるのは大我自身なのだ。

「今んところ、まあ事態はつきりしないけど記憶障害は収まってる

んで、色々思い出してるらしいんだ。

戻ってから検査受けてみないとだが、取り敢えずそこら辺の事も含めて俺達は、無事にここから脱出したいと思っっている。

……戻ったな」

健介の言葉にそれぞれ振り向けば、確かに和成を背負った裕也とその背を守るように走る真也とがいた。

すわ、また調子を崩したかと青褪める緑間に、降ろして貰いつつ和成は慌てて己がエースと認めた相手に声を掛けた。

「あー違うからね、真ちゃん。

パルクールモドキに俺ついてけないから、背負って貰ってただけだから」

「は？」

「ああ、高尾はともかく、俺らや真也は兄貴さん達に付き合って、パルクールって云うダイナミック障害物走をやってるからな。ちよつとした岩場とか飛び越えて走れるけど、こいつはそうも行かないから俺が背負った」

「はあっ？ ダイナミック障害物走!？」

裕也の答えに、大半は想像が付かない様子で首を傾げたが、知っっている一部の面子が驚いたり、目を剥いて二人を見た。

相田リコが、マジマジと裕也と真也の身体を見ているのを見なかった事にして、和成は三年生三人に見て来たものを伝える。

戦闘員が巡回していると聞いて、三人は表情を険しくする。

横で聞いていた祥吾も、話に出て来た『青色で黄色いマントみたいなもの付けたの』に思い当たる存在がいたのだろう、大きく眉を顰めた。

「マジか、《NAZCA》じゃねえか、それ」

「知ってるの、祥ちゃん」

「中身が違うかもしれないが、《NAZCA》はガイアメモリ密売組織のエージェント、それも幹部格が使ってるT-Oメモリでも上位の奴だ。

まあ、大シヨッカーとの折衝を行う為に来てるとしたら、幹部のあ

の兄ちゃんだろうなあ」

何度か対戦経験があるのだろう、苦虫を噛み締めたような祥吾の言葉に、同じく《S. A. U. L》に協力している健介と千尋とが眉を顰める。

「マジか」

「色々面倒な組織が入り込んでいるようだからな。先程非主流派のファンガイアがいたし、誠凛の方にはやはり『ホロスコープス』の怪人が来てたと言うし」

「逃げ出す為の船は難しいって話だし、ここで非戦闘員は警備残して待機させて、俺達で向こうに切り込んで時間稼ぎする方が安全じゃねえか？」

同輩二人の言葉に、こちらは身元保証として《S. A. U. L》に名を連ねているが、あまり実戦参加はしていない宮地兄が言うと、戦歴的には祥吾に次いで回数が多い健介が応える。

「余力を考えると、ちよつときつくはないか？」

少なくとも、まだ変身してない清志と、さつきは警戒に当たってたんで変身しなかった真也の二人に前面に出て貰う事になりそうなんだが」

年長者のやり取りに、これは心外だと言いたげに祥吾が食い付いた。現状現場にいる『仮面ライダー』の中では、年上の面子が複雑な思いをする程度には戦歴豊かであるのだ。

「待ってくれよ、健介兄い、俺もしかして待機っすか!？」

《N A Z C A》がいるのに!？」

「バカタレ、さつき火炎弾の直撃食らって倒れたの誰だよ。

それに、今日変身したばかりの順平や大我と、変身ツール持っていないカズや裕也だけに、この四〇人近くを守らせる気か？」

それには流石に、祥吾も言葉がない。

黙った弟分の額を、健介がポンと小突いたその時だった。

真っ青な顔で和成が警告するのと、悲鳴が上がるのは同時だった。

「後ろ、怪人が出て来た!」

「きゃあああ！」

「そんな事気にしないで、大人しく捕まればいいのに」

「「カントク！」」

赤黒い装甲に包まれた腕が伸びて、相田リコを捉え引き寄せる。

誠凛高校の面々が気付き、手を伸ばした時には彼女は羽飾りを背負い、両足が微妙に大きな馬型の怪人に抱き抱えられ、その顎を掴まれている状態だった。

「あいつ!？」

「テメエはペガサス!? どの面下げて現れやがった!」

宮地兄弟が吠える横で、秀徳高校三年生達が顔色を変える。

当の怪人の方はと言うと、宮地裕也の方を見てくつくつと笑った。

「よう、ハウンド。まあお兄ちゃんの後ろ張り付いてんだあ？」

そんなんだから、何時まで経っても「変身! Orange!」って、え?」

嗤って揶揄ろうとした怪人のセリフをぶった切る声とともに、『L O C K O N!』と電子合成音が響き、それと同時に何処からとも無く法螺貝のような音が鳴り響く。

Orange ARMS!

ソイヤ!

花道、On Stage!

そして呆気に囚われた馬型怪人の横つ面を、大橙丸の刀背(みね)の方ではあったが全力でぶん殴る『Armor ed Rider』の姿があった。

「「日向!?!」」

「「キャプテン!?!」」

「薄汚え手で、うちのカントクに触ってじゃねえぞ、この糞馬野郎があ!」

既にクラッチタイムに突入している順平の罵声に、慌てて健介、清志、千尋の腕に覚えがある三人がフォローの為に飛び掛かる。

それを避けようと大きく片足を振り上げた馬怪人ことペガサス・ゾ

ディーツは、だが懐に飛び込んで来た昆虫型のドローン達に気を取られたところを、拳法段位持ち三人掛かりで殴り掛かられた。

かろうじて三連撃を避けたものの、止めとばかりに『Armored Rider』に今度は無双セイバーの柄で思いつ切り顎をがち割る要領で殴り上げられ、折角の人質を奪い返された。

「おつま、卑怯だぞ」

「ああん？ 後ろから忍び寄って、確実に非戦闘員だろう女子高生人質にとったテメエに、卑怯呼ばわりされる筋があるか、ボケエ！」

「そりゃそうだ」

「順が正しいわ」

「これだから『ホロスコープス』はよお」

仮面越しの筈（ついでに言えば、自分自身仮面を被ってるも同然）で、にも関わらずペガサスは詰め寄る『Armored Rider』に憤怒の表情を透かし見て言葉が詰まる。

かてて加えて、『仮面ライダー』三人からも呆れたようにぼやかれ、元秀徳高三年生（現在は自主退学後行方不明）はギリツと牙を食い縛る。

そのペガサス・ゾディアーツの背後に、ぬるりと黒い蠍が現れる。

「何を焦っているの、ペガサス」

「スコープオン様！」

「！ 澤崎！」

清志の声に反応し、裕也が兄の荷物の中から取り出した小型アタツシユケースを投げる。

同じく、真也と健介、祥吾、千尋もすぐ変身出来るよう態勢を作る。

その更に後ろから、蠍の化け物が現れた為に一般人である学生達に緊張が走った。気が付けば、少年達の周囲を何十人と言う、黒地に骨模様の戦闘服を纏った戦闘員達が囲んでいる。

蠍の方には、変身し完全に戦闘態勢に入っている——ついでに言えばクラッチタイムに突入して落ち着く様子もない——日向順平の姿

に、軽く拍手しつつこう言った。

「これは大したものだ、これまで何度か試したが戦極ドライバーをここまで完全に使い熟（こな）している人間は貴様が初めてだ。

しかも、一番癖が強く誰も受け付けなかった《鎧武》のドライバーがなあ。

どうだ、小僧。我が大シヨツカーの一員になるのであれば、望むものは全て与えてやろう」

蠅螂男の言葉に、ペガサス・ゾディアースが物言いたげに身じろいだのを、蠅怪人が身振りで抑える。

それに対して、順平はきっぱりと拒絶を返した。
「断る。」

俺はここにいる仲間達と又次の大会を目指して切磋琢磨して行きたいと思ってるし、今の生活を捨てるつもりは毛頭無い。

第一、何で他人（ひと）の生活を踏み躪るような事をしなきゃならない？

お前らみたいに見えるからに不審人物の集団に、何で俺が加わらなきゃならないんだよ、ふぎけんな！」

「全くだ。大体、何処の何方様かは知らないが、この世界じゃ四〇年近く前に『SHOCKER』なんて組織は滅ぼされたんだ、寝言にしか思えねえよ」

清志が言葉を続けると、蠅螂怪人の様子があからさまに不快気になった。

それを取り繕おうと、スコープオン・ゾディアーツが慌てて言葉を紡ぐ。それが、そこにいる『仮面ライダー』と名乗る者達全員と、彼らと縁深い面子の逆鱗と神経をタワシで刮（こそ）ぎ上げる事になると知らず。

「ゼロ少佐、この子達は『骸骨（スカル）ライダー』等と言う偽善者を正しいと信じる可哀想な子供ですの。

私どもの高尚な思想も全く受け付けず、何もかも否定する愚か者ですもの。きちんと教育して」

「ふぎけんな、その怪人蠅女！」

真つ先に声を張り上げたのは、秀徳生である和成だ。

それに、同じく感情剥き出しで祥吾が噛み付く。

「父ちゃんが偽善者だと？ 言ってくれるじゃねえか」

「偽善はお前らじゃねえか、嘘で何もかも塗り固めて、お前らの括りに入らなかつた人間皆に迷惑掛けて苦しめておいて、さも自分達が正しいみたいにはぎきやがって」

『ホロスコープス』に振り回された裕也が、下を向いたままギリツと歯を食い縛る。その背を叩いてやりつつ、兄である清志は腰に簡易アストロドライバーを押し当て吐き捨てる。

「親父が偽善なら、俺達が偽善でも仕方ないじゃん、蛙の子は蛙だもんだよ」

「そうだな、生憎だが、俺達はお前らの糞下らない選民思想より、美辞麗句でゴテゴテに飾られた良く解らない御高説よりも、親父が体を張って見せてくれたものの方が良い」

健介が目だけ笑っていない笑顔で指輪を嵌め直す横で、千尋が何時も以上に無表情に構える。左手に掴まれているキバツトは、己の体が立てるミシミシという音に声にならない悲鳴を上げているが。

そして、コアシステムを巻いた真也と、レイヴ@黒子を降ろして青峰に預けた大我も、オーズドライバーを掴んで向き直る。

「俺達は、普通を失う恐ろしさを知っている。」

その俺達が、『普通の生活』を棄てろと言うあんた達を受け入れられると思うか？」

「俺は、これからもバスケがしたい、キャプテンと、学校の皆と、ここにいる奴ら全員と。」

それが、俺にとつての日常だ。祥のお父さんが、幸せになるのに必要だつて言つてたもんだ。

あんた達が言つてる事なんて殆ど判らないけど、ここから皆で帰るのを邪魔するって言うなら、俺は抗うぞ」

そして、大橙丸を構え背にリコを庇つたまま順平が唸った。

「二年前なら、お前らの言いなりだったかもな。」

お前らの言う通り、バスケで思うように成績を出せない事、勝てな

い事に鬱屈を溜めて、世の中に拗ねて後ろ向きになってた頃だったからな。

だが、今は無理だよ。俺は諦める事を諦めた。そしてこのチームで勝てた。

そうである以上、俺は次の勝利の為に努力しなくちゃならねえんだ、テメエらみたいなのに従って、馬鹿する暇なんざあるかってんだ！」

「威勢は良いな、餓鬼共が。」

だが、ここは我ら大ショツカーの基地であり、お前達は我々の手の内に居ると言う事を忘れて貰っては困るな。

たかだか七人で、四〇余人を守って逃げ切れると思っっているのか？

「ここが海に浮かぶ孤島だと言う事を忘れていてのではないか？」

ギチリと、鎌を振り上げ嘲笑う蠋螂怪人に、『仮面ライダー』達の何人かがぐつと言う顔になる。

不安そうな他の面々を背に、それでもと真也と祥吾が変身しようとしたその時だった。

「やだねえ、大幹部だかなんだか知らないが、子供いじめて楽しいかよ」

「この程度の男が、幹部の時点で『大ショツカー』と言う組織の程度も知れたものだな」

『然り。組織の品格は、構成員の質に現れるものだ』

不意の声に、一瞬そこにいるもの全員、敵味方関係なくポカンっと立ち竦んだ。

次の瞬間、真っ赤な存在と、青に差し色のように鮮やかに赤い複眼を持つ存在が、飛び降りて来たと同時に戦闘員を薙ぎ払う。

そして、黒い身体に金の角を持つ者が、蠋螂怪人セロの頭蓋を砕かんと跳び蹴りを放って来た。

僅差で、両腕の鎌で食い止めたものの、全くの不意打ちとなった蠋螂男は、ざざざと数メートル後方へ、地面を抉りつつ下がった。

その姿に、何人かの歓声が上がった向こう側で、悲鳴じみた声を上

げたのは澤崎彩芽ことスコープイオン・ゾディアーツだった。

「く、クウガ、電王、アギトですって!?

お前達、どうやってここへ来たの!」

「そんな事、俺の知った事かよ」

赤い装甲の存在——仮面ライダークウガが笑いながらそう言い放つや、飛び掛かろうとしたダスタードを回し蹴りで三体同時に薙ぎ倒す。

その反対側では、仮面ライダー電王SLASH Formがデンガツシャーをハルバートモードにして、戦闘員達を切り払っている。

そして、空中で軽やかに後方宙返りと共に降り立った仮面ライダーアギトが、大きく構えを取って周囲の『敵』に向かって静かに告げた。

「高校生達を、返して貰う。」

生憎だが、この世界に犯罪結社である『SHOCKER』の居場所は、疾うの昔に無い」

それは正しく、『新生仮面ライダー』の中心である三人が揃い踏みした瞬間であった。

そして、これ幸いと携帯で三人の写真を撮りまくる、歪みないライダー信者が約二名存在していた事を、ここに記しておく。

e p i s o d e 1 0 脱出。そして時は進む。

ここにいるバスケ少年達の殆どは、『仮面ライダー』を知らなかった。

映像作品としての『仮面ライダー』を知る者も、彼らの中では少数派であった。

だが今、彼らの目の前で。

「変身」

ガブツ

仮面ライダーキバが。

D r i v e r o n !

「変身！」

仮面ライダービーストが。

R e a d y !

「変身！」

仮面ライダーメテオが。

p i p p i

S t a n d i n g b y

「変身！」

仮面ライダー555が。

H O P P E R !

「変身！」

仮面ライダーHOPPERが。

「変身！」

タカ、トラ、バツタ!

T a , T o , B a , t a t o b a T A T O B A !

そして、新たに表れた仮面ライダーオーズと『Armored Rider』改め仮面ライダー鎧武、併せて七人が、それぞれ眼の前の敵を薙ぎ倒しに掛かる。

その後方、宮地裕也はヌンチャクらしきものを取り出し、高尾和成はファーストフードの玩具にしか見えないガジェット達に、どんど

んアストロスイッチを差し込み押しして手放してゆく。

「裕也、無理はするな」

「大丈夫です、大坪さん。」

それより誠凛の面子に気を使ってやって下さい。あそこは大所帯だ」

氣遣つてくれる兄の親友にそう応え、裕也は構えを取った。

そして、ガジェット達を放し終えた和成が、一見玩具に見える銃型ガジェットを取り出し構える。

暖色系ツートンカラーに塗られたそれは、和成専用に調整されたガイアメモリ用ギミックだ。

「高尾、それは」

「護身用に持って来てたんだ、この合宿の後援者がきな臭いつて聞いてたから。」

また、財団Xかなあつて思ってたなら、もつとトンデモナイ所だったから笑っちゃった」

焦る緑間真太郎にヘラつと笑い掛けつつ、和成は近付く戦闘員へと銃をぶつ放す。

怪鳥音と共に、振り回されたヌンチャクで戦闘員が二人纏めてぶつ飛ばされる。その横で、同じく丸太を振るって陽泉の岡村建一が戦闘員を殴り飛ばす。

「モアア!?!」

「何時でも走れるようにしとるんじや、アギト達が来たと言う事は、直に救助船が着くからの!」

焦る後輩に岡村が叫ぶと、それに応えるようにクウガが声を張り上げた。

「おう、安心しろ、今《S・A・U・L》のトレーラー積んだ船が港に強行着岸したとこだ!」

もうちよつとだけ頑張れよ、お前ら!」

その言葉を裏付けるように、港の方角から爆音が轟いた。

それは《S・A・U・L》到着の、派手な号砲であった。

さて、時間は僅かに遡り、『仮面ライダー』達に三人が合流したその

頃、《S・A・U・L》のGトレーラーを乗せた小型貨物船は、勝義島の港へと全速力で進んでいる途中であった。

これは、見た目と積載量こそ貨物船だが、実際は海上自衛隊から貸し出し（て貰うよう脅しを掛け）て運用している特殊高速船である。その甲板の上で、三体のG-3Xがそれぞれ装備の最終チェックを終わらせようとしていた。

一人は、警視庁に本部を置く《S・A・U・L》関東本部所属のGシステム装着者、本音京一郎警部補。

残る二人は、《S・A・U・L》東海地区所属のGシステム装着者兄弟、各務正宗警部補、各務兼定巡査部長である。

合宿前のLINEで、祥吾達の話題に上がっていた『東海の刀剣兄弟』とは彼らの事だ。二人とも所謂ノンキャリアだが、東海地区では対グロンギ戦が多い事もあり、三十前後の若さだがこの階級に上がっている。

たまたま今回、警視庁へ出て来ていた二人に、緊急要請が入った形で高校生達の救助作戦に参加している。

彼らの周囲では、船の警備と高校生達が船に乗り込む際の警護要員として同乗した機動隊の一個中隊がおり、その隊員達がやはり装備の最終点検を行っている状態だ。

「おう、本音、こっちは何時でも出られるぞ」

「俺もいいぞ。着岸と同時に、兼定が上から威嚇も兼ねて05《ケルベロス》を掃射する。」

俺とお前が、01《スコープオン》と02《サラマンダー》で子供の避難経路を確保する。一応この船に乗せるが、まあ50人足らずなら大丈夫か」

「兼定さん、誤射は無しにして下さいよ?」

「お前、俺がしょっちゅう誤射してるように言うんじゃねえよ」

口を尖らせるこのアラサーに片足突っ込んだ男が、毎回必要以上に弾丸撒き散らしその都度始末書を書いている事は、《S・A・U・L》関係者によく知られた話である。

彼らが纏っている強化服はブルーで纏められているが、左上腕に関

東本部の本音は赤色、東海地区の二人は緑色でそれぞれの認識番号が記されている。

ヘルメットを小脇に抱えたまま、そう打ち合わせていた三人のインカムに、ピッと通信が入った。

『S・A・U・L』中央管制室（センターコール）TOP―Kより各員、現在、高校生達は港より一二〇メートルの地点にて戦闘員及び未確認生命体数名に囲まれている状態です。

クウガ、アギト、電王、HOPPER、キバ、ビースト、555、メテオが交戦開始、尚、新たにライダーとして二人戦闘参加しています。データを転送するので、未確認と誤認しないよう注意して下さい』
「おいおい、又チビ共に戦わせるのかよ、警察のメンツ丸潰れって言わないか？」

中央管制室からの通信に、真っ先に唸ったのは兼定である。それに向かって、先ほどの男性ではなく女性の声が答えた。

『生憎だけど、持ち込んだのは向こうさんの様よ。そもそも、異次元で入手した『Armored Rider』ユニットのテストと適合者探しを兼ねて、高校生達を合宿と称して拉致したようだし』

「返すがえすも碌でもねえな、財団Xより酷いな、こんな組織なのか、SHOCKERって」

「俺が覚えている限り、真っ向から武力行使だったBADANよりはマシだが、餓鬼共が青春掛けているスポーツを利用して拉致した時点で話にならないな」

主席オペレーターの声に兼定が頭を掻き毟ると、当時小学校一年生だったがBADAN戦役を覚えていた各務正宗が重々しく告げる。

その時、格納スペースに警告ブザーが鳴り響いた。最初のブリーフィングで、着岸三分前に鳴らすと決めたものだ。

それを聞いて、兼定が慌ててヘルメットを頭に当てつつ立ち上がる。

「おっと、向こうさんもこっちに気付いて着岸地点に群がってやがる。先に出てぶっ放してくるわ」

「岸壁まで壊すんじゃねえぞ」

「あいよ、兄貴」

「お願いします、各務巡查部長」

ひらっと手を振り、G3—X・TK03とペイントの入った強化服姿の男は、階段を軽快に駆け上がって行った。

それを見送り、本音も正宗とともに抱えていたヘルメットを被った。パシユツと音を立てて密着したヘルメット内に酸素が循環するのを確かめ、本音京一郎は大口径サブマシンガン、G01《スコープオン》とその付属グレネードユニットであるG02《サラマンダー》を掴んだ。

戦闘は、数で圧倒的に優勢な筈の大ショッカー側を、仮面ライダー達が押し返しつつあった。

凄まじい勢いで戦闘員が薙ぎ倒され、各組織、各種族の怪人達もアギト、クウガ、電王の前にあつと言う間に爆散の憂き目を見た。

その光景に、最初に部下達に撤退を命じたのはドーパント達を率いる《NAZCA》であった。

「これは酷い。まあ、こちらとしても、今更SHOCKERなんて遺物と組むのもどうかと思つたし、こちらのトップを格下呼ばわりするのにも我慢の限界だし、良い口実だねえ」

顎の指を当てる仕草をして、青い鳥人型の怪人は灰色の鼻型女怪人に視線を向けた。

こちらの方は、事態に怖気付いたのか、ガクガクと震えている。

「スマートブレインは撤退しないのかい？ 我々『Exhibitoron』は、これ以上大ショッカーとの共闘に価値を見出だせないのがね」

「上層部から、撤退命令を受けておりません、ので」

「ふうん。それは大変だねえ」

それだけ告げて、《NAZCA》はそのまま動かない女怪人に背を向けた。

「《NAZCA》様、よろしいので？」

「気にしなくていいよ、どうせSB社とは技術者の奪い合いでこの間

に揉めたばかりだし、彼女、どうやら大シヨツカーへの義理立て用に送り込まれた捨て駒らしいし、こちらに助ける謂れはないよ。

彼女が助けを求めるなら、吝かじゃないんだけどね。

何より、私は社長と会長から預かった君達を、『Exhibition』の利益に関わらない形で消費する訳には行かないからね。

うちは既に、武闘派で鳴らしたMiss SHOPPERが退場しているんだ、これ以上の赤字はゴメンだね」

戦闘員(マスカレード・ドーパンド)の戦闘班長にそう答えると、『N A Z C A』は部下達に撤収を命じた。

ドーパント達のように組織立ってはないが、同じように撤退を始めたのはファンガイア達である。元々、自分の欲に忠実であるが故にK I N Gから離れた面子である。そもそも、沈み掛けた船に長居するよ
うな連中ではなかった。尤も、血の気の多い者がキバにちよつかいを出しては、文字通り粉碎されていたが。

ファントムの方は、元々自己判断だったのか参加者自身少なかった事と、ライダーとの戦闘後一応の指揮官であったレギオンが逃亡した為、逃げる者残る者バラバラで動き、結果残ったファントムは殆ど撃破されつつあった。

そして。

「ふうん、やるねえ、あいつら」

「オーズの劣化品かと思ったけど、全く別物なんでしょうね」

「八百年俺達が眠ってる間に、良く解らない連中が増えたようだねえ」
「判らないって言うと、今度のオーズ、俺達の誰のとも違うメダル持ってるな」

「どうでもいいよー、そろそろどっか行こうよ、セルメダル集められると」

「そうね。ここじゃ良い宿主もいなさそうだし。行きましようか」
そう声だけを残して、四つの影がすつと港湾施設の影に溶け込んで行った事に、気付いた者はいなかった。

セロ少佐こと、蠟螂怪人は焦っていた。

彼は、この世界の『改造人間ではない仮面ライダー』達を軽視していた。

強化服を着込んでいようと、所詮は人間、しかも全員未成年と言う事から、この時空をすぐ制圧出来ると高を括っていたのだ。

しかし今、周囲の戦闘員を薙ぎ払って、足手纏の高校生達を守りながら戦う他のライダー達へ指示を飛ばしていたアギトと呼ばれた存在は、それと同時に指揮官である自分との戦闘を行っているのだ。

勿論、クウガと電王の的確なフオローもあるが、それを度外視してもアギトはセロが真剣にならざるを得ない程に強かった。

「はあっ！」

「こ、これは」

パンつと、オルタリングの右側に付いた赤いボタンを叩いたアギトの右腕が炎に包まれ、その炎を振り払うと赤くなったその腕に一振りの片刃剣が現れた。

フレイムセイバーと呼ばれるそれを、アギトはブンつと一振りするや、蠟螂の首を狙い神速で振り抜いた。

改造人間故の視力と神経加速ブーストで何とか躲した紅と金色の剣は、そのままセロの斜め後ろへとすっぽ抜けた。

それを笑おうとしたセロの耳に、「超変身！」と言う叫びが突き刺さった。

声の方を見ようとした複眼に、紫色の閃光が走りセロの片目が切り裂かれた。

「ちっ、浅いか！」

「貴様、クウガっ」

すっぽ抜けたと見えたフレイムセイバーを、クウガが掴みそのまま紫のクウガ（タイタンフォーム）へとフォームチェンジしたのだ。

元々タイタンフォームは、破壊力と防御力に長ける分、機動は低い。それを飛んで来た剣を宙で捉え、振り上げたところでフォームチェンジする事でスピードを落とさず攻撃に繋げたのだ。

「ば、馬鹿な、こんな偶然っ」

「さあて、どうなんだろうな」

潰れた複眼を押さえ、慌てふためく蠍怪人に向かってクウガが平坦な声で答える。

もちろん、偶然でも何でもなく、二人はテレパシー能力でコンタクトを取り合っており、クウガが間合いに入ったところでアギトがセイバーを飛ばしたのだ。

クウガとアギトが指揮官を抑えている間に、電王の指揮下で仮面ライダー達は高校生の一団を守って港へと移動を始めていた。

電王と共に宮地清志こと仮面ライダーメテオ、中村真也こと仮面ライダー555が戦闘員達が作る壁に穴を穿ち、黛千尋こと仮面ライダーキバと福井健介こと仮面ライダービーストがその穴を押し広げ、そこを灰崎祥吾こと仮面ライダーHOPPER、火神大我こと仮面ライダーオーズ、日向順平こと仮面ライダー鎧武が庇いつつ六校のバスケット部員達を港へと誘導する。

無論、逃がすまいと大シヨツカーの骨戦闘員も追いつがろうとするが、飛び回るガジェットと裕也のヌンチャク、和成の銃器ガジェットによる牽制射撃で近付く事が出来ない。そして何より。

ブドウアームズ！

龍・砲・ハツハツハツ！

「先輩達に、指一本触れさせないっすよ！」

BANANA ARMS！

KNIGHT of SPEAR！

「Hi！ 邪魔するなら吹っ飛ばす！ O.K?」

DORIAN ARMS！

Mr. DANGEROUS！

「征ちゃんに、指一本触れさせないんだから！」

MANGO ARMS！

FIGHT of HAMMER！

「邪魔だ、道を開けろー！」

残り四つのベルトを持ち出した高校生達が、各々の武装を振り回し、ぶっ放して戦闘員を吹き飛ばしているのだ。

最初に戦極ドライバーを持ち出したのは、黄瀬涼太だった。

止めようとした自チームの先輩達に向かって、黄瀬はこう言った。

「幾ら経験があるって言っても、中村先輩だって高校生なんすよ！」

それに、シヨーゴ君ばかり良い恰好させるの嫌っすー！」

「おい、黄瀬!？」

海常勢がそうやってもめている横で、同じくドライバーを手に取ったのは、先程大シヨツカーの小細工によって暴走した氷室辰也だった。

それを見て、紫原敦が慌てて制止しようとした。

「室ちゃん、また何する気!？」

「勿論、逃げる為に邪魔する奴らにどいて貰うんだよ」

「ちよ、おま、氷室！ さつき大騒ぎ起こした事もう忘れたアルか!？」

「覚えているさ。だが、福井先輩が戦っていて、タイガまで仮面ライダーとして戦っている現状で、俺が守られてる立場って言うのは間違ってるような気がするんだよ」

同級の留学生に、きれいにそう笑って言い放ったエレガントヤンキーは、迷う素振りも見せずドライバーを腰に当てた。

その横で、赤司征十郎の手の中から戦極ドライバーを取り上げたのは実渕玲央だった。

「お!？」

「あー、玲央ネエ何するの!」

「実渕さん!？」

「さつき、征ちゃんが私を庇ってくれたから、今度は私が征ちゃんを守るわ。」

私も、あの木の実から変わった錠前、持ってるのよ」

そう言っつて、実渕はドリアンらしいごつごつした木の実を思わせる意匠の付いた、ロックシードを見せた。

ぽかんと見ている同級生の大きな方に荷物を預け——実は、根部谷永吉は既に千尋の荷物を抱えていたのだが——、氷室に倣ってドライバーを腰に当てた。

そして、最後に青峰大輝の荷物からマンゴーロックシードと戦極ドライバーを取り上げたのは、諏佐佳典だった。それを見て、桃井さつ

きは悲鳴を飲み込んだ。

「須佐先輩!」

「青峰、お前は桃井と背中の中の奴の面倒見ている、こいつは俺が使う」

「な、何言ってるんだよ、須佐さん!」

「須佐先輩、待って下さい」

「先輩、それなら俺が!」

三年生の、しかも良心と言われた寡黙な先輩の言葉に、暴君と言われた一年生も、隠れライダーマニアであった一年も言葉を失う。

慌てて二年生が名乗り出るが、それに向かって首を振ったのは、元主将であるもう一人の三年生だった。

「若松、お前は桜井見とらなあかんで。」

「須佐、初心者やさかい、無理するんや無いで?」

「何だ、今吉。止めないのか?」

「お前が、見た目を裏切る強情者なんはわしが一番知つとる。」

わしには仮面ライダーなど、真似事でも務まらない、せいぜいお前の荷物を代わりに運ぶくらいやしな」

そう言つて苦笑する相棒に小さく礼を言つて、須佐はドライバーを起動させた。

結果として、盲滅法な乱射や長柄を利用して振り回すだけの武器でも、犇めく戦闘員達を打ち払うには十分だった。

それらを掻い潜つて近付く者を、電王やメテオ、ビーストの広範囲攻撃が弾く。

FULLCHARGE!

『Kriegsbeil Boomerang!』

SaturnSorcery!

「おら、吹っ飛べ!」

Jabberwocky, Flame, Flame, Cloak

Go!

SaberStrike!

「合わせ技でドーン!、って三つかよ!」

電王の手から放たれたハルバートが、まさしくブーメランと化して

弧を描きながら戦闘員を吹っ飛ばし、メテオの右手に土星の輪をイメージした光の輪が生じ、それを戦輪（チャクラム）宜しく周囲の戦闘員達を薙ぎ払い、赤いシヨルダーケープを纏ったビーストの振るうダイスサーベルから、炎で形作られたドラゴンが三体飛び出し戦闘員を巻き込み爆ぜる。

そうやって、学生の一団が港に辿り着いた時、貨物船が接岸している周辺には既に戦闘員の姿はなく、クリアニング中と思しいG3―Xが二人、急げとばかりに手にしたサブマシンガンを振って見せた。

赤色でG3―X・PH005と書かれているG3―Xに向かって、電王が声を張り上げた。

「本音さん、こいつら頼みますー!」

「おい、何する気だ、お前!」

「殿（しんがり） つすよ、解ってるでしょ!」

特殊シールドを構えた機動隊の隊員が壁を作り、その隙間から高校生達を通らせ、後方の貨物船へと移動させる。

キバ、ビースト、メテオ、555、HOPPERの五人は、居並ぶ機動隊員達と学校の仲間達が船に乗るのを警護するべく周囲に散開する。そして、オーズと鎧武、他のArmored Rider達に船内と周辺を警戒するよう伝え、電王は島の方へ向き直る。

ハルバートモードのデンガツシャーをガンッとコンクリートに突き立てたかと思うと、電王は追い継ぎする戦闘員達を睨み付けた。

「ああ、もう。嫌だなあ」

『閃、私が代わろうか。そろそろ辛いのだろうか?』

「そう言う訳にはいかないよ。これから、こう言う組織がまた現れたら、同じ事で躓く事になる。」

それじゃあ駄目だ。それ言っちゃったら海斗はどうするよ。

あいつにしてみれば、乳飲み子の頃から可愛がってくれた人達の、これはあったかもしれない未来なんだ。それと戦う事を覚悟の上で《仮面ライダー》になったあいつと付き合おうと決めた俺が、今ここから逃げられるもんか」

殺到する戦闘員の波を前に、仮面ライダー電王はガンと己の額に拳

を打ち付け、改めてデンガツシャーを掴んだ。

その頃、仮面ライダーアギトとクウガは目の前で起きた事に絶句していた。

二人は蠟螂怪人セロ少佐を追い詰め、あと一撃と言うところまで来ていた。

「クウガ!」

「おう!」

二人の足元に、それぞれを象徴する紋様が光で形作られ、その光を纏ったまま同時に渾身のキックを放った。

だが、インパクトの瞬間、セロ少佐は近くにいた梟女を掴み自身の盾にした。

「え!?!」

「何だ?!」

「あ、ああ、そんな、死に、たくな、ああああアアアツ!!」

悲鳴と共に燃え尽き、灰となって砕け散ったオルフェノクの姿に、ライダー二人は一瞬セロから意識が逸れた。

それ幸いと、セロは動きの止まった二人に向かって、光弾十数発を撃ち込みその場から遁走した。

が、その光弾を、二人は鏡写しの如く並んで構えを取るや、全て弾き飛ばした。

赤心少林拳の奥義の一つである、『梅花』を共に習得しているからこそ可能な技である。

「あんの、卑怯者があ!」

肩で息をしながら、クウガが唸る。その横で、大きく息を吐きながらアギトも呟く。

「ああ、もう、話に聞いたヨロイ元帥とか、呪博士とか、指揮官として二の線三の線って奴だね、あれは」

「ったく、行こうぜ、多分もう皆船に乗った筈だ」

「ああ。」

って、待って、クウガ。あれ、コアボイルダーだ」

相棒が指さした方を見て、クウガもおやつと言うように首を捻った。

そこには、どうやら何処かに運び出すべく梱包しようとして、その直前で投げ出しましたと言う感じに放置されたコアボイルダー水上高速航行形態があった。

「あー、なある、祥のこいつを見つけて、闖入者がいるのに気付いて計画を早めたって事か」

「ある意味ありがたかったかもな。きっと、一週間の中日くらいに行う予定だったんだらうけど、その場合、千尋達の負担が洒落にならなかったらうし、下手打てば、死傷者も出ていたかも」

「不幸中の幸いと言う奴かね。まあ、やる事は変わらなかつただろうけどさ、大した被害を出さずに済んだって事は良しとして良いんだらうな」

相棒の言葉に「違うない」と返し、アギトはコアボイルダーに近付き状態を調べ始めた。

クウガの方も、コアボイルダーを固定する途中だったらしい木材を外しに掛かった。

ホテルのある、島の奥の方から火の手が上がったのはその時だった。

ちょうどその頃、戦闘員との連戦が途切れ、息を吐いた電王と他のライダー達が集まり退避を始めようと話したその時、どんつと足元から振動が伝わり、同時に電王とHOPPER、キバとビーストとは『S. A. U. L』からの通信を聞いて動きを止めた。

『S. A. U. L』中央管制室（センターコール）TOP—Kより各員、勝義島西岸より火災発生、ホテルとみられる施設群が爆発炎上中。証拠隠滅の為、施設自爆を図った可能性が高いです、速やかに脱出を。

『S. A. U. L』隊員は、保護した高校生の安全を第一に行動して下さい。『仮面ライダー』も、民間人保護をお願いします』

「まじか……」

通信を聞いて、思わずそう漏らしたのはキバである。

思わず背後を振り返り、そのまま走り出そうとしたビーストを、H O P P E R が慌てて引き留める。

「ちよ、ビースト！ 何処へ!？」

「ホテル！ 監督達が！」

ビーストの声に、他のライダーもはつとなる。

だが、それに向かって「落ち着け！」と一喝し、電王は弟分でもある面々に向かってこう言った。

「大丈夫、海常と秀徳、陽泉と桐皇、洛山の監督さんやコーチの人達は、眠らされて小舟に詰め込まれて漂流させられてるところを、《ホークアイ・ホールディングス》のクルーザーが保護したよ。

乗船してたお医者さんが命に別状ないってつき、だから、俺達も撤収だ」

「小舟って、」

「釣り船より大きいくらいの奴に、拘束なしで放置されてたそうさ。尤も、監督さん達の中にまともに操船出来る人間がいないと嵩を括っていたようで、船そのものに故障とかは無かったらしいよ」

実は、無事に戻る事で世間の非難を全て、指導者の彼らに被せるつもりだったのではないかと何人かは睨んでいたが、電王こと香山閃は高校生の弟達にそれを伝えるつもりはなかった。

取り敢えず、G3-Xが腕を振るのに答え、電王は仲間達を促し貨物船へ乗った。

最後に緑のナンバリングが入ったG3-Xが乗り込むと同時に、船とも思えない速度で岸壁から離れた。

乗り込んだ面子の中に、アギトとクウガがいない事に気付いて、慌てた声を上げたのは誠凛の福田寛だった。

「あ、あの、クウガとアギトは？ いないみたいなんですが」
「え？」

後輩の言葉に、まだアーマーを脱いでいなかった鎧武が周囲を見回した、その次の瞬間。海上から見える港の倉庫が爆発炎上した。

それなりに陸地から離れていたものの、仕込まれていた爆薬が洒落になっていなかった様子で一瞬船体が揺れるほどの衝撃が襲い、高校

生と新人らしい警官からくぐもった悲鳴が上がった。

「うお、マジか、奴ら！」

「清々しい悪役っぷりだが、洒落にならん！」

装備を脱ぐ為にGトレーラーへ乗り込もうとした各務兄弟が、タラップから落ちそうになって慌てて手すりに縋り付く。

機動隊の班長と話していた本間も、爆音と衝撃で踏鞴を踏んだ。だが、それでも咄嗟に操舵室に速度を上げるようインカムで怒鳴っていた。

軽くパニックになっている高校生達に、落ち着くように声を掛けていた555が、島の方から回り込む小さな影に気付いた。

「あれは!?!」

「水上バイク?」

555の声にそちらを見たオーズが、高速で近づくそれに首を捻る。

その声に通路に出たHOPPERが、近づく存在を見て喜色満面に飛び上がった。

「クウガだ! 俺のコアボイルダーに乗って来てる!」

「!?!?!」

ドドドツと、ライダーとその他何人かが同じ場所に殺到し、HOPPERが勢い宙へ押し出されそうになる。

その様子を見上げ、スプラッシャーを軽快に操りつつクウガが手を振る。その横へ、空中を赤銅色のホバーボード——これが、変形したバイクと思う者は、初見ではないだろう——、トルネイダー高速滑空（スライダー）モードで滑りながらアギトが並ぶ。

「?。(。D。ノ)ノウワツ、カッコいい!」

「アギトもクウガも無事だった!」

「さっすがあ!」

思わず警官の一人が漏らした声を耳にして、桜井と福田が手を取り合う。

クウガのハンドサインを見て、アギトも船の通路甲板に居並ぶ人々に手を振って見せた。

そして海上を走る二人は、貨物船を追い越し先に進んだ。

二人が進むその先に、一隻の大型クルーザーが見えた。

その甲板では、学生達に見覚えのある人物達が一杯に手を振っているのが見えた。

「監督だー！」

「どうしてあそこに」

「どうやら、邪魔者って事で船に乘せられて流されていたらしい。ここに向かっていたあの船が、途中で見付けて保護したんだ」

何人かの三年生に、電王が説明してやる。

騒ぎで皆聞きそびれたが、貨物船と大型クルーザーが近づく頃には最後の爆発が起こり、勝義島を包んだ炎は殆どの建築物と植物とを燃やし尽くしていた。

こうして、《S・A・U・L》の事件記録のみに記録され、世間には火災事件としてのみ公表された事件は終結した。

「あら？ 何かしら、これ」

東京に戻って、《ホークアイ・ホールディングス》が手配してくれたホテルで健康診断と事情聴取を受けた後、説明大会と称してホテルで全員一泊した——クウガとアギトは、《S・A・U・L》での報告書作りがあるからと帰ってしまったが、素顔の二人は片やベビーフェイスの美少年、こなた隣のお兄ちゃん的好青年と言う取り合わせで、実測と一部面々がどぎまぎしていた——、バスケット部員たちはそれぞれの家、または学校へと戻っていった。

そうやって、自宅に帰った相田リコは、号泣する父を宥めつつ自室に入り、荷物を広げていた。

殆ど広げる事無く持ち歩くだけだった荷物の中身を、元のタンスの戻そうとしていて彼女はそれに気付いたのだ。

「金色の、果物。なんだかりんごみたいだけど、本物じゃあ、無いわよね？」

手に持ち、何度も角度を変えつつ眺めるが、金色のりんごのようなもの、としか思えなかった。

暫く悩んで、リコは深く考える事を止めた。何となくだが、危ないものと思えない事と、明日日向順平に相談すれば良いと思ったからだ。

「ま、生物じゃないようだし、此処に入れておけば良いわよね！」

明日、順平に検査して貰うよう頼めば良いし、うん」

飾り棚の上の段にそれを置くと、リコはそのまま片付けを再開した。

彼女が、その金色のリンゴの事を思い出し検査に持ち込むのは、これからずつと後の事になる。

そう、これが異次元のとある世界に存在する『ヘルヘイムの森』に生じる『禁断の果实』であり、彼女はそれを『王』に授ける『始まりの女』に選ばれた事を、彼女自身もまだ知らない。

ほぼ同じ頃、赤司征十郎は東京の自宅にいた。

自宅は、現在大騒ぎであった。

何しろ、提携したばかりの会社が犯罪結社のダミー会社だったのだ、警察からのあれやこれやで本社に捜索が入ったのだと言う。

大人の騒ぎに背を向け、征十郎は自室に入ると、扉に鍵を掛け、ベッドに座って息を吐いた。

正直、事件の渦中であって命の危機を感じた身からすれば、その元凶に騙され事態のお膳立てに片棒を担いだ父親の顔など正面から見たいと思わなかったし、会社の長として取るべき責任は取って貰わなければ、同じように巻き込まれた先輩や同輩達に申し訳ないとも思っただ。

そして何より、今征十郎はやりたい事があった。

スマホを取り出し、電話帳に記録したまま長らく触っていないかった番号を呼び出す。

まだ就業時間だったが、相手はすぐに出てくれた。

そして、征十郎は声が震えないよう、気を配りつつこう声に出した。

「大変ご無沙汰しています、鴻上の伯父さん、征十郎です。

不躰で申し訳ありません、でも、以前伯父さんが仰った事を覚えていらつしやいますか？」

『やあ、元気そうだね、征十郎。お前が言っているのは、今年の正月に会った時の事だね。』

勿論、覚えているとも！

そうやって言つて来てくれると言う事は、お前にもどうしても叶えたいが、自力では難しい夢が出来たと言う事だね、素晴らしい！』

「ええ、伯父さん」

そう言いつつ、征十郎が思い浮かべたのは三人の仮面ライダーだ。

一人は、迷惑を掛け通しだった先輩であった黛千尋が変身した、『仮面ライダーキバ』。

中学時代、不要と切り捨ててしまったが実は誤解ばかりだった灰崎祥吾が変身した、『仮面ライダーHOPPER』。

最後は、自分を守る為に『Armored Rider』のベルトを手にした実渕玲央。彼、は戦極ドライバーの被験者として、『S. A. U. L』に仮登録してベルトの実験を手伝う事になった。あくまでも、ベルトの性能テストの為であり、仮面ライダーそのものになる予定はないとの話だった。

「伯父さん、俺は仮面ライダーになりたい。

世界平和なんて大それた事は言わない、それでも、傍にいる友人達を守るだけの力が欲しいのです」

少し間が開いた。

だが、すぐにスマホ越しでも響き渡るような『Happy Birthday!』が飛び出した。

『征十郎、お前の新しい欲望を祝福しよう。』

近いうちに私の会社に来なさい、見せたいものがある！』

「判りました、春休みには必ず」

通話を切ると、征十郎は窓から外へと目をやった。

庭の木々は一見すると冬枯れたままのようだったが、幾つかの木は芽は確かに大きくなっていて、やがて来る春を待ち望んでいるかのよ

う
だ
っ
た。
。

Thread capture Let's Go
! Masked Rider, s!!

01. 201X年3月11日、午後

一番広く日当たりの良い部屋が、滝家の居間兼ダイニングだ。

少ない時で六、七人、多ければ一四、五人が集まるこの部屋の、造り付けの棚の上には、一輪差しと一つの写真立てが飾られている。

そこに写っているのは、この家の家長と一〇人の二〇代半ばから後半ぐらいの男達だ。

彼らが、世に『伝説』と呼ばれる一〇人ライダー達であり、この写真はあの二〇数年前の『バダン戦役』の時に唯一全員揃った際に撮った、素顔で写った一枚っきりの写真である。

この写真に、滝家の長男は必ず食事を供え、それを下げて食べている。

『仮面ライダー』の肩書を担ぐ事になって二週間。世間はその間に、卒業シーズンを迎えていた。

火神大我は、体育館の設備点検で部活が休みになったのを利用して《S. A. U. L》で活動についての研修を終えた後、小学二年生以来かれこれ一〇年振りに、滝家を訪れた。

学業もとい、バスケットボールを優先したいと希望を出した大我に対し、周囲が名前を登録し第二級警戒時のみ出動要請が出るという形で登録するよう勧めた。高校生ライダーは、灰崎祥吾以外皆そうしているし、大学に進む面子も殆ど継続している。

滝家へは、以前はそれこそ週三日は泊りに来ていたが、父の海外転勤に付いて行きそこでの事件によって一種の記憶障害に苛まれていた大我は、以来ずっとこの家を訪れた事が無かったのだ。

今日は、連休で祥吾が、また大学進学で黛千尋、福井健介の二人が戻って来ている事を聞いて、懐かしくなった大我が、久方振りに滝家を訪れたのだ。

因みに、レイヴ@黒子はと言うと、黒子テツヤから布教されたマジバのバナラシエイクに嵌り込み、某社から進呈されたシエイク無料券百枚綴りを握って出掛けている。

何故かそのまま黒子を宿主に定めたレイヴと、黒子とは何時の間にか協定が出来上がったようで、ネットの使用を助ける——回線名義などを貸してやる事になったらしい——以外は基本黒子の生活を邪魔しない事になっているらしい。

相棒と怪人の二人連れを案じつつも、大我は駅三つ先の懐かしい家へと向かった。

高層マンションのエントランスに設置されている、各部屋へのインターフォンの中から滝家の物を押すと、一瞬おいて返事があった。

今日は自宅にいたらしい滝海斗に、歓迎の言葉を貰った大我は、そのままエレベーターに乗って最上階へ向かった。この全フロアが、滝家となっているのだ。

玄関から入って、ちよつと長めの廊下を歩いて突き当たりのドアを開くと、そこがリビングダイニングだ。

一〇年前と、殆ど変わらない室内を見回した大我は、棚の上の写真立てと一輪差しとに気が付いた。

あれはまだ、幼稚園に通っていた頃の事だ。

大我は『祥ちゃんのお父さん』が、棚の上にお菓子やおかずをおいて、少ししてから下ろして食べているのを何度も見た。

それで棚の上が気になり、ある日、居間に誰もいないのを良い事に、よじ登って見てみようとしたのだ。

ところが、元々精々耐荷重二キロ少々だった棚は、幼稚園児でも大柄な彼の体重に耐えられずあっさり棚板が外れ、大我は足場にしたソファアーに転げ落ち写真立てと一輪差しとは床に落ちた。

ガツシャンツと大きな音を立てて、割れた陶器とガラスの破片が床に散らばった。

当然、大きな音に隣の書斎で仕事をしていた、『祥ちゃんのお父さん』が慌てて飛び出して来た。

だが、『祥ちゃんのお父さん』は怒るより先に大我に動かないよう言

うと、掃除機を取って来て破片を全て吸わせて花を別の花瓶に挿すと、壊れてしまった写真立てから写真を取り出した。

その間に、徹子と芽衣子の二人のお姉さんから叱られ小さくなっていた大我の頭を撫でると、写真を見せてこう笑った。

「これは、おじさんの友達の写真なんだ。」

遠くに出掛けて中々帰って来ない人の為に、食べ物をお供える事を『影膳』と言うんだ。

おじさんの友達も、遠くに行っていて中々帰って来ないからね。彼らが旅先から無事に帰って来れるようにって、願掛けしていたんだ。

「これで納得したか？」

その言葉に頷いた大我を、『祥ちゃんのお父さん』は笑って撫でてくれたのだ。

一〇年振りに見た写真は、明るい部屋に置かれていた為か、記憶よりの色が薄くなった様子だった。

だが、思わず手に取って見た大我は、以前は思いもしなかった事に気が付いた。

「いらつしやい、大我。もう少しでアップルパイが出来るよ」

「あ、海斗兄ちゃん、皆は？」

「千尋と健介は、新しい服や雑貨を買いに行ったよ。祥吾は、コアボイルダーの定期整備でガレージに行ってる。」

他の皆も、それぞれの理由で出てるけど、後一時間もすれば帰って来ると思うけど、どうしたの？」

手を拭きながら、居間に移動して来た三つ上の『兄』に、大我は手に持つ写真立てを差し出しこう言った。

「海斗兄ちゃん、若い頃のおじさんに似て来たな、です」

「そりゃあ、親子なもの」

「で、こつちの帽子被った小柄な人、空兄ちゃんそつくりだな、ですつと」

「え？」

『弟』の言葉に、海斗は改めて写真を覗き込んだ。

記憶を探って、その人物の名前を引っ張り出すと、海斗はこう伝え

た。

「ああ、この人は一文字隼人さん。

父さんを挟んで反対側に写っている本郷猛さんと二人して、一〇人の中でも付き合いが長かったそうだよ。

それと、父さんの口ぶりじゃ、この人が一番の友達だったみたいだったよ?」

「はあ。あ、一文字と言う事は、空兄ちゃんのお父さん?」

「え? ああ、うん、そうだね」

「そつか、お父さんかあ。どおりで、兄ちゃんにじやれてる時の空兄ちゃんと同じ顔してら」

「そうかな?」

「え、気付いてなかったの、兄ちゃん。この顔、空兄ちゃんそっくりだぜ?」

そう笑って、大我は写真を指差した。

写真の中のその人は、横に並んだ親友が大好きだと、身体全体で示そうとするように笑顔で抱き付いていた。

牛乳が足りないと言う事で、お使いを申し出た大我が手近なコンビニへ行こうと歩いているところ、ブツブツ呟きつつ歩いている黒子テツヤ@レイヴを見掛けた。

察するところ、シェイクを多く飲む為歩いて消化を促しているのだろう——恐らく、歩く体力を提供しているのはレイヴの方だ——姿を見掛け、大我は頭を掻いていた。

取り敢えず、こんなところまでシェイクを求めてほつつき歩いて二人?を呼び止めようとしたその時だった。

大我の斜め前を、五十代ぐらいの女性が歩いていたのだが、その彼女を見るからに異形が襲ったのだ。

大我は、それが何かはよく覚えていなかったが『未確認生命体』である事は解った。あの島で見掛けたどれとも違う空気のそれは、三体一組で女性を襲うや、その女性の体に次々と飛び込んだのだ。

あっと思う間に異形は消え、女性はそのままアスファルトの上に倒

れた。慌てて駆け寄り、大我が抱き上げるとその女性の袖口からザラツと砂が溢れた。

「火神君！」

『おい、何だ今の奴は！』

「黒子、レイヴ！」

二人？が駆け寄って来るが、急に何かに驚いたように足を止めた。えっと大我が思ったその背後に、それは現れた。

フーンと、甲高い電子音風の汽笛を立てて空中から現れた列車が、大我の背後で停車した。

振り返って、思わず固まった大我の視線の先に、朱い狼を思わせる未確認生命体《イマジン》と二十歳位の青年が降りて来た。

その青年は、大我にとって兄貴分の一人であり、《仮面ライダー電王》である香山閃だった。

弟分と、その友人αにちよつと眉を顰めたものの、相棒である朱い狼に促され閃はカード状のものを、気を失っている女性の額に翳した。そのカードの表面に、1971/11/11/11と言う数字が浮かび上がった。

「1971年11月11日？　こりゃ、随分昔に飛びやがったな」

『閃、急いで追わなければ。四〇年近く昔ではないか、これだけ時代が離れていると、どんな影響が出るか判らないぞ』

「判ってる。大我、すまないがその人をあそこのベンチに寝かせてやってくれ。この人はイマジンの被害者だ。俺達は、これから追跡パスを利用して追い掛ける」

焦げ茶の癖つ毛を掻き混ぜ、閃は女性を抱える弟分にこう言うと、ウルイマジン朱い狼と共に列車の中へと戻ろうとした。

それを見送ろうとした大我は、その二人が乗ったのとは別の昇降口から『時の列車』に乗り込もうとしている黒子@レイヴに気付いた。慌てて見付けたベンチに女性を寝かせると、大我も二人？を追って列車に駆け込んだ。

これが、気が遠くなるほど長い一日の始まりになるなど、火神大我

にも黒子テツヤにも知る由も無かったのである。

02. 1971年、そして

『時の列車』デンライナー二号車は、1971年11月11日へとひた走る。

その車両の中に食堂車の中で、この列車の専属電王である香山閃は目の前で正座する二人、いや三人を額を抑えつつ見た。

その背後で、車掌らしい制服制帽の人物が不機嫌極まりない声でぼそつと言った。

「普通の電車だつて、無賃乗車は犯罪だぞ、判っているのか、餓鬼共」
「あー、すみません、オーナー代理」

閃の詫びに、オーナー代理と呼ばれた人物はふんつと鼻を鳴らすだけだ。

仮面ライダーオーズこと、火神大我は恐縮して大きな身体を縮めるようにしていたが、横で同じく正座していた相棒がことごと自分凭れ掛かった事に気付いて、首を巡らせてそちらを見た。

クタリと、黒子テツヤは大我に頭を預けている。右腕に、片腕だけの存在であるグリードのレイヴがくつついていた筈なのにそれが消えて、頭の赤いメッシュも消えている。

あつと思つたその次の瞬間、ウルフィマジンが窓の外に気付いて声を上げた。

『閃、窓の外に籠手こてが!』

「え? 鏝こてこて?」

思わず、お好み焼きを引つ繰り返す方を思い浮かべた大我だったが、か細い相棒の声でそれが吹っ飛んだ。

「火神君、レイヴの奴、過去に行く列車なら、他のグリードが寝てる状態だから、メダルを稼げるって」

「はあ?」

「おいこら、『時の運行を守る列車』で何やろうってんだ!」

そう怒りつつ、だがそろそろ指定時間に到着することに気付いた閃は、バリバリと頭を搔くと大我にレイヴを捕らえるよう言い付けウルフィマジンのウォルフィと共に運転席へと向かった。

どうしようと、オロオロする大我に向かってオーナー代理の叱責が飛ぶ。

「その坊主はこっちで見ておく、お前は時間犯罪者になろうとしている片腕野郎をめて来い！」

「はいっ！」

バタバタと出て行く大我を見送り、オーナー代理は苛ついたように制帽を被り直した。

デンライナーの制御装置も兼ねる特殊バイク、デンバードで飛び出した閃こと仮面ライダー電王は、さほど掛からず可燃物が詰め込まれている倉庫でわさわさしている、三体のモールイマジンを見付け出していた。

『閃、いたぞー！』

「よし、速攻で決める、行くぞー！」

デンバードから飛び降りると、その勢いのままハルバードモードのデンガツシャーを振り被る。

電王に気付いたイマジン達は、慌てて火を放とうとしたがその前に最初の一振りで二体が吹っ飛び、逃げようとした三体目をデンガツシャーを軸にしたスピッキクで蹴り飛ばす。

もがきつつ起き上がったモールイマジンを、電王の着地と同時のデングアツシャーでの唐竹割りが捉えた。

三体全て爆散したところで、閃は変身を解いた。だが、先程と違い、焦げ茶の髪には朱色のメッシュが一房入り、黒みがかった緑の瞳が朱く染まっている。

黒子にグリード・レイヴが取憑いているように、閃にイマジンであるウォルフイが憑依している状態なのだ。

「さてと、片腕怪人を回収に行くか」

『ああ、大我と言ったか、彼に任せきりにしては遅くなりそうだ』

そう言い合い、二人はデンバードに跨った。

その頃、大我はフラフラ擲揄からかうように飛ぶレイヴを、必死に追い掛けていた。

「こら、レイヴ、戻れって！」

「ふん、せっかく心おきなくメダルを稼げそうなんだ、邪魔するな」
「そうは行くか、このヤロ！」

ガンつと、足場を利用して飛び上がった大我の右手が、レイヴの飾り紐を掴んだ。それをレイヴが振り払おうとした為、結果的に空中でバランスを崩した大我は、アスファルトの上に受け身を取れないまま転がる事になった。ちょうど、レイヴをプレスする形で。

その衝撃で、一枚セルメダルが転がった。

「ぐへっ！」

「この、やつと捕まえたぞ、この野郎！」

ぎゃいぎゃいと騒ぎながら、二人？は元来た道に戻って行き、間もなく独特な電子音を立てて『時の列車』はこの時間を立ち去った。

その、空中に消える列車を見送った黒い人影に、列車の人間は誰一人気付かなかった。

その人影が、手に鈍く光るメダルを持っていた事も、そして彼が華美な軍服に身を包んだ老人に異様な掛け声と共にナチス式の敬礼をした事も。

それは、突然現れ、物凄い勢いで街を壊そうとした。

金色の羽毛の鷹のような頭部と翼を持つそれは、ガスマスクを被っているように見えた。良く見れば、鷹の目の部分に蛇のようなものが突き出しているのが気持ち悪い。

迎撃の為現れたダブルライダーに向かって、そいつは一声雄叫び、飛び掛かって来た。

「シヨッカーー！」

新たな怪人の異常なほどの破壊力に、仮面ライダー一号二号は手こずっていた。

一号の技も、二号の剛力にも全く怯む様子もなく、逆にその臂力で振り払う。

「この怪人は一体」

「隼人、気を付けろ、こいつは今までの改造人間とは違うぞ！」

ライダーダブルキックを弾き返され、焦りを浮かべる二号に、一号ライダーは声を掛けつつ必死に相手の隙を探す。

だが、これまでの改造人間とは何かが決定的に違うのは解るのだが、その違いの要因を掴めないでいた。

「ライダー、一端撤退だ！」

「滝?！」

背後からそう声を掛けたのは、ジーンズにTシャツのすらりとした青年だった。

仮面ライダーの協力者である彼、滝和也はショッカー壊滅を任務とするFBI捜査官である。

「こいつ、改造人間じゃないかもしれない、一遍下がって捜査し直そう」

一号の側まで駆け寄った彼が、そう言ったその時だった。

音も立てずに、滝の背後に回った怪人、ショッカーグリードの鉤爪が、背中から胸まで刺し貫いた。

「かはっ」

「たきっ?」

「滝……!!」

口と胸の傷から、大量の血を溢しそのまま崩れ落ちる青年に、一号も二号も手を伸ばさず。

だが、そんな二人に、ショッカーグリードの容赦ない攻撃は続けられ、そして。

そして、仮面ライダーはショッカーの軍門に下った。

03. 変わり果てた世界で

時の列車、デンライナーから降ろされた火神大我は、周囲の風景に違和感を覚えた。

確かに、あの時の広場なのだが、ベンチに寝かせた老婦人がいなくなっている。

電王こと香山閃によると、デンライナーに乗った数分後に戻って来た筈だと言うのに。

『どうした大我、馬鹿面晒しやがって』

「何だと、レイヴ」

「火神君、あの旗なんでしょう?」

「え? あれ、あんな旗、さつきあつたか?」

赤い鳥型をした欲望の化身が取り憑いた、相棒の指差したのは時間移動前には存在しなかった筈の、鷲のエンブレムを染め抜いた黒い旗だった。

それは権威を誇示するように、何枚も青空に翻っている。

まるで、何処かの独裁政権を思わせるその光景に、流星に大我も眉を顰めた。

「一体何があつたんだ?」

その疑念は、人々が行き交う街中に入ってさらに大きくなった。

何だか、人の数が減ったような気がする。道行く人々の服や荷物にも、鷲のエンブレムがついているのは気の所為だろうか?

首を捻る大我の横で、見覚えのないメダルケースを開いていた黒子テツヤ@レイヴがぶつぶつ言っている。

グリードと言う存在は、己自身であるコアメダルと、エネルギー兼身体の構造体であるセルメダルとで構成されている。

先程レイヴは、競争相手である他のグリードがいない——時間的にまだ眠っているからだ——過去の時代で、セルメダルの荒稼ぎを目論んだのだが、大我達に阻止されたのだ。だが。

「それ、何だ? 黒子、レイヴ」

「あの騒ぎの前、火神君を見掛ける前に。パッドPCを持ったお兄さん

から渡されたんです、君とレイヴへのプレゼントだって。ええっと、火神君は《鴻上ファウンデーション》って知りませんよねえ？」

『変なオヤジだったな。パッドに映った途端「Happy birth day!」だぞ。周囲の目が痛いつたら』

「いやいやいや、待ってくれ。《鴻上ファウンデーション》!? 何であの会社が、俺にプレゼント!？」

知らない事を前提に話し始めた黒子と、衆目を集めた事にむくれるレイヴと、ここ数年父とその勤務先の会社とが揉めている『日本三大何創っているか判らない大企業』の名前に大我が頭を抱えたその時だった。

物陰から、二人を伺っていた小さな影が二つ、示し合わせたように一気に走り出した。そして、体当たりで黒子@レイヴ——レイヴが表層に出て来ているので、ミスディレクションが消えていたらしい——の体勢を崩すと、その手の中からメダルケースを攫って、もう一人は大我のポケットから財布を抜いて逃げた。

「あー！」

俺のメダル!!」

「あ、ちよっと、財布!?! お前ら待てー！」

一目散に逃げる二人の子供を、黒子@レイヴが追うのを大我が更に追う。

命とほぼ同等であるメダルを持ち逃げされて、完全に逆上しているレイヴを黒子が宥めようとしているが効果が無いようだ。二人? を追っている大我は、だが彼らを全く気にしない人々と、無表情に二人を監視する人々を目の端に見て取り、うそ寒い思いをしつつ走った。

手馴れているらしい二人の子供は、ジグザグに路地を走り抜けていく。

その後を追ううちに、周囲の風景に大我はとある事に気付き眉を顰めた。

小学生の頃一時期、緊急支援の一環でアジアやアフリカの所謂紛争地域へ出向した父に無理を言って、その地方について行った事があつ

た。無論、《ホークアイ・ホールディングス》の警備部門の同行する場所までしか、付いて行く事は出来なかったが。

その際、物資輸送に車両に乗せて貰って貧しい村々も何度か回ったが、活動拠点としている首都や大きめの街にいる事が殆どだった。

戦時下の街は、表向き賑わっていても街のそこそこに、戒厳令下の空気の荒れや緊迫感、そして住民の疲労や悲観が漂っていた。

この町にはそれと同じ空気がありそして、壁が途切れた先に広がる光景に大我の足が止まった。

そこは、記憶が正しいなら滝家のあるマンションが建っていた筈だ。

だが、そこには今にも崩れそうな家々が並び、浮浪者同然の格好の人々が身を寄せ合っていた。

まるで太平洋戦争後か、紛争地のようなスラムと化した町の中、嗚然としている大我の耳に、「シヨツカーの秘密警察だ！」と言う叫びが届いた。

「シヨツカー?」

何処かで聞いた事があるような、そう思っている大我の目の前に、パトカーが二台やって来た。

普通のパトカーと違うのは、車体に書かれているのが警視庁ではなく、SHOCKERS | PORICEと言う文字だったところと、中に乗っていたのが刑事らしい人間が二人と、黒尽くめに白く骸骨を染め抜いたスーツを着た面々——戦闘員だと言う事だ。

パトカーが現れた途端、人々は蜘蛛の子を散らすように隠れてしまった。

戦闘員達は、ナイフを振りかざしつつ大我の方へと近付いて来る。

『バカガミ! 早く来い、そいつらこないだのと同じ連中だろうが!』
「だあ!!」

苛立ち交じりのレイヴの声に引っ張られるように、大我也足を速める。

その背後で、刑事と思われた男達が姿を変える。一人は、クリーム色の山椒魚が爬虫類になったようなイメージを与える怪人、もう一人

は緑色をベースに派手な色遣いの甲殻類に蝙蝠の被膜をくっ付けたような怪人になった二体は、戦闘員を先行させてゆつくりと四人（見た目）を追い掛ける。色が薄い方はザンジオー、殻付き蝙蝠はガニゴウモルと言うが、大我と黒子、レイヴは知らない事である。

先に立って逃げていた二人組のうち、大我の財布を持って逃げた少し小柄な方が足をもつれさせて転んだ。手に握っていた財布と、目深に被っていた野球帽が飛んで、某キセキのリーダーとは違う緋色の髪が溢れた。

「天馬！」

「いてて……」

「この、追い付いたぞクソガキ！」

転んだ少年にもう一人が駆け寄ったところを、追い付いた黒子@レイヴが捕まえる。

自分と仲間の腕を掴んだ、数センチしか背の違わない相手の手を、薄汚れた元は白かったろうパーカーを羽織った少年が噛み付こうとする。

その、野良猫同然の荒んだ少年を殴り倒そうとした怪人を、追い付いた大我がその小さめの頭を全力で握って止めた。

「人の相棒の体で、何してやがるんだよ！」

『ち、もう来たのかよ』

「か、火神君、バイクスローなんだかアイアंकロウなんだか判りません、痛い痛い」

騒ぐうちに、彼らは戦闘員に囲まれてしまった。

じわじわと、包囲を狭めていく戦闘員に舌打ちすると、黒子@レイヴが大我にメダルドライバーと三色のメダルを差し出す。

『ほらよ』

「あー、レイヴ、何時の間に！」

「落ち着け黒子。取り敢えず、適当に削って逃げるぞ。」

変身！

タカ、トラ、バツタ！

Ta, To, Ba, t a t o b a T A T O B A !

スキャナーを滑らせ、赤、黄、緑の光が大我を包み、その姿が変わる。

黒いボディに、三原色が鮮やかな見知らぬ存在に、少年二人とSHOCKERの怪人達が戸惑い悩む。

それに向かつて、大我は半ば自身に言い聞かせるようにこう名乗りを上げた。

「仮面ライダーオーズ、行くぞー！」

「仮面ライダーだど!? 構わん、殺せー！」

甲殻蝙蝠ガニゴウモルの一声で、わつとばかりに戦闘員が押し寄せ。相棒が中学生ぐらいの二人を、物陰に引つ張っていったのを確かめ、オーズはトラクロウを構えて有象無象を迎え撃った。

一応、小学二年までではあるが、火神大我も赤心少林拳の門下生として修練に参加していたし、アメリカ時代兄弟分だった相手の影響で多少なり護身術を身に付けてはいた。だが、それまで喧嘩らしい喧嘩をした事無かったにも拘らず大我が戦闘員を一蹴出来るのは、《オーズ》ことメダルシステム故である。

一人で軍団を相手取る事を想定されて構築された、錬金術の精華であるメダルシステムによる超人化は、改造人間との戦闘に十分効果を發揮していた。いや、戦闘員に関して言うなら、マスクの下で大我は戸惑っていた。

今回の戦闘員の方が、前回あの勝義島で対峙した連中より脆い気がするのだ。

腕の一振り、蹴り一撃で吹き飛ばされる戦闘員達を柱の陰から見ていた黒子も、同じ事を感じて首を傾げたが、赤毛とパーカーの少年達が零した言葉に驚く事になる。

「仮面ライダー? あんな仮面ライダーなんか知らない」

「つてか、仮面ライダーはショッカーの手先じゃないか、何で俺達助けようとするんだよ!」

「『え!?!』」

驚いた黒子@レイヴが聞き返そうとした、その時だった。

「仮面ライダーが来たぞー！」

ざっと、戦闘員の壁がモーゼの十戒の如く左右に割れた。

そこに、赤い複眼にアンテナが触覚のように揺れる、二人の異形が建っていた。敢えて言うところ、銀のグローブとブーツの方は両手を拘束する手枷が嵌められ、赤いグローブとブーツの方は鎖付きの枷が四肢に着けられた状態だ。

枷はともかく、この二体が仮面ライダー一号二号である事は、大我也黒子@レイヴも知っている。だが。

「あれ、待って下さい、一号二号どころか、クウガより前のライダーはBADAN大首領との決戦の為に異次元へ出掛けていて、まだ帰還してない筈じゃ」

『と言うより、あれは寧ろ捕虜か何か見えるがな、俺には』

「何言ってるんだよ、仮面ライダーはこの四〇年、シヨッカー最強の怪人として人間を襲った悪魔だよ！」

「何だって!?!」

パーカーの少年の言葉に、オーズの意識が一瞬横に逸れた。

それを咎めるように、手枷を外された銀のグローブ——一号と、枷を付けられたままの赤いグローブ——二号とがオーズへと飛び掛かった。

一号の蹴りと二号の拳は、咄嗟に身を振って交わしたものの、その直後に叩き込まれた回し蹴りに反応が遅れた。

よろめいたところを、二人同時のラッシュを受け、堪らずオーズはガード態勢を取る。だが、同時に大我はおかしいと感じた。

大我也もまた、かつて滝家に泊まりに来ては、夕食時に家主のお話に付き合っていた。

『有象無象の怪物達。家の壁なんて簡単に引き裂き、車もあつという間にスクラップだ。』

そんな奴らを、相手取って戦ったのが仮面ライダーだ。軽くビルを飛び越え、鋼鉄の柱だって簡単に捻じ曲げる事が出来る。

彼らは怪物達と同等の力を、子供やお年寄り、怪物と戦う術の無い人々の為に使ったんだ』

そんな話を聞いていた事と、あの嘘合宿事件の直後、変身したまま

の兄貴分達と軽く手合わせした際の感触で、《仮面ライダー》の力と言う物を確認していた。

おじさんから聞いた以上のものを感じて、思わず息を呑んだ大我に向かって、《新生》と称されるライダー達の第一号となった滝海斗は笑って言ったのだ。

「力は、心に左右される。岩を砕くような力も、心が定まっていなから表面を削るのがやっとなる。

そして心の強さと言うのは、冷酷になる事じゃない。やると決めた事を、けして揺るがずやり通す事だ。

その辺は、大我は出来てると思うよ。だから、冬の大会の大一番で、逆転勝利が出来ただろう？」

然るに今、伝説の仮面ライダー一号二号である筈の彼らの、攻撃はどうだ。

確かに、当たれば重い。オーズになっていなければ、きっと死んでいるだろう。

だが、それだけだ。資料の方は頭に残っていないが、おじさんは一号ライダーは必殺技を大量に持つ技巧派で、二号ライダーは力が強い事を良く喧伝されるが、柔道空手の段持ちで決して力だけの男じゃないと話していた。しかし今大我の前にいる二人の仮面ライダーは、ひたすらに拳を振るい、蹴り付けて来るだけの存在でしかなかった。

——一応の補足を入れるなら、大我がほんの数年とは言え格闘技経験者であり、高度な技術を持つバスケットボール選手であり、まだ解明されていない錬金術科学による、メダルシステムの超人化によってそれらが引き上げられている。

そして、学校には伏せてあるが実はこの二週間間に、数回メダルの怪物ことヤミーと戦い撃破していた事で、若干の経験値を積んでいたが故である。

手足に長く垂れた鎖を掴んで、オーズは二号の足をそれで払って転がし、そのままその鎖で一号の拳を止めた。

それを傍で見ていたザンジオーとガニコウモルが、焦ったように周囲の戦闘員に攻撃を命じようとしたその時だった。

「つつ、うわああああああああああああああああ!!」

突然の絶叫に、全員の動きが止まる。

声の主は、仮面ライダー二号だった。

蹲り、頭を抱えていた二号は、やおら立ち上がるや周囲に居る者全てを薙ぎ払い始めた。

壁を、コンクリートの柱を、そして戦闘員達を振るった拳や足、鎖が粉碎する。

「ああああああああ! ううああああああああああ!!」

「な、何事だ!?!」

「また二号が暴走したぞ!!」

「ええい、一号、二号を抑えろ! 他の者であの黒いのと餓鬼どもを捕らえろ!」

騒いでいる怪人達の間を縫って、オーズは二号が見て暴走した自分の財布を拾い上げる。

落ちた拍子に開いた、二つ折りの財布のパス入れのところには、ついこの間兄弟分一八人で撮った写真を入れておいたのだ。

二号ライダーの悩乱に、少年二人と黒子も戸惑いを隠せない。が、その間にパーカーの少年からメダルケースを取り返したレイヴが、黄色系のメダル二枚を取り出し、オーズへと投げた。

「あ。お前!」

「うるせえ、おい大我、こいつを使え!」

「うおっ、え? ライオンと、豹?」

「良いから入れ替えろって!」

急かされ、大我はドライバーのメダルを入れ替え、スキャナーを滑らせた。

ライオン、トラ、チーター!

Ra-Ta, Ratarata, RaTorartar!!

胸部に付いた円形プレートが、三原色から黄色系トリコロールに変わる。

同時に、頭部に集まるエネルギーを、オーズは怪人達に向けた。同時に、大型フラッシュを複数焚いたような閃光に周囲が染まる。

咄嗟の事に、目眩ましを避けられなかった怪人戦闘員達が混乱を起こしているところを幸いと、オーズは両脇に少年達を抱え、背中に相棒を背負った姿でその場を脱出した。

ありがたい事に、チーターのメダルによって生成されたチーターレッグは、超加速で走り抜ける事が出来るものだった。

04. 時間の名残と奪還の為に

怪人と遭遇した先から軽く一キロほど走り抜け、火神大我こと仮面ライダーオーズはラトラーターコンボを解除し基本フォームに戻った。

はあと、溜息を吐いたオーズの腕から降ろされた少年のうち、白っぽいパーカーを着込んだ方が足を蹴り付ける。

特に何と言う事も無いが、野良猫同然の反応を返す相手に困っている大我に、見かねたように黒子テツヤが口を開いた。

「取り敢えず、状況を整理しましょう。」

君達は名前を言えますか？ 僕は黒子テツヤ、横の人は仮面ライダーの一人でオーズこと火神大我君。

大喰らいで勉強が苦手で、お化けと犬が怖いと言う欠点がありますが、駆け出しヒーローとしてはそこそこだと思えますよ」

「お前、状況が呑み込めないからって俺に当たるんじゃないやねえよ。」

と言うか、あれ、お前ら」

毒舌激しい相棒に額を抑えつつ、改めて二人の方を見たオーズは既視感に首を傾げた。

パーカーの少年も緋色の髪の少年も、どちらにも見覚えがあるのだが記憶と噛み合わないと言うか。

「僕は、天馬。こっちは剛、です」

「天馬！」

「剛君と、天馬君か。」

さっきの奴らの事を教えてくれないかな、僕達には何が起きているか全く解らないんだ」

「さっきのはショッカー警察です。」

ショッカーに従わない人間を捕まえて、適性があれば改造人間にして、無い人間は労働所送りにしようとしているんです」

答えたのは、赤毛の少年の方だった。剛と呼ばれた方は、不機嫌そうに見知らぬ年嵩の少年二人を睨み付けている。

天馬の言葉に、黒子は変身したままの相棒を見上げた。

「どう思いますか、火神君」

「どうも何も、おかしいとしか言いようがねえよ。」

大体何でショットカーがでかい顔してんだ？ 仮面ライダーがあいつらと一緒にいて、そこからまずおかしいし、それに仮面ライダーがここにいて、じゃあおじさんは何処に」

そうぼやいて、大我ことオーズの背筋にぞくつと何かが走った。今、何か不味い事に掠った気がしたのだ。

黒子の中で何かしら考え込んでいた赤い鴉が、オーズの様子に気付いて何事かを問い掛けようとしたその時だった。

「いたぞー！」

「不審者と不穏分子、奴隷どもだ、包囲しろー！」

突然の声と共に、バラバラつと十数人の十六、七歳の少年少女達が四人を取り囲んだ。

問題は、黒子とオーズこと大我にとつて、少年達を率いているらしいリーダーとその取り巻きらしい面子が、ひっじょうに見覚えのある面々で思わず二度見してしまった。

赤、青、黄、緑、紫にピンクと、派手な頭髪のリーダー格らしい面々は、右手を斜め上に突き上げる敬礼と共に「イー！」と奇声を上げた。後ろに並ぶ部下らしい少年達も続いて声を上げるのに、レイヴ@黒子が苦笑と共に揶揄る。

『何だこいつら、あの黒覆面の真似か？』

「この人達はショットカーユーゲント、幹部候補生です」

「ショットカーに忠誠誓って、行く行くは改造人間になるんだってさ、糞が」

天馬の言葉に続いた剛の眩きは、嫌悪と憎悪に揺らめいていた。

中学生ぐらいだろう二人と、小柄でグリードの体力で何とか持っている状態の相棒を背中に庇い、オーズは学生服と言うより軍服っぽいシルエットの衣服をきっちり着込んでいる六人を、うそ寒い思いで見詰めた。

少なくとも、青峰大輝や紫原敦は制服を着崩している印象しかなかったが居並ぶ誰も彼もがきちんと着込んでおり、能面のような無表

情と共に背筋をピシッと伸ばしているのが、黒子と大我の違和感を掻き立てる。

そのうち、桃井さつきであろう少女が、赤司征十郎である筈のリーダー格に何事かを耳打ちする。

それを受けて、天馬とは系統の違う赤い髪の少年は、仲間達に顔を向ける事無くこう言い放った。

「奴隷の傍にいるアンノウンの幼体は、絶対に逃すな。

不審者と奴隷は強制労働班に引き渡し、不穏分子は改造人間に任せよう。

何、シヨツカーに逆らうものは親であろうと排除するのが、僕達シヨツカーユーゲントの規範だからな」

「ぐぶっ！」

「火神君、判りますが笑っちゃいけません」

『そういうお前も笑ってんじゃねえか』

マスクのまま噴出した相棒に向かって、無表情に黒子が突っ込むがそれを更にレイヴが突っ込む。そんな二人？を、剛と天馬は訝しむつつ見る。

微妙に黒歴史に掠っている迷言を吐きながら、赤司であろう少年が手を振ると後ろに控えていた少年達が前に出る。見れば、それぞれ特殊警棒らしいものを持っている。

問答無用らしいのを目にして、大我は笑いを噛み潰し迎え撃とうとトラクロウを構えた。

だが次の瞬間、鋭い風切り音と共に死角から大我ことオーズを襲ったのは、畳一畳分よりもさらに巨大なランプカードだった。

鋼鉄の板で、電動ノコギリよろしく高速で削られるような攻撃に、咄嗟のガードも意味を成さない。堪らず体勢を崩したオーズを、空中で何度も旋回しつつ執拗にカードは襲う。

ついには、その攻撃に耐え切れず、変身が解けて転がった大我の姿にシヨツカーユーゲントなる少年の一団が歓声を上げる。

その歓声に応えるように、巨大ランプカードはくるりと回転しつつ白尽くめに透明なマスクを被った怪人に変化した。

「これはこれはデルザー軍団のシャドウ様。お力添え、ありがとうございます
ございます」

「ふん」

赤毛の少年が丁寧に頭を下げるのに向かって、シャドウと呼ばれた
白い怪人はうっとおし気に鼻を鳴らした。

「俺は、仮面ライダーを名乗る愚か者の顔を見に來ただけの事。

高々人間のお前達に、感謝される謂れなどない」

そう言つて、シャドウは手にしたサーベルを一振りし、身体を起こ
した大我の鼻先にその切っ先を突き付けた。

「！」

「仮面ライダーを名乗るには、まだまだ力不足だったな。

成長を楽しみにしたかったが、残念ながらこちらにも都合がある。
せめてもの手向け、苦しまずに死なせてやろう」

そう言つて、白い改造魔人がサーベルを振り上げたその時だった。

突然伸展した線路の上を、近未来的デザインの列車が電子音による
汽笛を響かせ駆け抜けた。高速で走り抜ける列車に恐怖を覚え、
シヨツカーユージェント達は悲鳴と共に左右に散った。

そして列車が通り過ぎた後、何かの衝撃で跳ね飛ばされたシャドウ
の他に、その場には誰もいなくなっていた。

「何だ、今の非常識な列車は!？」

「リーダー、アンノウンの幼体も奴隷もいません！」

「あの隙に逃げられただど!？」

ざわめく少年達を背に、シャドウは無言で立ち上がった。

その背に、これは明らかな侮蔑を込めて青い髪と紫の髪、黄色い髪
の少年が嘲笑する。

「ふん、逃げられたのかよ。デルザー軍団も大した事ねえんじやねえ
の?。」

「改造魔人って言つても、改造人間と代り映え無いんじやん。なーん
だ」

「ガキの俺達と同程度でも、改造人間務まるんっすね！　なんかほつ
としたっす！」

「馬鹿者、何を言ってる」

緑の髪の少年が、慌てて止めようとしたその時だった。

ピピピッと、三人の心臓の上にカードが止まった。えっと驚いた三人に向かつて軽く鼻を鳴らし、シャドウは姿を消した。

ぽかんとする三人に、リーダーは本当にダメなものを見る目でこう告げた。

「愚か者、シャドウ様の寛容に感謝しておけ。

そのカードを受け止められなかった時点で話にならないが、あの列車が走り抜けた瞬間、列車から飛び降りてシャドウ様を蹴り飛ばし、不穏分子をかつさらった第三者がいたんだ」

「「え!?」」

「あの一瞬で、改造魔人の虚を突いたとは言え蹴りを入れた者がいると言う事に、シャドウ様も思うところがあつたのだろう。

さもなければ、お前達の暴言の代価として、此処にいる我が班全員の首が飛ばされていただろう。

相手の力量を見極められないのなら、次の選抜試験で落とされる事になるぞ」

そう言い放つと、リーダーは班員全員に撤収を命じた。

目的の存在に逃げられたのは残念だったが、それに固執するつもりはなかった。

その頃、火神大我は黒子テツヤ@レイヴ、天馬、剛の三人と共に『時間の列車』、デンライナー二号車の食堂車にいた。

あの瞬間、電王に変身した香山閃@ウォルフイがシャドウを蹴り飛ばしつつ大我を回収し、レイヴ@黒子が二人を抱えてデンライナーに飛び込んだのだ。

天馬と剛を見て、物を言わずに二人を抱き締めた閃に、抱き付かれた二人は勿論、黒子@レイヴもぽかんとした。

その様子を横目に、乗務員だと言う少女からコーヒーを渡されている最中であつた大我は、此処に来てやつとある事を思い出し、さつき回収した財布を取り出し確認しようとして、「え!?」っと声を上げた。

「どうかしたんですか、火神君」

「写真が、一緒に写ってる祥やキャプテン、高尾が消えそうになってる！」

「え？ ええ!？」

覗き込んだ黒子は、一人写っている人間の中でまともに姿を残しているのが大我と宮地兄弟、閃と二人の少年——なんと、天馬と剛だった——のみで、彼ら以外の全員の姿が、まるでピントがボケたかのように薄くなっているのだ。

言葉を失っている黒子と大我に、軽く鼻を鳴らしてレイヴが言った。

『特に薄くなっているのは、大我的左右に写った奴二人だな。』

確かこいつら、仮面ライダークウガとアギトだったよな。人間名は確か、』

「滝海斗に一文字空。海斗は滝和也の息子、空は仮面ライダー2号、一文字隼人縁の人間だ。」

そして、今その写真で姿が薄くなった面子は、滝和也という人間に命を救われた人間だ」

閃の言葉に対して、首を傾げた黒子に補足してやったのは大我である。

「そっか、あの嘘合宿の時、黒子は気絶してたから殆ど話し聞いてなかっただろうけど、日向主将（キャプテン）と祥、高尾に千尋兄、真也兄イに陽泉の福井さん、皆殺され掛かったり死に掛けた時に滝の小父さんに助けられたんだ」

「え？」

「祥は、赤ん坊の頃DQNにコンクリートに向かって投げられたの助けられたし、主将や高尾は犯罪組織に殺され掛けたの助けられたし、千尋兄や真也兄い、福井さんは滝の小父さんに助けられなかったら死んでたらしいし」

「何なんですか、そのDEAD OR ALIVE」

黒子の言葉に、レイヴの方が溜息を吐く。

だが、そうやって話すうちに、大我はある事に思い当たって青褪め

た。大我の顔を見て、悟った事を気付いた閃が頭を搔きつつこう告げた。

「判ったか、恐らくあの時俺達があそこに行つた事が切っ掛けで何か起こり、仮面ライダーがショッカーの軍門に降る事になった。

それと一緒に、恐らく滝和也が死んでいる。

俺はたまたま特異点で尚且つ電王だから影響から外れたし、お前も俺と居たのと元々の関わりが他の面子と違ったから無事だったが、他の皆は歴史から消えた可能性が高い」

その言葉に、大我はぐつと息を呑んだ。

そんな二人を、本来は義理の兄弟だった少年達が見詰めていた。

05. 再び1971年へ

05. 再び1971年へ

前回より、一〇分程前の時間にやって来たデンライナーから、六人の人影が降り立った。

仮面ライダー電王である香山閃とウルフィマジンのウォルフィ、仮面ライダーオーズである火神大我と黒子テツヤ@レイヴ、そして天馬と剛である。

ぎりぎりど、大我の右手がレイヴ@黒子の後頭部を握り込む。

「普段あれだけメダルメダル言っておいて、セルメダル落とした事に気付かないってどう言う了見だよ！」

『うつせえな、お前に押し潰された所為でふらふらしてたんだよ！』

「か、火神君、痛い痛い」

移動中に、レイヴが最初に来た時にセルメダルを落としていた事が判った。

レイヴとしては、命と同等のコアメダルでは無かった為にあまり深刻には考えていなかったが、《S. A. U. L》で色々説明を受けていた大我の方は、セルメダルが高エネルギー結晶の一種である事を聞かされていた事からかなり不味いと思っていた。

もしかすると、セルメダルをエネルギー源にした何か強烈な兵器を作り、それを使って仮面ライダー一号二号を倒し、洗脳したのではないか。

それが、大我と閃の出した仮説である。

「取り敢えず、まずはセルメダルを回収しよう。」

事態を転がしたのがメダルなら、回収すれば多分それで済む筈だ」

『あれだけ激変した世界が、本当に戻るのか？』

頭を擦りつつレイヴ@黒子が言うのと、これはウルフィマジンの方が答えた。

『時間の修復力は大したものだ。』

今回は大きく歪んだからこそ、大きく戻る事になる。恐らく、何事もなかったように元の世界に戻っているだろう』

「バタフライ効果が怖いところですが」

黒子@レイヴがそう呟くと、大我の方が頭を掻きつつこう言い放つ。

「起きなかった事は、無かった事だ。とにかくメダルを探すぞ。」

……だけど、お前らは列車で待ってた方が良いぞ？ 此処にも怪人居るんだからさ」

言葉の後半は、年下二人に向けられたものだ。

それに向かって、噛み付くように食って掛かったのは剛の方だ。

「お前らだけに任せられるかよ、俺達の仲間や家族が酷い事になったのは、そのデカイのとメツシユの所為だって聞いてさ。」

探しものなら得意だから、取り敢えず手伝わせろよ」

「あの、ごめんなさい、じつとしているのが心苦しいんです、手伝わせて下さい」

ペコッと頭を下げた天馬の頭を撫でてやり、閃の号令でそれぞれ行動を起こした。

暫くすると、あの時、モールイマジンを追って来た列車が六人の頭上を通り過ぎた。

それを見上げつつ、閃@ウォルファイが唸るように呟く。

「来た。大我、どの辺りでレイヴを捕まえた？ その近くで待機しよう」

「お、おう。えっと、こっちだったかな？」

『違う。こっちだ』

歩き出そうとした大我の襟首を掴み、レイヴ@黒子が全く逆の方向を指差す。

そんな周囲のやり取りに、剛はあからさまに「大丈夫か？」と言う顔になり、天馬も力無く笑った。

倉庫街の外れで待っていると、ギヤイギヤイと大声で喚き合いながら走ってくる大我と赤い片腕が現れた。

そのまま高みに上って逃げようとする赤い腕を、足元の木箱を蹴つて飛び付いた大我が叩き落とす。ついでにその上に大柄な身体が落

ちて、予期せずプレスする事になった。

その瞬間、チャリンと一枚メダルが弾き出されたが、赤い腕も追い掛けて来た方の大我也気付いていない。

「ぐへっ！」

「この、やっと捕まえたぞ、この野郎！」

呻いている腕を掴んで、ぶんぶん振り回しつつ戻って行く過去の自分を眺め、大我は頭を押さえる。

その大我の肩を、閃@ウォルフイが叩く。

「さ、今のうちにメダルを拾ってしまおう。それでミツシヨンコンプリートさ」

その言葉に頷き、メダルの転がった先を見た大我は、「うわっ！」と言った。そのまま走り出そうとしたのを強く肩を叩いて止めて、閃@ウォルフイが飛び出す。

メダルの転がる先に、骸骨模様の黒繫ぎを着込みナイフを持った戦闘員がいる事に気付いたからだ。

足先にメダルが当たり、屈んでそれを拾い上げようとした戦闘員の蟀谷に、閃@ウォルフイの手から飛んだビー玉が突き当たった。

指弾の要領で飛ばされたビー玉は、イマジンの力と拳士のコントロールとで見事に喰い込み、戦闘員を昏倒させた。

「うわ、すっげー！」

「ふわあ」

「火神君、あの人一体」

「あー、閃兄ちゃんは昔っからダーツとか手裏剣とか好きだったからなあ。アンキっての集める趣味あったし」

『あの狼怪人の力も借りての事だろうが、今ならあいつ、ガラス玉でベニヤ板くらいぶち抜くんじゃないか？』

興奮する年下二人の横で、高校生+ α が囁き合う。

だが、メダルを拾い上げようとした閃は、次の瞬間自らの足でメダルを踏み込み構えを取った。

あっと思った時には、彼に向かってナイフで斬り掛かる二体の戦闘員を手の返しだけで投げ飛ばし、三人目の腕を掴んで止めていた。

踏んでいたメダルを、踵で大我達の方へ飛ばし、閃が叫ぶ。

「メダルを持って、デンライナーへ戻れ！俺もこいつらをいなして逃げるから！」

「兄ちゃん！」

『早く！大我、レイヴ、黒子、二人を守るんだ！』

急な事に、動きが止まった三人を振り切るように、メダルと天馬の手を掴んで剛が走り出す。

「剛！」

「逃げるぞ！」

脱兎の如く走って行く二人に、顔を見合わせた三人？は慌ててその後を追った。

五人を追おうとする戦闘員を掴んで引き倒し、閃はターミナルバツクルを腰に巻いた。

閃の動きに、一〇数人の戦闘員が集まって来た。彼らを惹きつけるように、閃はライダーパスを翳した。

「お前らの相手は俺だ。行くぞ、ウォルフイ！」

『オウ！』

『変身！』

SLASHFORM！

オーラスーツ上にアーマーが展開し、閃@ウォルフイが仮面ライダー電王になる。

見知らぬ超人に、戦闘員達がどっと押し寄せる。それに、電王はデングツシャーを取り出し迎え撃った。

身の丈ほどもある武器を片手に、電王は湧き出すように増える戦闘員を相手に大立ち回りを演じる。

その状況を物陰から見詰める視線があった事を、戦闘中の閃は気付く事が出来なかった。

その頃滝和也は、愛車のスズキハスラーTS400で街を流してパトロールを行っていた。

昨日から、おやつさん事立花藤兵衛が町内会の温泉旅行に弟分の少

年とお嬢さん達の一部を伴って出掛けた為、立花レーシングクラブは三日間の休みになっている。

滝も旅行に誘われたものの、書類提出を理由に断った。

おやつさんは渋い顔をしたし、弟分には「兄ちゃん駄目だなあー」と笑われたのを苦笑いでごまかし、一行を見送り、そのままパトロールを行ってている。

実際は、書類はとつくに提出している。だが、仕事そつちのけで遊びに行く事は出来なかったのだ。

これまで、何度かレーシングチームの面々と共に遠出をしたが、その時は事前に出先にシヨツカーに関する情報があったからこそで、今回はそう言う情報が無かった為に滝は東京に残る事にしたのだ。

幸いと言うか、一文字隼人と先日海外から戻って来た本郷猛の二人も、朝から用事と称して出掛けている。

そもそも、彼は秘密結社シヨツカーの調査殲滅を任務とする、IC POへ出向中のFBI特命捜査官である。

現状、『仮面ライダー』の協力によつて戦果を上げているものの、滝和也はそれを良しとは決して思っていないかった。

「世は並べて事もなしってね。だけど、何か引つ掛かると言うか」

一通り街を流し、港近くの倉庫街へとやって来た滝は、見掛けた自動販売機で缶コーヒーを買おうとバイクを止めた。

だが、小銭入れを出そうとしたその時、「イー！」と言ううんざりするほど耳慣れた叫び声に、滝は顔を跳ね上げた。

「ち、何をやるつもりだ、シヨツカー！」

大きく舌打ちすると、滝は足一本で車体を支え、大きく振り回すようにして方向転換させると声の方へとバイクを走らせた。

06. 始まりの時代

06. 始まりの時代

メダルと天馬の手を握って、剛は見知らぬ倉庫街を走る。

一応、日々のかっぱらい稼業で足には自信があつたが、それでも後ろから殺気混じりに追って来る気配には首の後が総毛立つ思いがする。

寧ろ、今までの連中の方が微温（ぬる）いぐらいの剣幕と、知らない場所であると言う事実が剛に判断ミスをさせた。

「あ!？」

「行き止まり!？」

戦闘員を避けて飛び込んだ、倉庫の突き当たりの扉は外から施錠されているのか開かなかつた。

必死に扉を開けようとする二人の後ろに、戦闘員の一団が迫る。

その時だった。

鋭いバイクの排気音が響き渡ったかと思うと、緑色のバイクに乗った人物が戦闘員を跳ね飛ばす勢いで突っ込んで来た。

バイクを半回転させる要領で止まった人物は、一瞥して状況を把握したのだろう、中学生ぐらいだろう二人を細い背に庇った。

その人物に向かって、戦闘員から声上がる。

「滝和也だ！ 構わん、やれ!」

「子供二人に何の用事だ、シヨツカーの戦闘員共。

また何か、碌でも無い事を企んでやがるな!」

そう吠えるや、滝と呼ばれた青年はナイフを振り上げ斬り掛かる戦闘員を受け流し、死角から近付こうとした別の戦闘員へ後ろ回し蹴りを当てて下からせる。

二人を引き倒そうとした戦闘員を引き戻し、殴り倒した青年を戦闘員は二人掛かりで抑えこもうとした。

それを長く細い足で撓（しな）るように蹴散らすのを、剛と天馬は呆けたように見詰めた。

だが、更に大勢の戦闘員と共に怪人が二体現れた。

怪人を目にした滝和也の表情が、少し硬くなるのが判った。

「戦闘員ばかりか、怪人まで、しかも二体も持ち出すたあ、どんな悪巧みしてやがる。ショツカー！」

「黙れ、FBIの犬。おとなしくその餓鬼共が持つマテリアルを寄越せ。そうすれば楽に死なせてやる」

「ふざけんじゃねえよ！」

そう唸るように叫んだ青年は、だがふつと表情を和らげ笑った。

「ま、お前らこそ大人しく尻尾巻いて逃げれば、見逃してやったんだけどな」

「何……は!?!」

毒々しい色合いのトカゲ怪人が、相手の表情に気付いてハツとなるが、その次の瞬間。

少年二人を庇う、滝和也の両脇を守るように壁を突き破り、バイクに乗った何者が二人現れた。

一瞬で空気が変わる中、破片から少年達を庇う滝に向かって声が掛かる。

「滝、無事か！」

「どうやら間に合ったようだな」

最初の声は、赤いブーツとグローブの持ち主で、落ち着いた声は銀色のブーツとグローブの主だった。

目を閉じていた剛と天馬は、揃いのバイクに跨り、こちらを見る仮面ライダー一号二号の姿を目の当たりにして一瞬体が強張った。

だが、その『最悪の改造人間』と剛達と呼んでいた二体に向かって、彼らを庇ってくれていた青年はこう返した。

「こいつら、この子達を襲うつもりらしい、俺はこの子達を避難させる、頼むぞライダー！」

「任せろ、滝！」

「急げ！」

頷き合うと、ライダー二人は怪人と戦闘員に相對し、青年は剛達に動くよう促した。

戸惑いつつも、青年に促されるまま走りだし、だが剛は肩越しに振り返って、そして『仮面ライダー』が戦闘員を蹂躪するさまを見た。戦闘員達を一蹴し、怪人を拳一撃で吹っ飛ばす、その姿に目が見開かれる。

あつと言う間に戦闘員は数を減らし、怪人達はライダーの攻撃にたまらず距離を取ろうとしている。

それを見詰める剛の様子に、滝はその頭をぼんと撫でてこう言った。

「もう大丈夫だ、正義の味方が来てくれたからな、もう怖い事はないぞ」

「正義の味方？」

「そうだ」

そう笑い掛けた青年の顔を、剛は今まで香山閃や火神大我には見せなかった、心の底から安堵したような顔で見詰めた。

『仮面ライダー』への疑念が消えた訳ではない。だが、この人が言うのなら、信じてても良い気がしたのだ。

火神大我と黒子テツヤ@レイヴは、先に走って行った二人を追い掛けている途中で、別の戦闘員の一团に捕まり掛かっていた。

「糞、レイヴ、メダルを寄越してくれ！」

『判ってる、落とすなよ、大我！』

「変身！」

タカ、トラ、バッタ！

Ta, To, Ba, t a t o b a, T A T O B A!

独特な起動Voiceと共に、大我は黒地に信号トリコロールの超人に姿を変える。

初めて見る存在に、戦闘員達も動きが止まる。それを幸いと、大我——仮面ライダーオーズはトラクロウで、犇（ひしめ）く戦闘員を薙ぎ払う。

身体の方をレイヴに任せ、周囲を見回していた黒子がこちらへと走って来る剛と天馬、そして二人を庇う青年に気付いた。

「！ 剛君、天馬くん！」

『ああん？ 誰だ、あの男』

こちらが驚いたように、青年側も見知らぬ存在に驚いたらしい。思わず足が止まった青年に向かって、天馬が何やら説明している。

だがそこに、新たな戦闘員の一団を従え、鉄兜に何処かの高級軍人らしい装いの老人が現れた。

その姿に、オーズの動きが止まる。

あの存在を、火神大我は半日前に知ったところだ。——過去、『仮面ライダー』に倒され、BADAN戦役で復活し再び倒された、ゲルショツカーの大幹部。その名は。

「あれ、誰だっけ？」

『『おい』』

素で忘れたらしいオーズに、人間と異形、二人の相棒が同時に突っ込む。

老人の方は、大我の反応にはさしたる反応を見せず、部下達に指揮棒でかかれと指示を飛ばす。

ナイフを構え、オーズと一見普通の高校生であるレイヴ@黒子を包囲しようと近づく戦闘員を、第三者がバイクで蹴散らした。

驚く滝和也の目の前で、追い付いた仮面ライダー電王がデンバードから降りると、戦闘員をレイヴ@黒子から引き離し殴り飛ばした。

新たに現れた道の存在に、軍装の老人、ブラック將軍は目を眇めた。電王こと香山閃の方は、事態が更に大きくなっている事に軽い眩暈を覚えている。

「ああもう、もうデンライナーで離脱してる予定だったのに！ 大幹部までお出ましだし！」

『閃、しかもこの時代の人間と接触してしまっているようなんだが』

「え？ ……うええ!! 親父!?!」

「え?」

剛と天馬を庇う青年を見て、電王が思いつ切り驚いているのに気づき、オーズこと大我もそちらを見る。

尤も、そこにいる青年は背は高いが手足が細い為に電柱のようで、

大我が覚えている筋骨逞しい『祥ちゃんのお父さん』とは別人のように思えた。

大我からすると、あの青年の背格好は寧ろ滝家の長男にそっくりだったのだが。

その青年はと言えば、少年を捕まえようとする戦闘員達を、その細長い手足を鞭のようにしならせて蹴散らしている。

微かな振動とともに、爆発音が二つほぼ同時に起きたのは混戦の真っ只中だった。

『え?!』

『爆発音?』

「何だ、今の?」

「察するところ、他にいた怪人を、仮面ライダーが倒してくれたんだろつと!」

驚く仲間に向かってそう言うと、電王はデングァツシャーをハルバードモードに組み上げ、一閃した。

トラクロウで戦闘員を切り飛ばしつつ、どう言う事かと問う弟分にデングァツシャーを取り回しつつ電王は一言だけ返した。曰く、

「だから、この時代が仮面ライダー一号二号の時代、って事だつて!」

「あ、そうか、此処が『伝説の始まり』の時代か」

思い至つたと言う風に大我が頷いたその時だった。

数人掛かりで押し掛かる戦闘員によって、滝和也と中学生二人の間が開いた。

ここぞとばかりに、二人を引き倒し連れ去ろうとした戦闘員と揉み合う拍子に、剛の手からセルメダルが溢れ、戦闘のど真ん中へと転がった。

「あ!?!」

「しまった、メダル!」

一気に戦闘員を振り払った滝が、一も二もなく二人の方へ走るのを見て、オーズはスキヤナーを滑らせた。

Scanning Charge!

「セリヤア!」

メダルを潰す勢いで、オーズは低い姿勢からキックを放った。が、それを打ち消すようにブラック將軍が放った鞭の一撃の為に、目的は果たせず周囲の戦闘員を吹っ飛ばすだけに留まった。

当然、オーズの行動にレイヴ@黒子が声を張り上げる。

『お前、何やってる!』

「向こうに渡すより良いだろう!」

「あああ、二人共それどころじゃないでしょう!」

喧嘩を始めそうな二人?に、黒子@レイヴの悲鳴が上がる。

その間に、メダルを拾い上げたブラック將軍はニタリと笑い、部下達に撤退を命じた。

それこそ波が引くように引き上げる戦闘員に、大我と閃は舌打ちとともに変身を解除した。

「畜生、メダルが」

「追い掛けるにしても、あつと言う間だったし。天馬と剛を放って置く訳には」

そう言いつつ互いに途方に暮れた顔を見合わせている二人の肩を、ぽんと叩く手がある。

振り返った二人が見たものは、めちやくちや良い笑顔でこちらを見ている、瘦身の青年の笑顔だった。

07. 思い出の味

07. 思い出の味

「ふうん、八百年前の錬金術の産物のメダル、ねえ」

「はあ」

あれから、閃@ウォルフイと大我、黒子@レイヴの三人+αは、天馬と剛共々滝和也の自宅だと言うマンションへと連れて来られた。

大我や黒子からすると、凄くこじんまりとした印象の3DKであったが、閃からこの時代では結構良いものだと言われた。

未来から来た事は話さず、セルメダルとそれを奪われた事を話すと驚いたようだったが、あまり不審がっていない様子の滝に、大我と黒子は首を傾げる。

「あの、変な話とか思わないんですか？」

「んー、そういうのもあるんじゃないか？」

シヨツカーの怪人の中には、化石から復活させた三葉虫の怪人や、四千年前のエジプトのミイラとか居たからな。

八百年前くらいなら、驚く事ねえわな」

「はあ」

カラカラと笑って、狭いキッチンで何やら作業している滝の手元から、ふわりとコーヒーと暖められたミルクの香りが立つ。

少年達があつと思うと、彼はお盆にバラバラのマグカップを乗せて戻って来た。中身は、コーヒーが二つにミルクコーヒーが四つ。

驚く少年達にミルクコーヒーを渡し、閃にコーヒーを差し出した。「カフェ・オ・レなんておしやれなものじゃない、ただのコーヒー牛乳だ。一応砂糖は入れたが、足りなかったら角砂糖があるから足してくれ。」

後、お前さんは成人らしいから、コーヒーな」

「どうも」

それぞれに配ると、青年は自身のコーヒーに角砂糖を三つ放り込んで啜った。

それを横目で見ながら、剛もミルクコーヒーを啜った。程よく甘

く、でもコーヒーの味もする、そんな飲み物だった。

一気に飲んで、ほっと一息吐いた剛は、横でマグを抱えた天馬がポロポロ涙を零しているのに気付いた。

「天馬!？」

「どうした、熱かったか!？」

天馬の様子に気付いて、滝も水を汲もうと立ち上がろうとする。だが、それに向かって天馬は首を振った。

「違うんです、これ、初めて飲んだのに、凄く懐かしくって、俺、」

そう言つて、涙を零す天馬の頭を、閃@ウォルフイは黙って撫でる。

天馬の様子を横目で見ていた大我は、渡されたミルクコーヒーを一口飲んで、理解した。

それは、まだまだ小学生低学年で、灰崎祥吾と転げ回って遊んでいた頃。兄達と一緒におやつ時に出された、ミルクコーヒーと同じ味だった。その時、『祥ちゃんのお父さん』は、やっぱり真っ黒なコーヒーに角砂糖を三つ入れて飲んでいた。

やっぱり、剛と天馬は兄弟分かなあと思っていると、彼の隣りに座る相棒+αがこう宣った。曰く。

『バナラシェイクが良かった』

『この時代にやねーよ』

(注、1971年7月には、マジバのモデルであるマクドナルドの日本一号店である銀座三越店は開業しており、マツクシェイクもあつたようですが高校生達は知りません)

声を揃えた二人?にデコピンと言う名の釘を差し、大我は残りのミルクコーヒーを啜った。

そこへ、コンコンコンつと、玄関からノック音がした。

不意の事に驚いた子供達が腰を浮かせるが、続いた声に全員顔を見合わせた。曰く、

『ターキー、置きっぱなしだったバイク持ってきたぞー』

「おう、隼人、済まねえな!」

そう答えて、滝が短い廊下の先にある玄関へ出る。

思わず、居間の入り口から玄関を伺うと、そこに二人の青年が立つ

ていた

一人は、淡紅色のスーツの、巻毛と濃い眉が印象的な青年、もう一人は茶色い上下を着込んでいた連れや滝よりやや背の低い青年だった。

その小柄な青年の顔を見て、大我は目を丸くし、閃の方も目を見開いた。

「空兄ちゃん?」

「ん?」

大我の声を聞いて顔を向けた青年の方は、そこに立っている大我の背の高さに驚いていた。

室内の、見知らぬ顔に眉を顰めているもう一人の青年に向かって、滝が簡単に五人を紹介する。

「本郷、隼人、この子達はさっきの騒ぎの関係者だ。取り敢えず、話しがてらコーヒー飲ませてたんだ」

「そうか。俺は一文字隼人、滝の友達のフリーカメラマンだ。で、こっちは」

「本郷猛。研究者だ。滝とは、バイクレースで知り合ったんだ」

「俺の事情を知ってて協力してくれてる。だから、何も怖がることなえよ」

見知らぬ顔に、警戒心を剥き出しにした中学生二人に向かって笑い掛けると、滝は青年達と小声で何やら話し始めた。

小柄な青年の言葉を聞いて、大我は納得した。彼は、一文字空の父親の若い頃の姿だと。

閃の方は、本郷と一文字に目礼しつつ、頭の中で考える。

(恐らく、先程の戦闘で剛達を助け、他にいただろう怪人を片付けてくれたのはこの人達だよなあ。)

……うえーい、どんどん事態が大事になってるよなあ。収集し切れるのか、俺)

〔閃、大丈夫か?〕

(何とかするよ、うん)

小声で何やら話していた三人は、決着が付いたようだった。

二人は、家に上がらずこのまま帰るようだ。

「じゃあ、シヨツカーの奴らが彷徨いていないか、俺達で街を流してくるよ」

「見付けたら知らせるから、そのつもりでな」

「おう、すまねえな」

そう言つて帰つて行く二人に、大我と黒子@レイヴは揃つて頭を下げる。誠凛高校バスケット部は基本的に真面目な為、目上に挨拶をするのが当然である。

二人に釣られるように、慌てて中学生二人組も頭を下げ、閃も丁寧なお辞儀をした。

玄関の扉が閉じられると、滝は五人に向き直った。

「ところで、お前さん達、今晚どうするんだ？ 家が遠いみたいに言つてなかったか？

まあ、雑魚寝になつてしまつて良いなら、この家に泊まつて行けば？

こつちも仕事としてシヨツカーを追っているから、力になれると思ふしな」

そう笑つた青年に、真つ先に「お願いします」と答えたのは剛で、その事に滝以外の皆が驚いた。

何しろ、数時間前まで閃も大我達も、天馬以外の誰も信用しないという目で見ていたのだから。

その夜、九時を過ぎたくらいに、マンションから人影が出て来た。

その人物に向かつて、声を掛ける者がいる。

「滝、彼らは？」

「疲れてたんだろ？ 軒かいて良く寝てる」

声を掛けたのは、昼間に訪ねて来た本郷猛。その横に、バイクを押し掛けの姿勢で一文字隼人も居る。

出て来た滝和也も、バイクを押しつつ応える。

三台同時にエンジンを掛ければ、流石に煩かろう。と言う事で、一区画向こうまでバイクを押ししていくのだ。

「滝、あの子達怒るんじゃないか？」

一文字の言葉に、これは真面目くさった顔で滝は応える。

「怒ろうが何だろうが、連れて行けねえよ。」

大体な、俺は親父や五郎だって、シヨツカー捜査に関わらせるの嫌だったんだ。お前らだって」

そう言い掛けて、滝は言葉を切った。

二人が、何とも言えない表情で滝を見ているからだ。もう一度嘆息すると、滝は繰り言を仕舞いこみ現状に向き合った。

「行くぞ、発信機は上手く動いてる」

「おう」

「判った」

三台のバイクが走り出すと、それを待っていたようにマンシヨンの玄関からそつと五人の人影が出て来た。

無論、滝が眠っていると思っていた五人である。

実質丸一日走り回った大我が爆睡していた為、上手く誤魔化せた四人は、滝と本郷、一文字の三人が出掛けるのを待って家を出て来たのだ。

「俺は連れてつてくれると思ったんだがなあ」

『恐らく、四人の引率と見做されたんだろう。閃、凹むな』

肩を落とす閃に、ウォルフイが慰めの言葉を掛ける。

閃としては、この時代の義父——滝和也と大差ない年齢であり、又変身して戦っている姿を見せたのだ、大我達は置いて行くとしても、自分にはお声が掛かると内心思っていたのだ。

その向こうで、黒子がレイヴと共に嘆息している。

その横には、一瞬で眠ってしまったので起こすのに手間の掛かった大我が、まだよく起きていないのかぼんやりとした顔で立っている。

「火神君、そろそろ起きて下さい」

『お前、寝穢いにも程があるだろうに』

「うっせえ、疲れてんだよ、俺は」

「済まないな、デンライナーで顔洗ってくれ」

閃の言葉に、同じく目を擦っている剛の横に立つ天馬が、確認する

ように問うた。

「あの電車で移動するんですか？」

「ああ、あの人のバイクに仕込んだ発信ビーコンは、デンライナーでないと拾えないし、最悪の場合、あの三人をデンライナーに投げ込んで逃げないといけないかもしれないからな」

出来れば、そんな事にならないで欲しいんだが。

そうぼやいた閃の顔は、これまでになく険しかった。

08. 最悪の誕生

08. 最悪の誕生

火神大我と香山閃、ウルファイマジンの三人は、天馬と剛、黒子テツヤ@レイヴをデンライナーに残し、一見すると川の傍にあるポンプ小屋か何かに見える、コンクリート製の建物の側に潜んでいる。

黒地に白く骨を染め抜いた、所謂骨戦闘員が巡回する事、そしてこの近くに発信機を仕込んだ滝和也のバイクが隠されていた事から、ここでほぼ間違いないと睨んでいた。

『何か、空気が騒がしいな』

「恐らくは、仮面ライダーが侵入しているからじゃないか。ほれ」

相棒のぼやきに、閃は奥から走って来る戦闘員を指差す。

その伝令らしい戦闘員に連れられ、入り口を固めていた戦闘員達が基地の奥へと引っ込んで行く。それを見ていた三人は、領き合い基地の入口を潜った。

「取り敢えず、閃兄ちゃん別行動しよう、仮面ライダー達が暴れている隙に、手分けしてメダルを探し出そう」

「危険だって、言いたいところだがメダルからどんな兵器を作られるか判らない以上、猶予はないに等しいか」

弟分の言葉に、苦虫を噛み潰した顔で閃は了解した。

そうやって別れたものの、ものの五分で大我も閃@ウオルファイも戦闘員に追われ、基地中央部へ追い込まれる形になった。

戦闘員にしてみれば、上の命令に従い仮面ライダー迎撃へ向かっていたのだが、基地内をあからさまに無関係な人間が歩いていけば追いつけるのは道理である。

戦闘員に追いかけられつつ、大我は身に付けたドライバーにメダルを押し込み、スキヤナーを滑らせた。

「変身！」

タカ、トラ、バツタ！

Ta, To, Ba, t a t o b a T A T O B A !

オーズに変身して、そのまま作戦指揮室らしい大きな部屋に飛び込

む形になった彼は、岩盤を削って機材を設置したらしいある意味安普請なそこで、一〇数人の怪人と溢れるような戦闘員を相手に戦う二人の仮面ライダーを見出した。

取り敢えず、抑え込もうとする戦闘員を振り払い、近くに来た蟻地獄の怪人を殴り倒したオーズに、体の横にラインが一本入ったライダーが気付いた。

「はあ!? 誰だ、お前!?!」

「あの時に見た彼とは違うようだが」

植物系怪人を殴り飛ばしたもう一人の声に気付いて、大我は慌ててこう名乗った。

「あの、俺、仮面ライダーオーズ、こいつらに持って行かれたメダルを取り戻しに来ましたっ」

「そうか、俺は仮面ライダー二号、こつちが一号だ」

そう答えたのが一本ラインの方で、大我は内心「逆じゃね?」と思っただが、口に出さずに押し寄せる戦闘員を殴りに入った。

そうこうしている内に、同じく戦闘員に押し込まれるように仮面ライダー電王も作戦指揮室へとやって来ていた。

「せ、じゃない、電王!?!」

「オーズ、お前もか、悪い、殆ど調べられなくて」

「俺も、こいつらワサーって、いきなり湧いて出て来て、何も出来なくて」

そう言いつつ、二人も飛び掛かって来る戦闘員を振り払い、殴り倒す。

無限のような戦闘員の数だが、それなりに数を減らした頃、通気口の網を蹴り破って降りて来る人物が居た。

物音に、咄嗟に振り向いたオーズと電王の視線の先にいたのは、煤塗れになった滝和也その人だった。

「た、滝さん!?!」

「あれ!?! 追い掛けて来たのか、二人共!?!」

家で寝ている筈の面子に驚きつつ、滝は戦闘員から庇うように側に来た二号ライダーに向かってこう告げた。

「悪い、あつちこつち調べたけど、何処にも目的のものはなかった、すまんー！」

「気にするな、このアジトをぶっ潰すついでだ」

そう言つて滝の肩を叩くライダーの姿に、オーズこと大我は不意にここにはいない兄貴分二人の姿を重ね見た。幼い頃、似てない双子と思うくらいに何時も息のあっていた二人に。

その時だった。

「捜し物はこれかね、仮面ライダーとFBIの犬、そしてイレギュラーの諸君」

不意に掛かった低い壮年らしい男の声に、ライダー達は一斉に顔を上げた。

鉄柱と鉄のメッシュ板で組まれた演壇の上に、赤い尖った覆面に赤いマントを纏った人物が立っている。その横で、軍装の老人——ブラック將軍が控えている。

その、赤づくめの人物の手に、銀色のメダルが握られている事にライダー達は気付いた。

「シヨッカー日本支部へようこそ、反逆者と身の程知らずの諸君」

「貴様、大首領かー！」

仮面ライダー1号の声に、真っ赤なKKK団の如き人物が笑い声を上げる。

その声に、腰を落として戦闘態勢を取ろうとした電王は、大首領を睨み付ける滝の眼に気付いた。

閃はその目を覚えている。

テロリスト集団から、自分を救い出した時、集団のボス——事もあろうに、そのテロ集団との徹底抗戦を叫んでいたその国の防衛大臣本人だった——を足蹴にし、見下ろしていた時の眼だった。

大首領は、暫く手の中でメダルを弄んでいたが、何かを思い付いたようにメダルを握った。

「そう言えば、このアーティファクトに用があつたようだな。

では、こうしてみようか」

次の瞬間、異様な輝きに包まれたメダルが、大首領の手の中から浮

かび上がる。

オーズが驚く内に、何処からともなく音を立てて、大量のセルメダルが金色に輝くメダルに集まって来る。

そして、メダルの塊は一際輝くと、金色の羽毛の鷹のような頭部と翼を持つ怪人が現れた。

その姿と気配に、オーズは相棒に取り付いた紅い鴉と、その同族である連中の事を思い浮かべ戦慄した。

「まさか、グリードをセルメダルから生み出した!? そんな、グリードはコアメダルで生まれるって!」

「恐らく、大首領の力で、セルメダルをコアメダルに作り変えた、って事だな。畜生、洒落にならねえな、この」

『噂に聞いていたが、どれだけ規格外なんだ、あ奴は!』

オーズはトラクロウを、電王はデンガツシャーを構える。

新たに生み出された怪人は、一声「ショツカー!」と叫ぶや、オーズと電王へと突進する。そして構えていた二人を、ボデイソニックよろしく弾き飛ばした。

二人はそれぞれ剥き出しの岩壁に叩き付けられ、ついでに三十センチ以上の厚みがある岩をぶち抜き通路へと転がる。

変身しているからこそ大怪我は免れたが、オーズは衝撃で軽い脳震盪を起こして立ち上がる事が出来ない。

蹲っているオーズに、奇声を上げつつ襲い掛かる怪人を電王がデンガツシャーで抑えようとした。だが、怪人の振り下ろした腕の一撃に、ウルファイマジンの体力で底上げされている筈の電王が揺らぐ。一撃を受け止めたデンガツシャーが、圧力にギンギシと軋む。

「がっ!」

『閃!』

「せつ、いや電王!」

そのまま電王を押し潰そうとする怪人に、滝和也が体当たりを掛ける。

押し退ける事は出来なかったが、ぶつかった衝撃で怪人の力が緩んだ。それを幸いと、電王は怪人の胴体を蹴り上げてその腕から転がる。

ようにして逃れた。

「滝！」

「ライダー、外へ行こう！　ここじゃ不利だ！」

飛び跳ねるようにして立ち上がった滝の言葉に、戦闘員や怪人を薙ぎ払ったダブルライダーが頷く。

一号が何とか立ち上がったオーズを支え、二号が電王の腕を取り、滝の先導で基地の外へと走り出す。

「ふははは、逃げられると思っっているのかね？　行け、ショットカーグリード、裏切り者どもを打倒し、あるべき姿に戻すのだ！」

大首領の嘲笑とともに、新たに生まれた怪人、ショットカーグリードはライダー達を追い掛けた。

その頃、デンライナーの外に剛と天馬、黒子@レイヴの三人は出ていた。

大我と閃@ウォルフイが基地に潜入して、そろそろ三〇分程。天馬と黒子は「もう少し掛かる」と主張したのだが、剛が我慢出来ず「外で待つ」と言い張ったのだ。

『はあ、じゃあ、この列車から離れない位置で待つって事で良いんじゃないかね？』

「レイヴ、それは」

『中でじっとしているのが嫌なんだろう？　待つくらいさせてやればいいだろう』

そう言う事で、列車から降りて降り待っていた四人？が、体感で一〇分程外でウロウロしていた。

急に、騒がしくなった空気に気付いたのは天馬だった。はっと顔を上げた天馬に吊られて、他の面々が小屋の方を見たその次の瞬間、青年と異形が四人、金属製の扉を蹴り開けつつ転がり出て来た。

「火神君、閃さん！」

『おい、大我！』

「滝さん!？」

「四人とも、デンライナーに戻れ！」

四人に、そう叫んだのは電王だった。

その声に、レイヴの体力を借りて黒子は天馬と剛を抱えてデンライナーへと走る。

それを見届け、電王はダブルライダーと滝に向かってこう言った。

「一旦退避しましょう、あの列車に乗って下さい！」

「あ、あれ？ 列車って？」

あからさまに河原に停車している、デンライナーを見て流石に滝は面食らった様子で足を止めた。だが、その滝に向かって一号二号がオーズと電王を押しやった。

あつと思つた時には、一号二号は追い縋ってきたショットカーグリードを抑え込もうと二人掛かりでその胴を捉えていた。

「ライダー！」

「済まない、滝の事を頼む」

「馬鹿野郎、お前ら何考えてっ」

そう叫んで戻ろうとした滝を、電王が肩に担ぎ上げて走り出す。

「え、な、ちよつと!？」

「すみません、貴方に死なれる訳にはいかないんです！」

『済まん、だが、この後の悲劇の回避の為に、貴殿には生きていて貰わねばならんのだ!』

電王がデンライナーに向かって速度を上げる横で、オーズがショットカーグリードに向かって走る。

メダルの専門家として、グリードの亜種を何とかするのは自分だと思つたのだ。だが。

「行くんだ！」

「え!？」

「ショットカーグリードは俺達が倒す！」

二人は、デンライナーへ向かおうとするショットカーグリードに組み付きつつ、オーズに向かって叫ぶ。

躊躇するオーズに、グリードに喉輪を掴まれつつ伝説のライダー二人は叫ぶ。

「私達は、決して悪には屈しない！」

「どんな手を使つてでも、最後には悪に打ち勝つ！」

「だから、」

「だからあの子達を、滝を」

立ち竦むオーズは、だが川の中から飛び出して来た怪人に気付いき、慌ててデンライナーの方へ走り出した。

亀の怪人らしいその存在の背には、一メートル程の砲身が背負われていた。

「カーメーラー!!」

一声叫ぶや、その怪人は四つん這いになった。そして立て続けに二発、甲羅の上の迫撃砲でデンライナーを攻撃した。

二発はデンライナーの後方車両に着弾し、大きく車体が揺れた。

「火神君、戻って下さい、列車を発車させるってオーナー代理が、うわあ！」

「わー！」

乗車口にいた剛と黒子@レイヴの悲鳴が上がる。

その横に、滝を担いだ電王が飛び込んだ。乗り込むなり、変身を解いた閃からウルフィマジンが離れる。

「ウォルフイ、緊急発進、頼む！」

『判った！』

赤い狼の怪人が、運転席側へと走るのを横目に、香山閃は列車から飛び降りようとする滝を羽交い締めにして止めた。

「離してくれ、二人が！」

「滝さん！」

そうやって揉み合う内に、動き始めた列車にオーズが飛び乗った。振り返ったオーズは、シヨツカークグリードに捻じ伏せられた二人の姿に、ギリつと仮面の下で歯を噛み締めた。

だが、それも次の瞬間起きた爆発音と大きな揺れ、年少者の悲鳴で脇に置かねばならなかった。

亀型怪人、『カメバズーカ』による爆撃は、激しさを増していたのだ。

09. どん底より

09. どん底より

カメラズーカによる迫撃砲攻撃によって、デンライナー二号車は炎に包まれつつ走る。

昇降口に固まる面々に向かって、十五、六歳に見える女性乗務員が声を張り上げる。

「後方車両を切り離します、皆さん、前方に移動して下さい！」

「！ 皆、前の車両に行こう、早く！」

閃の声に押されるように、揺れる車内を少年達は前の車両へと移る。

だが、一際大きな爆発とともに、大きく揺れた車両から炎が吹き出す。乗務員として、移動する人員の確認をしていた少女は、その揺れで炎に包まれた車両へと転がり込んだ。

「乗務員さん!?!」

「おい、大丈夫、うわ!!」

黒子テツヤ@レイヴと、火神大我が戻ろうとしたが、立て続けの爆発による揺れと吹き上がった炎で、貫通扉から離れねばならなかった。

滝和也と天馬、剛の三人を先に行かせた香山閃がオーナー代理とともに戻って来て、炎に包まれた客車の中で起き上がったものの身動き取れない少女の姿に青褪める。

「ロツテー！」

「中佐、きやあ!!」

代理の声に、必死に立ち上がろうとした乗務員の少女だったが、更なる揺れと勢いを増す炎に身動き取れなくなった。その時だった。

オーナー代理と閃の間をすり抜け、火の海になりつつある車両の中に、先に奥へ行った筈の滝和也が飛び込んだ。

彼は着ていたジャケットを少女の頭に被せると、そのまま腕に抱き上げ、貫通扉へと投げた。咄嗟の事で、閃とオーナー代理とは衝撃を減らす為に、彼女を受け止めると同時に仰け反るようにして扉から離

れた。

まるで、それを待つていたように再びの爆音、それと同時に最終車両との連結部分に砲弾が当たり、爆風にそこに固まっていた全員が吹き飛ばされる。

「がつー！」

「ぎゃっー！」

煽りで壁に叩き付けられ、大我と黒子@レイヴとが呻き声を上げる。

そんな弟分に一瞬目を向け、しかし閃は燻ぶる貫通扉の向こう、爆発しながら時間の狭間に落ちて行く車両を見て膝を付いた。

滝が、こちらにいないのは一目瞭然で、落ちて行く車両は燃え尽きんばかりに炎に包まれていて、彼の生存は絶望的だった。

「畜生」

ガンつと、床を殴り付ける。

あそこで、ライダー達を置き去りにしたのは、滝さえ生きていれば逆転出来ると閃なりに考えたからだ。なのに。

だがしかし、感傷にも後悔にも浸る暇を与えず、デンライナーの振動は酷くなっていく。

「閃、その二人と奥の二人を連れて離脱しろ、デンライナー二号車はもうすぐ爆発する」

「オーナー代理?！」

振り返ると、意識を失っているらしい乗務員の少女を抱えたまま座り込んでいるオーナー代理の肩が、赤く染まっているのに気付いて閃の顔が引き攣る。

しかし、近付こうとする閃をオーナー代理は叱り付ける。

「行けー、あの子達を殺す気かー！」

「!」

歯を喰い縛り、閃は揺れに逆らうように壁に捕まり、弟分に近付いた。

オーナー代理とのやり取りを聞いていた大我は、何か言おうとしたが閃が頭を横に振ったのを見て、そのまま口を閉ざした。

奥から、滝を追って戻って来た中学生二人が、状況を見て青褪める。その二人を目にして、閃は覚悟を固めた顔になる。

「大我、短距離で良い、飛べるフォームはあるか？」

「え？」

言葉に詰まる弟分が変わって、その友人を寄り代にしているグリードが唸るように応える。

『俺様のメダル、赤のコンボなら飛べる。が、精々俺とあの二人を抱えて飛ぶので限界だぞ』

「良いよ、俺は自力で何とかするさ。」

ウォルフイ、自動運転にセットして離脱してくれ、俺達も脱出する！」

相棒にそう怒鳴り、閃は大我に変身するよう促した。

大我はまだ迷っている様子で、オーナー代理に目を向けた。その彼に向かって、オーナー代理であった男は短く「行け」と言って眼を閉じた。

まだ躊躇していた大我だったが、反対側の貫通扉側から炎が吹き上がったのを見て心を決めた。

「すみません！」

タカ、クジヤク、コンドル！

タージャードーラー！

黒いボディを、赤色トリコロールに包んだ姿に変わると、オーズは両脇に剛と天馬を抱えた。その背に、レイヴ@黒子が縋り付く。

「行くぞー！」

「おい、あの人達!？」

「うわああ!？」

飛び出した大我オーズの目に入ったのは、見覚えのあるビル群に、炎に包まれ蛇行するデンライナー。

そして、閃が一拍遅れで飛び出すのを待っていたかのように、その車両は粉々に砕け散った。

三人抱えた為に優雅には行かず、裏路地のぼろぼろで放置された

アスファルトの上に滑り込むようにして着地したオーズは、慌てて飛び降りた閃の姿を探した。

取り敢えず、飛び出した空中でイマジンのフォロー無しでオーラスーツを着込んだ閃こと電王の方は、オーラアーマー無しのプラットフォーム状態でバラツク小屋へと飛び降りた。

しかし、見た目以上に傷んでいた小屋のスレート屋根は、地上五〇メートルから降って来た体重七〇キロ前後の重量物にあっさり破れてしまい、電王はそのまま下まで落ちて泥の上を転がった。

「痛うううっ」

「電王！」

変身を解いて、駆け寄った大我に向かって片腕を挙げて見せつつ、同じく変身を解いた閃はその挙げた拳を固め、地面に叩き付けた。

「せん、」

「畜生っ、もう、時間を遡って修正する事は、出来無い。一号車がこちらに気付けば、いや、二号車が吹っ飛んだ以上は……」

そう呻くと、座り直した閃は吹き上げた炎で少し焦げた髪を掻き混ぜ、そのまま手で額を覆った。

その様子に、天馬と剛は不安そうに顔を見合わせる。が、何かに気付いた様子で天馬が閃と大我に声を掛ける。

「シヨッカー警察が来る、ここから動こう！」

「天馬の勘は当たるんだ、行こう！」

剛の言葉に、取り敢えず五人？は移動を始めた。

彼らが離れて数分後、天馬の言葉通り彼らの居た路地裏に、シヨッカーの骨戦闘員がわらわらとやって来た。戦闘員達は壊れたバラツク建ての屋根に気付くと、上司に報告を入れてまだ他にいる筈の不穏分子を探しにそれぞれ散開した。

その、戦闘員達の動きを、物陰から何う影がある。

その影は、そつとその場を離れると何処ともなく消えていった。

10. Revenge.

10. Revenge.

剛と天馬に連れられて、火神大我と黒子テツヤ@レイヴ、香山閃の三人？は彼らが隠れ家にしてた廃屋へ逃げ込んでいた。

入り口に残っていたボロボロの看板には、掠れているが《Amigo》と書かれていた。

中に入ると、店舗だったらしい部分にはボロボロの毛布や何とか洗ってあるらしいマグカップなどが並べてあり、此処に何人か寝起きしているらしいのが見て取れた。

そこから更に奥に行くと、ジャンクを繋ぎ合わせたらしい古い通信機器が置かれてあった。

「他にも何人か居るんだけど、皆出払ってるみたいだ」

「これは？」

「元々あった無線機に、皆で機械拾ってきて繋いで、ショツカーの放送や無線を盗聴するのに使ってるんだ。

あいつらの哨戒範囲とか、これで結構聞けるんだ」

剛の言葉に頷く閃の前で、天馬が通信機をいじる。

ざざざつと雑音が流れた後、低い男の声流れ出す。

『……今此処に、全ての組織がSHOCKERに統合された。』

世界の平和を乱（みだ）す、愚かな人間共を排除する事が決定した』
その声に、閃も、そして大我也眉を盛大に顰めた。

あの時、アジトで聞いたショツカー大首領の声に他ならなかったからだ。

『ふん、要するにショツカー以外の人間は殺すって事か』

「笑い事じゃありませんよ、レイヴ。火神君、閃さんもこれからどうしますか？」

黒子の声に、大我は兄貴分の方へと視線をやった。

香山閃は、時の運行を守る《電王》である。しかし、幾つかのぽかと想定外の事態との連続によって時の列車デンライナーを失い、時間を遡って歪んでしまった世界を修正する事は不可能になった。しか

し。

「歪みを修正して、この世界を無かった事に出来ないのなら、せめて仮面ライダー一号二号を奪還しよう。」

彼らの洗脳の下にある本来の彼らは、必ず逆襲を誓っている筈だ」その言葉に、大我はあの時の——ショットカークグリードを足止めしようとした、二人の言葉を思い出した。

私達は、決して悪には屈しない！

どんな手を使ってでも、最後には悪に打ち勝つ！

だから、

だからあの子達を、滝を

閃の言葉に、大柄な弟分が同意を告げようとしたその時だった。

「あんだ達、誰!?!」

急な声と共に、ガチャガチャツと何かの金属音がした。

振り返った大我と黒子@レイヴが見たものは、些か旧式だが立派なライフルを構えた五人の男女であり。

「カントク!?! それに先輩方!?!」

「え?」

二人の声に、相田リコと思しい女性と誠凛高校バスケット部二年生らしい面々は、戸惑ったように仲間内で顔を見合わせた。

天馬と剛の執り成しを受け、三人+αは剛達と一緒に暮らしていると言う五人と改めて話しをする事になった。

その際、誠凛高校とバスケット部の事は混乱の元になるから話さないようにと閃に言われ、黒子があからさまに不機嫌になった。

それに対しては、レイヴが何か言った様子だったが、それは割愛する。

「俺は香山閃、こっちの大柄なのは弟分の火神大我、その横のは弟分の友人の黒子テツヤ。事情があつて二重人格っぽいけど、そこは訊かないでやってくれ。」

俺達はショットカーと揉めて、この二人に助けて貰ったんだ」

「そうだったの。私は相田リコ。あの子達の姉代わりよ。後ろにいる

のは伊月俊君、土田聡史君、水戸部凜之助君に小金井慎二君。

他にも何人かいるけど、今は出払っているわ」

ざっくりとした閃の言葉に、相田はあっさりと言った。

おそらくは、勘が良い天馬が連れて来た人間と言う事で、警戒レベルを下げているのだろうと閃と大我は思った。また、警戒心の強い剛が何も言わないと言う事も、ポイントが高いようである。

話を聞いていた大我は、ふと相田の胸元に目が行った。

ボロボロの、男物らしいレジャー用ジャケットの胸ポケットに、小振りな眼鏡が挿してある。レンズが割れているらしいその眼鏡に、事態を悟って大我は口を真一文字に閉ざした。

が、レイヴ@黒子がばっすりとその疑問を口にして、大我は飛び上がりそうになった。

『なあ、あんた、その眼鏡、何の役にも立たないんじゃないのか』
「おいっ」

レイヴの言葉に、一瞬こちらを見ている四人の目が厳しくなる。が、そんな仲間達を制し、相田は眼鏡を挿したポケットを押さえつつ静かに答えた。

「これはね、私を庇って、ショッカーに捕まった幼馴染みのものなの。

もう、いないとは思っただけど、手放せないの」

淡く笑つてのその言葉に、大我は黙って相棒の小さな頭を握り込む。

ぎりぎりと言葉の間に、「僕じゃないのに……」とボヤきつつ、しかし黒子はアイアンクロウを甘受した。

目一杯握力を掛けている弟分に、流石に止めようと閃が声を掛けようとしたその時だった。

突然通信機から、急ぎ立てるようなビーブ音が響いた。

その音に、天馬と剛、そして先輩であった五人が腰を浮かせる。

「えっ」

「警告音？」

思わず顔を見合わせた誠凛一年エース達に、本来の時間での練習中のような緊迫感とともに、相田リコが急ぎ立てる。

「シヨツカーが近付いているわ、逃げましょう！」

急な事に戸惑いつつ、それでも三人？も立ち上がる。

閃の手を掴み、天馬が先に立って走る。その後ろを、大我と黒子@レイヴの背を押すようにして剛が続く。

リコ達五人も、手早く生活の痕跡を隠すと、天馬達とは逆方向へと走り去る。

シヨツカーの戦闘員達が踏み込んで来たのは、皆が立ち去った数分後。

古ぼけた椅子に僅かに温もりが残っている事を確認すると、戦闘員達は再び散っていった。

走って走って、五人+αは最近使われていないらしい倉庫で息を吐いた。

ごろごろと壊れた家具や家電、コンテナなどが転がるそこで、それらの影に身を隠しつつ息を整える。

体力の関係で、黒子の代わりに肉体のイニシアティブを取っているらしいレイヴが、確認するように声を上げる。

『取り敢えず、仮面ライダーを取り返すと言っていたが、どうやるつもりだよ』

「そう言えば、俺がこの時代で一号二号と戦った時は、俺の財布に入れた写真を見て、二号が大暴れしたんだけど」

「写真？ そう言えばそんな事言っていたな」

時計の上では一時間、しかし体感時間では既に一八時間以上経過していると言う事実以上に、デンライナーを失った事と未だに相棒ウルフィが合流しない事にダメージを覚えていたようで、閃は事態を思い出すのに暫く掛かった。

大我の方は、改めて財布を取り出しそこに挟んでいる写真を見て、薄くなってしまっている仲間達の姿に眉を下げた。

大きな身体を縮めるようにして、壊れた筆筒の影にいる大我に向かって、実は仲間内で唯一人大我の兄弟分をよく知らない黒子@レイヴがそう言えばと話し掛ける。

「そう言えば、火神君。

それらさんと言う方とかいとさんと言う方って、どう言う方々なんですか?」

「いや、だから俺にとつては物心付く前からの兄貴分。

そうだなあ、L・Aで事件に巻き込まれるまで、兄ちゃんと言えば閃兄ちゃんと海斗兄ちゃん、空兄ちゃんだったんだ。

海斗兄ちゃんが《HOOKアイ・ホールディングス》会長秘書である滝和也の息子、空兄ちゃんはその親友の息子だって聞いている。

滝の小父さん、若い頃あんなに細っこい人だったんだなあ、小料理屋の兄ちゃん達が兄ちゃんはたいきばんせー型だって言ってた理由が判った」

「大我、それちよつと違う。

まあ、取り敢えず小父さんと海斗はあまり似てなかったけど、一文字さんと空は瓜二つだったな」

閃の言葉に、大我は驚いたようにこう言った。

「え? 何言ってるんだよ閃兄ちゃん、海斗兄ちゃんと小父さんそっくりじゃん。

立った時の姿勢とか、歩き出す時とか、チビ達に話し掛ける時とか、笑った顔なんか本当にそっくりだけ?」

弟分の言葉に、思わず閃は押し黙る。

火神大我は、昔からやや神経質な一文字空、手まめで人一倍動き回る滝海斗の後ろをついて歩いていただけあって、一見大雑把そうだが細かい事に気が付く性質(たち)である。因みに、一緒に育った灰崎祥吾は、空の手の速さと海斗の粘り強さを吸収している。

弟分の意外な——と言うと本人は憤慨するだろうが——観察眼に言葉を失った、その時だった。

「イー!」

「イー!!」

戦闘員の声が聞こえ、思わず全員が息を詰める。

二人組で動いているらしい戦闘員は、だが何やらぼそぼそと話し始めた。

「それにしても、先ほど捕まえたあの赤い狼みたいなの、イメージと言
うらしいな」

「グロンギともオルフェノクとも違う、不思議なもんやったなあ」

赤い狼と言われて、閃の眉が跳ね上がる。

やる気が無いのか、ブラブラと歩いている戦闘員二人は聞き捨てな
らない事を落として行つた。曰く、

「仮面ライダーは相変わらず不安定やなあ」

「大体、元々大首領様に逆らつて、人類の味方やつた奴らじゃない
か。補助頭脳に仕込んだ洗脳装置だけじゃ抑え込めないから、飛行船
に洗脳装置の中継器を積んで、奴らを出す時に洗脳が解けないように
しているんだろうに」

「そこまでして仮面ライダーを使わなくてもと思うんやけど、人類へ
の面当てなんやろうなあ」

そんな事を話しつつ、戦闘員は遠ざかつて行く。

暫く様子を窺うかがっていた面々は、顔を見合わせ声を潜めた。

「聞いたか？」

「ああ」

「うん」

「飛行船って、あの側面に大型モニターの付いた、鷹か鷲が羽を広げた
シンボルの付いたあれでしょうか？」

「それで合つてると思います。あれ、シヨツカーの広告用だけじゃな
くて、仮面ライダーを縛るものだったんですね」

閃の問い掛けに、大我と剛が頷く。

黒子が呟くのに向かつて、悔しさを滲ませつつ天馬が応える。

少し考え、大我は閃の方を見た。

「なあ閃兄ちゃん、兄ちゃんの相棒、あいつらに捕まつてるみたいなん
だよな？」

「ああ、道理であいつらしくもなく、何時までも合流しないと思つた
ら」

「じゃあ、兄ちゃん、二手に別れよう、兄ちゃんは相棒を助けに行つて
くれ。俺、飛行船を落として来るから」

サラツと言われた言葉に、閃は顔色を変えた。

「バカ言え、そんな事出来るか。今回は黒子君も天馬も剛も一緒なんだぞ」

「黒子は元々ミスディレクションに長けてるし、戦闘員ぐらいならレイヴが捌ける。」

それより、あいつらに捕まってるって言うなら、ウォルフイ酷い事されるんじゃないのか？」

「そうですよ、早く助けないと」

大我の言葉に黒子が同意すると、ここぞとばかりに剛も声を上げた。

「そうだよ、あいつ助けてやろうよ、それに、さつき兄ちゃん変身した時、何時もと違う姿だったじゃんか、あいついないと困るんじゃないのか？」

それを言われ、一瞬詰まりだが観念したように閃はこう答えた。

「そう、ウォルフイがいないと俺はプラツトフォーム以上のフォームチェンジが出来ない。そうである以上、正直お前と別れてウォルフイを助けるっていうのは、骨だな」

「じゃあ、ウォルフイさんを助けて、飛行船を壊すでいいんじゃないかな？」

「それを言ったら、ウォルフイが何処に居るのか判らないんだぞ!」

天馬の言葉に、閃は否を唱える。

その言葉に一同が言葉に詰まった、その時だった。

倉庫の、割れたガラスを震わす勢いで、頭上から男の声がある。恐らく、飛行船をスピーカーとしているのだろう、音が動いているのを感じる。

低く掠れた老人の声に聞き覚えはないが、一人だけ思い当たる人物が居た。

あのアジトで、大首領の側に控えていた軍服に鉄兜の老人、ブラツク將軍。

『今、この街の何処かに隠れている、仮面ライダーを称する不穏分子共に告ぐ。』

お前達の仲間であろう未確認生命体を、これから一時間後に処刑する。助けようなどと言う無謀は、考えない事をお奨めする。

それでも挑戦するなら、一時間以内に臨海公園に設置された処刑場へ来るが良い』

「兄ちゃん」

「……畜生、完全に馬鹿にしやがって」

ガンっと、コンクリート床を殴ると、閃は口惜しそうにその拳を眉間に当てた。

そんな年上に向かって、レイヴ@黒子が声を掛ける。

『どうするんだ？ 向こうさんは、来ないだろうと高を括ってるみたいだがな？』

「レイヴってば、」

「……判ったよ、まずはウォルフィを助け出す。その勢いで、飛行船もあいつらもぶっ飛ばす。

それで良いな、大我」

そう言うと、閃は立ち上がった。

彼に続いて、他の面々も立ち上がると、戦闘員達の動向に気を配りつつその場を後にした。

11. hurry up!

11. hurry up!

幸いと言うのもおかしいが、火神大我や黒子テツヤの持つスマートフォンは普通に使う事が出来た。

流石に登録している電話番号に掛ける事はしなかったが、地図アプリで臨海公園の位置を調べると、直線距離でもさほど離れていな事が判った。

物陰を縫うように移動を繰り返した五人？は、普通に歩けば一〇分ほどで辿り着く場所に、三〇分掛けて近付いていた。

本来なら、ストリートバスや、コンサートなどのイベントが開かれたら公園には、戦闘員によつて無機質な金属製の十字架が建てられようとしている。

一本ではなく、二本、三本と建てられるのを眼にして、香山閃は眉を顰めた。同じように物陰から公園内を見ていたレイヴ@黒子が舌打ちする。

『はん、俺達を捕まえる事を前提に、処刑場の準備をしてやがるな』

「ああ、俺とウォルフイ、大我とレイヴ、いや黒子君かな」

「僕ですか。まあ、右腕だけのレイヴを吊るすなら、わざわざ十字架でなくても、柱一本でいいですものねえ」

『おい』

傍目には一人漫才みたいになっている黒子に、大我は思わず溜息を吐いてしまう。だが、公園の中に飛び込もうと制服のポケットに突っ込んでおいたドライバーを取り出そうとして、そのまま凍り付いた。

「あれ？ 兄ちゃんどうしたの？」

「えーと」

「にいちゃん？」

「ドライバーが、無い」

真つ青になった大我の言葉に、中学生二人が青褪め、閃の顔が引き攣り、レイヴ@黒子が襟首を掴み上げた。

『てめえ！ 何やってやがる！』

「せ、先輩達に会った時には、ポケットにあっただ、だから、落としたんだとしたらさっきの倉庫かなって」

「火神君え……。すみません、フォローしようがありません」

焦って答える大我の言葉に、暫く額を抑えていた閃は、こちらに近付く複数の存在に気付き周囲に警告を発した。

「不味い、戦闘員が来る！」

大我、お前はドライバーを拾って来い、こっちは俺が食い止める、天馬、剛、レイヴに黒子、後は頼む！」

そう言つて、閃はこちらに気付き殺到する戦闘員の集団へ向かって走り出した。

考えたのは一瞬、大我は相棒の肩を掴んでこう告げた。

「悪い、黒子、レイヴ、ドライバー拾ってきてくれ、頼んだ！」

「か、火神君?！」

言うなり、戦闘員相手に乱闘している閃に加勢に入った大我を、黒子テツヤはなんとも言えない顔で見た。

だが、それを振り切るように中学生二人の背を叩いたのはレイヴの方だった。

『あの馬鹿。』

さっさと取りに行くぞ、このままじゃ話にならない』

「レイヴ！」

「そうだね、急ごう！」

「だあもう、世話が焼ける兄ちゃんだな！」

そう言い合いつつ、四人?はもと来た道に戻るべく走り出した。

壊れた倉庫まで、後数十メートルという所まで来て、四人は足を止めねばならなかった。

彼らを、シヨッカーユーゲントの一団が待ち構えていたからだ。

「見つけたぞ、アンノウンの幼生体」

「幼生体?！」

赤毛の少年の言葉に、黒子@レイヴが首を捻ると、吐き出すように剛が答える。

「あいつら、天馬の事そう呼んでんだ。意味判んねえけど」

『……成程、普通の^{ガキ}子供と空気が違うと思つたがな』

「レイヴ？」

「僕達を無視するのは止めて貰おうか！」

ビシッと、音を立てて黒子の肩が裂けた。

はっと身構えた四人の目の前で、赤毛の少年は革製らしい長鞭を束ねた状態でこちらを指した。

「お前達に選択肢はない。大人しく我々に付いて来て貰おう」

「トウーマツチ過ぎます、赤司くん」

『おい』

思わず呟いた宿主に、レイヴが小さく突っ込む。

その様子をバカにされたと取つた少年が、天馬目掛けて大きく鞭を振るつた。

風を切つて襲い掛かる皮の鞭に、剛が天馬を庇い身を固くした、その次の瞬間。

パンつと、大きな音を立てて赤司の繰り出した鞭は弾かれた。

「……え!?」

「何っ!」

「……え?」

驚く青少年の集団の前に、一人の男が現れた。

テンガロンハットに赤いシャツ、黒のウエスタンルック。見た事もない男の姿に、黒子@レイヴ、天馬と剛は途惑いを隠せず、シヨツカーユーゲント達は胡乱なものを見る目を向けた。

それに向かつて、ウエスタンルックの男は芝居がかった仕草で手にした鞭で帽子を上げると、周囲を見渡し赤毛の少年に目を留めてこう言った。

「赤司征十郎クン。

シヨツカーに協賛する日本企業の最大手、赤司コーポレーション会長の一人息子。

文武両道、カリスマ故にシヨツカーも期待を寄せる天才児。

子供にしては鞭の腕もまあまあだ。

だが」

男は軽く口笛を吹いた。

敵を怒らせる為ではなく、駄々を捏ねる幼子をからかう、いや、論す様に。

「日本で二番目にも程遠い」

男の言葉に、ユーゲント達の大半は馬鹿馬鹿しいと言う表情を浮かべ、赤司の周囲にいるカラフルな面々は不愉快そうに顔を歪めた。

「あんだよ、テメエ」

「赤司つちは、シヨツカーでも一番の鞭の名手が絶賛したんスよ!？」

「赤ちんの事馬鹿にするなら、捻り潰すし」

「得体のしれない人間に、仲間を侮辱される覚えはないのだよ」

「貴方、何者ですか、私の情報網に引つ掛からないなんてっ」

黙っている赤司の周囲で、青髪、金髪、紫髪、緑髪の少年、桃色髪の少女が喚く。

それに対して何も答えず、男はすつと何かを取り出し、天馬の手に握らせた。それは大我が落としたメダルドライバーだった。

「これ!？」

「これを取りに行こうとしていたんだらう? 早く、どじな兄ちゃんに届けてやりな」

男の言葉に一瞬目を見合わせ、天馬と剛は男に一礼して駆け出した。一瞬遅れたが、黒子@レイヴもきちんとお辞儀をして二人を追った。

その三人を追い掛けようと、青峰、黄瀬、紫原が動こうとしたその次の瞬間、男は腕を大きく振るった。

ただそれだけに見えた腕の一振りで、うねるように翻った鞭の先端が三人のみならず赤司と緑間、桃井の胸元に付けられていた翼を広げたシヨツカーユーゲントの記章を弾き飛ばし、空中で纏めて手近な壁へと叩き付けた。

「生憎だが、シヨツカーで一番だろうが、日本一じゃないなら、俺の敵じゃないね」

バチンツと、大きく火花と共に砕けた記章と、ぱらりと手のひねり

だけで鞭を纏めた男とを見比べ、後ろに控えていたユーゲントの少年達はわっと蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「こ、こら、逃げるな！ 逃げたらお前達は」

「みどりん、駄目」

事態に凍り付いていたものの、逃げた班員に気付いて振り返った緑髪の少年が何かを言い掛けたのを、慌てて桃色髪の少女が止める。

だが、テングロンハットの男の言葉に、六人は飛び上がる事になる。

「盗聴器は叩き壊しておいた。」

六人とも、もう本音を零しても大丈夫だぜ？」

「気付いていたのか？」

目を細めつつそう問うた赤司に、男の方はにっと笑って応える。

「俺は探偵でね、とある人物の依頼でこの街とシヨツカーの調査をしていた。」

お前さん達が候補生と言う名の人質である事も、シヨツカーに忠誠を誓う振りをしつつ同年代の人間に武器を横流ししていた事も、お前さんが仲間三人への改造命令を撤回させる交換条件の為に、あの赤毛の坊主を捕まえようとしていた事も、全て調べさせて貰った」

男の言葉に、今まで張り詰めたものが切れたように桃井と黄瀬が座り込む。

二人を労る仲間を横目に、赤司征十郎は男を見る。

二十代後半、いや三十代くらいか。

しかしあの鞭の腕と言い、幹部と自分達しか知らない筈の事を調べ上げた手腕と言い、目の前の人物は彼が今迄出会った事の無いタイプの人間であった。

赤司の思考を他所に、男は何処からともなく取り出したギターを肩に担ぎこう宣った。

「さて、そろそろ次の仕事だ」

「次の仕事？」

聞き返した赤司に、男はテングロンハットの位置を直してこう答えた。

「ああ、これから上がる汚い花火に合わせて、シヨツカーに無理やり協

力させられている科学者達を脱出させると言うお仕事だ」

そう言った男の背後に、物凄い爆音と共に、巨大なファンを背負った真つ赤なオーブンカーが一台突っ込んで来た。

あつと思ふ間もなく急停車したその車——どうやらオートドライブだったらしい——に飛び乗り、男はあつと言う間に走り去って行った。

「赤司」

「行こう、真太郎。どうやらこれから、大事件が起こるらしい」

「大事件って、赤司くん」

近付いた長身の補佐役と、顔を上げた紅一点に向かって、赤司征十郎は仲間達すら久方ぶりに見る笑顔でこう言った。

「僕、いや俺の手でないのは残念だが、これからシヨツカーを揺るがす何か大きな事が起きるらしい。」

見に行こうじゃないか、何が起きるのか」

その言葉に顔を見合わせ、そして頷き合った五人は、リーダーとともに何処かへと身を隠した。

そんな彼らの頭上を通り、シヨツカーの広報用飛行船はゆつくりと海へと進んでいた。

12. 仮面ライダーの相棒

ショットカーユーゲントから逃げ出した三人＋αは、海浜公園のモニュメントが見える辺りで隠れ家で別れた五人と合流していた。

「天馬、剛も！」

「姉ちゃん！」

「あれ、あのでかいのもう一人は？」

少女が年少者二人を抱き締める横で、線目の青年からの言葉に心持ち遠い目になりつつ、黒子テツヤ@レイヴが答える。

「実は、公園に捕まっている閃さんの仲間であるウォルフイさんを助けようとして、火神くんが肝心なものを落としてしまいました。」

二人が戦闘員の気を逸らしている間に、それを僕達が行ったんですが」

「じゃあ、二人は捕まったって事か!？」

少年四人の内、一番整った容姿の——その代わり、それを隠すように頬に煤を塗っている——少年が呆れたようにそう言うと、黒子は表情を変えぬまま肩を落としてみせた。

それに向かって、口を開いたのは剛だった。

「とにかく、急いで助けに行かないと、兄ちゃん達殺されちゃう」

「とは言っても、どうやって?」

「…………?」

「水戸部も、危険だった」

大柄な少年の言葉を、小柄な少年が代弁する。

そのやり取りに、思わず涙が滲みそうになりつつ、黒子はこう切り出した。

「皆さんで、少し騒ぎを起こしてくださいませんか、そうしたら僕が近付いて、三人の拘束を解きますから」

「……………」

「君、本気で行ってるの?」

驚く面子の中で、相田リコだけが自身より少し背のある相手を見つ

め返す。

それに向かつて、黒子はこつくりと頷きつつ答えた。

「気配を消す事には慣れてますし、相棒の不始末ですから『多少なら打たれ強いしな』」

そう言つて胸を張つた黒子に、五人は何ごとか言いたげだったが天馬と剛の二人に押し切られ、そのまま公園内へと向かった。

海浜公園内に作られた処刑場には、近隣にいたらしい人間数百人が集められていた。彼らの周囲には、骨戦闘員と怪人、そして『シヨツカー』の傘下に入った未確認生命体達が、威圧するように周囲を囲んでいる。

そればかりではなく、幾つかTVカメラらしいものが設置され、それを戦闘員がいじっている。どうやら、『反逆者の処刑』を中継する為のものらしい。

シヨツカーのエンブレムである鷲のシルエットが刻まれた、二〇メートルはありそうな金色の尖塔の足元に、礫台は三角形を作るように並べられていた。

何処と無く暗い顔の人々の目の前に、赤いどう見ても怪人が一人と、一九〇センチはあろう大柄な少年と彼よりは年上らしい一八〇センチほどの青年とが手枷で拘束され引きずられて来た。その後ろから、仮面ライダー一号二号が黙々と付いて来ている。

彼らを見て、「え？」とか、「あれが仮面ライダー？」と、囁く声が溢れる。

そんな中、刃物で脅され動けない三人を、戦闘員達は倒されていた十字架に縛り付けた。そのまま引き起こされた十字架の足元へ、薪が積み上げられ灯油まで撒かれた。

「嘘だろ!？」

「焼き殺す気かよ、こいつら」

灯油の匂いにむせつつ火神大我が唸ると、無駄に固い金属の留め具を睨みつつ香山閃が齒軋りする。

そんな二人に向かつて、やはり縛られたウルフィマジンが耳を垂ら

して謝罪する。

「閃、大我くん、濟まない。俺が奴らに捕まらなければ」

「気にするな、俺の見通しが甘かったのが、そもその失敗だったんだ」

「いや、あそこで俺がドライバーを落とさなけりや」

お互いに言い合う内に、閃は自身のターミナルバックルを持ってニタニタ笑っている、緑色のコウモリのような怪人が目に入って眉を顰めた。

そうこうしていると、軍服に鉄兜の老人が三人と見物人の間に立って声を上げた。

「人間共に告ぐ。」

これより、『仮面ライダー』と称する反乱分子の処刑を執行する」

ブラック將軍の声に、見物人のざわめきが小さくなる。

人々が静かになったのを見て、ブラック將軍はすつと右手を挙げた。それに応えるように、松明を抱えた戦闘員が三人、広場に入ってきて十字架の前に並んだ。

燃える松明に、閃と大我の表情が引き攣るのを視界の端に見て、ブラック將軍の口の端がニンマリと吊り上がる。

馬鹿にされているのを感じて、閃はぐつと視線を引き締めた。

それに向かって更にニタリと笑い、老人は腕を振り下ろそうとした。その時だった。

パパン、パンパンパン！

人垣の後ろ側で、突然炸裂音が立て続けに響き、わつと人垣が崩れる。

「何!?!」

「何の音だ!?!」

「ええい、ゲリラのガキどもだな！ 捕まえろ！ あいつらも一緒に焼き殺してやるわ！」

ターミナルバックルを抱えた緑色の怪人——ガニゴウモルが吠え立てるように喚くと、その声に弾かれるように戦闘員達が走り出す。

断続的に続く炸裂音に、戦闘員が右往左往している最中だった。

突然何処とも知れない場所から現れた金色の異形、シヨツカーク
リードが飛び出し大我の後ろ側を大きく腕で薙いだ。

『うわぁ!?!』

「黒子、レイヴ!?!」

礫台で、必死に身体を捻った大我は、倒れ込み痛々しく頬を腫らし
たレイヴ@黒子の姿に目を見開いた。

カララっと、黒子の手からメダルドライバーが吹っ飛んでいる。

そのドライバーを、戦闘員の一人が拾い上げる。

他の戦闘員や怪人達に刃物を突き付けられ、レイヴ@黒子は顔を顰
めた。そうこうする内に、天馬と剛、ゲリラの五人が同じように刃物
を突きつけられた状態で連行されて来た。

レイヴ@黒子と同じ場所で突き転がされた七人を、怪人達が嘲笑い
つつ見ている。

「くく、騒ぎに紛れて仲間を助けようと言う計画は、平凡だが良いもの
だったし、多くの怪人の目を掻い潜ったとは大したものだ。

だが、シヨツカークグリードには通じなかつたな」

『けっ』

ニタニタと笑いながら、座り込んだレイヴ@黒子に向かって言った
ブラツク將軍は、メダルドライバーを拾った戦闘員に向かってそれを
寄越せと手招きした。

招かれた戦闘員が、手の中の物を手渡そうとして、不意に「あ!」と
言う声と共にすつと指差した。

その手の中に、リモコンスイッチが握られている事に誰も気付か
ず。

キュボーンン!! ボンボンボン、ズドーンン!

指差された先、海上をゆつたりと進んでいた巨大モニター付きの飛
行船が大きく爆発炎上した。しかも、それに吊られるように周囲の電
波中継機であろう塔やビルの一部からも火柱が立った。

「な、何だと!?!」

「飛行船が、ゲフツ!?!」

戦闘員の蹴りを喰らい、ガニコウモルはターミナルバックルを放り

うとした戦闘員達を蹴散らし、滝の左右に並んだ。

その光景に、見物していた人々の間からざわめきが消える。

「滝」

仮面ライダー一号が、万感を込めて滝の右肩に左手を載せる。

「待ち草臥れたぜ」

仮面ライダー二号が、声の震えを隠しつつ右の拳を滝の左肩に当てる。た。

そんな二人の盟友に、滝は少し表情を和らげ二人の背に手を当てる。た。

「俺にとつちや半年だが、お前らには四〇年なものな。」

……待たせて悪かったよ」

そう言つて、滝和也は二人の背に手を添えた。

そんな彼らに向かつて、苛立ちを隠さずブラック将軍が唸る。

「おのれ、FBIの犬め。だがシヨツカーグリードに敗れた旧式の改造人間二体に、足手纏の貴様にガキどもで、何が出来る！」

「け、偉そうに言つてくれるな」

滝が鼻を鳴らすと、横に並んでいたライダー二人が一步前に出た。

「やつと、雪辱を果たす時が来た」

「今一度、シヨツカーの敵、そして人類の味方として俺達は戦う！」

身構えつつそう啖呵を切ったダブルライダーに、ブラック将軍の青白い顔にピキピキと青筋が走った。

そしてある意味、奴隷以下とライダーを見下していた怪人達が、二人を打ち据えようと命を待たず飛び出そうとした、その時だった。

「それでこそ先輩方。我々もお手伝いさせて下さい！」

突然の声と共に、海浜公園内に建てられていたシヨツカー大首領を称えるオベリスク状のモニュメントの上に、赤と緑の人影が現れた。

赤い頭部に緑の複眼、海風に靡く二対のマフラー。

その存在を知っているのは、今この場には香山閃唯一人だった。

「仮面ライダー、V3。どうして、だって仮面ライダーは」

時間の果てに消えてしまったと、言い掛けてハツとなる。

尖塔の突端からV3が飛び降りると、まるでそれを待っていたかの

ように次々と仮面ライダー達が現れたのだ。

パワーアームを振るいつつライダーマンが。

ライドルスティックを自在に振り回しつつ仮面ライダーXが。

ガランダーの獣人に飛び掛かる仮面ライダーアマゾンが。

着地と同時に電気技を放つ仮面ライダーストロンガーが。

滑空しつつ現れたスカイライダーが。

飛び降りて来たと同時に拳を振るう仮面ライダースーパー1が。

電磁ナイフを構えた仮面ライダーZXが。

一気に怪人や戦闘員を相手に戦い始め、その姿に人々の表情が明るくなった。

「か、仮面ライダーがなんでこんなに!?!」

「馬鹿な、貴様達は何処から現れた!?!」

完全に彼らの想定外なのだろう、ガニコウモルとザンジオーが慌てふためきつつ、松明を持った戦闘員に火を点けるよう急ぎ立てた。

だが、戦闘員は勢いづいて突進してきた人々と、三人を助けようと飛び込んで来た滝和也と中高生八人に突き飛ばされ殴られた。

礫台の足元に積まれた薪を蹴散らし、水戸部に抱き上げられた天馬と剛とがイマジンの固定金具を外すのを見た他の人達が、同じように礫台に取り付いて大我と閃の金具を外し、三人は自由を取り戻した。

「閃兄ちゃん!」

「大我さん!」

「おう!」

「ありがとうな、剛。ウォルフイ!」

『ああ、閃、行こう!』

二人が差し出したドライバーを受け取り、大我が腰に当てる横で閃にウルフィマジンが同化する。

焦げ茶の髪に一房朱くメツシユが入り、深緑の瞳が朱く変わる。そしてターミナルバツクルを身に着け、閃はライダーパスを手にした。「変身!」

タカ、トラ、バツタ! Ta, To, Ba. t a t o b a, Ta ToBa!

『変身!』』

S L A S H F O R M !

黒い身体に、三原色が映える仮面ライダーオーズ。青いボディに、赤い電仮面が差し色のように映える仮面ライダー電王が現れ、人々から歓声上がる。

その二人の肩を、滝が叩いて笑った。

「おーっし、まずはこの連中ぶっ飛ばして、此処にいる人達を避難させるぞー!」

「それは、俺達もお手伝いします!」

打てば響くように返った声に、オーズと電王は顔を見合わせ、そして慌てて声の主を探した。

フアーンと、独特な電子音警笛を鳴り響かせ、公園の上空すれすれをデンライナーが走り抜ける。大我や閃が知るものと違い、白いボディに真っ青なラインが入っている。

「新型デンライナー!?!」

そして、驚く人々の頭上に八人の声が響いた。

「「「「「変身!」」」」」」

黒と金、真紅と金、黒と朱、赤と黒、新緑、青、黒と銀、そして橙色の仮面ライダーが着地した。

「アギト、クウガ! みんな、どうして此処に」

「いきなり、砂漠みたいな場所に投げ出されたと思ったら、あの列車に救われたんだ」

「事情は、オーナー代理って人に聞いた。頑張ったな、お前ら」

電王の疑問に、アギトとクウガが応える。

えっと、オーズは横で線目の青年と大柄な青年と一緒に戦闘員を殴っていた相棒と顔を見合わせた。

「俺達も、『伝説』の人達も、デンライナーに保護されてたんだ」

「人類の自由と、平和の為に戦う仮面ライダーが復活したから」

「俺らも此処に立つ事が出来るんだ」

仮面ライダー555、^{フアイズ}仮面ライダーHOPPER、仮面ライダービーストが言葉を続ける。

次から次に、見知らぬ『ライダー』が現れる事に、改造人間達は戸惑いを隠せずに吹き飛ばされる。寧ろ、未確認生命体側の方が積極的に新たに現れたライダー達と戦っている。

新顔のライダー達によって、幾重にも広がった戦闘員の壁に切れ目が出来た事を察して、滝和也は見物人として集められていた人々に向かって声を掛けた。

「皆、ここから逃げて、隠れてくれ！」

滝の声に、老若男女全員が動き出す。カラフルなライダー達に促され、見物人として公園内に集められていた人々は避難を始めた。

避難誘導の為走り出そうとしたリコの腕を、オレンジ色の果物と鎧武者モチーフのライダーが掴んだ。

「え？」

「リコ、お前も避難誘導が終わったらとぼちちりを受けない場所に隠れてろ、良いな！」

「っ、順平！」

声を掛け、そのまま襲い掛かる星屑忍者を切り払った鎧武者——仮面ライダー鎧武を見詰め、だがリコは思い切るように踵を返すと、仲間達に声を掛け走り出した。

きつと、ゆっくり話せる筈だから。

そう胸の内で叫びつつ、リコは弟分二人を促し、人々と共に公園の外を目指した。

人々が動くのを見ながら、滝和也が一号二号を振り返る。

一号はガラオックスと、二号はエイドクガーと戦い、それぞれを倒したところだった。

「ライダー！ 俺は人々を避難させてくる！」

「おお、滝！」

「頼んだ！」

「おおよ、すぐ戻るからな！」

そのやり取りだけで、三人はすぐそれぞれ向き合うべき方へと走り出す。

その姿に、欠片の躊躇は無く、三人の互いへの信頼を如実に現して

いた。

13. ショツカーグリードの最後

13. ショツカーグリードの最後

一般人が避難した事によって、ショツカーと、二〇人の仮面ライダーの戦いは激しさを増していた。

何体もの怪人が、未確認生命体が爆散し、戦闘員が蹴散らされる。そんな中、火神大我事仮面ライダーオーズは、ブラック將軍の正体であるヒルカメレオンに振り回されていた。

カメレオンの能力と言うには高度過ぎる、光学迷彩に手を焼いていたのだ。

殴る、或いは蹴りつけようとした途端周囲の光景に溶け込み、見失って動きが止まった途端に死角から攻撃を受ける。

ぎりぎりど苛立つオーズを嘲笑いつつ、再びヒルカメレオンは消える。

だが、そこに『伝説』の一人、仮面ライダーZXからの助言が飛ぶ。「視力に頼るな、センサーを使うんだ！」

「そうか！」

ぱぽつと、オーリングサークル、円形プレート赤い鷹のマークが点滅すると、コンクリート壁に張り付きこちらを伺うヒルカメレオンを発見した。

「居たー！」

「ちい、おのれ、こうなれば貴様の血を吸い尽くして、ぎゃー!」

気付かれたヒルカメレオンが、触手を伸ばしオーズを捉えようとした。だが、その次の瞬間、ヒルカメレオンは四方からの爆風でその場に棒立ちになった。

衝撃集中爆弾によるトラップを、上手く発動させたZXが下がるのを視界の端に捉え、オーズはスキヤナを滑らせ必殺の態勢に入った。

ScanningChage!

「おうりゃあああああー！」

バツタレツグで高く飛び上がったオーズは、中空に現れた三色の輪を潜り抜ける。

三つのコアメダルの力を纏ったオーズの、渾身の一撃がヒルカメレオンの真芯を捉えた。

「おのれ、仮面ライ、ダアアアアああ!!」

ヒルカメレオンが爆発四散したのを背に、オーズは滑り込むように着地した。

それを見て満足そうに頷くと、ZXは次の怪人へと向かい合う。そのZXに一礼して、オーズも次の相手へと走り出した。

丁度その頃、海浜公園から撤退しようとしたデルザー軍団のシャドウの前に立ったのは、香山閃こと仮面ライダー電王だった。

デンガツシャーをハルバートモードに組み上げ、臨戦態勢で立つライダーを名乗る相手に、シャドウはすつと目を細めた。

「ほう、俺の前に立ち塞がるか」

「俺も、仮面ライダーなもので」

電王の答えに、軽く鼻を鳴らした改造魔人は、だが抜手も見せず到手裏剣よろしくカードを数枚投げ付けた。

それを極僅かな動きで躲すと、電王はデンガツシャーを振り切った。ブンツと、風を切ったハルバートの切っ先がシャドウのマスクの表面に一筋傷を入れた。

「！ 貴様っ」

「ち、外した!」

『閃、踏み込みが浅い!』

自身に傷が入られた事に、怒りを見せた白い魔人がサーベルを抜いた。

間合いを取った電王に、憑依しているウルフィマジンが唸り、すつと体勢が変わる。

『ウルアアアアアア!!』

「こいつ、イマジンの方か!」

凄まじい勢いで、かつ自在に繰り出される、デンガツシャーハルバートモードの切っ先にシャドウは舌打ちする。

攻撃特化型らしいウルフィマジンの太刀筋は、皮を削ぐように魔人に迫っていた。

だが、何かに気付いた電王が身体の主導権を奪い返し、間合いを取った。

内輪揉めかと、シャドウが戸惑った一瞬後。

「エレクトロファイヤー!!」

L I G H T N I N G ! M A X I M U M D R I V E !!

「エレクトリックファイヤー!!」

ドカンッと、足元から上がった二重の電撃にシャドウは狼狽える。

高電圧で燻る視界の端で、赤いカブトムシとライトグリーンのバツタが立ち上がったのを見付け、シャドウは驚きを隠せない。

「な、ん、だど!?!」

「今だ!」

F u l l C h a g e !!

ライダーパスをバツクルに当てると、バチツとデンガツシャーにエネルギーが籠もる。

「ウォルフイー!」

『おお、喰らえ!』

『B r · l l e n d e s W o l f ! 』

弧を描いて、デンガツシャーは白い魔人を脳天から唐竹よろしく断ち割った。

「デルザー軍団……万歳つ!!」

断末魔にそう叫び、シャドウは爆散した。

肩で息を吐きつつ、だがぐつと身体を起こすと、電王は人々を追いかけようとする戦闘員へと走り出した。

それを横目に、仮面ライダーホッパーは飛び掛かって来る戦闘員を電ショックで感電させて退ける、仮面ライダーストロンガーを見た。

ストロンガーは少々訝しげにホッパーを見るが、特に何かを言う気は無いようだった。

それに向かつて、ホッパーの方が口を開く。

「シャドウの事、自分で倒そうと思わなかったのか?」

「あん? だって、ヤツは俺と因縁のある奴じゃなかっただろ?」

「え? だってあいつはデルザーの」

「俺のライバルだったシャドウなら、俺がこの手でぶっ倒したよ」

戦闘員を殴り飛ばしたホッパーに、ガニコウモルを蹴り上げつつストロンガーは笑う。

そんなものかと思いつつ、ホッパーは次の敵を探すべくストロンガーに背を向ける。

その迷いない後輩の姿に、ストロンガー城茂も背を向け、目に付いた奇械人目掛けて走り出した。

クウガとアギト、スーパー1とV3とライダーマンとが、ドグマとデストロンの怪人、そしてグロンギ達を打ち据える。

その向こうで、555とキバ、ビースト、鎧武がそれぞれ関わりのある未確認生命体と、Xとアマゾン、スカイライダーが因縁のある組織の改造人間と戦っている。

そしてオーズは、ショッカーグリードと向かい合っていた。

だが、ショッカーグリードのパワーに振り回され、オーズはまともに打撃を入れる事も出来ない。

「強過ぎる」

思わず歯を食い縛った、その時だった。

一号二号が駆け付け、ダブルパンチの要領でオーズからグリードを突き放した。

「ショッカーグリードは、私達に任せろ！」

「でもっ」

「手出しは無用だ！」

二人の気迫に吞まれたオーズは、一礼して他の仲間の援護の為その場を離れた。

そして、二人のライダーは四〇年来の宿敵に向かい合った。

二人息を合わせた攻撃が、ショッカーグリードを襲う。ここで、二人もグリードも思いも拠らなかった事が判明した。

この四〇年の間に、SHOCKERはライダー二人のマイナーチェンジを繰り返しており、その為あの日破れた時より遥かに二人の能力は高くなっていた。そして。

「よし、行くぞー！」

「おうー！」

二人は気合を込め、飛び上がったショットカーグリードを迎え撃つべく宙を舞った。

二人へと、羽爆弾を撃ち込もうとしたショットカーグリードの片目が、銃声とともに血を吹いた。

姿勢が崩れたところへ、二人の渾身のキックが叩き込まれた。

「ライダーダブルキック！」

最後の足掻きと放たれた羽爆弾を浴びつつ、だが二人はグリードを押し切った。

吹っ飛んだショットカーグリードは、公園のオベリスクの中心部に激突して巨大な亀裂を作り、そしてその根本へと墜落した。

着地し、警戒するダブルライダーの目の前で、ショットカーグリードは翼を広げ辛うじて立ち上がった。

「ショットカーグリード！！！」

一声叫び、崩れ落ちてきたオベリスクの瓦礫に押し潰され、本来存在しなかった怪人、ショットカーグリードは爆散した。

大きく肩で息を吐き、二人は背後を振り返った。

少し離れたビルの上、そこにライフルを片手に立つ滝和也の姿があった。

二人にライフルを持った手を振ってみせると、彼はビルから降りて行った様子だった。

暫くそちらを見ていた一号二号は、どちらからともなく顔を見合わせる、頷き合い走り出した。

14. 正義の味方

14. 正義の味方

火神大我こと仮面ライダーオーズが駆け付けた時、《伝説》《新生》双方のライダー達は、赤い三角覆面の存在と対峙している真つただ中だった。

この怪人物がショッカー首領であることを知るのは、一号二号を除けばライダーではオーズと電王こと香山閃だけであったが、その全身から発せられる異様な気配から、この存在が事の元凶であろうと容易に察する事が出来た。

「行くぞー！」

「「「「「おおう！」「「「「「」」」」」」

最初に、首領に向かって突貫しようとしたのは仮面ライダーV3と《伝説》の七人だった。

だが、赤覆面を取った首領は、ゴルゴンの怪物を思わせるような一つ目に無数の蛇が絡んだ姿を曝すや、その巨大な一つ目から怪光線を発して、ライダー達の突進を阻んだ。

ならばと、仮面ライダーアギトの指示で散開した《新生》ライダー達が、銃や飛び道具での遠隔攻撃に出ようとした。

それを見透かしたように、絡み合う蛇達の中から伸びた四匹が、オーズと電王、V3とXライダー、クウガとHOPPER、そしてキバとスカイライダーを掴み上げ振り回して、慌てるライダー達へと投げ付けた。

慌てて抱き留める者、転がり息を詰める者へ駆け寄る者、様々なライダー達を見詰め、ショッカー首領は笑う。

そこへ、ショッカーグリードを倒した一号二号が駆け込んで来た。

「オーズ、電王！」

「皆、無事か！」

後輩になるライダー達を見回す二号と、ぎつと己を睨み付ける一号とを眺め、ショッカー首領は高らかにこう告げすつと宙に浮いた。

「お前達が守ろうとする人間が作ったもので、お前達を完全に滅ぼし

てやろう。

見るがいい、これがショットカーが作る世界の秩序、正義の象徴である『キングダーク』だ！」

首領の言葉と共に、立っていられないほどの揺れが海浜公園を襲った。

波の動きに気付いたXライダーの指示で、ライダー達は慌てて公園内の遊具や建物の上に飛び乗った。

公園の目と鼻の先の海中から、黒い影がせり上がってくるのが見える。

そしてそれは、軽い津波を伴い海上に姿を見せた。一對の角を持つ、黒いその巨大な人型は、赤く光る眼をライダー達に向けた。

「キングダーク、だと」

「完全体と言う事か!？」

「俺が知っている奴と少し違う……」

Xライダーが呻く横で、二号とZXが呟く。

だが、その次の瞬間、三人は他のライダーと共に、キングダークからの迫撃を避けて飛び上がらねばならなかった。

機械故の間断なくばら撒かれるエネルギー弾の雨に、ライダー達は成す術無く逃げ回る事を強いられる。

「畜生、何か手はねえのか!」

「あんのデカ物!」

新旧双方のライダーが異口同音に吐き捨てる中、高笑いと共にショットカー首領はキングダークの中に消えた。

『さて、そろそろ終いにしようか』

そう言つて、ゆっくりとキングダークは公園へ近付き始めた。

勝利を確信したショットカー首領は、ライダー達を踏み潰そうと巨体を進める。

ライダーを追い詰めたと確信した彼は、見落としている事に気付かなかった。

キングダークの姿を、別のビルの屋上から滝和也は睨んでいた。幸

い、このビルは屋上に色々パネルやら給水タンクやらがあるお陰で、身を潜めるのに具合が良かったのだ。

滝の傍に、バラバラつと少年達が集まって来る。剛と天馬、そしてレジスタンスの少年達だ。

「滝さん、みんなここから遠くへ逃げたよー！」

「最低でも、五百メートル以上は離れたと思います」

天馬の言葉を、相田リコが補う。それに頷き、滝はライフルを構え直す。

多少距離はあるが、キングダークの眼を狙う事は出来る。

カメラだろう箇所を潰して、少しでもライダー達の為に反撃の切っ掛けを作ろうと思ったのだ。

だが、そこに真つ赤な人物が飛び込んで来た。

急な事に、慌てて銃を向けようとした少年達に、待ったを掛けたのは滝だった。

「大丈夫、味方だ。」

科学者達は脱出出来たか、ズバット」

滝の問い掛けに、一体化しているヘルメットのフェイス部分を開いた。

そこから覗く顔に、天馬と剛の目が丸くなる。彼は、ショツカーユーゲントから助けてくれた青年だった。

『ズバット』と呼ばれた青年は、にっと笑うと一枚の折り畳んだ紙を差し出した。

「ああ、皆無事に脱出している。」

それから、これは科学者達からあんたに、『キングダーク』の重要部分の見取り図だ」

「すまねえー！」

受け取った紙面を一瞥し、滝は少年達からライフルを二丁借りると、一丁には大振りなペイント弾丸、残りに徹甲弾を詰めた。

それを見届け、ズバットは再びフェイス部分を閉じた。

「じゃあ、俺はこれで」

「おう、助かった。だが、礼が」

「なあに、この先の活動資金分は、奴らの金庫からたんまり頂いておいた。

見取り図の配達は、アフターケアの一部だ、気にするな」

そう言うと、真つ赤な強化服を着込んだ流離いの名探偵、ズバットは百数十メートル下へと飛び降りて行った。

子供達が、言葉なく彼の人物が真つ赤な自動車で走って行くのを見詰める中、滝はライフルで、ライダー達を踏み潰そうとするキングダークのカメラアイに標準を合わせた。

民間人の安全の為、公園内を逃げ回るライダー達を踏み潰そうと、キングダークが陸上に上がって来たその時だった。

赤く輝くカメラアイが砕け、それに少し遅れて銃声が届いた。

パーン！ パーン！ パーン！

両方の眼が潰され、三発目はキングダークの胸部、人間の心臓よりやや首近くへ黒い地肌に鮮やかに緋色の花が咲いた。

「何だ!？」

「ペイント弾!？」

《伝説》のライダー達がざわめく中、《新生》達は一斉に銃弾が飛んで来ただろう方角を見た。

彼らの予想を、仮面ライダー二号が噛み締めるように呟く。

「滝か。あそこが奴の弱点だと言うんだな」

「一号二号、あそこを狙います」

そう言い切ったのは、仮面ライダーアギトだった。

彼の背後で、新生ライダー九人がそれぞれの必殺技の準備に入る。

「おい、本気か?」

「もしかすると罠じゃ」

ストロンガー、スーパリーの声に、仮面ライダー一号が否を告げた。

「いや、我々も行くぞ!」

「俺達の仲間が教えてくれたんだ、キングダークを潰すぞ!」

二号も言葉を続けるに至り、伝説の面々も覚悟を決めた様子で態勢を取る。

そして、スキヤナでカテドラルをなぞろうとしたオーズに、レイヴ
@黒子テツヤの声が飛んだ。

『タイガ、これを使い！』

「レイヴ!? これって、孔雀とえつと?」

咄嗟に掴んだのは、赤い孔雀と鷹ではない猛禽の意匠の入ったメダ
ルだった。

投げた方は、盛大に鼻を鳴らしてこう言った。

『俺様のとっておきだ、これでへマしたら只じゃ置かないからな!』

「火神君、頑張ってください!」

「黒子、レイヴ、Thank you!」

二人?が離脱するのを見届け、大我ことオーズは虎とバツタのメダ
ルを新しいものに入れ替え、改めてスキヤナを滑らせた。

T a k a ! K u j a k u ! C o n d o r !

T a i j a i d o o r ! !

オーリングサークルが深紅に染まり、三種類の鳥をモチーフにした
ものになると、頭部もより鷹らしく形状を変えた。

ぱつと広がった三対の翼から、紅のオーラと共に熱を放射すると
オーズタジャドルコンボは薄っすらと陽炎に包まれた。

その周囲で、クウガがアメイジングマイティに、アギトがトリニ
ティフォームに、555がアクセルフォームにフォームが代わる。

『小癩な、だがこの近辺にいるのは判っている、すべて踏み潰して』

視野を潰されたまま、キングダークは公園をエネルギー弾で焼き払
おうとする。

だが、その前に二〇人の仮面ライダー全員が宙へと飛び上がる。狙
うは、キングダーク胸部に存在する最重要装置。

エネルギー弾を掻い潜り、一号二号のライダーキックが、V3の反
転キックが、ライダーマンのキックが、XライダーのXキックが、
チャージアップしたストロンガーの超電子ドリルキックが、スカイラ
イダーの大回転キックが、スーパリーのスーパードライダー月面キック
が、ZXの穿孔キックが朱いペイント目掛けて放たれる。

そしてクウガのアメイジングマイティキックが、アギトのトリニ

テイライダーシュートが、555のアクセルクリムゾンスマッシュが、電王のキック技が、キバのダークネスムーンブレイクが、HOPPERのライダーキックが、ビーストのストライクビーストが、鎧武の無頼キックが、《伝説》の一〇人が砕いたキングダークの胸部装甲を突き破り、コントロールシステムに殺到する。

そして、スキヤニングチャージを行ったオーズは、真紅の不死鳥と化して他の仲間を追う。

インパクトの直前、赤い三つのメダルを潜ったオーズタジャドルコンボのコンドルレッグが、クロウ状に展開し炎を纏う。

『行けえ、オーズ！（火神君！）』

「せいりゃあああああー！」

オーズの攻撃——プロミネンスドロップによって、キングダークのメインシステムは炎と共に砕け散った。

その爆発音の中に、ショッカー首領の断末魔の声が聞こえたと思っただのは、オーズだけではなかった。

崩れるように海の中へ倒れていくキングダークを背に、ゆつくりと舞い降りて来たオーズが通常のタトバコンボに戻ると、クウガやビースト、HOPPERが駆け寄り揉みくしゃにする。

そんな仲間の様子を見て笑っている、他の《新生》の若いライダー達を何とは無く見ていた《伝説》の面々の中から、何かに気付いたように一号二号が踵を返す。

キングダークの攻撃を受け、あちこち燻ぶり設置されていた建造物も破壊された海浜公園へ、天馬と剛、レジスタンスの少年達と共に滝和也が近付いて来るのが見えた。

少年達が、オーズと電王、そして果物武者のライダーへと走って行くのを見送る滝に、二人は近付きそして変身を解いた。

その背中は、オーズこと火神大我と、電王こと香山閃があの日に見た、あの二人の青年の後ろ姿で。

一瞬だけ泣き笑いを浮かべ、滝は二人を抱き寄せた。

その次の瞬間、世界は光に包まれた。

15. そして日常に還る。

15. そして日常に還る。

光が収まると、周囲は一変していた。

瓦礫が散乱していた、荒れ果てたシヨツカーを称えるオペリスクが建っていた臨海公園は、見覚えのあるストバスコートと遊歩道を抱えた公園に姿を変えた。

周囲に居た仲間達も、《伝説》のライダー達も姿を消し、そこには火神大我と黒子テツヤ@レイヴ、そして香山閃とウルファイマジンの四人(?) だけになっていた。

「あ、あれ?」

「ここは……」

『この間、ストバスとやらの大会があつた場所だな。何が起こつた?』

「ウォルフイ、これって」

『ああ、時間が修正されたんだ』

突然の事に周囲を見回していた弟分とその友人は、閃とウォルフイの言葉に振り返った。

「恐らく、俺達とは別の『時の列車』が、あの時のメダルでシヨツカーグリードを生み出される事を阻止してくれたんだ」

『ふうん?』

「え? でも誰が、その別の電王に知らせたんだ?」

話すうちに、独特の電子音警笛が鳴り響き、見慣れた白い車体が彼らの前を走り抜け、その後赤、青、黄、紫の未確認生命体に庇われるように立つ青年がいた。

居住まいを正す兄貴分に、大我也慌てて背筋を伸ばす。

その様子に、穏やかそうに笑うこの青年が、一度に複数のイメージを憑依させて戦う伝説の電王であると、大我が知るのは後の話である。

「滝和也さんに頼まれて、このメダルを回収してきました」

「滝って、え?」

青年の言葉に驚いた閃に向かって、赤い鬼のようなイメージが頭を

掻きつつこう答える。

『この間、時の砂漠に迷い込んでたおっさんを助けたんだよ、そのおっさんが、おめーらの落としたメダルを回収してくれって言ったんだよ』

「え!？」

『時空破断装置だっけ？ それで出来た疵きずを潜ひそったら、色々別の世界を渡り歩くようになったっちゃったんだって。

無茶な人だよねえ?』

青い亀のようなイマジンの言葉に、閃と大我は思わず顔を見合わせた。

仲間の二人を困ったように見詰めてから、青年は大我の手にあの時落としたメダルを手渡した。

「滝さん曰く、デンライナーを見た時に、急に今回の記憶が浮かんだそうです」

「あ、あの、滝、さんは今、デンライナーに乗ってねえ、ないですか?」
『あの人なら降りちやったよー、自力で帰らないと、また何処かに吹っ飛んじゃうんだってさー』

大我の問いに、紫色の龍らしいイマジンが踊りつつ答える。

彼の言葉を、これは眉を下げつつ青年が補う。

「滝さんが手に入れた、ガジェットの性質らしいです。自力で次元のオーロラを越えて移動しないと、元の場所に強制移動させられるらしくて。」

あ、家族の皆さんに、「必ず帰るから待っていてくれ」と、おっしやつていました」

「そう、ですか」

青年の言葉に、閃は改めて頭を下げる。

「ありがとうございます。」

皆さんは、これから何か用事でも?」

「ええ、僕達の路線で少し困った事が起き掛けているので、先行している仲間と合流しなくてはなりませんから」

そう言っって暇乞いすると、青年は仲間のイマジンと一緒に——立つ

たまま眠る黄色い大柄なイメージを赤と青のイメージが引き摺って――、再び『時の列車』に乗り込みこの時間から去って行った。

警笛を響かせつつ、デンライナーが走り去っていくのを見送って、思わず大きく深呼吸をしたその時だった。

突然、大我が制服のポケットに突っ込んでいたスマートフォンが着信メロディを奏でた。

慌てて取り出すと、ディスプレイには『長兄』滝海斗の名前があった。

「はい、もしもし！」

『ああ、大我、もう買い物済ませてる？』

言われて、はたつと考える。

そう言えば何か頼まれたような、考える前に海斗の声が続く。

『今、空が牛乳買って来てくれたから、まだ買ってないなら帰って来てくれていいよ、祥吾達もそろそろ帰って来るから、皆でおやつを食べよう』

「え、あ、はい判った、です」

『じゃあ、待ってるから』

電話を切って顔を上げると、今の今まで横にいた相棒＋αの姿がなかった。

恐らく、バニラシェイクを求めて、手近なマジバへと走って行ったのだろう。

相棒達のシェイク中毒ぶりに呆れつつも、大我は背伸びをしている兄貴分に顔を向けた。

「閃兄ちゃん、海斗兄ちゃんがみんなでおやつを食べようって」

「そうか、じゃあ、帰ろうか、大我」

ウオルファイ——ウルフイマジンを身に宿し、笑いかける閃に頷くと大我は滝家があるマンションへと歩き出した。

だが、歩いているうちにふと大我は足を止めた。

（あれ？）

「今」の滝の小父さんがもう一人の電王に助けを求めたから今があるなら、「昔」の滝さんはどうやって助かったんだ？

滝さんは、半年前になって言ってたけど、デンライナーって最終車両が吹っ飛んでからも結構走ってたよな？」

「大我、どうした？」

『お腹が空いたのか？』

「あ、何でもねえ、です」

立ち止まり、振り返る『兄』に、大我は慌てて足を動かし彼の横に並ぶ。

『兄』達と『姉妹』達と、『弟』達と、幼馴染みが暮らす『皆の家』に帰るのだ。

傾き始めた太陽を横目に、二人の青年は公園を後にした。

何処とも知れない、建設途中で放置されたかのようなコンクリート打ちっぱなしの部屋で、二人の青年が向かい合っている。

二人は、兄弟と思える程度に似通った面差しをしている。

火神大我や香山閃、現在《新生》仮面ライダーと呼ばれている面々が見ればその過半数が驚くほど、とある人物に彼らの面差しは似ている。

生真面目そうに口を真一文字に引き結んでいる、全体にやや色素の薄い相手に向かって、彼よりがっしりした体格で濃い色合いをした髪の毛の青年が食って掛かっていた。

その頬には、羽を広げた鷲の刺青が入っている。

「何で、奴を助けてんだよ、あの男は敵だぞ!？」

詰られている青年は、黙って手の中のやや古びたカメラを撫でていく。

時間と空間の狭間を、燃え上がる車体と共に落ちて行こうとした人間を助け、200X年の夏頃の時間に運んだ彼は、青年の手当てと世界情勢の説明をしたのだ。

理由は、彼自身でも良く判らない。だが、この人物が死ぬかもしれないと思った途端、居ても立ってもいられなかったのだ。

刺青の青年は、彼のやった事を組織への叛意だと責めているのだ。

そこに、二人の間に置かれていたスマートフォンがビーツビーツと

音を立てて振動する。

色合いの薄い青年が取り上げ、スピーカーモードで繋ぐと、低い老人の声がかう告げた。

『デイケイド、大首領がお前にお言葉を下さるそうだ』

その言葉に、責められていた青年は凍り付く。それを見て、もう一人の方はほくそ笑む。

上手くすれば、自分に彼の役割が回ってくるかもしれないからだ。

暫く時間をおいて、スマートフォンからさらに低く、掠れた男性の声が青年——デイケイドを呼んだ。

『……デイケイド』

「……はい、お父様」

意を決して返事したデイケイドに、だが思わぬ言葉が投げ掛けられた。

『待機を守れなかったのは褒められないが、良くやった。

間もなく新たな任務を命ずる。良く休め』

顔を跳ね上げたデイケイドと、驚愕を隠せないもう一人とがスマートフォンを凝視するが、そのまま回線は切れてしまった。

「何だよ、何だよ可笑しいじゃん、だって、滝和也って、シヨツカーの敵の一人なんぞだぞ!」

あのまま見殺しにすれば良い筈じゃん、なのに何で!」

「お父様にはお父様のお考えと計画がある。

俺達が口を挟むのは、それこそ烏澁おしがましいと言う物だろう?」

地団太を踏む連れに、微かに嘲笑しつつデイケイドはスマートフォンを上着のポケットに収めた。

「行くぞ、名無し。

何も無い、この終わった世界に残っていたいなら止めないがな」

「この、点取り虫が!」

そう吐き捨てつつ、刺青の青年はデイケイドの開いた時空のオーロラを潜って次の世界へと移って行った。

Ex02 序奏と間奏

exepisode02—A アギト

滝海斗は、最初『クウガ』として戦い始めた。

アークルを『アンノウン』に割られ、その後オルタフォーに目覚め『アギト』になった。

周囲には、そう思われている。

父親である、滝和也の事故の後、気分転換にと大人達に勧められた発掘隊のバイト。

この時、山の中とは言え日本国内の発掘調査と言う事で、誰も想像もしなかった。

彼とその兄弟分とが参加したその発掘隊は、後に『未確認生命体による最初の殺人事件』として記録される、城南大学九郎ヶ岳遺跡発掘隊だった。

海斗と一文字空は、その惨劇の数少ない生還者として記録されている。

あの、惨劇が起こった時。

怪人に追われる中、他の人を逃がそうと海斗と空はおとりとして、その怪人の前に飛び出した。

しかし、始めて相対したその敵は、武術の心得を持ちまたそれなりに『人ではない存在』との立ち合いを重ねていた筈の二人を、あっさり振り払った。

空は、プレハブ小屋の壁に叩き付けられ、薄いものの二重構造の壁に減り込む形で止まり、海斗は整理前の発掘品を積み上げた保管箱を突き崩した。

割れたプラスチックケースで額や腕を切り裂き、血塗れになった海斗の腕が、とある発掘品に触れた。

それは、今回の発掘で一番注目を集めていた石棺の上に、まるでお供えのように置かれていた石の装飾品らしき物、だった。

その瞬間、海斗の脳裏に一連なりの映像が雪崩れ込んだ。

猟師だった「自分」と、細工師だった優しい「友」。

『靈石』を「自分」は己の意思で手にしたが、「友」は周囲に脅されるようにして手にした。

倒しても、倒しても『敵』はやってくる。

味方の村は数えるほどしか残っておらず、中には『敵』に与し、『敵』と同じものになり果てて襲って来た村もあつて。

それでも、「自分」と「友」は、敵の群れを一つづつ潰していった。群れの長をねじ伏せ、群れごと地に封じた。

そして、最後に尤も悍ましい『白』を完全に封じ込める為に、生きながら共に封印として祠で眠りに就く事になったのは、「友」だった。途中で傷を負い、戦いから脱落した「自分」は、「友」が眠る祠の封の前で、泣く事しか出来なかった――。

その、泣いている男の背中に、父の姿が重なった。

二〇年前、仮面ライダー達が、大首領との決着を付ける為に異次元に向かった際に通った時空魔方陣が現れたと言う、旧シヨツカー基地の片隅で彼らの生還を祈る、父の背中に。

「とお、ちゃん」

子供達の前では明るく笑う父の、その背中を見たのは偶然だったけど。

何年も前の事だったのに、未だに海斗はその光景を忘れられずにいた。

「とお、ちゃん、なか、ないで」

友を死地に行かせ、何も助けられない事を一人嘆いていた父を、支えられる大人になりたかった。

父と肩を並べられる捜査官になりたいと、それだけを目標に勉強に励み、身体を鍛え、だから。

掴み直した掌の中で、石化していた何かが本来の姿を取り戻す。

謎の文様に包まれたそれが、金属の光沢を帯び、そして。

「変身!!」

血に塗れ、傷だらけの、それでも立ち上がった齢一六の青年の腰で、意味の無い装飾品と目されていた謎の石は、本来の姿を取り戻した。

こうして、『未確認生命体第三号』は現れ、発掘隊を蹂躪した怪人集団、《グロンギ》と戦い始めた。

しかし、『アークル』は遙か昔に壊れたままであり、実際には『アークル』に残った情報と前装着者の残留思念を読み取った《ルミナ》が、その姿と戦闘力を表面的になぞっていただけであつたが。

* K a i t o T a k i

一文字空は、滝家に引き取られた子供達の中でも、海斗とニコイチと言う事で目立っていた。

二人が一緒に暮らし始めたのは、それこそ二人ともオムツを引かずっていた頃からで、双子のように育って来た。

活発な空と、大人しい海斗は一見すると気が合わないのではと気を揉む大人達がいたが、空が苦手な事は海斗が得意で、海斗が手古摺る事は空がこなしてしまうと言うように、二人は何時も寄り添っていた。

そんな二人だが、高校は別々の学校に進んだ。

海斗は秀徳高校、空が進学先に選んだのは正邦高校だった。

空が海斗に依存気味だと思っていた周囲は、皆驚いたものだったがそんな大人達に向かって、空は真面目くさった顔でこう答えた。曰く、

「俺、海斗のお荷物になるつもりはねえんだよ。だから強くなる」

空は、子供の頃から漠然と感じている事があった。

手を離すと、海斗が何処かの誰か知らない奴に連れ浚われるのではないか、と。

それは、物心ついた時からずっと感じていたもので、だから中学卒業まで空は海斗と同じ部屋で寝起きしていた。

だが、赤心少林拳の義経管長から言われた一言で、空は考えを改めた。

「お前は海斗に守られたいのか？」

あれは、お前が依存するなら否とは言うまい。だが、お前はそれでもいいのか？

あれに付属品と思われたいか？ あれと並び立つ男でありたいとは、思わないのか？」

その言葉に、空は考えた。

考えて考えて、一月間自分はもうありたいか、海斗にどう思われたかと思っているのかを自身に問うた。

そうやって出した答えは単純で、でも難しい事だった。

「俺は、滝海斗の相棒になる。いや相棒であり続ける」

庇護対象ではなく、一方的に力を借りるのでもなく貸し付けるのでもない、対等で信頼されてこそ成り立つ関係。

そうなりたいと打ち明けた空に、義父と会長は笑って「頑張れ」と告げた。

だから。

発掘現場から逃げ延び、收容された警察病院に怪人——後に、かつての「バダン戦役」にて暴れた改造人間と区別する為に『未確認生命体』と呼称される事になった——と相對した時、空は持ち込まれていた発掘隊の『遺品』の中から石の装飾品——『アークル』を迷う事無く掴んだ。

怪人の脅威より、未知への恐怖より、何より海斗を一人で戦わせる事が恐ろしかった。

海斗が、『一人』になる事が一番怖かったから。

「一人に何てさせねえ！ お前一人じゃねえ、だから待ってる相棒!!」
腹に焼き付く熱も痛みも、銃を持った警官達を一瞬で絶命させた怪人も、全て空には二の次だった。

怪人の鈎爪を受け止めた腕が、相手の胸に叩き込まれた脚が、赤い装甲に包まれる。

それは、どんな運命の悪戯か。

かつて、赤い拳を振るって戦った男の血を引く青年は、全身を紅の装甲に包んで戦いに飛び込んで行った。

その事に、涙した人間がいた事を、彼は未だ知らずにいる。

*S o r a I c h i m o n j i

「合いの子の出来損ない、一族の恥」

大笑いな事に、正真正銘怪物である父方、快樂殺人鬼を出したご立派な母方の双方から、黛千尋に投げ付けられた言葉である。

そして、その言葉にブチ切れた当時の保護者、現義父は——彼は双方から『偽善者』と罵られた——キバット五世の協力を『無理やり』取り付け、魔皇甲冑を着込んで大暴れした。

母方の『退治人』達も、本性を曝したファンガイア達も、悉く魔皇甲冑——『キバの鎧』を着込んだ義父に薙ぎ倒されていた。

あの時、札束で親族をぶん殴る予定——そう言ったのは、秘書のお姉さん方だ——だった《ホークアイ・ホールディングス》(H・E・H) 会長アラン・ホークアイ氏とは言えば、眉一つ動かす事無く、義父が暴れるに任せていた。どうやら御大も、千尋を罵倒するついでに滝和也と会社とをデイスった双方に、顔には出さないが怒髪天を突いていたらしい。

その結果、D & P社はH・E・Hにかなり足元を見られた協定を結ばざるを得ない状態になったし、母方が肩入れしていた『素晴らしき青空の会』は、『SPIRITS』隊に問題組織としてマークされる事になって、信賴回復にかなり腐心したそうだ。

その後、何年か経って、あの時の事を聞いた千尋に、会長は苦笑いと共にこう答えた。

「君の事だけじゃないよ、どちらもH・E・H(我が社)を『人間もどきの会社』と侮ってくれていたからね。あの事が無くても、近々何かしらの対応を取る予定だったんだよ。

まあ、滝君が怒っちゃったから、予定より遥かに派手になっちゃったけどね」

何はともあれ、人間とファンガイアと言う異種族間に生まれた千尋にとつて、社員の四分の三が改造人間と言うH・E・Hの社員寮——と言つても、上級幹部用のマンションだが——での生活は、結構気楽なものだった。

家に入入りするのは、それこそ人間と動植物のハイブリットだったり、常人の五〜十倍に強化されていたり、さもなければ改造人間と手合わせをこなすようなびっくり人間であった——彼らは大抵、義父の元部下だが、『元』を付ける事を皆嫌がった——。

何しろ、義父からして、生身で改造人間相手に取っ組み合い、かつてはナイフと銃で人外魔境が荒れ狂う戦場のど真ん中を走っていたような人物だ。

そんな大人達に守られて、黛千尋は『人間としての生活』を身に付けて行った。

そんなこんなで、実の父の遺品でもある魔皇甲冑、所謂『キバの鎧』を身に着ける事になったのは、高校一年、滝の家を出て、京都にある洛山高校に進学して一年経つか経たないかの頃だ。

ファンガイアの『王』が代替わりしたものの、その王が人間との共生を宣言した事に反発した古参が、新生〈チエックメイト・フォー〉を見下し勝手な行動を取り始めたのだ。

それだけなら、千尋が動く義理は無い。

何しろ彼は先代『王』と『女王』から抹消対象にされ、命と引き換えに一族から追放され義父とホークアイ氏に保護された身の上である。

一族から縁切りされた千尋が、ファンガイアの内輪揉めに関わる義理は何処にもないのだ。

だが、そうやって勝手を始めたファンガイアの貴族が目をつけたのが、洛山高校の生徒の生命力だった。

寄りにもよってと苦り切りつつ、千尋は重い腰を上げた。掌よりやや大きなキバットの身体から、爆発するような魔力が流し込まれる。

そのエネルギーの圧に、無意識に歯を噛み締める千尋は、全くの人類でありながらこれに複数回耐え、変身してのけた義父を改めて尊敬する。

魔力が鎖となって体を覆い、魔法鋼の鎧が出来上がる。

そして、突然現れた『敵』に戸惑う怪人に向かって、千尋は名乗り

を上げる。

「俺は骸骨ライダーの息子、仮面ライダーキバ」

気負う事無くそう告げると、『キバ』は走り出す。

恐ろしいほどの満月を背負い、ファンガイアを粉砕した『仮面ライダー』がネット上で騒がれる事になるのは、ほんの一週間後の事である。

*Chihiro Mayuzumi

中村真也は、『スマートブレイン社』の起こした事故の唯一の生存者であり、彼らが回収し損ねた実験体にして『王の候補者』である。

それは、真也が高校に進学する寸前の春休みに起きた事件だった。同級生——と言っても、二年生の頃に一年だけ同じクラスだっただけの相手だ——の女生徒が、自殺未遂を起こした。

四階建ての校舎の屋上から飛び降りて、でも打ちどころが良かったらしく一命を取り留めていたようだ。

尤も、部活仲間やクラス内のLineで流れてきた話によると、自殺にしては色々不自然な状況で、ついでに彼女が「助かった」事も不可解と思われていると知れた。

彼女が落ちた場所は、アスファルトに覆われた駐車場だったのだ。もやもやを感じた二日後、真也は現在『仮面ライダー』として警視庁に出入りしている義兄二人から、自殺未遂事件について何か聞いていないかと問われ、面喰った。

苦虫を噛み潰した風の一文字空と、眉間に皺が寄っている滝海斗曰く、ネットニュースで派手に流れたにも拘らず、自殺を図った女生徒の家族がこの騒ぎを事件として扱う事を嫌って、警察の聞き込みその他を拒絶しているのだと言うのだ。

自分の子供の怪我や精神分析より、自分達の外聞や仕事が優先と言う、これが俗に言う『毒親』かと真也が頭痛を覚えていると、海斗が口元を覆いつつ唸った。

「取り敢えず、その女の子に関しては、ちよつと注意を払ってくれ。」

こんな事は言いたくないが、その子はオルフェノクとして『覚醒』している可能性がある。となれば、スマートブレイン社の連中がその子を拉致しようとする恐れがある」

「え？ あいつらが誘拐しようとするのは、大体小学生でも低学年の子供が多いと思うんだけど」

「あー、あいつらの探している『オルフェノクの王』って奴が、子供の中に潜んでいるって思われてる所為らしいな。」

だが、同時にあいづらとしては即戦力って意味で、同族になった奴らを引き込みたいらしい。

オルフェノクも寿命は短いらしいが、力は未確認生命体の中に分類される以上、未成年一人でもそこいらの成人男性の集団を一蹴出来るからな」

真也の疑問に、頭を掻きつつ答えたのは空の方である。

あの連中のめちゃくちやさ加減にうんざりしつつ、真也は気を付けると請け負った。

だが、その翌日に、今度は同級の女子六人が集団自殺を図ったと連絡が飛んで来た。

何でも、自殺を図ったのは女子バレー部の一軍選手だった面子で、中にはスポーツ推薦が決まっていた子もいたと言う話だった。

が、その知らせを聞いて、真也はある事を思い出した。

女子バレー部で、レギュラー選手の仲が物凄くギスギスしているの、退部者が増えている、そんな話を年末の頃に聞いた覚えがあった。

もしかすると、自分が聞いた話は外向けのソフトな表現で、実際は物凄いいじめがあったのではないか、それが原因であるの女生徒は飛び降り、そして今回集団自殺（○）が起きたと言うのなら。

六人のうち、一人以外はほぼ即死だったらしい。

助かったのは、一軍選手だが基本ベンチスタートが多い準レギュラーだったそうだ。

いやな予感を覚えた矢先に、入院中の女生徒二人が入院先から姿を消した——一人は、もつと前から行方不明なのを、例の毒親が学校や警察を誤魔化していたらしい——と言う連絡が来た。

まさかと思い、義兄に連絡を入れてギアシステムを持って学校に向かった真也は、夕闇の迫る空の下、取り壊しのため閉鎖された旧講堂で、殺し合う鳩と鴉のオルフェノクを見出した。

鳩の方が、最初に自殺を図った女生徒で、鴉の方が集団自殺（○）の生き残りだった。

そして、先に覚醒していたピジョンオルフェノクよりも、凶暴さを表に出したクロウオルフェノクの力が上回り、鈎爪が鳩の胸を引き裂

いた。

灰と共に硬質な羽根を撒き散らし、青い炎に包まれて女生徒が燃え尽き消えるのを、鴉の娘は嘲笑と共に見ていた。

「あははは、いい気味、やっぱりあの人が言ったとおり私は選ばれた者だった！」

松浦さんでもチイチヤンでもヨシちゃんでもヤエでも葉月でも谷頭でもない、私が！

私こそが新人類に選ばれた、本当のエリートだった！」

鴉が囓り続ける間に、真也は燃え尽きる少女に駆け寄っていた。

ほぼ無意識の行動だったが、真也に気付いた少女は救いを求めるように手を伸ばし、だが真也がその手を掴んだ時には、一握りの灰を残して燃え尽きた。

その手の中の灰が、握り込んだ事で更に壊れ、塵となった事に言葉を失う真也に向かって、笑いながらクロウオルフェノクは鉤爪を振り上げた。

「あら、ナアニ。人が良い気分にいるのに、無粋な奴。

まあいいか、殺せばお仲間になるカモだし、私ってヤツサしい！」
「うわ!？」

格闘技とバスケットボールとで鍛えた反射神経で、咄嗟に横に転がって鉤爪からの斬撃を躲した真也は、言いようのない嫌悪と怒りと共に灰色の鴉を見上げた。

ケタケタと嗤うクロウオルフェノクの影に、青白くかつての素顔が浮かぶ。

恐らく、これまではクラスでも埋没気味で、部活でも恐らくスポーツ推薦を貰った女生徒の取り巻きAだった少女は、オルフェノクとして覚醒し、そしてその後には接触を持っただろう《スマートブレイン社》のエージェントに煽られ。

鳩を倒した事は、多分《スマートブレイン社》側としては予定外だったのだろうけど。

真也は唇を噛み締め、手にしていた保管ケースからベルト型のコアユニットと、携帯電話型のマルチデバイスを取り出した。

「ナアニ、そんなオモチャデ何する気？」

小首を傾げる鴉には答えず、デバイスに起動コードを打ち込み、頭上に掲げた。

p i p i p i

S t a n d i n g b y

「変身！」

フォトンブラッドがラインを描き、ソル・メタルの装甲が真也の身体を包む。

「ふうん？ ナアニ、ヒーローごっこ？ 女の子アイテニ何考えてるノ、ありエなあイ」

そう噛み転げながら、鉤爪を閃かせ飛び掛かって来たクロウオルフェノクの爪を体裁きで躲し、伸びていた腕を逆手に掴み、そのまま投げ飛ばす。

オルフェノクになり、またそれなりにバレー部員として鍛えていたとは言え、格闘技の素養の無い元少女はそのまま講堂の床板に叩き付けられ、その衝撃に息を詰めた。

「……警察に行くぞ。オルフェノク同士の戦いだったとしても、あんな人は一人殺したんだ」

「警察？ ナンで？ アイつはあタシ達を殺そうとして、松浦さんトチイちゃんトヨシちゃんトヤエト葉月が死んだ！ だからワタシが敵をウツター！」

「お前、だったら今何で俺を殺そうとした？」

真也——555の言葉に、鴉は心底不思議そうに首を捻った。

「何で？ 仲間にシテアゲヨウトしたのヨ？」

ダツテ、オルフェノクは選ばれタ新しい人類」

「違う！ 選ばれた生命体が、長くても十年生きられるか判らないよ
うな脆い生き物なものか！

オルフェノクは『死に損ない』なんだ！」

そう叫んだ真也の脳裏に浮かんだのは、辺り一面の炎と、自分を二人で必死に抱き抱えて守って命を落とした両親、そしてその両親の遺体を『ゴミ』と呼んで投げ捨て足蹴にした、灰色の男達。

「俺は、認めない。」

死んだ人間が生き返るまでは良いさ、誰だって死にたくないんだ、ズルでも何でも死を凌駕したいってのは人間誰しも持つ欲求だ。

でも、死んで蘇って、そのまま静かに暮らすならともかく、生きてる人間を殺して仲間にする？

ふざけるな！ 俺はオルフェノクの仲間になるなんて御免だ。

死んだ人間をゴミ呼ばわりする化け物に、人の死に寄生しなきゃ存在出来ない様な存在に、誰がなるもんか！」

「！ イワセテおけバ!!」

転がるように立ち上がったクロウオルフェノクは、バンつと音を立てて翼を広げると、そのまま講堂の天井近くまで飛び上がった。

「仲間にナルノガイヤナラ、死ね！ 死ねシネシネエエええ!!」

「この、馬鹿野郎!!」

それは、咄嗟の行動だった。

先程鴉を投げ飛ばした際に、弾みで投げ出す形になった保管ケースから小振りな懐中電灯——サバイバルゲームに詳しい者なら、ライフルに取り付けるスコープと買っただろう——に似たものが転げており、真也はそれを掴み足のソケットに取り付けた。

その後はほぼ惰性で、足を振り上げ、蹴る態勢に入った途端その装置——ポインターから赤く光る円錐形が飛び出し、鴉の胸にその切っ先が定まった。

「死んでシマエー！ そシテアンタもあたしと同じにナツチャエー！」

「うわあああああ!!」

迎え撃つように飛び蹴りを放った555のボディに、ガリガリガリイっと鉤爪が傷を入れる。が、555の蹴りは、真紅の円錐ごとクロウオルフェノクの胸を貫いた。

着地し、振り返った555の視線の先で、クロウオルフェノクは青い炎に包まれていた。

「……あ」

「エ？ あ、燃える？ あタシ、燃エチャう？」

イヤ、いやアああア!? 死にタクない！ あたシ死にたクナいいイ

「イイイ!!」

そう叫び、取り繕ろうとした鉤爪の消えた手を、555は思わず後ろに下がって避けていた。

更に近付こうとして、その間に鴉の少女は燃え尽きてしまった。

その、燃え尽きた痕跡を声も無く見詰める真也の耳に、ぺちぺちと気の抜けた拍手が響いた。

「いやあ、流石は『偽善者』の息子。

君もこれで、立派な『人殺し』だ」

弾かれたように振り返った555の視線の先に、真つ青なワンピースを着込んだ少女、いや女性がニタニタと厭らしい——何も知らない人間なら愛くるしいと表現するのだろうか、真也には彼女の笑顔の下から溢れる禍々しさから眼を逸らす事が出来なかった——笑みを浮かべ、講堂の物置と化した舞台の端に座っていた。

凝視する555に、仮面の様に笑っている女性は、彼の心を抉ろうと言葉を続ける。

「君言ったよね、『オルフェノクであっても人一人殺した』って。そうである以上、君も『人殺し』だよな？」

窓際の落ちこぼれとは言え、元FBI捜査官の養子が人殺しなんて、ねえ？」

「……!」

ぐつと歯を噛み締めた真也の様子に、にんまりと青い女性の口の端が上がる。が、その顔が急に強張った。

「は、良く言うぜ。」

察するところ、煽って持ち上げて会社に連れて行くところを、変な方向にプライド刺激しちまって回収に失敗したんだろ？」

「そして、予定していた二人を連れて帰れなくなったので、代わりにお前さん達が昔へオルフェノクの記号を植え付けた真也を連れて帰ろうって心づもりらしいけど、それはさせられないかな」

「っ、一文字空、滝海斗」

顔を上げた真也は、講堂の昇降口に立つ義兄二人の姿に目を見開いた。

海斗が、真也に笑い掛ける横で、空の方は顎を上げて《スマートブレイン社》のエージェントを見た。

「真也のこれからの進退は、警察に行って決定する。」

あんた達《スマートブレイン社》に、余計な気回しをされる謂れも予定も無い。

判ったら、あんたはさっさと帰って、始末書なり減給なり処分を受けるんだな」

「あら、守ってあげないの？ 薄情ね」

最後の足掻きに、女は精一杯の虚勢に吐き捨てる。

それに向かつて、呆れ果てたと言う顔で海斗が答えた。

「自分がやった間違いを、きちんと償うのは当然の事。」

犯した罪に背を向けて、逃げ回るのを正しいなんて言うものか。償う為の手伝いは、俺達もする。

だから、あんた達《スマートブレイン社》はさっさと帰ってくれないか？」

「くっ、この、怪物と兄弟ごっこに興じるがいいわ。覚えておきなさいよ、中村真也、この裏切り者！」

そう言う海斗の背後に、武装した『SPIRITS』隊隊員が並んでいる事に気付いた女は、忌々し気に舌打ちすると、暗がりにも紛れるように姿を消した。

女の気配が完全に消えたのを察して、真也と二人の肩から力が抜けた。

そして、ギア・システムを保管ケースに戻して近寄って来た真也の、この間散髪した頭を空が容赦なく撫で回した。

「わ、えわ、え？」

「馬鹿野郎！ 危ない真似しやがって！」

「色々あるけど、先ずはお前が無事で良かったよ。」

帰って休ませて上げたいとこだけど、事情聴取は受けて貰わないと、ね」

そう、困ったように言った義兄に頷き、真也は歩き出した。

事態を聞いて、頭を抱える警視總監と身元保証人を見る事になるの

は、その三〇分後の事である。

*Shinya Nakamura

福井健介は、中学二年の二学期から秋田の中学校に転入した。

祖父母の許に行くまでの約一年間、健介は発掘調査団基地での怪我もさることながら、契約を結んでしまった『ジャヴァウオック』による魔力搾取に苦しんでいた。

最初、滝和也を始めとするSPIRITS隊はビーストドライバーを使用不能の状態にして、そのまま封印状態に持ち込もうとした。

それに否を唱えたのは、スミドロロンや魔女参謀、その他魔法や呪術にかかわりを持つ元幹部達だった。

「滝和也、気持ちは判るが此奴を封じれば、契約を結んでしまった小僧に悪影響が出るぞ」

「ファントムと言ったかのう、此奴は魔族とは違うが人の魂を食い尽くして生まれるが故に魔族より厄介な存在じゃ」

「此奴、これまでに少なくとも百を超える人間の魂を食い切りここまでの力を得た者じゃ。下手をすれば小僧の命も諸共に封じる事になるぞえ」

「そうだね、今この時間も健介君の魔力、生命力をあの『ジャヴァウオック』と名乗った存在は搾取している。

せめて、それだけでも止めさせる事が出来れば良いんだがね」

《ホークアイ・ホールディングス》会長、アラン・ホークアイがこめかみを抑えつつそう言うのと、鼻から下をベールで覆った魔女参謀が物憂げに杯を揺らし、中の上物の赤ワインを眺めながら答える。

「魔力を、補ってやれば良いのじゃがのう。

残念ながら、術者として魂を鍛える余裕はあの子供には無かろうよ、あのペースで魔力を絞られておつては、さほど待たずに生命力まで絞られてしまう」

「魔力を、他所から補充する事は出来ない訳では無いぞ?」

しかし、『ジャヴァウオック』の搾り方からすれば、下手な方法では焼け石に水、何より魔力を取り込むとなれば、よほど力の籠ったものではなくては。

手っ取り早いのは、魔力そのものを食べさせる事じゃが、あの小僧に我らの魔力は劇物と変わらぬ」

かつて、ライダー達を苦しめた女性幹部の言葉に、滝はぐっと両手を握り締めた。

彼女達は、先のBADAN戦役の際にアラン・ホークアイ、いやマミー・ゼネラルによって魂を戻され、暗闇大使の傀儡から解放された。その際、大首領ことJUDOの行動に不信を抱き、彼女らはそのままマミー・ゼネラルに与したのである。

「あんた達でも駄目なのか？」

滝の問いに、呪術魔導の類を嗜む女傑二人は首を横に振った。

「済まぬが、魔力を持つ者の血肉を食べさせる事が最も手軽で早い、そのような事はさせられまいよ」

「このご時世では、魔力の籠った宝石を集めるのも一苦労よ。しかも、その魔力を『ジャヴァウオック』めが気に入らねば意味がない」

「……そうだね。まずは、どのような魔力なら彼のお気に召すのか」

頭が痛い、会長が金髪に指を差し込んだその時だった。

すうっと、影が蟠ったかと思うと、一人の老人が現れた。

「面白い事が判ったぞえ、マミー・ゼネラルよ」

「おや、幽霊博士ではありませんか、何か進展でも？」

真つ白な総髪に、片手を鉄製の義手にしている老人——元ジンドグマの幹部であった幽霊博士は、義手に引つ掛けた手提げ袋の中から焼き菓子を取り出し、それをそこにいた四人に配ると、自身も一回り大きなマドレーヌに嚙り付いた。

その焼き菓子を見て、滝が目を見開いた。

「これは、うちのチビ達が焼いたマドレーヌ？」

「そうじゃ。これを小僧に食わせたら顔色が戻ったし、グダグダ文句言いよったフアントムめも大人しくなりおった。

魔女参謀よ、以前其方が言っておったろう、海斗めの纏う「力」。どうやらそれが、魔力の代用品になりそうじゃ」

昔からの馴染みの言葉に、魔女参謀の表情が少し明るくなる。

スミドロンの方も興味深げに首を傾げ、頬に指を添えた。

「オルタフォースと言うたかの。あれほど光の気配の高い力は、妾も余り見た事が無い。

しかし、何故この焼き菓子にあれの力が？」

「何、簡単な話じゃ。」

その菓子は海斗と徹子と天馬の三人が、粉を振るって混ぜて焼いたもんじゃ。その過程で、あの三人の力が菓子に移ったようじゃ」

「そう言えば、あの三人、かなり似通った力の『質』を持っておった。……ふむ、三人で手ずから作ったのが、良い結果になったのやもしれぬのお」

滝海斗は滝和也の息子、滝天馬と重音徹子は鉄道事故の遺児で滝に養子として引き取られた。

特にこれと言って似ているところがある訳でも血の繋がりがあってもないが、三人は周囲からも纏っている空気が似ていると良く言われていた。

そして、三人の共通項が『オルタフォース』と呼ばれる力の存在である。

所謂魔力、靈力に似ていてしかし少しずつ違っていると、《ホークアイ・ホールディングス》に身を寄せる呪術、魔術スキル持ちの改造人間達が口を揃えて言った、『限りなく光に近い、純度の高過ぎる生命エネルギー』を、三人は若干の差はあるものの持っていた。

そのオルタフォースが、三人が手作りした焼き菓子にかなり残留したらしく、その菓子を食べた健介の状態が良くなったと言うのだ。

渡されたマドレーヌを一口齧り、アラン・ホークアイは少し首を捻りつつ同じく齧っていた滝に視線を向けた。

「私には良く判らないな。」

だが、改善が見られるなら、時間稼ぎが出来ると言う事だ。

滝君、海斗君達に事態を話して、焼き菓子を量産して貰ってくれな
いかい？」

「そうですね、俺もピンときませんが。」

確か、まともに食事が出来ない健介に、天馬が海斗の作ったプリンを食べさせたなら食べられたから、甘い物ならいけるんじゃないかって

事になって菓子を作ってたらしいんで。

でも、まさかそれがそのオルなんたらが関わってたなんてなあ」

「まあ、其方はそうよな」

滝が出て行くのを見送って、年長者達は話を続けた。

海斗と天馬、徹子が作成に手を出した食品なら、大体オルタフォー
スが籠っている事が判り、以来健介が普通に生活が出来るようになる
まで、三人は毎日のようにキッチンで食事やお菓子を作り続けた。

ドライバーの封印は結局健介自身まで巻き込みかねない事、更にぽ
つぽつ現れるようになった謎の怪人——ファントムへの対応の為、結
局健介に協力を仰がざるを得なくなった事から見送られる事になっ
た。

但し、滝は『ジャヴァウオック』の干渉力を低くする方法の検証を、
SPIRITS隊に依頼していたが。

その後、祖父母の許に身を寄せた福井健介は、出羽三山の修験者を
先祖に持つ岡村建一と親しくなり、長じてバスケットボール部に入る
事になる。

それに前後して、飼い主を守ろうとした猫又と仲間を増やすべく絶
望をふりまこうとしたスプリガンファントムとの戦いに巻き込まれ
た事は、また別の機会に語る事にする。

福井健介が臥せていた時の事。

世界が、突然砂に変わった。
何もかも。何もかもがだ。

自分の記憶すら砂と消えて、気が付けば緋色の狼のような姿で、砂の海の中に座っていた。

そんな自分に、『あの方』は仰った。

「世界を壊したものがいる。

お前達は過去に飛び、世界を壊した『分岐点の鍵』を探し出し、其奴を抹殺せよ。

これは勅命である！」

訳は判らなかつたが、その『勅命』という言葉に、逆らい切れない何かを感じて、自分は命じられるまま穴のようなものに飛び込んだ。

同じように、穴に飛び込んだ者は千を越えたのではなからうか。

但し、自分を含めて一部を除くと、皆『勅命』を発した金色の人物に向かつて熱狂的に歓声を上げ、我先に穴に飛び込んでいた。

自分は、まるで濁流に押し流されるように、穴に飛び込んでいた。

他の者のように熱狂する訳でも盲目的に従う訳でもない。

ただ、彼を見捨ててはいけなと思うたのだ。

それが、砂と零れ落ちた記憶に端を発している事だけは、何とか判っていた。

目が覚めたら、全てが消えていた。

パパも、ママも、妹も、お兄さんも、お姉さんも、皆皆、全て砂に変わって、中佐と二人、砂漠の中心にいた。

そのうち現れた列車——時の列車に乗る事が出来た私達は、私達の電王を探す事になった。

私達の歴史に連なる時間線の、過去の何処かにいる特異点を探し出し、その人に『電王』として戦って貰う。

私も、中佐も、残念ながらある種の特異点ではあつたけど、『電王』にはなれなかつたから。

だから、『時の列車』の二号車を預かり、中佐がオーナー代理、そして私、シャルロット・フィリス・キャゼルヌは列車の乗務員として乗り込み、私達の旅は始まった。

家族を、世界を取り戻す為のその旅は長く続き、私達は銀河歴以前の時間帯でやっと、目的の人物を見出した。

香山閃。

彼が、私達の世界に連なる特異点であり、同時に世界を繋ぐ『鍵』であつた事を知るのは、ずっと先の話になる。

TIME—STRANGER

この先は、黒バスマイダーズにおける電王の最終話になる予定の話です。

興味の無い方はご覧にならない方が良いと思います。

この話は、元々単独で考えており、この最終話はおそらく変更する事は無いと思われまます。

……つか

………つか

「閣下！」

声に飛び起きる。

そこには、軍服を纏った良く知った顔があった。いや、何だろう、もつと若くて、もつと瞳の色は黒っぽい緑だった気がする。

周囲を見回せば、そこは自身の良く知っている己の旗艦の私室で、目の前の見知った顔は、些か呆れたように腕組みしてこう言った。

「やはり、強行軍は宜しくなかったのではありませんか？

務めとは言え、もう少しご自愛ください、閣下」

『ほら、連戦だからぼろぼろじゃないか。』

俺は無理して欲しいとは思ってないよ、ウォルフイ』

重なって聞こえるのは、同じ声、だが何だろう、もつと親密だった気がするのに。

「……ジンツァー」

「はい、閣下」

「もう少し、崩して貰えないか、今は、その」

こちらの言葉に一瞬目を瞬かせ、周囲を見回した後、國務尚書護衛艦隊指揮官を務めるホルスト・ジンツァー上級大將はがりがりど焦げ茶の頭を搔いてこう言った。

「全く、今だけだぞ、ミッターマイヤー。」

バイエルラインに抜けたら、またぞろ嫌味言われちまう。あいつ、俺より出世した癖に、艦隊司令部ぶん投げてお前の護衛艦隊率いたって言って、またビツテンフェルト元帥とワーレン元帥に殴られてたぞ」

「あいつめ……」

過剰な慕い方をしてくる元部下であり現在総司令部重鎮になっている男に、苦笑いが浮かぶ。

そんな自分を見て、少しだけほっとした様子で彼は言葉を続ける。「大体、バートラト星系との通商航路開設の式典出席の序に、向こうの視察とか何とかくっ付けて休暇を兼ねれば良かったのに、ミュラー元帥やメックリンガー元帥はそのつもりだったらしいのに殆どとんぼ返りにしちまって。」

勤勉は程ほどにしてくれ、お前まで倒れたら本気で帝国潰れかねないぞ」

『真面目過ぎるんだよ、ウォルフイは。』

俺達は遊撃隊扱いだから、イマジン以外は鉢合わせたら叩くで良いんだから。」

肝心の相手の時に、疲れ果てて負けましたは洒落にならないって』士官学校時代の最期の同期生の声に、もう一つ声が被さって聞こえる。

それは学生時代に聞いた目の前の人物の声のようで、そうではない気もする。

こちらがそんな事を考えているうちに、従卒の少年がコーヒーを運んで来た。どうやら、ジンツァーが呼んだらしい。

その、コーヒーを差し出す従卒の姿に、緋色の髪の少年が重なる。

そして、その少年の頭を撫でていた、十代であろうジンツァーの姿。『よろしくな、ウォルフイ。』

俺は香山閃、フルネームはホルスト・閃・香山・ジンツアーってなるんだけど、日本じゃ通りが悪いから日本人名だけで通してる。

だから閃って、呼んでくれ』

涙がすつと、片目から零れた。

「国務尚書閣下?」

「閣下!」

「何でもない、何でもないんだ」

慌てて傍に来て、膝を付いた相手に向き直る。

親友は、自分の手で討ち取った金銀妖瞳の彼。

でも、目の前にいるのは、士官学校時代に確かに友と呼んだ相手で、
そして、

千数百年前の世界で、一度は世界を壊す事に加担した自分を許し、
そして世界を取り戻す手伝いをしてくれた人間の、多分彼は子孫だ。

「しかし、」

「本当に何でもない。ただ、そうだな。」

せ……ジンツアー、これからも、よろしく頼む」

一瞬、閃と呼びかけそうになり、慌てて言い直した自分に向かって、
一瞬目を細め、そして彼はこう言った。

「うん、改めて宜しく、だな。」

……ウォルファイ」

歴史が、どんな紡がれ方をしたのかは判らない。

でも。自分がいるこの時間と彼がいた時間が一旦途切れ、でも結び
直せた事実がここにある。

俺は忘れまい。

ウルファイマジンとして、世界を壊そうとした事、そして。

『電王』ホルスト・閃・香山・ジンツアーの相棒として戦った、この
記憶を。

No one knows mythology.

Fourth chapter TOKYOGUA
RDIAN

蠢動

四月が来て、滝家の少年達を含めた日本中の学生が学年を進めた――留まった人間もいるかもしれないが――。

で、四月半ばの部室内で、学期初めの実力テストの返って来た答案を前に、誠凛高校バスケット部三年生達は戦慄していた。……いや、一名は遠い目になっていたが。

「これは……どう言う事かしら？」

「いや、見た通りじゃないかな」

わなわなと震えるバスケット部監督相田リコに、バスケット部主将日向順平はそう答えるしかない。

彼女の目の前の会議机の上には、二年生部員の答案が並べられている。

福田、河井、降旗、この三人は何時も通り、100番代前半の成績だ、安定している。

黒子テツヤも、国語で何とか100番台中間に留まっている。

そして、『バカ神』事火神大我。彼の平均点は60点だった。何と、黒子を抜いて、三人に近付いていた。

何度も答案を確かめる三年生達の鬼気迫る姿に、当の大我が縮こまっている。

「この点数、本物なんだ？」

「……！……!？」

「再提出の答案じゃないよって、水戸部も驚いてるよ」

「全部、この間の学年末試験の倍……はっ」

「黙れ伊月。いや、皆まずは成績を上げた事を誉めてやれよ」

そう言った順平に、カントクは鼻先に噛付かん勢いで答案を叩いた。

「そんな事言ったって、順平、私達が皆で教えてギリギリ補習回避レベ

ルだったのに、一月後に倍以上点を取ったのよ!？」

「そう言えば、日向も地味に点が上がってないか？」

そう言ったのは、チーム唯一のリア充、土田聡史だった為か、がたと同期がこちらを見たのに内心順平は引き攣ったが、主将の意地で動揺を押し殺した。が、幼馴染みにはばれた。(オワタ)

「どう言う事なのかなあ、順平い」

「待て、落ち着け、もうすぐ新入生が入るんだ、騒ぎにしてくれるな」

「あ、あの、実はこの一月、家庭教師に来てもらったっす」

流星に、先輩達がギスるのは不味いと思つて、大我が声を上げた。
「？」

「家庭教師？ あ、もしかして大学生だつて言うあの人達？ って、水戸部が言つてるよ」

小金井慎二の言葉に、根が素直な大我はさっぱりとこう答えた。

「あ、兄ちゃん達もだけど、閃兄ちゃんの後輩だつて言う花宮先輩とゆかいな仲間達が」

「え？」

「「ええ!?!」」

「「えー!?!」」

「あのオタマロがですか!?!」

先輩同輩の反応にびくつくチームのエースの様子に、順平は今度こそ額を抑え溜息を吐いた。

同日同刻。

都内のとある古刹では、しめやかに葬儀が行われていた。

警視庁の未確認生命体対策班、《S・A・U・L》に所属する弱音羽久警部補は、喪服に身を包み焼香を行った。

故人は、彼女の大学時代の恩師だった。

工学に進む女性が珍しくなくなった昨今、セクハラ、モラハラを行う教授が少なくなかった学生時代に、きちんと論文を読んで指導してくれた人で、この人がいなくなったらGシリーズは日の目を見る事が無かった。

Gシリーズが警察庁に採用されて以降も、その改良の助言を貰っていた弱音は、何とも言えない思いで遺影を見た。

故人は交通事故で亡くなった。居眠り運転で、高速道路で減速無しで中央分離帯に突っ込んだのだと言う。

事故の一週間前に、G-3の量産機能限定版であるG-3マイルドの搭載機能について話し合い、あくまでも安全機能主体でと言う話を纏め、来月又話し合おうと約束をしていたのだ。

他の参列者に場所を譲り、会場から出て来た弱音は、山門のところ
で煙草を吸う女性の姿に、思わず眉を顰めた。

同じく喪服に身を包んだ女の方は、弱音の姿に気付くと煙草を携帯
灰皿に入れて、にっこり笑って見せた。

「久しぶりね、弱音さん」

「ええ、大学卒業以来ね、花村さん」

話し掛けて来た女性は、同窓生であり、ある意味学科でのライバル
だった花村咲夜である。

同じような装甲強化服の研究をしていたものの、弱音が『危険状況
における身体防護服』として研究していたのに対し、花村はそのもの
ずばり『戦闘用強化服』だった。

だからと言う訳でも無いが、お互い最低限の会話しかした事が無
かった。

卒業後、弱音が警察庁に進んだように、花村の方は自衛隊に進んだ
とは聞いていたが。

「先生、残念だったわねえ」

「ええ。まだまだご意見を頂きましたのただけ」

残念と言う言葉に含みを感じたものの、弱音が取り敢えず言葉を返
すと、花村は肩を竦めた。

「それにしても、貴方安全服を作るとか言いつつ、結局戦闘服作ってん
じゃないの」

「……G-3Xは確かに戦闘力を強化したけど、それは未確認生命体
との戦闘時着用が多いからよ」

「それよ、未確認生命体との戦闘こそ、自衛隊に任されてしかるべき

じゃないの？ しかも、その未確認生命体迄抱き込んでいるそうじゃない、貴方のところって」

言われた言葉に一瞬眉を顰め、そして海斗達仮面ライダー達の事を言っているのだと気付いてムカツとなった。

言い返そうとしたその時、ぼふつと上着を頭から被せられた。

「きやつ」

「何油売ってんだ、迎えに来たぞ」

そう言ったのは、弱音の従兄妹であり《S・A・U・L》所属の本音京一郎警部補だった。

従兄妹にそう声を掛けると、本音の方は花村に顔を向けてこう言った。

「こいつ、これでもうちの整備チームのトップなんでな、これから仕事だから連れて行かせて貰うがいいな？」

「え、ええ、もちろん。知らなかったとはいえ悪かったわ」

制服姿の青年に疑問形だが威圧され、花村は引き下がった。

従兄妹を半ば抱えるようにしながら、歩き出した本音は数歩離れたところで振り返った。

「自衛隊を未確認生命体鎮圧に引つ張り出す事になったら、それは『B A D A N 戦役』の再来だ。そんな事態にしない為に、俺達《S・A・U・L》が動いてる。」

あんた達がどう思ってるか知らないが、あんなの相手に仮想軍隊がドンパチしたら他所の国がどう思うか、考えてくれねえか」

そう言つて歩き出すと、背後から盛大に舌打ちが聞こえて本音は大きく嘆息した。

苦虫を噛んだように顔を顰めている従兄弟に、弱音は声を掛けた。

「京一郎、あの」

「彼女、自衛隊の過激派だな。」

最近、自衛隊の中で未確認生命体排斥の過激派がいるんだと「排斥？」

本音の愛車であるホンダ・NSXまで来たところで、本音はがりがり頭を搔いてこう言った。

「お偉いの一人が、昨今の未確認生命体事件に対して、自衛隊の火力をつぎ込んで掃討すべきって発言してな、それに若手が乗っかってるんだと。ただなあ」

「ただ、何？」

話を聞くうちに、弱音も眉を顰めていた。

乗り込んで走らせつつ、本音は言葉が続ける。

「そのお偉い、BADANの時に士官だった息子が、富士演習場の事件で亡くなったんだと」

「え？ あ、ブラックサタンの。でも、富士演習場の自衛隊は、何の指示も出てない待機状態で勝手に攻撃して、殲滅されたって聞いたけど」

「そう言うのも吹っ飛ぶくらい改造人間を恨み、その延長で未確認も恨んでるんじゃないやねえかって話。それと、お前に教えとけって総監に言われたんだがな」

「え？」

「今朝早く、お前の恩師の研究室が黒ずくめの集団に荒らされたそう」

「何ですって!？」

「監視カメラを含めた警備システムをハッキングして入り込んでいたそう」

因みにそれが判ったのは、たまたま別の学科で泊まり込んだ学生が、研究室から出て行った不審者を見掛けて、警備員に知らせたからだそう」

「そんな事が。……先生の研究を狙って？ でも先生の研究は殆ど学会で発表されて、産業スパイが狙う旨味なんて何もない筈よ？」

そう言った従兄妹に向かって、本音はガリつと頭を搔いてこう告げた。

「まだ捜査中だからはっきりした事は判らんが、少なくとも侵入者は潜入作業のプロか、特殊工作に長けたプロだって言うのは間違いない。

それにな、羽久」

「え？」

「お前の恩師、事故の前度々電話が掛かって来てて、その電話に向かって激高してたって証言が講師や学生の間から出てるそうだし!?」

「睡眠薬とかは検出されなかったが、事故じゃなくて事件の恐れが出て来たそうだし」

二人の乗ったNSXの前に、警視庁の庁舎が見えて来た。

その庁舎を横に見ながら、NSXは別棟にある《S・A・U・L》の地下駐車場へと滑り込んだ。

それから一週間後、ゴールドエンウィークの人出の増えたショッピングモールに、トカゲ型の未確認生命体が現れた。

「あはは、このリザードマン様が絶望を振り撒いてやるぜえ！」

そう叫ぶなり、鱗の装飾が付いた長剣を振り回す怪人から人々が逃げ惑う中、人々の流れに逆らって走る青年が二人いた。

一人は、薄い色合いのぼさぼさの金髪に三白眼の福井健介。

もう一人は、白金髪に瞳孔が良く判らない薄い色合いの瞳の黛千尋。

二人は、今回たまたま理由は別だが一緒にこの本屋に来ていて——千尋はラノベ購入に、健介は予約していたカリブ海の写真集を受け取りに——事件に遭遇していたのだ。

「ああくそ、たまの休日位、好きにさせやがれってんだ！」

指輪を嵌めつつそう唸る健介に、溜息交じりに千尋はこう返す。

「だったら待機してれば良かったんじゃないか？　まだ《S・A・U・L》からの出撃要請は来てないぜ？」

「相手が《フアントム》なんだよ！　てか、ちーちゃんこそ本屋に居たらいいだろ？」

健介の言葉に、不機嫌そうに一言。

「ばあか、あのままじゃ店閉まって、買うに買えねえよ。俺は、この店限定付録の為に来たんだからな。」

取り敢えず、どんな能力を使うか判らんから、さっさと調査（サー

チ)するなり撃退するなりするぞ」

「はいよっと」

そう返事しつつ、健介は呼び出したドライバーにビーストリングを当てて捻り、千尋は合流したキバットバット五世を掴んだ。

「変身！」

そして、転んで逃げ遅れた子供にスケイル・ソードを振り上げたりザードマンファントムに、仮面ライダービーストがダイスサーベルで挑み、仮面ライダーキバが子供を抱えて距離を取った。

己の前に現れた『古の魔法使い』と『古い存在との混血』(ファンガイアハーフ)を前に、リザードマンは仮面のような顔でも判り易く怒りを見せた。

「貴様らあ、俺様の邪魔をするか！」

「うっせえよ、俺の『昼食』(ランチ)になって貰うぜ！」

切り結ぶビーストとファントムに、子供を家族の許に届けて戻ったキバが、割り込む事が出来ず軽く舌打ちする。

「くそ、遠距離攻撃手段がないってのは面倒だな」

「うーん、アームズモンスターを起こすべきかなあ(ーωー;)」

キバットがぼやいているうちに、警官隊とG-3Xの一团が到着した。

特殊シールドで壁を作る警官達を背に、G-3Xがキバに話し掛ける。彼は最近新規装着者になった新人だ。

「状況の報告を願いますー」

「お疲れ様です、現在確認されている未確認はビーストと交戦中の『P種』一体のみ、半径一キロ以内に他の反応は見られない」

「一キロ、ですか？」

面喰ったような反応に、キバは仮面の下で苦笑いを浮かべた。

恐らく、半径五キロから未確認の存在を感知するクウガ、アギトに比べて範囲が狭いと思ったのだろう。

「ああ、探査力ぴか一の一号二号(アギトとクウガ)と並べてくれるな、その代わりこっちは、確実に個体数を感知するから」

「あ、いや、そんなつもりは」

焦っている新人さんに、これは微笑ましく思いつつ笑って、キバは戦鬪の動向に目を向けた。

鏢迫り合いを押し勝ったビーストが、ダイスサーベルのドラムを弾く。

カララつと音を立てて、止まった出目は最大値の6だった。

「よっしゃあ、くらえメインディッシュー！」

Saber Strike!

銀色に光る八本足と翼を持つ竜の形をしたエネルギーの塊が六体、振られたサーベルの切っ先からリザードマンへと飛び込んで行く。

だが、六連弾を喰らいぼろぼろになりつつも、まだ立っている未確認生命体の姿に、G-3Xが慌てて装備のロックを解こうとし、キバが援護の為前に出た、その時だった。

G-3Xのセンサーが、近づく熱源反応を捕らえ、盛大な警告音（アラート）を鳴らした。

「熱源接近？ って、小型爆発物？ ミサイルって、総員伏せろ!!」

G-3Xからの怒声に、警官達はシールドの陰で身を固くした。

纏まって飛んで来たミサイルは、大半がリザードマンの背中を捕らえ、そして数発がビーストとキバへと命中した。

そしてそれは、屋内で使用されるには火力の高い代物だった為に、リザードマンは周辺の店舗のショーウィンドウどころか陳列物まで吹き飛ばす勢いで爆発、炎上した。その爆炎に、包囲網を作っていた警官の一部が巻き込まれた。

ビーストの方は、ミサイルを見出したその瞬間に『ウイング』のマントを呼び出しそれで衝撃を中和させたが、キバの方はたまたまミサイルとの間にファントムがいた為、気にせず走った結果吸い込まれるように自身に突っ込んでくるミサイルに気付くのが遅れた。

数発とは言え、未確認生命体を爆散させたミサイルの直撃を受け、堪らずキバは変身解除でその衝撃を減らした。

「キバ!？」

「うわわ、しっかりしろ千尋、（ハ、ミアタフタミノ、ハ）ノ」

床に倒れ込んだまま、呻いている青年に、ビーストが駆け寄りその

頭上でキバットが泡喰った様子で飛び回る。

その間に、警官隊の方は思わぬ爆発に巻き込まれた負傷者の応急手当の為、大急ぎで動き出した。

そんな騒ぎの中、慌てて通信機を誤操作したG-3Xは、回線を繋ごうとして変な通信を拾っていた。

『R-01より本部。目標I沈黙、目標K、目標B命中するがそれぞれ中破と損傷軽微、指示を求める』

『本部よりR-01、拡散推進弾砲の実験は成功した。今回はこれで撤収せよ』

『了解、1320（ひとさんにーまる）撤収』

（え!?!）

慌てて録音しようとしたが、その前に通信が終わってしまった。

通信の内容に呆然としつつ、だが警官隊指揮官に尻を叩かれながらG-3Xは現場の収集の為動き出した。

程なく、負傷者の搬送の為に呼ばれた救急車のサイレンが聞こえてきた。

黛千尋の負傷入院の知らせを受けて、滝海斗と一文字空、香山閃の三人は、それぞれの予定を切り上げ城南大学付属病院へと向かった。

赤みを帯び始めた空の下、三人がバイクで病院に乗り付けると、駐輪場に見覚えのあるバイクが二台止まっていた。

「あ、真也のオートバジンと祥吾のコアボイルダーだ」

「そう言えば、梓小母さんと一緒にこっちに戻るって言ってたな、祥吾」

目敏く見付けた空の声に、身内の予定を閃が思い出す。

それに対し、不自然な位置に直立する黒い自販機を指差し海斗が微笑する。

「ライドベンダーがあるよ。ここには置いてなかった筈だから、大我も来てるみたいだね。多分、公共機関で来てる面子もいると思うから急ごうか」

「おうー」

「行くか」

三人がエントランスを潜ると、人待ち顔で立っていた青年がほっとした顔で手を振った。

彼は、三人を始めとした滝家の養い子達が幼い頃から世話になった小料理屋《TOKIO》の店員である、永瀬知治と言う人物だ。

彼は、シヨツカーを始めとするBADAN戦役の後で行き場を失った改造人間達の受け皿となった、《ホークアイ・ホールディングス》と言う会社の人事福利厚生部門が開設した飲食店の一つである《TOKIO》の接客兼施設管理助手と言う名目を持つ。だが同時に、滝家の子供達の送迎役も良く行っていた為、三人とも顔見知りを乗り越して身内カウントしている人間の一人である。

「三人とも、こつちこつち！」

「知治さん！」

「知兄！」

「知さん、千尋は！」

駆け寄った三人に、ほっとしたのかへによっと顔を崩して永瀬は笑った。

「良かった、三人が来るの待ってたんだ。」

病室は何時もの階の10号室、皆集まってるから」

「ありがとう、知治さんはこれからどうするんですか？」

海斗がそう問うと、永瀬は表情を改めてこう言った。

「天馬と和ちゃんとか、足の無い子供達を送って行くから、この後は通用門側の待合室で待つてるよ」

「あ、そうか。もうすぐ正門閉じちゃうか」

「判った、じゃあ、また後で」

時間を思い出し、永瀬の言葉に頷いた三人は、エントランス最奥のエレベーターに乗った。

そこから一旦三階まで上がり、そこから別棟に移動して更にエレベーターで地階まで降りると、そこは《S・A・U・L》と《SPIRITS隊》と《ホークアイ・ホールディングス》とが用意した仮面ライダー及び未確認生命体事件関連の負傷者専用の特別病棟になる。

最奥の10号室に入ると、そこは八人用の大部屋で、ガタイの良い体育系の学生達が詰めかけても暑苦しくない程度には広さのある部屋だった。

そこには、ベッドの上でぶすつたれている包帯姿の千尋が居り、それを仲間達が囲んでいる状態だった。普段なら飛び回っているキバットはと言うと、千尋の状態が気になっているのか、彼の肩でじっとしている。

「千尋ー」

「おい、大丈夫か、お前」

海斗と空がベッドに近付けば、傍にいた宮地清志、裕也兄弟と中村真也とが場所を譲った。

反対側の傍にあつた折り畳み椅子に座っていた健介に、些か困つたように事態を聞くのは閃である。

「戦闘中の負傷だつて聞いたけど、ショッピングモールに出て来た奴、そんなに厄介だったのか？」

「うんにゃ、敵はファントムだったけど、奴自身は俺一人でも何とか耐えるレベルだった。……まあ、セイバーストライク最大値を耐える程度にはタフな奴だったけど、それでもG-3Xもキバもいたから、あの時点ではどうとでもなつたんだ」

半ば不貞腐れたように答えた健介に、言葉を足したのは千尋の方である。

「俺も健介も、魔力やオルタフォーエスなら探知出来るが、ごく普通の戦略兵器には反応出来ないからな。肉眼視出来ない位置から発射されちゃ、判らんな」

「戦略兵器だつて!？」

素つ頓狂な声を上げたのは裕也だったが、その場にいる全員的心情を代弁していた。

それに向かつて落ち着くよう声を掛け、少し険しい顔になって海斗が千尋に質問を投げた。

「裕也君、待つて。」

千尋、戦略兵器だったのか？」

「あの、屋内で使用する事を全く考慮していない火力と、馬鹿みたいな射程距離は戦略兵器だと思う。」

あの時、俺は手持無沙汰だったから、「トウルーアイ」も併用して半径一キロ圏内の探査をしていた。まあ、尤もG-3系統やギアガジェットと同じ強化服系の相手じゃあ、俺は視認出来なきゃ判らないがな」

「G-3Xが『伏せろ！』って言った時には、大型ガシャポンのカプセルみたいなのが目の前に来てたからな。俺は「マント」が間に合ったから良かったものの、ちーちゃんは完全近接戦闘型だから」

健介がそう続けて、知識のある者達が「ああ」と言う顔になる。

真也と『民間人その1』の高尾和成と祥吾が顔を見合わせ肩を竦め、宮地兄弟も仕方が無いと天を仰ぐ。この場で判らないのは、ライダーとなつて間も無く、共闘経験が無いに等しい日向順平と火神大我だ。「あの、それって」

「黛さんは、防御力低いのか、ですか？」

「いや、そうでもないよ」

「一番弱いのは、俺の【Computer】メモリか、【Book】メモリを使った時だと思う。耐久値紙だし」

真也が手を振り、腕組みしつつ祥吾がそう言う。それに続けて、閃の方が顎に手を当てつつ言葉繋げる。

「基本フォーム単体では、キバの鎧は攻守のバランスが取れた逸品なんだ。」

ただ、現状耐久値ベスト3はクウガのライジングタイタンとタイタン、555といたつたところで、実際のところ555から下は、ほぼ横並びだ。大我のメダルチェンジの組み合わせによっては、また変わるかもしれないが」

「じゃあ、今回千尋兄ちゃんが怪我したのは？」

「タイミングの悪さが一番だろうな。それに、現場の状況的に、ちー兄さんがミサイルを躲したら、警官隊が作った壁に突っ込んでたかもしれない。ファントムの爆発に巻き込まれたって人達が、結構他の病室にいるし」

この中で『民間人その2』である天馬の問いに、眼鏡を直しつつ真也が答える。

が、それに否を告げたのは健介と空だ。

「それはどうかな、なんか、俺と千尋が恣意的に狙われた気がする」「流れ弾にしては、ちよつと数が多い気がするな。それに不自然な気がするんだよな、未確認とケンとヒロにだけ当たって、警官隊に流れなかったって言うのが」

「あ、そう言われると」

「確かに変な感じだな」

空の言葉に、和成と今まで眉を顰めて話を聞いていた清志とが頷いた。

そのままミーティングに発展しそうだったが、看護師に「面会時間終了」の一言と共に千尋以外の全員が押し出された。

「小型とは言え推進弾の直撃を食らって、変身解除で衝撃相殺図らなきゃいけなかったし、その時のポカで火傷とか打ち身とか色々作ったから、三日間入院して安静にしろだとき。一日で治るんだがな、こんな」

「そう言うなって。あ、ラノベ代わりに買って来るから、予約票預かるぜ」

「頼む」

ぼやく千尋に健介が話しかけるのを聞きつつ、学生達は三々五々病室を後にした。

バイクの無い宮地兄弟と和成、まだ免許を取っていない天馬、救急車でこちらに来た健介とは、待っていた永瀬のワゴン車で帰って行ったが、遅れて来た三人と祥吾、真也、大我と一緒に順平も通用口を潜った。

「あれ？ 順平お前、ワゴンに乗らなくていいの？」

「あ、もしかして大我とニケツか？ 海斗と一緒にの方が良くないか？」

空と閃がそう言うのと、順平の方は申し訳なさげにこう言った。

「あ、いや俺はこいつがあるんで」

そう言うのと、順平はポケットの中から桜の花を象っているらしい錠

前を取り出し、そのロックを外すと少し離れた場所に投げた。

すると、ばしゅつと音を立てて桜の花の形をしたカウルを持つ桜色の車体のバイクが現れた。

「おい、これ」

「何時の間にか増えてたんですよ、これ。《ホークアイ・ホルルディングス》で調べて貰って、車検通して貰ったから普通に公道で走れますから」

「マジか」

「……この間会長さんが言ってたのはこれかあ」

思わず真顔で聞き返す空に向かって、大真面目に順平は返答する。

そんな弟分——一緒に暮らした時間は短かったが、世話を焼いた相手だ——の言葉に、閃は額を抑え、海斗は遠い目になった。

兄貴分と先輩のやり取りを横目に見ながら、祥吾と真也、ライドベスターをマシンバイクモードにした大我とは明日の予定を話し合った。

「祥吾と大我は、明日どうするんだ？」

「俺は、お袋と姐さん達と一緒に買い物。大我は？」

「うーん、多分自主トレかな？ 明日部活休みなんだ」

「休み？」

それに補足を入れたのは、ジェットヘルメットを被った順平だった。

「ああ、それ、明日俺が《S・A・U・L》に戦極ドライバーの事で呼び出し受けてるんで、どうせなら部活休みになって話になったんだ」

「あ、あれか。やつとそんな話になったんすねえ」

「あー、実測と氷室が関西と東北だからか？」

「春休みは、結局《S・A・U・L》の方が《大シヨツカー》の調査に忙殺されて、ロックシードの調査に掛かれなかつたらしいから」

「おら、お前ら、帰るぞ！ 何時までも寒いところで立ち話も無いだろ」
祥吾と真也の会話に、空が制止を入れてこの場はお開きとなった。

そして、七台のバイクが——二台ほどこちよつとふらついていたが——病院の裏門からすつかり暗くなった街へと滑り出して行った。

ほぼ同刻、警視庁の警視総監の執務室に、一人の警官が呼び出されていた。

「新條勇真警部補、入ります」

「勤務終了時間にすまない。一つ確認を取りたくてな」

ぴっと敬礼する二十代前半だろう、癖のある黒髪に所謂甘めの風貌の青年に、新條強警視総監は書類を下しつつ言葉を掛ける。

今回呼び出されたこの警官は、昼間のショッピングモールでの事件に出撃したG-3Xの装着者である。

本来なら、キャリアとして警察組織の次期管理者としてデスクワークに着く筈だったが、自ら志願してG-3Xの装着試験を受け、《S・A・U・L》に入った変わり種である。

……まあ、名字を見て理解したお偉方は、全員口を閉じたが。

ご覧の通り、彼は警視総監の甥——新條強の兄、新條敬太郎の息子である——で、縁故を云々されないよう一般志願者の中に混ざって試験を受けていた。

「報告書は読ませて貰った。爆撃直後の混線についてだが」

「は。申し訳ありません、目の前の事態に狼狽えて、オペレーターを呼び出そうとしてスイッチを押し間違えまして……回線繋いだままだったのですが」

「ああ、オペレーター側からも報告を受けている。

新條警部補、他に何か気付いた事があったのでは？」

ずっと上位の上官からの問いに、新人警察官は少し口ごもった後、こう付け足した。

「通話を録音出来なかったので、断言する根拠が無いと思ひ省きましたが、通話中に嗚咽のような声が聞こえました」

「嗚咽？」

「本部側の応答の際に、微かに。ただ、小さすぎて性別も年齢もはっきりしませんし、もしかするとスタッフが鼻を鳴らしただけかもしれないが」

はつきりしないと云いつつ、嗚咽であった事を確信していると取っ

た警視総監は眉を顰めた。

「他に、気が付いた事は？」

「報告書以外に気が付いた事は以上です」

「……判った。ご苦労だった」

ぱつと敬礼すると、にっと表情を崩すや、新条警部補はこう言つて退出した。

「では、お先に失礼します。

Kによろしくね、叔父さん！」

「こら、勇真！」

閉じられた扉に新条警視総監が溜息を吐くと、卓上に設置されたノートパソコンから笑い声が漏れる。

『やれやれ、勇真君は相変わらずのようですね』

「俺だつてびっくりしたよ。」

大学行つたから、てつきり弁護士になつて兄貴の跡を継ぐんだと思つたら、警察庁に入つて来てしかも《S・A・U・L》に志願するなんて思ふかよ」

ネクタイを緩めつつ、そうぼやいた新條に、パソコンからの声——
《S・A・U・L》の超大型サーバーに組み込まれている人格搭載検査補助プログラム《K》は笑い声を立てる。

《K》は、実際にはプログラムではなく、かつてBADAN戦役前に起きていたロボット犯罪に対応するべく、警視庁の特別科学捜査室に配属された犯罪捜査用ロボットであった。

しかし、ボディが劣化により機能停止に至つた為、サーバーに繋がつて自我と記憶を保持している。

新條勇真とは、まだ警官として活動していた時分に子守をした事があり、それ以来ボディを失うまで何度か遊んでやった事があつただ。

かつての相棒の笑い声に肩を竦めつつ、BADAN戦役のとぼつちりで繰り上がり出世したかつての熱血刑事は、手元の書類に決裁印を押した。

予兆

翌日は青空が広がり絶好のスポーツ日和で、一部のスポーツ青年達を落胆させた。

日向順平も、恨めしく思いつつ《S・A・U・L》のトレーニングフロアから外を見ていた。

今日、連休中日を利用して、以前の事件で入手した奇妙な錠前——ロックシードと、『Armored Rider』ユニットの起動装置と——言うべき戦極ドライバーの検査の為に、事件の際にそれを使用した面子を呼び出し、起動実験を行う事になった。

東京在住で、何度か出頭して検査を繰り返している順平はともかく——実家住みだが、過去滝和也に救われ彼の庇護下にいた時期があった為、『滝家の子供』カウントに入っている所為か、順平には警察側から割とよく要請が来ていた事実がある——、他の生徒達は移動その他の要素もあつて、今まで集まつて貰う事が出来なかつた。

今回は、全員予定を揃える事が出来た為、やつと順平以外の使用者による戦極ドライバーのテストを行う事が出来ると言う事だ。

順平が実験して判った事だが、どうやら戦極ドライバーは汎用性があるものと、使用者が限定されるものがあるようで、洛山の実測玲央と海常の黄瀬涼太が使用したものが汎用型らしく順平でも問題なく起動したが、陽泉の氷室辰也、桐皇の諏佐佳典が使用したドライバーは起動してもスーツを短時間しか維持出来ず、半ば弾かれるように変身解除した。

その為に、五人集めての起動実験である。汎用型を使っていた実測と黄瀬も、改めて他のドライバーを使えるかの実験の為呼び出したのだ。

それを順平に教えたのは、《S・A・U・L》のオペレーターである都鳥論巡查部長だ。

彼は《S・A・U・L》の職員の中でも、本音恭一郎警部補——そろそろ昇進するらしい——と共に最古参に数えられる警官で、海斗、空を始めとする仮面ライダー達とも顔馴染みだ。

「ああ、いい天気だな」

「あら、そうなの？」

半ば不貞腐れたようにそうボヤいた順平に、実測が反応し窓辺に近付き外を見る。

今、このトレーニングフロアには、待機中の面々がいる。暇潰しを兼ねて、トレーニングマシンを使っていた氷室と須佐も近付き窓から五月晴れの空を見上げ、それぞれ溜息を吐いた。

現在は黄瀬が実験中で、彼の起動実験が終了したら、全員であの時回収されたロックシードの起動実験を行う事になっていた。

そんな状況でのストバス日和に、思わず恨み言が出そうになる。その時だった。

壁掛け型のインターフォンが、けたたましい音を立てた。

驚く面子の中で、動いたのは順平だ。まあ単純に、ここに何度も来ているので、取るのに躊躇が無かったただけだが。

「はい、日向です」

『あ、日向君、すまない、皆下に降りて来てくれないか!?!』

掛けて来たのは、都鳥巡查部長だった。

向こう側がざわついていのに不穏なものを感じ、順平は大きく眉を顰めつつ問返していた。

「何事ですか？ 何か騒がしいみたいですが、何かトラブルですか？」

『ああ、それが』

少し言い淀んだものの、奥で響いた上官——本音警部補の声だ——に押されるように都鳥が告げた事。それを聞いて、順平達は慌ててルームから駆け出す事になった。

『黄瀬君が、パニックを起こして、実験格闘室から飛び出して行ったんだ。』

実験前から何だか憔悴した感じだったけど、本人がやるって言うてきかなかつたから前回使ったドライバーを試して貰ったんだけど、その、起動しなくてね。

起動しなかつた事に驚いて、ドライバーを掴んでたら、急に叫び出して、職員を振り切って飛び出しちゃったんだ』

ほぼ同じ頃、灰崎祥吾は愛車で警視庁の近くを走っていた。

最初は、母と姦しい友人達に付き合う予定だったが、急な会議が入ったとの事で中止になったのだ。

恐らく、昨日のキバ——黛千尋の負傷で、対策会議になったのだろう。母も、薬品部門で会議とかで休日出勤となり、暇を持て余す事になった祥吾は、取り敢えず静岡では手軽に買えない——学校から専門店が遠いのと、品揃えが今一だった——バイク用品を買いに行き、その帰りに《S・A・U・L》に顔を出そうとしていた。

「しかし、戦略兵器ねえ。何処の軍隊だよ？」

在日アメリカ軍がそんなもの持ち出すなんて事になったら、ゴードンのおっさんがまたペンタゴンで大暴れするよなあ」

素直に慕っている事を口に出せない分、滝和也（総隊長）に対して敵対的な人間にあからさまな威嚇をする事で有名な、巨漢で隻眼の元第10分隊隊員を思い出す。

彼は軍に復帰した後、見るからに頭でつかちな若い佐官が元上官（滝）を扱き下ろしたのを耳にした途端、行軍用フル装備を付けさせたその佐官を、飛び込み競技用プールの飛び込み台（もちろん一番高い分）に引きずって行って、板の端に押しやってこう言い放った。

「おう、俺の隊長を笑ったんだ、せめてフル装備でここから飛び込んで向こう岸まで泳げるくらいの根性と体力ぐらいあるんだよなあ、このうらなり野郎（Bearish）が！」

改造人間と戦うつてなあ、こんなもんじゃねえんだぞ、実戦も碌に知らねえ若造が俺の上司の何を笑えるんだ、言ってみろ、おら！」

エリートで、実は同期から嫌味な坊ちゃんやんと敬遠されていたWASPのボンボン佐官は、普段のスタイリッシュぶりから程遠い姿で飛び込み板に縋り付き、落とす為に板を踏み鳴らす万年軍曹に泣いて助けを求めていたそうだ。——同期同僚どころか、上官も三つくらい上の人間しか止めに入らなかつた時点で、このボンボンの人望の無さが知れ渡った訳だが。

この騒ぎの後、ゴードンは二週間の謹慎を受けたが、これっぽっち

も懲りた様子はなかったそうだ。

こう言う男だ、隊長の『息子』達に手を出す馬鹿がいたとなれば、これこそ何処ぞの「ランボー」か「コマンドー」のように、重火器担いで大暴れするのが目に見えている。

「おっさん、何だかんだ言いつつ海斗兄ちゃんにでろでろだからなあ。兄ちゃんが悲しんでるって事になったら、他の元隊員の人達に抑えられるかどうか。……っとうわ!」

考え事をしつつコアボイルダーを走らせていた祥吾は、視界にいきなり飛び込んだ影に、慌ててフルブレーキを掛けた。

ぎりぎり寸前で停まる事が出来て、ほっと息を吐いて顔を上げた祥吾は風防（バイザー）を跳ね上げ相手を見た。

目の前に座り込んでいたのは、地味めなトレーニングスーツに眼鏡の青年だったが、その顔は祥吾の良く良く知る人物だった。

「あぶねって、お前、リョータ!」

「あ。祥吾、君」

座り込んでいた青年——黄瀬涼太は、怯えたような、それでいて夢の中にいるような虚ろな目で祥吾を見上げ、ゆっくりと焦点が定まった。

「何やってんだよ、お前、ああ、ちよつと待て」

腰が抜けたのか、這いずるようにしながら立ち上がろうとする黄瀬を見かね、祥吾は路肩に愛車を止めると、半ば抱え上げるようにして元チームメイトを立たせた。

普段ならぎやいぎやい騒いで振り払うだろう相手が、大人しくされるがままになっっているのを見て、ヘルメットの下で祥吾は眉を顰めた。

「あー、何やってんだよお前」

「……」

俯いて黙っている黄瀬に、どう対処したものかと思っていた祥吾の耳に、ぐうううつと大きな音が聞こえた。

うん? と思った祥吾の目の前で、真っ赤になって腹を押さえる黄瀬の姿があった。

「何だリヨータ、腹減ってんのか？」

「あの、その、まだ、お昼食べてない、から」

「何だ。驚かすなよ、何があったのかと思っただぜ。」

「だったらうちに来るか？ お前下手な店に入って、ファンに追い回されるの不味いだろ？」

黙っているのを、自分に対するあれやこれやだろうと思っただ祥吾は、コアボイルダーに戻り一見ビューエルタンクのトランクから予備ヘルメットを取り出すと、きよとんとしている黄瀬に差し出した。

「え？ そこ燃料タンクじゃないの!？」

「驚くとこそこかよ？」

「え、だって」

「こう言うバイク珍しくねえよ、ホンダやスズキの市販車にも普通にあるぞ、タンクがタンデムシート下に移ってるの。まあ、こいつはエンジンとエネルギーが特殊なだけだな」

そう言いつつ、祥吾はバイクに跨り、黄瀬の方を見た。

「来いよ、美味しいもの食わせてやるから。」

ここにいてるって事は、《S. A. U. L》の用事、終わったんだらう？」

祥吾の言葉にに一瞬びくつと身を竦め、慌ててジェットヘルを被った黄瀬は、おっかなびつくりタンデムシートに腰を下ろした。が、それに祥吾は駄目出しする。

「馬鹿、スカート履いてる女じゃねえんだ、ちゃんと跨れ！ 高速上がれねえし、スピードも出せねえよ！」

「え、だって、」

「お前みたいに無駄に手足が長いのが、そんな乗り方してたら街路樹やガードレールで足削るつての。ほら、ちゃんと乗って、そのタンデム用フットバー起こして、足の裏の真ん中で踏んでろ！」

もたつきつつ、黄瀬が何とかフットバーを踏みしめたのを確認して、祥吾は滑るようにコアボイルダーを発進させた。

彼らが立ち去った数分後、《S. A. U. L》の施設から外に出た日向順平ら四人がやって来た。

「もう、随分掛かったわねえ」

「oh……《S. A. U. L》の施設って、意外に広かったね」

実測玲央と氷室辰也が、施設の思わぬ広さに溜息を吐いた。

見た目は地上四階に見えるが、実際はコントロールルームやGシリーズの開発室、装着員やオペレーター達の待機室や訓練室などがある為、実際は地下三階、地上六階——窓が無い中二階、三階がある為——の建物なのだ。

民間人立ち入り禁止の方は職員が回ってくれたが、それでも結構な広さを走り回りつつ外に出て来てみたのだが。

「もしかして、タクシー拾って家に帰ったか？」

「いや、あいつ荷物預けたままの筈っす、財布とかスマホとかも、一緒に預けたでしょう？」

財布のカードとか、精密機械が検査機に誤差を出す可能性があるって説明受けて、須佐さん達も預けたでしょう」

首を捻る諏佐佳典に、それは無いだろうと思ひ順平が否定を入れる。

それに向かつて、心なしか目を輝かせながら氷室が割って入る。

「トラブルだね、誰が黄瀬を浚ったんだろう」

「もう、辰也ちゃん、不謹慎よ」

「全くだ」

物騒な事が好きらしい——通り名が『エレガントヤンキー』だ——氷室の発言に、実測と須佐が眉を顰める。

そこへ、制服警官が四人に声を掛ける。《S. A. U. L》の所属を示す袖章が付いている。

「ああ居た居た、四人とも、実験室に来て欲しいそうだ。

黄瀬君だったかな、彼は保護されたそうだから心配いらなそうだ」

「そうなんですか？」

「ああ、連絡が入ったそうだ」

代表して受け応える順平も、周囲もほっという空気になる。——氷室も残念そうだが、無事な事は喜んだ。

それならと施設に戻ろうとして、順平は視線を感じて背後を肩越しに振り返った。

その視線の先に、白いドレスを纏った金髪の少女が立って、こちらを見ていた。

一瞬、幼馴染みの少女かと思ったが、彼女は金髪でも無ければ赤い瞳でもない。

「おい、日向、行くぞ?」

「あ、はい!」

須佐に呼ばれ、順平は歩き出したので、気付かなかった。

背後の少女が何かを呟いた後、空間に現れた裂け目(クラック)を潜って、姿を消したその事に。

丁度同じ頃、宮地清志は『みゆみゆ』のミニコンサートに来ていた。ファンクラブ会員百人限定のイベントで、コンサートの後『みゆみゆ』を囲んでのランチパーティーがある。

それ故に抽選の当落で、雑談チャンネルにスレが乱立したほどだ。

清志は、何とか抽選に引つ掛かる事が出来、弟がドン引きするほど浮かれ狂っていた。

尤も、そのイベント前日にキバ——黛千尋の負傷が起きた為に、喜びに若干水を差されたが。

大盛況の中ミニコンサートが終わり、イベントのメインであるランチパーティーの会場へ移動しようと言う時に問題が起きた。

会場の外で起こっていた、未確認生命体数体と仮面ライダー電王との戦いの真横を移動せねば移動出来ない——会場へ乱入しようとしていたイマジン達を、電王が防いでいたのだ。——状況になっていたのだ。コンサートが終わった頃に、《S・A・U・L》の警官隊が到着した事もあり、彼らの護衛の下避難も兼ねて移動しようとした、その時だった。

避難誘導を買って出ていた清志は、こちらへ殺気を向ける何者かの気配を感じ、慌てて周囲に目を向けた。そして、数百メートル先のビルの屋上に、豆粒のような人影があり、それが何かを担いでいると

思った。

だが、その瞬間、昨日の福井健介と千尋の話を思い出し、清志は全員に「走れ！」と叫んでいた。

「おい、危な……」

「あつちのビルの上から、こつちを狙ってる奴がいる、急げ！」

周囲を走らせようとした清志を、警官が抑えようとする。

その次の瞬間、イマジンを狙う小型ミサイルが雲霞のようにこちらに飛来し、殆どはイマジンに吸い込まれ炸裂したが、流れ弾が数発オタク達の周囲で爆発し、野太い悲鳴が幾つか上がった。

そして、流れ弾によって破壊されたビルの看板の破片が、アイドルの少女に降りかかろうとした。

「糞が！ 民間人が屯つてるところで何しやがる！」

そう叫ぶや、清志は彼の女神を守るべく地を蹴った。

向こう側で起きている、民間人達の騒ぎに仮面の下で眉を顰めつつ、香山閃は地面から身体を引き起こしていた。

恐らく、今のマイクロミサイルは、『イマジン』を狙って放たれたのだろう。

目の前で破壊活動を起こそうとした『イマジン』と、自身に憑依している『ウルファイマジン』を狙って。

咄嗟に衝撃をウォルファイが引き受けた為、閃自体はさほどでもないが、それでも殺し切れなかったダメージの為に電王も床に転がっていた。

敵の方は、大柄な猪型と彼の陰になつたらしい砂漠狐型のイマジンが負傷しつつ残っていたが、穴熊型と孔雀型の二体は爆砕していた。

「ウォルファイ、ウォルファイ！ 大丈夫か？」

へだ、大丈夫、だ、取り敢えずイマジンは……」

全然大丈夫ではない声音に溜息を吐き、それでもと閃が立ち上がったその時だった。

「ふむ。そう言えば卿は白兵戦は得意だが、狙撃は及第点がやっただったな。

ならば、俺が代わってやろう」

「へえ?」

SHOOTINGFOAM!

何かが電王に飛び込んだと思っただ途端、赤い狼型のイマジンが弾き出された。そして、それまで携えていたハルバート型のデンガツシャーが、組み変わりスナイパーライフル型に変じた。

「お、おい!」

「閃!」

へさあて、御覧じろ。……遠距離の無差別攻撃とは、卑怯者め

Schlag von Adler!

そう嘯きつつ放った一撃は、豆粒のような人物から何かを弾き砕いたのを見て取れた。

ライダーアイは、赤い何者かが担いでいた箱——恐らくはミサイルポッド——を撃ち抜き弾き、爆発した事を捕らえていた。

「凄……」

「おい、用が終わったなら閃から出る!」

へいやいや、これからは俺が彼と共に戦うから、卿は休むと良い

「え? いやちよつと待て!」

自分の中からの「声」に、閃は途惑いウォルフィはいきり立つ。

電王は、ひらひらと手を振る。どうやらウルフィマジンとは別のイマジンが憑依しているのは判るが、周囲には何が起きているのか良く判らない。

「卿は何を言っている! 閃と契約しているのは俺だぞ!」

へ何、大した支障はない、寧ろ今まで戦い続けだったのだろうか? 俺が肩代わりしてやると言うのだ

「勝手な事を言うな!」

「ちよつと、痛いって、俺は大岡漫談の子供か!」

二人で三人漫才よろしく大騒ぎしている『電王』を、警官隊も、そして意識が戻ったららしいオレンジ色の猪と砂漠狐のイマジンも呆れたように見えていた。

時間は少し戻り、灰崎祥吾が黄瀬涼太を連れて来たのは、大きなマ

ンションだった。

「あ、あの、シヨゴ君、ここは？」

「俺んち。まあ、俺の家自体は今静岡だから、ここは俺の父ちゃんの家、な」

そう言つて、コンシエルジュに頭を下げ、真つ直ぐエレベーターに向かう祥吾を、黄瀬も慌てて追いかけた。

エレベーターに乗ると、祥吾は一六階——屋上の一つ下の階数を押した。

「シヨゴ君、お父さんつて、」

「うん？ ああ、前に話したろ。血は繋がってねえけど、この世でたった一人、俺が尊敬してる父ちゃん、滝和也！ ここは父ちゃんの家がある、《ホークアイ・ホールディングス》日本支社東京本部の幹部用社宅な。父ちゃん、会長さんの首席秘書だから」

「え？ ええ?!」

黄瀬が驚いているうちに、高速エレベーターは目的の階層に着いた。

エレベーターホールから滝家の玄関まで、普通の高級マンションでも三、四件分の距離を歩いた事実、黄瀬は気が遠くなる。

これでも芸能関係の仕事に就いていて、お高いマンションやビルの中に入ったりした事はあつたし、超ド級の坊ちゃんだった赤司征十郎のセッティングで中学生が入るような場所じゃないだろう店に入つた事も、何度かあつた。だが、そう言うのと一線を画す空気がそこにはあつた。だが、祥吾はこれが当然とばかりに颯爽と歩く。

自分達が、どれだけ灰崎祥吾（かれ）について無知だったのか、否無関心だったのか改めて突き付けられている気がして、黄瀬は思わず顔を伏せたまま歩き、祥吾が止める前に扉にぶつかった。

ガツツ！

「あたー！」

「何やってんだよ、お前」

頭を押さえる黄瀬の姿に、祥吾が慌てた声を上げると、それに応えるように扉が開いた。

「ちよつと、大丈夫？　かなり痛そうな音がしたけど」

顔を出したのは、明るい茶色の髪を肩より短いショートボブで揃えた、二十歳そこそこの女性だった。

その女性に、祥吾は頭を掻きつつ挨拶した。

「あ、めーこ姉ちゃん、久しぶり。今日戻るんだったんだ？」

「ああ、祥吾。そう言えばあなた、梓ママと一緒にこっちに戻ってたんだっけ。で、この子は？」

この子と言われ、黄瀬は慌てて居住まいを正し自己紹介をしようとした。が、彼が口を開く前に祥吾の方が紹介した。

「姉ちゃん、こいつ俺と同中で、真也兄いの後輩。」

財布と携帯落として、腹空かしてたから何か食わせてやろうと思つて」

「あら、だつたら『T O K I O』に連れて行って上げれば良かったのに。あそこ付けてくれるし、近所の体育会系のお兄さん達が満足する量出してくれるでしょ？」

「今日は連休だから、あそこランチやってないんだよ。確か晩に商品開発部の歓送迎会が入ってるって事で、今別チーム迄呼んで仕込みやってるらしいから、賄い頼むのも悪くてさ」

祥吾の答えに、芽衣子と呼ばれた女性はそうだったのと呟き頬に手を当て、それから黄瀬に向かって頭を下げた。

「こんにちわ、私は榊芽衣子。祥吾のお姉さん代わりに一人です。いらっしやい」

「え、あ、はい、おじやま、します」

ぎくしゃくと黄瀬が頭を下げたその時だ。

奥の方から、女性の声が芽衣子を呼んだ。

「メーコオ、お客さん？　上がって貰えば？」

「判ってるわ。どうぞ、入って下さいな」

「え、あ、はい」

「ほれ、スリッパこつちな、うち土足禁止だから」

黄瀬に来客用のスリッパを勧め、自身は自分のものらしいジョリーロジャーの描かれた黒いスリッパを履くと、祥吾は芽衣子と共に奥へ

と歩き出す。その背中を、黄瀬も慌てて追いかけた。

幾つかの扉を通り過ぎ、廊下の突き当りは結構な広さのキッチンだった。

広々としたアイランド型キッチンは、四人掛けのダイニングテーブルに繋がっており、その背部には業務用と思しいオーブン付きガスコンロと並んで大きなオーブンレンジ、レンジ機能だけらしい小型のものが三つ並んでいる。

とても家庭用と思えないシンクやコンロ、大きな業務用冷蔵庫に絶句している黄瀬に声を掛けたのは、その大きなガスオーブンから大きな天板を取り出した、赤い巻き毛を三角巾で包んだ女性だ。

「ふむ、良い感じね。」

「ああ、いらつしやい。そこに座ると良いわよ？」

「あ、私は重音徹子、祥ちゃんの姉代わりの一人よ」

「えあ？ あ、はい、その」

「祥ちゃんが友達連れて来るのって初めてねえ」

「テト姉、何作ってんの？」

「キドニーパイの試作だよん。」

キドニーパイって、日本人には馴染みが無いから、面白がって貰えるとは思うけど、後が続かないってのはお店としては問題だからね」
テーブルに着いた黄瀬と祥吾の前に、十センチ直径の丸いパイと紅茶が並べられる。

同じくテーブルに着いた芽衣子と自身の前にも同じものを並べ、徹子も座り、紅茶を一口啜った。

「おずおずと、パイに手を付けた黄瀬は、そこから溢れる熱々のビーフシチューに目を白黒させた。」

「あら、中身シチューにしちやったの？」

「本場でも好き嫌いが割れるって事は、もつに対する好き嫌いだろうって思ったの。どうせなら、食べ易い方が良いと思ってね。」

問題は、出す時に焼くか、時間定めて焼いておいて保温器に入れるかってこと」

そんな事を話し合う女性陣に首を傾げた黄瀬に、ペろりと一つ目を

食べ終えた祥吾が答えて曰く。

「夏に、テト姉とメーコ姉の二人、喫茶店を始めるんだよ。」

「お店?」

「おう、祖父ちゃんの店再興するんだって」

「あはは、お祖父ちゃんみたいにコーヒーに一家言ある訳じゃないから、ケーキの方に力入れる事にしてるんだ」

「あら、バリスタの勉強してるでしょ、テト」

くすくすと笑う女性陣に、黄瀬は居心地悪げに身じろぐ。

が、そこに不意打ちのように徹子が投げ掛けた言葉に、黄瀬は飛び上がる。

「で、祥ちゃん、ちゃんと『S・A・U・L』には連絡入れてるの?」

「うん、移動中に論のあんちゃんに連絡入れといた。こいつの荷物、日向さんが持つて来てくれるって」

「しよ、ショーゴ君!」

「落ち着いてちようだい、君の具合が悪いのを心配したから、祥ちゃんはうち迄連れて来たのよ。」

客間は準備終わってるから、食べたらずし休みなさいな。さつきよりマシになったけど、顔色悪いわ、黄瀬君」

芽衣子にそう言われ、黄瀬は何も言えなくなり大人しく座り直す。そして不意に思い付く。

以前の合宿で、自分達の勘違い、否思い込みで祥吾が部活から追い出された事を、先輩である中村真也含めて関係を持っていた面々は相当怒っていた。なら、女性陣とて怒っていたのでは、と。

だが、芽衣子も徹子も、そんな事は気にした風もなく、二人は黄瀬を客間だと言う一部屋に案内すると、そのままベッドに寝かしつけた。

「あ、あの、俺」

「話したい事があるなら、まず寝なさい。体が辛いと、頭もよく動かないものよ?」

「私達は、お客さん無碍に扱ったりしないの。例え何かしらの因縁があつたとしても、祥ちゃんがお客だと言った人間に、礼を欠いたり

しないわ。

寝られないと言うなら、暗くしてあげるから横になって目を閉じてなさい。それだけでもかなり楽になれるわ」

年上の女性二人にそう言われ、黄瀬は観念したように目を閉じた。程なく漏れて来た寝息に、二人はそつと部屋から出て行った。

黄瀬が目を覚ますと、二時間ばかりが経過していた。

重い頭が幾分楽になり、体を起こそうとしたところで扉が開いた。

「あ、」

「目が覚めたようね。うん、大分顔色が良いよ。

ポカリ飲む？」

「あ、ども」

入って来たのは重音徹子だった。

差し出された、ほど良い冷たさのスポーツドリンクを受け取ると、

黄瀬はペットボトルの半分ほどを一気に喉に流し込んだ。

「……シヨーゴ君、は？」

「祥ちゃんはお母さんに忘れ物を届けに出掛けたわ。大丈夫、そろそろ帰って来る筈よ。」

順平君もそろそろこちらに着くと思うから、それまでゆっくりしててね」

そう笑い掛けられ、黄瀬は恐縮しきりだった。

客間から出て来た徹子を、部屋の外で待っていたのは祥吾と芽衣子、そして外出から戻って来た中村真也と、彼と途中で合流した日向順平の四人だった。

そつと部屋から離れ、居間に入ったところで、高校の先輩として真也が問い掛ける。

「徹子姉さん、黄瀬の様子は？」

「そうね、少なくともここ一週間ぐらいはまともに寝てなかったんだと思うわ。」

多分、市販の導眠剤や眠気覚ましをがぶ飲みして胡麻化してたんでしょうね。かなり胃も荒れてたようだしね」

徹子の答えに、眼鏡越しでも真也の眉が顰められる。

彼女の左手首に巻かれているのは、一見すると大振りな腕時計のよ
うなギミックだ。これは、ガイアメモリに内包されているガジェット
を行使する為の、簡易ドライバーだ。

これと《Doctor》のメモリで、徹子は黄瀬の検診を行ったの
だ。この簡易ドライバーでは、応急手当程度の治療と痛みを和らげる
以外には、病状確認ほどしか出来ない仕様だ。ロストドライバーやガ
イアドライバー（メモリ中毒のリスクを考えないなら生体コネクタ）
を使えば、四肢切断クラスの大怪我でも治療が可能になる。

手首から外した簡易ドライバーとメモリを祥吾に返すと、大きく首
を回しつつ徹子はソファアに腰を下ろした。

「うーん、何度使っても慣れないわね。祥ちゃん、良く平気ねえ」

「あー俺、何かメモリに対して耐久性があるとかないとか、研究室のあ
んちゃん達に言われたけど、良く判んねえ。まあ、簡易ドライバーは
出来る事限られるし、動きにくいから俺も《Book》にしか使わな
くなってるからなあ」

受け取った物をしまい込む祥吾を横目に、芽衣子は真也に話を振つ
た。

実は真也は、イベントホール近辺で起きた未確認襲撃事件の応援に
向かったのだ。ただ、途中で収束と宮地清志の負傷を知らされ、取り
敢えず清志の様子を見に行ったのだ。

「真君、清君の怪我の方は？」

「酷いのは、接地した時女の子を庇って打ち付けた肩と鎖骨の骨折で、
後は降って来た破片を浴びた時の打撲だけだそうさ。ただなあ」

「宮地さん、どうしたんだ」

順平の問いに、「何と言ったものか」と言いたげに真也は頭を掻い
た。

「いや、今日はイベントだったろう？ ついでに言えば、清志さんが
庇ったのは、彼の推しメンな訳で。」

彼女に感謝されてキスされて、清志さん血压爆上げして倒れちゃっ
たそうさ。

ついでにファンクラブ有志から、貢物よろしく見舞いの品がガンガン持ち込まれてる状態。搬送されたのが普通の救急病院だから、病院関係者はともかく俺や他の面子も近付けないぐらい人間がごった返してる状態で、《S・A・U・L》の方も事情聴取がままならないって嘆いてました」

「……あー」

「まあ、宮地さんだからなあ」

宮地清志のドルオタぶりは、バスケ仲間内でも有名ではあったが、聞けばファンクラブ内でも顔役に近い状態だったのが、今回の『雄姿』により勇名を確たるものにしてしまったらしい。

「まあ、それだけ人間が多いなら、無理に病院から抜け出して、というのは出来ないでしょうからからそう言う意味では安心だけど。

問題はこつちよねえ」

溜息吐きつつ芽衣子が視線を向けた先に男達も目を向け、一様に疲れた顔になった。

二〇畳近い広い居間の向こう側、作り付けのカウンターバーのところで騒いでいる面々がいる。

「だあかあ、何でお前達まで来てるんだ！」

「いえ、その、場の勢いと言いますか」

「いや、お前らにくつついてたら何も言われなかったし」

「はっはっは、世話になるぞ、【特異点】」

カウンターのスツールに座り、頭を抱えている香山閃を庇うように紅い狼型イマジンが立っている。その正面には、オレンジ色の猪型イマジンと砂漠狐型イマジン、そして同じくスツールに優雅に座った黒い鷲型イマジンとがいる。

「何だか、増えちゃったわね」

「何でも、戦闘中にまた戦略兵器の攻撃を受けた時のどさくさである黒いのと契約しちゃって、そのまま後の二人もくつついて来ちゃったって」

「……閃の部屋に、三段ベッドでも入れなきやいけないかしら」

「テト姉、そうじゃないよ」

芽衣子が首を傾げるのに、真也が説明を入れる。

それに対してなんかずれた事を呟く徹子に対して、俗に言うチベツトスナギツネのような顔で祥吾がツツコミを入れる。

そして順平は、増えてしまった悩み事に頭を押さえつつ、黄瀬に荷物を渡してやるべく立ち上がった。

朱影

時間は、少し遡って午後二時頃。

誠凛高校と秀徳高校の距離の、丁度真ん中ぐらいの位置にあるマジバに高尾和成は呼び出されていた。

呼び出したのは、誠凛高校新三年生伊月俊だ。

「あ、伊月さん、お待たせしました」

「ああ、大丈夫、そんなに待ってないから」

待ち合わせの五分前に店内に駆け込んだ和成に、伊月は笑ってこう答えたが、彼の前には食べ終えたハンバーガーとポテト、コーラの容器があった。

取り敢えず、自分の分を買ってきたついでに、コーラを買って渡した和成は、相手の話を聞くべく席に着いた。

「なあ、高尾、お前、宮地さんとか、他の面子の事、何時から知ってた？」

「何時からって、あー、兄ちゃん達の事が判ったのは、割と早かったですよ。」

……九郎ヶ岳遺跡の事件の時、《ホークアイ・ホールディングス》は独自に救助隊を編成して、そこで『クウガ』を保護しましたから」

そう言いつつ、和成が思い出すのは膝を付いて号泣する秘書課や研究部門のお姉さん達。

『止めてよ、幾らあいつの息子だからって、あんた達が仮面ライダーになつてどうするのよ！』

そう叫んだのは、秘書課の『王女』と呼ばれていた女性だったか。

でも、きつと一番取り乱すと思われたバラランガ——皆からママ・バラランガと呼ばれていた女性だけは、赤くなった目で兄二人を抱き締めた。

『あの人の、息子だものねえ。無辜の人々が危険に晒されて、黙つたられなかったのよねえ』

その言葉で、周囲に居た人間は皆判つたのだ。

バラランガだけは、こんな日が来てしまう事を悟っていたのだと。

「祥ちゃん……灰崎が『HOPPER』メモリとロストドライバーでライダーになったのは、中二の時。福井さんや黛さんは、進学先で事件に巻き込まれたから、元々持っていたドライバーを使う事になったそうです。」

宮地さんは、秀徳高校で、『ホロスコープス』って犯罪結社が生徒達を取り込もうって騒ぎを起こした時に、偶々宮地さんが簡易ドライバーに登録される形になったそうで」

「そう、なんだ」

言葉少ない、他校とは言え同じポジション、そして似た能力を持つ先輩の沈んだ様子に、和成は買って来たバーガーに手を付ける事も出せずに座り直した。

確か、今日は実測や氷室達、先の嘘合宿事件で『戦極ドライバー』と言う、俗に平行世界と呼ばれる世界から持ち込まれたガジェットに触ってしまった面々が集められ、実験を行う事になった筈である。

そんな事を思い出した一方、同時に昨日——黛千尋を見舞いに行った病院で、日向順平がレイヴ——あの騒ぎ以来、部員の一人に取り憑いた『グリード』と言う新たな未確認生命体と共に、火神大我が度々メダル集めを兼ねてヤミーと戦っているのを知ってアイアンクロウをかましているのを、他の面子と一緒に宥めた事を思い出した。

「えーっと、伊月さん、日向さんと何かあったんですか？」

「あ……いや、何だか、日向の奴、部活休みの度に何処かに呼び出されてるらしくて、もしかして、あいつ……」

「いや、日向さんは一応民間協力者になったって話は聞いてますけど、よっぽどの事が無い限り要請が来る事ありませんよ？　ただ、実験に何度か呼び出されたって話は、中村さんや福井さんから聞きましたけど」

「そう、か」

何処となく落ち着いたような、でもまだ落ち着かないような風情の伊月に、掛ける言葉を探して和成は必死に記憶を掘り起こす。

そして思い出した事に、背筋を伸ばし対面に座る他校の先輩を見た。

「伊月さん、誤解しないで欲しいことがあります」

「え？」

「俺や日向さんが世話になった《ホークアイ・ホールディングス》の人々も、そして『SPIRITS隊』も、兄ちゃん達や先輩がライダーになった事を諸手を上げて喜んでる訳じゃありません。」

滝さん、俺達を保護し、養い親になってくれた人は俺達に向かってこう言っていました。

『お前達にはあつたかい場所で寝起きして美味しいものを食べて、いっぱい遊んで将来の夢の為に勉強する権利がある。その為に俺達大人がいるんだ』って。滝さんは、全身全霊で犯罪者と戦って、俺や中村さん、黛さんみたいな子供を保護し、俺の叔母さんや、福井さんの祖父母とか、身内の許に送り返してくれました。そうやって、俺達の幸せを、未来を考えてくれて、会社の人達も、『SPIRITS隊』の人達も、父さん、否滝さんの考えを尊重していました。

だから、兄ちゃん達が仮面ライダーって呼ばれる立場になった時、俺達の周囲に居た大人達は皆嘆いたし、兄ちゃん達に九郎ヶ岳の遺跡発掘勧めた人達は責任感じて辞表出そうとした人まで居ましたし」

和成は辞表と言ったが、実際は自責の念から自殺しようとした面々を、ライダーとなった空と海斗が止めたのだ。

「日向さんも、その辺りは判っています。自身と周囲の人間の安全確保以外には使わないって本人も言っていましたし、だからこそ、伊月さん達に詳しい事を話してないんだと思います。」

第一、前に祥ちゃん、灰崎が言ったように、『S・A・U・L』関連の情報は守秘義務があり、警察側にも厳しい情報統制が敷かれています。民間人である皆さんに、おいそれと話す事があれば、罰せられるのは日向さんですし」

「そうなのか!？」

「民間協力者だからこそ、うかつな情報漏洩は自身と周囲の危険度を上げる要因になりますから」

和成の言葉に、腑に落ちたと言う顔になった伊月がいる。

どうやら、例のドライバー関連で色々溜め込んでいたようだ。

他校の先輩が笑みを見せた事にほっとしながら、高尾和成はマジバを後にした。

自宅に帰る途中、和成は相棒を見掛けた気がして振り返った。だが、一瞬で人並みに紛れたのか見失った。

あれっと思いつつ、和成は踵を返した。

いくら何でも、緑間真太郎がおは朝以外で髪を赤く染めるとは思えなかったからだ。

翌日、滝海斗、一文字空の二人は、揃って《ホークアイ・ホルルディングス》の特殊科学研究室に足を運んでいた。

ここは、《S・A・U・L》の科学班、及び『SPIRITS』隊の科学部門と共同で未確認生命体及びそれに係わる特殊な技術、事象の解析を進めている研究所であり、かつては《BADAN》に捕らわれ——或いは自ら志願し——ていた科学者とその弟子にあたる研究者が大勢所属している。

二人を呼んだのは、そんな学者の中では珍しく最初期から『SPIRITS』隊側で協力してくれていた、志度敬太郎博士である。

「ああ、二人とも、忙しいところすまなかったね」

「お久し振りです、志度博士」
「これ、うちの女性陣からの差し入れです、グループの皆さんどうぞ」

海斗が差し出したバスケットを、博士の助手の一人が受け取り下がる。まあ、恐らくこの後、毒見だ何だと称して中身の五分の一は突き崩されて捨てられ、三分の二はスタッフの腹に収めてしまうのだ。……まあ、『マドレーヌ五百個もあれば、二つ三つは博士達に食べて貰える』と言ったのは重音徹子だったか。

出資者が出資者なので、あからさまな行動に出る者は少ないが、こう言う差し入れを一時期は調べもせず廃棄していた時期があったので、その頃に比べればマシになったと二人は思っている。

「今回、アストロドライバーの調整が終わったと聞いたのですが」

「ああ、滝捜査官から預かった、アストロドライバーの正規版の方だ

よ。

アストロスイッチを四個同時使用する、これが開発者の想定していた形だろうね」

そう言いつつ、椅子から立ち上がった老博士が二人に見せたのは、保護用ケースに収められた大振りな四つのスロットとレバーの付いたドライバーだった。

このドライバーの開発者は、『ホロスコープス』の襲撃で命を落とした。その開発者の親族が、託され持つて逃げたのが1スロットの簡易ドライバーと半完成状態のアストロドライバー、40個のアストロスイッチだった。『SPIRITS』隊はその人物を保護し、ドライバー達を預かった。

そして、未完成のドライバーと幾つかのスイッチが、滝と『SPIRITS』隊の名前で志度博士のグループに託されたのだ。

その形に、空が目を見張る。

「結構デカいっすね」

「君達のもの、然程変わりはないがね。

ドライバーの、基本的なところは完成されていたからね、私達が手を入れたのは中の基板の完成と、スイッチスロットの矛盾の無い接続だったよ。

いやはや、これを一から個人が研究していたとは。……ヘンリー博士がご存命であれば、驚かれ喜ばれただろうにねえ」

『伝説』と称される仮面ライダー達の中で、純戦闘用ではなかったのは宇宙開発用改造人間である仮面ライダースーパー1だ。——深海開発用改造人間であるカイゾクこと仮面ライダーXも本来は戦闘用ではなかったものの、神啓太郎博士が『GOD』との徹底抗戦の為に手を加えたらしい。勿論、最初は息子にそれを使う事など考えもしなかっただろうが。——

その開発者であったヘンリー博士は、当然ながら宇宙進出と開発を主眼に置いた研究者だった。

宇宙の力「コズミックエナジー」の存在を知れば、きっと研究者に援助の手を伸ばしたに違いないのだ。

ギミックなどが結構好きな空が、色々と博士に質問している横で、ある事に気付いた海斗が声を掛けて来た。

「博士、三井博士がいらつしやらないようですが」

「ああ、三井さんか。彼女は、先月付でここを辞めたんだよ」

「三井って、あのぎつくりシヨートに眼鏡の？ 確かライダーマンガミックの研究してた」

三井女史は、BADANに攫われ殺害された父を持つ、女性研究者である。大学進学中に《ホークアイ・ホールディングス》が主催する奨学金制度に応募し、卒業と共に特殊科学研究室に入った人物だ。

海斗、空とも顔馴染みで、二人が来たのを知れば、自身のデスクを離れ、二人に会いにわざわざ来ていた女性だ。

優秀だった彼女は、入って二年で学費を返済し終わっている為、ここを辞めて何処に転職しようと、特に問題は無い。

だが、ライダーマンのアームを熱心に研究していた姿を知っている海斗と空は、些かの違和感を感じた。

「三井博士、もう研究を終わられたんですか？」

「先月の頭に会った時は、オペレーションアーム相手に唸ってた気がするんだけど」

二人の問いに、志度博士は深くなった皺に更に縦皺を加えつつ、二人に頼みを告げた。

「研究は終わってはいないが、他の者に引き継ぎを行っていたよ。」

だが、ここを辞めて以来彼女と連絡が付かなくなってね。どうにも不穏でならないから、少し彼女の身辺を調べるよう、ホークアイ会長に伝えて」

「そんな、プライベートに踏み込むような事、してどうするんですか！」

志度博士の言葉を、若い男の金切り声が遮った。

研究者と言うより、体育会系DQNと言った風情の人物に、海斗の眉が顰められた。

正直、父親である滝和也が事故に巻き込まれて消息不明になる以前、それこそここが設立されてから度々、消息不明になってからは父

の名代として月一回必ずここに来ている海斗と空は、当然ながら研究者達の顔を見て覚えている。彼らから向けられる感情も、嫌と言うほど感じ取り、理解している。

だからこそ、海斗は静かに志度博士に問うた。

「博士、あの人は新人ですか？　もしかして、三井博士の後任ですか？」

「あ、ああ、後任の南原君だ。自衛隊の科学開発科からの転職で」

「自衛隊？」

「俺の事は関係ないじゃないですか！　ちつ、これだから怪人と共生してる怪物は」

そう吐き捨てた男を、頭一つ背の低い空が一本背負いで床に叩き付けた。

リノリウムに叩き付けられた衝撃を、何とかしのいだらしい男の耳元に、ガンっとバイクブーツが踏み込んだ。

「よう、兄ちゃん、世渡り下手とか言われねえ？　馬鹿正直が過ぎるとか？」

自衛隊でこの事どう聞いてたか知らないけど、よくまあ俺達の前でそんな事言ってくれるな？　俺や海斗が化け物ってのは、まあ百歩譲ってやるとして、ここにはSPIRITS隊からの出向者も多いんだ、言葉には気を使えよ」

「な！」

「大体、お前さん、三井女史のデスクって隣の部屋だぜ？」

わざわざここに来て喚いてるって事は、お前さん、研究進んでんの？　ここって、今月はともかく来月末には研究レポート提出して貰わないと、次の三ヶ月分の研究費出せない仕組みだけど知ってる？」

立て板に水で問い質す空に、自称元自衛官は起き上がり喚き散らした。

「五月蠅い五月蠅い！　何が仮面ライダーだ、何が英雄だ！　あいつら只内輪もめして人間巻き込んだただの屑じゃないか！」

滝とか言う奴だっけそうだ、日系だか何だか知らないがアメリカ人の癖に日本で災害広げて歩きやがって！　落ちこぼれ捜査官が上手

く怪人に取り入って、英雄気取ってただけじゃねえか、くそが！」

その男に、思わず拳を固めた空の腕を、誰かが掴んだ。

空があつと思つた時には、南原と言う男は警備員に囲まれ、手錠を掛けられていた。

「な、何が」

「南原光義研究者、研究物の不正持ち出し、及び身分学歴詐称でお話があります。勿論、そのまま警察へ連行させて頂きます。はっきりお伝えします、貴方には産業スパイの嫌疑が掛かっています」

警備主任の言葉に、男は色めき立ち、喚き散らした。

「産業スパイだって!? ふざけるな、お前達が情報の出し惜しみするから、俺が自衛隊に持って帰っただけじゃないか！」

「はい、自白完了つと。このまま正面に来てる、パトカーに乗せて貰つて構わん。連れて行け」

「はっ」

泡を吹きつつ「くあwせdrftgyふじこーp」と喚いている男を、警備員達が引き摺り出す。

その光景を見送りつつ、リクライニングシートに腰を落ち着けた志度博士が大きく息を吐いた。

「やれやれ、話を聞いてはいたが、本当にスパイだったとは」

「志度博士、それはどう言う事ですか？」

海斗がそう問うた時だ。のそりと現れた大猫が、構えとばかりに海斗の脛にすり寄った。

その猫は、海斗の友達——と言うより、海斗の父、滝和也の『友人』であった。

「お前、エーシユカじゃないか。……あ、まさか」

「ああ、南原君の周囲に、度々彼とその仲間が姿を見せるようになってね。

当時を覚えていた研究者が、慌てて警備に連絡して、捜査を始めたんだよ。

まさか再び、SCP—1733—RU—Jが手助けしてくれるとはねえ」

「そっか、そう言えばお前達、その施設に対する復讐・侮蔑・サボター
ジユ・偽装・窃盗を企てている人間のところに現れるんだったね」
「いや、単にアンニヤロウが、親父を常日頃からデイスってたんだろ
よ。な？」

海斗に抱かれ、空に撫でられた大猫は、ご機嫌そうにゴロゴロと喉
を鳴らした。

かつてBADAN戦役中に、SPIRITS隊に潜り込んだ作業員
を大猫達が捕まえ、何処とも知れぬ場所で引きずり回した事件があっ
たのだ。

猫を下ろしてやると、海斗は眉を顰めつつ相棒を見た。空の方も、
憮然としつつ頭を掻く。

「嫌な事態になったね。」

先月亡くなった弱音さんの恩師の研究室を漁った連中も、特殊訓練
を積んだ人間の集団であるのは明白で、元特殊部隊カレンジャーじゃ
ないかって話が出てた上に、事件前頻繁にかかっていた電話の相手
が、どうも自衛隊の駐屯地からの発信だったって話なのに」

「三井さん、連絡付かねえんだよな、まさか自衛隊に拉致られてるとか
言わねえよな？」

空の疑念に、志度博士がこう言った。

「自衛隊全体が取っている動きとは思えんよ、統合幕僚監部には元『S
PIRITS』隊の目黒君もいる。彼以外にも、『SPIRITS』隊
から自衛隊に戻って上層部に入った隊員はいるし、彼らの薫陶を受け
た人間も一定数居る。」

今回の事に関しては、私の方から目黒君に連絡を取ってみようと思
う。

《S. A. U. L》やアラン会長からの連絡では警戒されるかもし
れないが、私が個人で目黒君に連絡するなら、あちら側も大して警戒
しないだろうからね」

二五年前の『BADAN戦役』を乗り切った老博士の言葉に、二人
の『仮面ライダー』は深く頭を垂れ、感謝を示した。

事件が起きたのは、その日の午後三時頃。

再開発の為に建物の取り壊しが進む場所に、銀行強盗を計ったドーパントとヤミー——ヤミーの宿主がガイアメモリを使ったらしい——が逃げ込んだのだ。

解体が始まりがらんどろになった大きな倉庫の中に、縛れるように逃げ込んだ二体を追って来たのは、丁度東京に戻っていた『対ドーパント専任捜査官』の肩書を持つ灰崎祥吾こと仮面ライダーHOPPER、そしてたまたま祥吾と一緒にいてヤミーがいるからとついて来た火神大我こと仮面ライダーオーズに、彼にくっついて来たグリードレイヴ@黒子テツヤだ。

『S. A. U. L』の方は、犯人達が途中大型車両が入れない細い路地を何度も縫うようにして逃走した為に、まだ辿り着けていない状態だった。

「こら、オーズ、何でテツヤ連れて来てんだよ！」

停車するなりのHOPPERの怒声に、頭が痛いところかみの辺りを押さえつつオーズは返して曰く。

「黒子って言うよりレイヴが付いて来てんだよ、メダルが手に入るって」

「すみません、彼『うるせえな。ほれ、ヤミーがいるだろうが、さつさと倒せ！』ああもう！」

赤いメッシュの入った水色の髪と言う、目立つ事極まりない姿の少年が、そのまま物陰に消える——グリードの特殊能力かと言うときに非ず、黒子テツヤの特技である。

さつさと身を隠した未確認生命体に嘆息しつつ、オーズはトラクロウを構え、HOPPERは腰を落とし拳法の構えを取る。

「こんなところで捕まってたまるかあ！ 行け、カミキリヤミー!!」

巨大な恐竜の頭部を模した怪人——ティールックスドーパントが喚くと、天牛（かみきりむし）型の未確認生命体が一声吠えてオーズへと飛び掛かった。

長い触覚——傍目にも固そうな、蛇腹状に伸び縮みする難物だ——の一本を、オーズは左腕のクロウで受け止め、もう一本を右腕で弾く。

その陰から、文字通りバッタの脚力で飛び上がったHOPPERが、結構な高さまで吹き抜けになった倉庫の天井迄飛び上がる。そのままスレート屋根を支える鉄骨を蹴った反動で、HOPPERは札束の詰まったポストンバッグを抱え、一人逃げようとする怪獣の頭を狙う。

デカすぎる頭部と、ここまで走って来たが故のスタミナ切れでよろけたが為に、HOPPERが必殺を期して放ったハイキックは、ティーレックスドーパントの鼻先を削るだけに留まった。

が、その掠った程度でも鼻先の装甲が削れ、ドーパントは弾かれた反動でゴロゴロと五メートルほど転がった。

「ち、無駄に硬いぜ、《古生物の記憶》は」

「ひいひいひい！ 来るなくなるなクルナア!!」

攻撃を受けた事で、そしてダメージを受けた事に怯えたドーパントが、咆哮と共に衝撃波を放とうとする。

「オーズ、飛べー！」

「うわたたつー！」

が、事前に察したHOPPERの声で飛び上がり、同心円状に放射された広範囲衝撃波を躲したオーズは、宿主の攻撃で棒立ちになったヤミーに狙いを定め、バックルにスキヤナを滑らせた。

Scanning Charge!!

「せいっやああー！」

走り込みつつのジャンピングキックによって、カミキリヤミーは数十枚のメダルをばら撒きつつ爆散した。

己の攻撃で、味方であり盾であった筈のヤミーが敵の攻撃の餌食になったのを見て、焦った男はビッググ体になろうとした。

「おっと、それはさせられねえかなー！」

HOPPER! MAXIMUMDRIVE!

ガイアメモリが過剰起動している為に、生体コネクタがある部分が発光している。

光っている男の左肩を目掛け、ライトグリーン輝きを纏った神速の回し蹴りが叩き込まれた。

コネクタから弾き出されたメモリが、二重の負荷に耐え切れずに砕け散り、その反動で気絶した強盗犯はそのままずると床に伏せた。

急いで男に駆け寄ったHOPPERが、息と脈を確かめる。

物陰から出て来て、メダルをかき集める相棒+αに頭を押さえつつ、変身を解いた大我は、同じく変身を解いてウエストポーチから取り出した、所謂結束バンドで男を後ろ手で拘束している祥吾を見た。「そんなの持つてるんだ？」

「おう、流石に手錠とか預かってないし、前に針金で固定したら犯人（ホシ）が手首千切りそうになっちまって。」

だから、結束バンドで親指を固めるだけにしてるんだ」

「へえ」

「さてと、流石にそろそろ警官隊も追い付いて良い筈なんだが」

男が動けないだろう事を確認し、祥吾が立ち上がったその時だった。

ガチンつと、金属音がした。

「あ、やっとき……何だこいつ」

祥吾の声につられて扉の取り払われた倉庫の入り口に目をやった大我は、そこに建つ赤い人影に一瞬悩んだ。

一瞬だったのは、人影の手に大口径重火器が握られており、それが彼らの後ろでまだメダルを拾っている相棒に向けられているのを悟ったからだ。

「黒子、レイヴ、逃げろ！」

「かが『うわ!?!』」

ドンつと、発砲され思わず三人？は左右に散った。

物陰に逃げ込んだ祥吾は、大型火器を構える相手を窺った。

マスクと特殊素材だろう全身スーツに身を包んだ相手は、何故か大我と黒子の二人を追い回す。

すぐ横のコンクリ柱に隠れた祥吾の横を通り過ぎ、まるで猫が獲物をなぶるように逃げる大我と黒子の足元を狙って、つづけさまに大型ショットガンをぶっ放したのだ。

先程祥吾が拘束した銀行強盗が床に転がったまま、銃声に泣き叫ぶのにも一切関心を示さないまま、赤い人物は二人？ばかりを追う。

「何だ？ 何で大我とテツヤばかり」

——それはどうかな、なんか、俺と千尋が恣意的に狙われた気がする

——不自然な気がするんだよな、未確認とケンとヒロにだけ当たって、警官隊に流れなかったって言うのが

一昨日、黛千尋を見舞った際の会話が脳裏に蘇る。

そして、昨日の事件でも、攻撃を受けたのはイマジンと『イマジンを憑依させていた電王』だけ。

「もしかして、テツヤに憑いてるグリードと、大我の中のメダルの力を狙ってるのか!？」

そう思い至ると、祥吾は横合いから赤い存在に殴り掛かった。

動くものに銃口を向けたものの、全身真っ赤な——黒いラインが幾つか走ってはいるが、頭部のフルフェイスマスク以外はさほど固くはなさそうな印象の相手は、だが何かに驚いたように動きを止め、殴られるままになった。

そして、その身体はびっくりするほど固い手応えだった。

ゴツ

「いてえ!？」

「シヨウ!？」

思わず拳を押さえた祥吾の姿に、逃げ回っていた大我的動きが止まる。

だが、大我に銃口を向けようとした怪人物は、何かに気付いたように銃を上げ、先程ヤミーが爆散した際に壊れたコンクリスレートの壁を突き破り、その場から逃げて行った。

「え?」

「な、何が……『あいつ、逃げやがった』」

驚いた大我と、息切れを起こしている黒子@レイヴ、そして祥吾の耳に、パトカーのサイレンとG-3Xが駆るガードチェイサーの排気音が届いた。

ぽつかりと開いたスレート板の割れ目から、赤くなり始めた空が覗いていた。

時間は少しだけ戻って。

とある墓地に、中村真也は来ていた。

ここに、養父と《ホークアイ・ホールディングス》が立ててくれた、彼の両親の墓があるからだ。

用意して来た花と供え物を置き、線香を供えると真也は静かに手を合わせた。

春の彼岸の頃は学年末な事もあり、墓参りに来れなかったのでゴールデンウィークに来たのだ。……五月三日が、両親の命日でもあるので、寧ろゴールデンウィークでの墓参りを慣例としていたのもあるが。

一〇年前のゴールデンウィーク、家族で温泉バス旅行に行こうとして、起きた転落事故で真也の両親は亡くなった。

運転していたのは、《スマートブレイン》社に属するオルフェノクで、わざと事故を起こし生存した子供を拉致しようとしたのだ。

そして、その時の事故で生き残ったのは真也只一人であり、現場近くで待ち構えていた《スマートブレイン》社の職員はおびやかな治療を行い【オルフェノクの記号】と呼ばれるものを投与し、そのまま連れ去ろうとした。

辛うじて意識がある状態の真也を保護したのは、職員達を追っていた滝和也——Skull Riderと彼に率いられた『SPIRIT S』隊だった。

あの時、真也は死んでなお自分を守ろうと抱き締めていた両親の遺体を、「進化出来なかったゴミ」と称して足蹴にした男達を見ていた。そして、そんな灰色の怪物達を薙ぎ倒し、回収した遺体一人一人に手を合わせていた滝和也の背中も、真也はずっと見ていた。

だから、真也はオルフェノクを、より正確には《スマートブレイン》社と言う会社を信じる事が出来ない。そして、養父である滝和也が信を置く相手には、警戒心が下がる傾向にある。

年末の来訪以降の事を報告すると、烏の害があるとの事で備えていたお菓子を下げて、真也は墓地を後にした。

「あれ？」

学生寮に帰ろうと、バス停のある通りまで出て来た真也は、何気なく顔を上げて目の前の光景に眉を顰めた。

結構な交通量のある片側二車線の通りの向こう側に、詰襟姿で非常に目につく緋色の髪の青年が立っている。

色合的には、そう、弟分である火神大我と、『キセキの世代』のリーダー格である赤司征十郎の髪色を足して割って明度を上げたような感じだろうか。

まあ、それだけなら「派手な頭」で済んだのだが、そんな髪色の人物が、やはり『キセキの世代』の一人で、同じく弟分である高尾和成の相棒、緑間真太郎と瓜二つな面差しをしていれば、凝視も已む無しではなからうか。

「緑間？…にしては髪……あれ、もしかして眉毛も赤いか？」

思わず、しげしげと凝視する形になったが、それまでじつと、そこぞ電柱かバス停留所の看板かとばかりに突っ立って横顔を曝していた向こうさんが、いきなりぐるつとこちらに顔を向けた。

その無機質な視線に、一瞬背筋に冷たいものが走った。

真也はそのまま、通りの向こう側に立つ存在が迎えらしい車に乗ってそこから離れるまで、動く事が出来なかった。

前触

中村真也が、謎の人物を見かけた、その夜。

《ホークアイ・ホールディングス》会長宅に、訪ねてくる人間がいた。応接間で来訪者を迎えたアラン・ホークアイは、己に深く頭を下げる人物に一瞬だが苦い表情を作った。

「警視庁捜査課第三課、課長の角谷と申します」

「同じく第三課、見浦と申します」

「ええ、初めまして。アラン・ホークアイと申します」

企業会長の声に、あからさまに動揺を見せたのは見浦と名乗った老境に差し掛かった刑事で、その上司である近々退官であろう老刑事は淡々と訪問理由を語った。

「今回お伺いしたのは、Mr. にお伝えしておくべき情報がありましたな」

「それは解せませんな。警察の方が、一民間人に何を？」

「確かに、本来は情報漏洩に当たりますなあ。」

しかし、これは貴方にお伝えせねばならん事です。現在情報統制下にある為報道されておりませんが、現在五人の行方不明者が出ております。

表向き、行方不明者に十代の未成年である事以外に共通点はありませんが、実は一つ共通点があります」

「ほう？。ならこちらにあれこれ言う前に、捜査を進められては？」

そう言つて話を切り上げようとしたアラン・ホークアイに向かって、角谷警視はこう言い放った。

「行方不明者全員、『松本機関』出身者を親に持つ、超常能力者だったんですよ。」

貴方の元後輩が育てている、事件孤児の中にいるレベルの透視、遠視能力を持つ子供が、忽然と行方不明になっています」

そう言われた瞬間、ぎしりとソファアの肘置きが軋んだ。

アラン・ホークアイことマミーゼネラルと言う改造人間は、S H O C K E R 科学者陣の狂気から生まれた怪人だ。

彼は事故によって大脳新皮質の大半を失った人間と、麻薬の大量投与によって肉体機能の大半を失い、萎縮を起こした人間の脳とを二個一にして産み出された。……実は、大首領の依り代として改造したものの、元ナチスの研究者達が所謂『理想的なアーリア人の肉体』に形成した為、大首領が外方を向いたと言う笑えない事実がある。

そして、委縮した脳の持ち主の名前は松本蓮、日本警察官僚を父に持ち、だが自身は母方の故郷である香港で主に活動していたICPO捜査官である。

「それはつまり、私の……いや、滝君の息子達にも危険がある？」
「公には存在しない事になっている、異能者組織であった『松本機関』の関係者をピンポイントで浚ったと言う事は、それなりの情報流出があつたと思われまます。

そして、以前『松本機関』の一部職員が貴方の庇護下にある子供を拉致しようとして、『SPIRITS』隊によって捕まった事も把握しています」

「……その時の情報が、一緒に流出した、と」

聞き返すアラン・ホークアイの声が低くなる。

それに向かって、角谷は「推論だが、否定は出来ない」と目を伏せた。

先程から会話に出て来ている『松本機関』とは、松本蓮の父が極秘裏に作っていた超常能力者を集め、能力を暴発させないように訓練させた組織だ。ただ、その集め方がほぼ拉致や人身売買だった事と、能力制御させていた特異能力者がほぼ監禁状態だった事が大問題だったが。

元帝国軍人であり、また政府の命令で特異能力者による部隊の編成を命じられていた松本某氏は、終戦後国家維持の自警組織として異能者組織を作ろうとしたのだ。……ただ、この人物ある種のダメ人間ホイホイの気があり、警官としての部下に所謂駄目屑エリート系の人間が部下に集まる傾向にあつた。……当人も、数少ない真つ当な部下三人を自身の失策で死なせ、妻子に八つ当たりした程度に駄目な人間である。

尤も、「使えない者でも使えないりの使い道はある」的発想の彼の人物は、そう言う連中を特に統率しようとしなかった。あの連中が、某氏が健在の時には忠犬よろしく大人しく従っていた事も理由の一端だろう。

そして創始者である父親の死後、雨後の筍のように現れた自称『後継者』が組織内で利権争いを起こした挙句、滝家の養い児達に手を出し組織そのものが摘発される事になったのだ。

尤も、こんな話を世間に公表すれば警察組織そのものが機能不全に陥りかねない——寄りにもよって、警察官僚が人身売買して一部の間を監禁していた——として、ICPO側が情報統制を掛けていた。「……なるほど。確かにお知らせいただいて良かった。

こちら側も、可能な限りの対処を取る事にしましょう。信頼されて預けられた子供達を、むぎむぎ誘拐などと言う事になれば、私は滝君に顔向け出来ない」

「ええ、そうして頂きたいと思います。

もう亡くなつた方をこのように言いたくはないが、あの人が国家の為にと作つた組織ですが、過激派に非合法行為の口実を与えてしまいましたからな。組織に関わつた人間の中には、現在の政権で組織の高官に就いている者もいる。

あの人達が何かをやらかしていたとすると、そのままもみ消されかねません」

そう話を切り上げ、男達は帰って行った。見浦と名乗つた老刑事は、物言いたげにしていたものの、角谷に促され黙って帰つた。

彼らを見送り、深く溜め息を吐いたアラン・ホークアイの背後に、影が沸き立つように数人の男達が並ぶ。そこには、《ホークアイ・ホールディングス》社長中村史也、アメリカ支社総括である高橋俊を始め、それぞれ一見して三、四十代の筋骨逞しい男達だ。

彼らは、現在《ホークアイ・ホールディングス》の要職にある幹部社員であり、同時にマミーゼネラルがショツカーの北米支部長であった頃からの部下達——つまり全員改造人間である。

「アラン様」

「話は聞いたとおりだ。

これで、『未確認生命体』だけをピンポイントで爆撃する戦略兵器のからくりが見えたね」

「技術の出先は『財団X』ですな。

確か、カズ坊と順坊が、そう言う傾向の兵器を開発していたセクトに捕まっていたから」

上司の言葉に、そう応えて角刈りの頭を掻き回した高橋の横で、他の男達も些かうんざりした顔で頷く。

『財団X』とは、ぶつちやけてしまえば財団の名の下に、兵器の開発販売を行う犯罪結社だ。だが、兵器会社と言う形で幾つも『表の顔』があり、尚且つその会社と様々な国家が取引を行っている為、ICPOもなかなか摘発出来ずにいる組織だ。壊滅したBADANから研究者が流入した事もあり、『SPIRITS』隊が非合法行為を理由に工場や研究所を潰しているものの、正直現状はイタチごっこを抜け出せずにいる。

「海斗と空の話じゃ、自衛隊の過激派って連中が限りなく黒い灰色って状態ですし、子供達の警護を増やしたいところですが、和成君も順平君も、下手に人を増やすと却って目立って厄介な事になりそうで」

「後気を配るべきなのは、芽衣子ちゃん、徹子ちゃん、霧子ちゃんと天馬、海外に移った子供で一番気になるのは、現在留学中の剛くんくらいでしょうか」

部下達の言葉に、パンつと手を叩きアラン・ホークアイはこう宣った。

「中村君、社員住宅の保全管理を強めてくれたまえ。高橋君、『SPIRITS』隊とのタイアップを。」

必要とあらば、援助額の増額も認めよう。マッコイ君、トニオ君、《S. A. U. L》と情報交換を進め、誘拐された子供達の早急な保護を。他の者も、緊急に備え準備は忘れないよう。

いくら『松本機関』出身者を親に持つと言えど、能力制御迄引き継いでいるとは思えない。最悪、能力を絞り出すような形になり、衰弱している可能性もある」

「そうですね、兵器に子供を利用するような輩に、弱った子供を手当てるような良識があるとも思えませんからな」

苦く呟いた部下の言葉に、アラン・ホークアイも渋面を隠さず頷いた。

「さあ、私達は私達に出来る事をしよう」

その言葉と共に、元シヨツカー大幹部は踵を返し、彼の部下達もその場から消えた。

ゴールデンウィークも残り二日と言うところで、秀徳高校バスケット部は久し振りに体育館での部活に勤しんでいた。

歴史が長い秀徳高校は、同時に施設も古いものが多い。

そんな訳で長期休暇中に施設の補修や改築が進められる訳だが、古豪強豪と呼ばれている為運動部も多い。

また、学校の周囲がそこそ建物が集まっている為大型建材や機器が入り難い。

そんな訳で、機材の保管などの為に校庭や運動場の一部が使えなくなる為、運動部は日替わりで部活を行う事になる。

本来なら、体育館使用なのでもう少し部活を差し込める筈のバスケット部は、残念ながら今回のゴールデンウィークは普段卓球部とバレー部が使っている講堂が補修工事に入った為、六日間の連休のうち学校での練習は連休頭の二日間と、今日しか確保出来なかった。

「あー、体育館ひっそりぶりー」

「ストバス場も使えない場所が多かったからな」

練習着にバスケットシューズを履いて背伸びする高尾和成の横で、緑間真太郎が眼鏡の位置を直す。

それぞれ、連休中の部活休みには自主トレを行ったものの、きちんとコートに入るのは久し振りである。

実は、和成は《ホークアイ・ホールディングス》の所有するバスケットコートを部活に借りられないかを打診した。滝家のあるマンションに隣接して、正規のバスケットコート二面を有するストリートバスケット場があるのだ。

そのコート、本来は微妙に空き地になってしまい、駐車場にするには車を通せるほどの通路が無く、建物を建てるにも資材搬入などに問題がありと言う事で、緑地する予定だった場所だ。

ところが、丁度滝家の子供達がバスケットボールに興味を持った事を知った会長の鶴の一声で、多目的広場の名目でバスケットコートに整備されたのだ。もちろん、マンション住人の過半数が改造人間である事を考慮し、怪人同士がガチり合っても大丈夫なように造られている。

以来ここは、季節の折々に住民達が近在の皆さんを招いての、イベントが行われるようになったのだ。

結果的に、先に近在のPTA主催のフリーマーケットと小学生フットサル大会の予定を組まれていた為、残念ながら秀徳バスケット部がコートを借りる事は出来なかった。

だが、下見と称する和成と、今年の主将である宮地裕也と共にコートを見に行った緑間は、その施設の管理の良さに「流石は大企業管理の施設」と、唸っていた。

「あそこのコートが使えてたら良かったんだけどねえ」

「仕方が無いだろう、こちらが申し込む一月も前から決まっていたのだから」

走り込みの後、パス練、連携からのシユート練習を行い、十分休憩に入った。

相棒の分のドリンクも抱え、壁際に来た和成は緑間に渡すとその場にべたつと座り込み、自分のドリンクを喉に流し込んだ。受け取った緑間の方も、壁に背中を預けてドリンクに口を付けた。

そこに、同じくドリンクを手に持った裕也が寄って来た。

その表情は微妙で、何か悩んでいるように緑間は思った。

「裕也先輩、どうかしたんですか？」

同じ事を感じた和成が口火を切って話し掛けた。

ただ、和成は裕也の兄、清志が怪我した事を知っているのです、そっちの事だろうと思っていた。

果たして、ガリつと頭を掻いた裕也は実に言い辛いように、「変人」と

名高い現在チーム最長の後輩を見た。

「いやなあ。

なあ、緑間。身内にお前に似てて赤い髪の人間って、いるか？」
「は？」

裕也の言葉に緑間は目を丸くし、和成も思わず飲もうと口に運んだドリンクを下ろしていた。

「裕也さん、それって」

「いや、タベLineで真也の奴から連絡が来てな、こいつの身内らしい奴を見掛けたが、そう言う外見の人間居るのかって聞かれてな。

で、実際のところはどうなんだ、緑間」

先輩である裕也の言葉に、緑間は暫く考え、そして答えて曰く。

「今は、いません」

「え？」

「父の伯母の子、要するに父の従兄弟ですが、その人物の学生時代と今の俺の背格好が、瓜二つのレベルで似ているとは親族達が集まった際に聞いた事があります。その人物が、赤毛だった事も聞いています。

しかし、父の従兄弟は二五年前に亡くなっていますので」

「あ、まさかBADAN戦役か？」

裕也の確認に、緑間は頷き、そして言葉を足した。

「父の従兄弟は、その当時自衛隊の戦車隊に所属し、緊張に耐え切れず命令無視して戦端を切った戦友に巻き込まれ、ブラックサタンと言う集団に焼き殺されたそうです。

それが原因で大伯母は精神を病んで、実家に帰って来たそうです。

……俺が小学生の頃に亡くなりましたが」

「……」

思わず黙り込んだ裕也の横で、和成は首を傾げていた。

相棒の言葉が本当なら、この間自分が、そして昨日真也が見た人物は、一体何だったのだろうか。

その頃、海常高校の体育館でも、バスケット部の部活が行われていた。新主将になった早川充洋が、ここぞとばかりに声を張り上げる。

「よおし、一〇分休憩！」

しっかい(り)水分取って休めよ！」

「「「はー」「」」」

早川の声に、レギュラー新入生、全員が返事を返す。

新たな後輩、新しい一軍達が各々ドリンクを受け取り思い思いに休憩を取る中、中村真也は練習に参加している新二年生のレギュラー選手、黄瀬涼太の姿を探した。

一昨日に黄瀬の顔を見た時には、睡眠不足で蒼褪めていた顔色に焦って、思わず城南大附属病院の心療内科受診を勧めてしまった真也がいる。

二日振りに見た後輩は、一見すると普段通り——所謂高校生モデルでバスケをしているキセリヨそのまま——に見える。

だが、一年間芸能人ではない、一バスケット少年黄瀬涼太を見て来た真也には、後輩がかなり無理やり顔を取り繕い、何時も通りに「見える」ように演技していると知れた。そして、それはもう一人のレギュラー仲間であり、今期の主将である早川も気が付いたらしい。

「なかむあ(ら)、ちよつといいか？」

「早川？」

「黄瀬の奴、無理してう(る)っぽいかあ(ら)、向こうに連れ出して休ませてやってくえ(れ)ないか？」

こっちは上手くごまかすし、監督にも話しとくかあ(ら)！」

「判った。じゃあ、声掛けて向こうに連れていく」

声を潜めた分、聞き取り難かったが何を言いたいのかは解ったので、真也はドリンクをマネージャーに返すと、笑って新人達に應對している黄瀬の許へと歩み寄った。

「黄瀬、ちよつといいか？」

早川に頼まれて、去年の大会のDVDを探さなきゃいけないんだが、俺もうろ覚えだから手伝って欲しいんだ」

「え!？」

「だったら自分が」

そう言って、身を乗り出した『やる気はあります』アピールの強い

新人に、

「いや、黄瀬じゃないと判らない事があるから呼んでるんだ。

それより、レギュラーを目指すなら、基礎練習を疎かにするのは頂けないな」

と、軽く釘を刺して、真也は黄瀬を連れて部室棟へ向かった。

バスケット部部室に入ると、真也は問答無用でベンチに黄瀬を座らせ、自身のロッカーから予備タオルを出し、金色の明るい頭を隠すように被せた。

「な、中村先輩?!」

「休んでろ、これは主将命令でもあるからな?」

タオルの陰で、目を丸くする後輩に、少しだけ溜息が漏れる。

「お前は基本的に、笠松先輩や小堀先輩、森山先輩のところに走って行ってたけど、俺や早川だって、お前を見てたんだからな。

本当に調子が良くて笑ってるのと、調子が悪いのを隠して笑ってるのの区別くらい付く。

言っておくが、俺は一昨日の事を早川に話していないからな? 早

川は純粹に今日、お前の顔を見て調子が悪いって看破したんだ」

真也の言葉に、丸くなった目が申し訳なさに伏せられる。

口実としてDVD探しを言い出したため、昨年インターハイのものを取り出しつつ、真也は話を振ってみた。

「なあ、養父（おやじ）の家から帰った後、眠る事出来たか?」

「……いいえ。」

あの、寝てはいると、思うんだけど。寝た気がしないって言うか」
インターハイの対桐皇戦のディスクを手を持ったまま、真也はベンチで項垂れている後輩を見た。

記憶を辿っているらしい黄瀬は、自身の状態を言い表す為の語彙を、必死に漁っているらしい。

「図書館、なんです」

「え?」

「寝ようとして、目を閉じたら、図書館の中にいるんすよ。それも、床

も天井も見えなくて、本棚が延々と並んでる、そんな場所で俺、一人で誰も、いなくて、声を上げてても、響くばかりで」

言い続けるうちに、黄瀬の肩がカタカタと震え始める。

黄瀬涼太は、孤独が不得手で寂しがりや、その癖人見知りの気があっても相手に懐き続ける。『キセキの世代』のいじられキャラと言われて、あれだけそっけなく扱われてもあの面子を慕い続けたのだから。

そんな彼には、人気の無い本棚しかない場所と言うのは確かに堪えるかもしれない。

だが、ある事に気付いて、真也は後輩に向き直った。

「なあ黄瀬、図書館って言うか、無限に書架が連なっているんだな？」

もしかして、何か知りたいと思ったら、目の前に本が出て来たとか起きなかったか？」

「え、何でそれを」

顔を跳ね上げた黄瀬の反応で、やはりと思う。

何度か話に聞いた、灰崎祥吾が【BOOK】で『地球（ほし）の図書館』にアクセスした時と、状況がそっくりそのままだった。

丁度その頃、退院した黛千尋は福井健介、岡村建一の二人と、城南大学近くのマジバで落ち合っていた。

「何があった……うん？」

自分の分のジュースとアップルパイを持って来た千尋は、岡村の前にある小さな宝石箱に首を傾げた。

「よ、来たか」

「おお、怪我は大丈夫かの？」

先に来ていた陽泉OBの向かいの席に千尋が座ると、岡村はその大きな手に不釣り合いな宝石箱を開いた。

その中には、赤、青、黄、緑の大振りな石の付いた指輪と、掌の形の飾りが真ん中についた指輪が一つ。

「これは？」

「この間預かった、魔法石で作ったんじゃ」

「判るか、殆ど〇〇が一晩で作ってくれました、のノリで昨日の夕方には出来てたんだぜ？」

何処となく、何かの仮面を思わせる、子供のおもちゃと思われそうな大振りな指輪の一つを取り上げ、千尋はその石の部分を照明に透かす。

その、内部にびっしり文様が刻まれているのを見て千尋はビックリした。

「何だこれ、んー、霊力は感じるような、感じないような」

「これは、どちらかと言うと霊力を注ぎ込んで起動させんと、何の力もないただの装飾品じゃな。」

正直、何でこうなったのかは儂にも判らんのじゃが」

岡村の応えに、千尋と健介はずっこけそうになる。

岡村は、出羽三山に関わる修験者を長年輩出した家系の末裔で、とある組織に割と早い頃からスカウトを受けていた経歴の持ち主だ。バスケをしたい（ついでに女の子にもてたい）ので断ったが。

福井健介と知己になって以来、彼の父の遺品である古文書の中に含まれていた魔法道具に関する文書を見付け、うっかり読み込んだ結果幾つか魔法道具を再現してしてしまった。——断っておくが、健介の亡き父はとんでも学説を喚き散らすマッドな学者では無く、あくまでも風俗文化資料として収集していた真面目な考古学者である。ただ、そうして集めていた中に本物のマジックアイテムが混じっていただけである。——

健介の持つている、ジャヴァウオックに纏わる特殊攻撃を可能にするクロークリングも、岡村が資料の中から拾い上げ再現した代物である。

その再現率に、『SPIRITS』隊と《ホークアイ・ホールディングス》の研究者達が戦慄したのは、今でも語り草である。……血筋由来の潤沢な霊力もあって、《ホークアイ・ホールディングス》が秘かに青田刈りを画策していると言う噂もあったりする。

「判らないは無いだらう、モアラ！ お前が作ったんじゃないか！」

「と、言われてものお、今回は寧ろ石に請われるまま細工しただけだか

らのお。古文書を捲つとつたら、石達が騒ぐページがあつたもんじやから」

頭を掻きつつの岡村の言葉に、健介は物問いたげに千尋を見た。

この指輪の材料になった魔法石は、千尋が差し出したものだからだ。

千尋の方と言うと、どう答えたものかとかめかみを押さえた。あの魔法石は、彼の……一応親戚が置いて行ってしまったものだからだ。

それは、入院二日目。

検査が終わり持ち込んでいたラノベを読んでいた千尋の横に、ふわりと異形が現れた。

突然の事で、千尋は己の膝から飛び上がったキバット五世を咄嗟に掴み、だが相手を見て肩を落とした。

そこにいるのがファンガイアの本体でもファントムでもなく、魔皇甲冑だと気付いたからだ。

「キング、出来れば普通に受付から入って来てくれませんか？」

『いや、関係者じゃないからと門前払いされそうだったから』

そう答えたのは、目の前の魔皇甲冑——サガの鎧を着込んだ人物だ。

彼は数年前に代替わりしたファンガイアのKINGだ。先代KINGとQUEENの間に生まれた生粋のファンガイアだが、世話役が穏健派だった事と親世代を薙ぎ倒した人類最強の存在の為、親達の言うファンガイア絶対の思想が根付かなかつたと言うある意味苦勞の多い存在だ。

KING継承後のすったもんだを千尋に助けられる形になり、以来非公式な形ではあるが彼と仮面ライダーは緩やかな同盟関係にある。

「そりゃまあ、ここは基本関係者以外立ち入り禁止だが」

『それに、病院の薬品臭が、アレルギーに引っかけちゃって。

用事だけなら、人間にたくさん会うより真っ直ぐ壁抜けた方が早いかなと思って』

「あー……気持ち判るが、ほどほどにな。曲がりなりにも、一企業の

社長なんだし」

『うん、善処するよ』

「する気ねえな、この野郎」

かたや一種族の長、こなたその種族から追い出された半端者だが、微妙に距離が近いのは二人が年が近い従兄弟同士だったと言う事に尽きる。

K I N Gの母である先代Q U E E Nと、千尋の亡き父は血を分けた姉弟だった。

ファンガイアとして過剰なほど気位の高い姉にとって、人間を娶った弟は何が何でも処分しなくてはならなかった。それ故に、弟の遺児である千尋への当りも強かった。

隠棲させられた彼女は、《ホークアイ・ホールディングス》の術者系能力者、主にスミドロンや魔女参謀達によって、千尋に殺意を抱いて近付けば、その殺意と同じだけ全身に痛みを感じると言う術を掛けられている。

尤も、彼女ら曰く「あれはあの女の殺意を女に跳ね返す鏡じゃ。殺意など抱かず気に入らぬ者程度の思いでおれば、そもそも起動せぬわ」との事だったが。

そんな事もあり、公では親しい事は伏せているものの、こうやって第三者がいらないところでは主にK I N Gの方が千尋を構いたがっている。

『そうだ、余りゆっくり出来なかったんだ』

「おいこら」

そう言うなり、サガことK I N Gは何処からともなくゴロゴロつと六色の水晶の塊——いや、魔法石の塊を取り出し、千尋の膝の上に置いた。

軽くオレンジぐらいはある石の大きさに、千尋が呆れているうちにK I N Gは帰ってしまった。

『母さんが死蔵していた魔法石なんだ。うちじゃ珍しくもない石だし、確かちひろの周囲にはこう言う物を扱う人間居ただろう？ そう言う人に渡しておいてね？』

「あ、ちよつと！……まったく」

あつと言う間に姿を消した年上らしい従兄弟に嘆息しつつ、千尋は膝に置かれた石を見下ろした。

うん？

ある事に気付いて、黛千尋は小柄な悪友に小突かれている大男に向き直った。

「なあ、岡村。確か石は六つ渡したと思うんだが」

友人の疑問に、岡村建一はあっけらかんと言。

「おお、透き通っていた奴と黒く光つとった分はこれじゃ。石二つ必要と言う、結構ごつい細工があつての」

そう言つて岡村が指さしたのは、掌の形の飾りが真ん中についた指輪だった。

五つの指環は、何やら人待ち顔で光を弾いていた。

何処かの建物の中で、何人かの人間が角を突き合わせていた。

「検体四号が衰弱状態に陥りました。」

これ以上の実験の継続は、検体の死亡に至ると思われます」

初老の男の声に、若い——三十代ぐらいと思しい男の声が不貞腐れたように吐き捨てる。

「花村、お前の機械欠陥あるんじゃないやねえの？」

こんなに頻繁に検体に倒られちゃ、実用化なんて夢のまた夢だろ！？」

それに向かつて囁付いたのは、二十代後半だろう険の立った女の声だ。

「あんた達実働隊が、こつちの制止振り切つて連続で出動するからでしよ！」

私は、クールダウン時間があるつて言つたじゃない！ 検体だけじゃないわ、R-01は未だ起動して一月の赤ん坊と一緒になんですからね！」

「赤ん坊って、馬鹿言ってるじゃねえよ、戦闘機器に赤ん坊のメンタルじゃ機能不全に陥るからってメンタルモデル積んでるだろうがよ！」
「馬鹿言わないで！ そのメンタルモデルとボディのバランスのすり合わせが必要だって言ってるでしょ！」

あんな達みたくないな、無教養ですべからく暴力で事済まそうとする脳筋と一緒にしないで！」

男女の空気が、この上なく悪くなり取っ組み合いになるかと言うところで、双方を諷める声が出た。

「……水原三佐、花村一尉、そこまでだ。」

花村一尉、R-01と脳波誘導射撃管制装置ののメンテナンスを。

水原三佐は、次の検体の招集を」

「しかし閣下、松本機関の資料によると、システムに耐えられそうな特異能力者はもうおりませんが」

最初に報告していた男の声に、『閣下』と呼ばれた老年と思しい男は静かにこう応えた。

「それについては、技術提供先から資料が来ている。」

これまでの検体より、能力、体力ともに飛び抜けている。やや年嵩だが、その分花村一尉のシステムにも耐えられる筈だ」

そう言った男の手元に置かれた書類には四つの名前が書かれていた。

『遠視、透視系能力及び感応系能力者

誠凛高校三年 日向順平

秀徳高校二年 高尾和成

誠凛高校三年 伊月俊（要増幅）

海常高校二年 黄瀬涼太（要制御システム）』

克服

誰も知らないところで、それは起きた。

ゴールデンウィーク最後の部活、相棒をチャリアカーで送り届け家に帰ろうとした高尾和成は、公園のベンチにぼんやりと座る赤い髪の青年に気が付いた。

そのまま通り過ぎる事無く、彼の許に近付いたのは、その面差しが先程別れた相棒、緑間真太郎そっくりだったからだ。

「あの、大丈夫？ 体調悪い？」

「自己チェック中だ、問題ない」

「え？」

「うん!？」

思わず、お互い顔を見合わせ、そして弾かれたように赤い髪の緑間のそっくりさんはズササツと一〇メートル程距離を取った。

和成はと言うと、相棒そっくりな人間の、ギャグマンガもかくやな動きに思わず笑い出していた。

「ぶっは、リアルカートゥーン、目の当たり、ぶははっwwww」

「~~~~っ、誰だ、貴様は!」

「ごめんごめん、体調が悪いのかと思って声掛けてみたんだけど、それだけ動けるなら大丈夫か」

和成の言葉に男の表情が一瞬消えたが、些か憤慨したような声でボヤク。

「いきなり知らない奴が横にいて自分を覗き込んでいたら、驚くのが普通だと思うが？」

「あーうん、ごめん。知り合いに似てる人間が、ベンチで項垂れてたから気になっちゃったんだ」

和成の言葉に、男はむっと眉を寄せた。

眼鏡の無い緑間の顔を見ている気分になって、笑い続ける和成にこれは結構険の立った声が投げ付けられる。

「どんな教育を受けたのかは知れないが、目上の人間に対して随分な事だ」

「え？」

「貴様は高校生だろう。俺は二五歳の自衛官だ、敬語を使うのが当然だろう」

青年の言葉に、笑いを収めて和成は向き直る。

「ごめんね、確かに初対面に向かつて爆笑した事は謝るよ。年上と思わなかったから、馴れ馴れしくし過ぎた。でも。自衛官だから敬語つてのはお断りだよ。」

俺、敬語は尊敬出来る人間について決めてるんだ、身分職分で敬語強要する奴とか、他人に敬語強要しておいて自分は相手を貴様呼びするような人間には、タメ語で充分だと思ってる」

高校生の言葉に、赤毛の男は一瞬戸惑ったような顔になり小さな声で「そう、なのか」と呟いた。

それに向かつて、何事か言葉を続けようとして、和成の背負うスポーツバッグから振動交じりの着信音が鳴った。

「しまった、義母さんから連絡！」

気が付けば空はすっかり朱から紺に染まっていて、和成は慌てて携帯を引っ張り出しつつその公園を後にした。

チャリアカーに乗って走り去った和成の背中を、青年はじつと見送っていた。

翌日正午、海常高校の裏門に、一台のバイクが停まった。

メタルブラツクの前部とメタルグリーンの後部のツートンカラーに塗り分けられたそのバイクは、当然灰崎祥吾の操るコアボイルダーである。

昨夜、真也から連絡を受け、予定を変えてこちらに来たのだ。

尤も、この間のWC《ウインター・カップ》の事もあり、二の足を踏んだ祥吾に向かつて、

「根回しは済ませるから頼む」

と、言った真也に押し切られる形で、海常訪問が決まったのだ。

取り敢えず愛車を駐輪場に収めてロックを掛けると、祥吾は真也を呼んで貰う為に守衛室へと向かった。

守衛室には、先に真也が根回ししていた様子で、祥吾が名乗るとすぐに何処かに内戦を掛けてくれた。程なく現れた真也に連れられ、祥吾が向かったのは保健室だった。

「保健室？」

「上手く眠れないらしくてな。ただ、症状が医療の範囲じゃどうしようもないらしいから、取り敢えずガイアメモリで検索して欲しいんだ」

「それは良いけど、それにしても、寝ただけで『地球《ほし》の図書館』らしい場所に入り込むって、あいつ何やったんだ？ この間会った時、メモリの反応なんて何もなかったのに」

目元を誤魔化すのと、明暗の誤差で目が死ぬ——虹彩の色が薄い祥吾には、燦燦と光が差す校庭から校舎に入るだけで頭痛を覚えるレベルで辛いのだ——為に掛けた、淡い色合いのサングラスで歩く祥吾を見咎める者はいない。

他の部活は今活動中らしく、グラウンドから掛け声が響き、吹奏楽部の楽器のチューニングらしい音色が聞こえる。

保健室に入ると、机に向かっていた保険医が顔を上げた。

そこにいたのは、祥吾も良く知っている女性だった。

「え？ ギリーラさん？」

「ここじゃ九条みわって名乗ってるから、九条先生って呼んで頂戴」
「今年の四月から、新任保険医としてここに赴任して来たんだよ」

ボブカットの三十代くらいの女性は『毒蝶ギリーラ』と言う名で、かつてはSHOCKERの改造人間であり、BADAN戦役の際にマミーゼネラルに自我を戻され、そのまま彼の勢力に加わった一人である。本職は鱗翅目をメインとした生物学者だが、きちんと医師免許を持つ内科医であり、近年校務医としての資格も取っている。

書類を読む為に掛けていた眼鏡を外し、立ち上がったギリーラはちらっとベッドの一つに視線を向けた。

「黄瀬君には、今本社から取り寄せた導眠剤で寝て貰ってるけど、利きが悪いわね。」

今も肉体的には眠ってるけど、精神は覚醒状態で維持されてる感じ

よ」

「それは……」

「私が使ったのは、T-0の方の【Doctor】メモリだから、祥ちゃんが使ったT-1メモリよりやや簡易ドライバーとの相性が悪いというのものもあるのかもしれないけど、彼の覚醒状態は間違いないと思うの。」

後、メモリの反応が微妙な気がするわ」

「え？」

「テト姉は、こないだ使った時、そんな事言っていなかったぜ？」

驚く真也と、眉を顰める祥吾に向かって、ドライバーと厳つい模様で飾られたT-0メモリを見せつつギリラはこう続ける。

「私が改造人間だから、かもね。」

何となくだけど、彼にこちらを窺われているような気がするのよ。いや、彼じゃないわね。何か判らないけど、何かとても大きな存在に、黄瀬君経由で覗かれている気分だわ」

ギリラの言葉に、思わず二人の言葉が止まった、その時だった。奥から、押し殺したような唸り声がする。

「黄瀬!？」

「リョーター!」

魔されている黄瀬に真也が駆け寄り、何かしら思い付いた様子で祥吾はロストドライバーを取り出し、腰に当てた。

「祥ちゃん!？」

「こいつが『地球《ほし》の図書館』にいるって言うなら!」

【BOOK】!

「変身!」

祥吾の頬に、開いた本と閉じた本を並べて文様化したラインが走ったかと思うと、それを覆いつくすようにスーツが形成される。

メタルネイビーに白くラインが走るスーツに身を纏い、祥吾は毛布を握り締める黄瀬涼太の手を取った。

その次の瞬間、祥吾の意識は、一気に引つ張られた。

「え!？」

気が付けば、そこは本当に高い天井と、床が見えない世界で、延々と書架が連なっていて果てが見えない空間だった。

普段、自分が接続していた場所と比べると、広がりも書架の数も段違いである。

見えない足場に乘っているのは判るが、それ故に却ってこの空間の広がりをはつきり認識する事になる。

「うそ、だろ？」

もしかして、これが『地球《ほし》の図書館』本来の広さだったのか!？」

周囲を見回しても、黄瀬らしい人物を見出す事が出来ない。

「あーくそ、検索ー、『黄瀬涼太』！」

延々と続く書架に苛立ち、ままよと叫んだその瞬間、ざざざざつと音を立てて書架が動き、主観で二〇メートルほど先に、本に埋もれて座り込んでいる金色の髪を見出した。

足場を確かめつつ近付いて、祥吾は黄瀬涼太の異常に気付いた。

積み上がった本に、座り込んだ周囲をぐるりと囲まれ、彼の上にパラパラと書類らしきものが降っている。

その降って来た書類が、ある程度溜まると本に変じて黄瀬の横に積み上がる。

「何だこれ、何でこんな事が」

一瞬躊躇して、それでもと祥吾は手を伸ばした。

「おい、リョータ、しっかりしろー」

「シヨゴ、くん？」

ぎこちなく首を動かし、自分を見る元同級生に手を伸ばせば、ぎくしゃくした動きで手を伸ばしてくる。

何となく、じれったいと感じて半ば無理やり伸ばそうとした右腕を掴んだ、その次の瞬間。

「え!？」

「あ」

バキン!

ロストドライバーに差していた【BOOK】のメモリが、刺さった

ままはじけ飛ぶ。

あつと思つた時には、物凄い力で祥吾は後へと吹き飛ばされた。

『地球《ほし》の図書館』から弾き出される瞬間、祥吾は懐かしさを感じる手の幻を見た。

「祥吾！」

「祥ちゃん！」

「……う」

祥吾が目を開くと、焦った顔の真也とギリーラが視界に入つて来た。

起き上がってドライバーを見ると、差し込んでいた【BOOK】のメモリが、真ん中からばっくり裂けていた。

「うわ、やっぱりブレイクしちゃってる」

「大丈夫だったか、お前が黄瀬の手を掴んだ途端、メモリが吹っ飛んで」

「え？ あれ？」

二人の話によると、祥吾が黄瀬の手を掴んだ瞬間、メモリブレイクを起こして変身解除されてしまったらしい。その後そのまま意識のない祥吾を引き離れたところだったと言う。

体感時間と、現実時間がずれている事に関しては、『地球《ほし》の図書館』にアクセスした弊害だろうが、それにしても今まで『地球《ほし》の図書館』の内部で動けなかったのに動けた事、黄瀬の周囲に何故本が積み上がっていたのか。

判らない事が増えてしまった。

「んっ……」

「黄瀬?！」

どうやら、黄瀬が覚醒したらしい。

慌ててギリーラがヘルスチェックを行うのを眺め、祥吾は破裂したメモリをそつと握り込んだ。

事件は、その日の午後、誠凛高校の体育館で起こった。

誠凛高校バスケット部は、その日練習を行っていた。

その体育館の扉を突き破り、奇怪な外観の怪人が飛び込んで来た。「げひゃひゃひゃ、ゲートの臭いがするぞお」

そう言いつつ金属とガラスの扉を突き破り、へし曲げた獅子の顔を持つ怪人に思わず練習中の高校生達が凍り付く。

その状態で、咄嗟に動けたのは仮面ライダーオーズこと火神大我と、その相棒であるレイヴ@黒子テツヤだ。

「火神君！『使えー！』」

それまで体育館の床でぐったり伸びていた黒子の髪に、すつと赤い差し色が入ったと思つた瞬間ばね仕掛けのように跳ね上がり、そのままタオルを置いている舞台上に飛び上がるとメダルドライバーとメダル三枚を投げた。

ドライバーとメダルを受け取り、大我は周囲に声を掛ける。

「みんな逃げてくれ！ フリ、フク、カワ、一年を頼む！ 変身！」

タカ！ トラ！ バツタ!!

Ta, To, Ba, t a t o b a TA, TO, BA!!

スキヤナを滑らせると、大柄な大我を三色のメダルが現れ囲む。

『仮面ライダー』に変身した上級生の姿に、唾然呆然となっている後輩二人を降旗光樹、河原浩一、福田寛の三人が半ば押し出すようにしながら、体育館の外へと避難させる。

その向こう側で、後輩達と逆側の扉から上級生達が避難を始める。

「おおっと、お前は逃がさないぜえ？ しつかり絶望してくれよ、

『ゲート』ちゃん？」

そう嘯きつつ、マンコティアがモデルだろうファントムが狙いを付けたのは、副主将として集団の最後にいた伊月俊だった。

ファントムの剣が、伊月に届く瞬間、その手に向かってバスケットボールを投げ付けた者がいる。

「逃げる伊月！」

それは、扉を開いてメンバーに避難するよう声掛けした後、同じく舞台に置いたスポーツバッグから戦極ドライバーを取り出した日向順平である。

相手がファントムであると断じた時点で、自身の携帯で専門家へ福

井健介』に連絡を取ったものの、その切っ先が幼馴染みの一人に向けられているのを目にした途端、順平は手近なボールを投げ付け、ドライバーを掴んでいた。

「変身！『イチゴ！』うん!？」

何時ものオレンジロックだと思って、見ないままロックを開いた順平は、何時もと違うコール音に思わず動きを止める。空間の裂け目から現れたのは、メタリックに光を弾く巨大なイチゴで、順平の途惑いもへつたくれもお構いなくそれは彼の上に落ちて来た。そして。

イチゴアームズ！ シュシュツとスパーク！

「おうわ？ 何時ものじゃなかった!？」

「何やってんのさ、ヒューガ!？」

ヘッドパーツはともかく、苺を意匠にした左右非対称なプロテクターと両手に納まったナイフと言うには大振りな二振りのイチゴ型刃物に狼狽えつつも、マンコティアファントムがばら撒いたグルーを同輩達に近付けまいと切り裂いた。

その向こう側で、トラクロウを振るいながらオーズが相棒に声を掛ける。

「黒子！ 俺の携帯に海斗兄ちゃんのナンバー入れてるから、向こうに連絡入れてくれ!！」

「判りました!！」

その間に、件のファントムは最後の確認の為に立ち止まった伊月の前に瞬間移動した。

「よう、足手纏い。」

俺は知ってるぜえ、お前は中学時代からずっと日向のお荷物だったよなあ?！」

獅子面の怪人の言葉に、伊月俊の顔から表情が消えた。

「げひやひや、この間優勝したが、それもお前の力って言うよりあそこの『幻の六人目』と『キセキならざるキセキ』と『無冠』の『鉄心』のお陰だよなあ?！」

お前が力になってりや、中学時代に公式戦全敗なんて無様曝さないよなあ?！」

がくんと、膝を付いた伊月に、更に勢い付いて物を言おうとしたマンコティアに、轟音と共にイチゴクナイが投げ付けられ、突き刺さった。

思わずクナイの軌跡を目でなぞったオーズは、クラッチ全開の鎧武に思わず背筋を伸ばした。

「いつてえな！ って」

「その糞下らねえ物言い、早瀬だな。」

屑だ屑だと思つたら、ファントムなんぞになりやがったか」

クラッチタイムのみならず、激怒の余り身体からゆらゆら何か陽炎じみたものが立ち上っているのが見える。

一瞬気圧されつつ、だが早瀬と呼ばれた怪人は伊月を一瞥するや、勝ち誇って踏ん反り返って見せた。

「へっ、事実は事実だし？」

その証拠に、伊月くんは絶望してくれたし？」

「何だと！」

見れば、蹲つた伊月の身体に、顔に不気味な紫色の光の零れる亀裂が現れ、それは少しずつ増え徐々に広がっていく。

「伊月先輩!」

駆け寄つた黒子の中で、片腕だけのグリードが眉を顰める。

仮面ライダービースト事福井健介と共闘になつた際に、何度か見掛けた状況だ。

『不味いぞ宿主《テツヤ》、こいつの精神世界を食い尽くしてファントムが出て来ようとしてやがる!』

「え!」

『しかも、普段対処してる魔法使いも、何たらつてところの術者もいない、このままだと確実にこいつは死んで、ファントムが増える!』

「そんな、僕達に出来る事は無いんですか、レイヴー!」

黒子の悲鳴に、レイヴは舌打ち交じりにこう答えた。

『こいつが助かる方法は二つ、こいつの精神世界に入って、中を食い荒らしているファントムを倒すか封印、もう一つはこいつ自身が自分の中のファントムをねじ伏せる事だが、……無理がありそうだな』

「無理って?」

『後、精々持つて五、六分、こいつが自力でねじ伏せるならよし、もし魔法使い達がそれまでにここに付なきや、俺はお前を引きずって逃げろぞ』

「そんな」

『俺はグリード、ファントムとは同じ魔物でも系統が違うんだ、俺に出来る事なんてねえよ』

そう言う声は存外に悔しそうで、黒子はそう言えばここ三ヶ月ばかりのうちにレイヴがなんだかんだ言いつつチームの人間に馴染んでいた事を思い出した。

意識を持たせようと、黒子が伊月に声を掛け始めたその向こうで、鎧武とマンコティアの戦いは苛烈さを増していた。

「早瀬! 手前は自分が何もしなかった、いや何もかも放り出していたのを棚に上げて、随分な事言いやがって! お前が監督のお気に入り、ずつとスタメンにいたから勝てなかつたってのもあるんだぞこの野郎!」

「げひやひや、そんな監督に逆らえなかつたお前の勝手じゃねーか、俺の知った事か」

下品に笑いつつ、だがマンコティアは内心激しく焦っていた。

近接武器であり、同時に投擲武器であるイチゴクナイを自在に操り罵詈雑言と共に凶悪な蹴りを放ってくるかつての負け犬——日向順平の勢いに、度々押し負けそうになるのだ。

(この、偶々優勝したからって、偉そうにっ)

「舐めるなよ、人間がっ!」

そう喚いた次の瞬間、マンコティアファントムは急に尾を立て、そこから針をばら撒いた。

グルルを倒し終わり、一瞬気を抜いたオーズを毒針が襲う。

「ぐ、いてえー!」

「火神君! 『馬鹿、近付くな、俺らじゃ何も出来ねえって!』」

相棒の悲鳴に腰を浮かした黒子を、レイヴが引き戻す。

そして、本来の獲物である鎧武の方は。

「この、こいつで！『ORANGE！』」

イチゴアーマーと入れ代わりに現れたオレンジアーマーが鎧武に被さり、それと同時に高速回転を起こし毒針を弾いた。

その、想定外の光景に絶句するマンコティアの目の前で、橙武者が姿を現す。

ORANGE！ 花道、ONSTAGE！

「好い加減にしろや、この野郎！」

「こ、このっ」

使い慣れた形態になり、大橙丸が唸りを上げてマンコティアに迫る。

絶好調にクラッチタイム延長中の順平を前に、マンコティアになった元同級生は見込み違いの事態に内心泡を食っていた。

こいつは中学時代の、報われないまま努力を続ける根暗で、今回はたまたま『無冠』と『キセキの世代』と偶然に恵まれて『WC優勝校の主将』なんて身の程知らずな立場にいるだけの筈で。——マンコティアの中では、順平達の努力が報われたと言う事実は無い。

こいつは、見下していた相手が自身が望んでも手に入らなかった物を全て手に入れた事に絶望して、ファントムに堕ちたのだから。

剣戟の鋭さに内心怯えつつ、だが視界に入った伊月の状態にへらつと笑う。

「げひゃひゃ、えっらそうに！」

言っておくが、俺を殺しても伊月ちゃんは元には戻らねえぶぜっ!？」

だが、正面からヒールキックを受け、マンコティアは後ろによろけた。

「んな事は知ってらあ、こいつを預かるに当たって先輩方から習ったからな、お前らファントムを含め、未確認生命体のあれやこれやな。

俺は伊月を信じてる。あいつはファントムなんぞにはならない。

だから、専門家が来るまでお前が馬鹿やって被害者が増えないように、抑えて置くのが俺の仕事だよ！」

大橙丸を突き付け、そう言い切った鎧武の、順平に強さに、マンコ

ティアは発狂よろしく激昂する。

「黙れ黙れ！ ふぎけるな、負け犬の癖に!! お前なんか俺に勝てると思うなよ!!」

そう叫んだ瞬間、マンコティアの前身から沸き上がった光がカードを形作り、9枚のカード型の光弾が鎧武に襲い掛かった。

「な!?! うわあ!?!」

数発ならともかく、流石に九連続爆撃を受けて戦極ドライバーのダメージ許容量を超えた。

衝撃で弾き飛ばされ、同時に順平の変身が解けた。

「キャプテン!?!」

後輩達の悲鳴の中、だが順平は跳ね起き、衝撃で外れた戦極ドライバーをもう一度掴んでいた。

切れた口元を拭い、割れた眼鏡を投げ捨て叫ぶ。

「俺は、バスケが好きなんだよ、どんだけ力量不足と言われようが、分不相応と言われようが、自分だけは騙せなかった、誤魔化せなかった!」

そんな俺に付いて来てくれた奴らがいる以上、お前なんぞに負けるか! どっち付かずで逆恨みしか出来なかったお前に!」

「日向あああア!!」

この一通りを、身体から響く不気味な亀裂音を聞きつつ伊月俊は見ていた。

「ひゆう、が……おれ、は」

ぎりつと両手を握り締めた、その時だった。

【このままで、良いの】

気が付くと、伊月の前に、一人の少女が立っていた。

金色の髪と、赤い右目の白いワンピース姿の少女はひたと伊月を見てこう言った。

【彼は、貴方がファントムにならないと信じている。そして、貴方を、仲間を、後輩達を守ろうとあそこで戦っている。

貴方は、そのまま良いの?」

彼の友として、彼の仲間として、貴方に出来る事がある筈】

中学時代からの友である少女に似た、でも彼女より年上だろう女性の声に、伊月は目を見張り、そして。

「どけよ、俺に喰われるよ、俺に自由を寄越せ！」

自身の奥から響く声に、伊月は意識を合わせた。

そこには、銀色に輝く西洋竜《ドラゴン》がいた。荒れ狂い、のたうち回るそれを、伊月は不思議と怖くないと思った。

ついさっきまで、自身を引き裂いて出て来ようとする得体の知れないものだったのに、目を合わせた途端、伊月俊はこのドラゴンを知っていると気付いたのだ。

そのドラゴンの眼は、勝てない事で内心荒んでいた中学生の頃、鏡を見るたび見ていた眼だったから。

(こいつは、俺なんだ)

そう思った瞬間、俊はドラゴンを押さえ込んでいた。

突進しようとしたドラゴンは、見えない壁に押さえ込まれそれ以上に進めなくなったのだ。

(ごめんね、俺の中のドラゴン。でも、お前を開放する訳にはいかなんだ。

だって、お前は昔の俺なんだもの。

……恥ずかしいね、克服したつもりだった昔の自分に負けるところだったなんて！)

「お前!?!」

驚くドラゴンを、己の奥へと押し戻す。

驚いた表情を浮かべているらしいドラゴンは、少しだけ嬉しそうに、でも悔しがりつつ精神の奥底へ消えた。

福井健介と、岡村建一とが誠凛高校体育館に辿り着いたのは、俊の身体に広がっていた亀裂が一気に消えたその瞬間だった。

「うお!?!」

「亀裂が消えたって、まさか、ファントムを押さえ込んだのか!?!」

ファントム専任として、色んな事態を見て来た健介にも初めてのケースで、思わずまじまじと身体を起こす俊を見る。

同じく、全く想定外の事態に顎を外しそうになっているのはマンコ

ティアファントムだ。

順平への当て付けもあったが、俊の方が精神的に脆いと見込んで――事実彼はゲート状態に陥ったのだから――襲ったと言うのに。

「ま、まさか、そんな、嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ!!」

「やかましい！ お前が俺と俺のダチを勝手に決め付けて、勝手に見下してただけだろうが!!」

喚き散らすマンコティアに怒鳴り付けつつ、立ち上がった順平は同じく立ち上がった俊に向かって親指を立てて見せた。

「よう、信じてたぜ、伊月！」

「あはは、彼女に言われてやっとな出来ただけどね。……はっ」

「黙れ伊月」

ダジャレを察知して切り捨てつつ、だが順平は首を傾げていた。

はて、彼女とは？

だが、それを深く考える前に新たな声が割って入る。

「あーあ、大口叩いてこれかよマンコティア。」

やっぱり三流は、ファントムになっても三流かあ」

「レギオン!!」

真っ先に反応した健介に、二階のキャットウォークからこちらを見下ろす骸骨のファントムは、些かうんざりした風に肩を竦める。

「来たんだ、古の魔法使い。面倒だなあ。」

マンコティア、この失敗の挽回方法は判ってるよね？ そこにいる奴らを殺せ。取り敢えず、そこでお前の毒で動けないデカブツとか？」

「ぎげんな手前！ その前に俺のダイナーになりやがれ！」

そう叫び、健介が指輪を付ける。

そのまま飛び出そうとするのを、慌てて岡村が羽交い絞めで止める。

「待て待て福井、まず火神の解毒してやらにや」

「っと」

だが、その拍子に岡村の上着のポケットから、入れっぱなしだった宝石箱が落ち、そこから二つの指環が俊の手の中へと飛び込んだ。

それは、掌型の飾りのついた指輪と、仮面を思わせる紅い指輪だった。

それまで光を弾くだけだった指輪達は、俊の手の中で自身が光り始めた。

暫く指輪を見詰めていた俊は、岡村に申し訳なそうに頭を下げた。

「岡村さん、すいません、これお借りします」

「うん？」

そして右手に掌型を、左手に仮面型を嵌めた。

「おい、伊月!？」

「俺にも、出来る事があるよ、日向」

右手を臍の辺りに翳すと、そこに湧き上がるようにベルトが現れる。右手に嵌めた指輪と同じ、黒い掌型の飾り、否ハンドオーサーが目立つ。

シャバドウビタッチヘンシーン!! シャバドウビタッチヘンシーン!!

賑やかに歌い出す、ベルトの中央の掌の位置を動かすと、俊は左手の指輪をそこに押し当てた。

PLEASE!

ヒー、ヒー、ヒー・ヒー・ヒー!!

横に伸ばした左手の先に、深紅の魔法陣が出現した。

それが俊の身体を通り抜けると、その身体を特殊スーツが覆っている。指輪そっくりなマスクに包まれ、黒いスーツはマジシャンの礼装のよう。

魔法陣が消えると、ぱつと裾を払い伊月俊は名乗りを上げた。

「そうだね、俺は宝石の魔法使い。いや、仮面ライダーって名乗らせて貰おうかな。」

俺は仮面ライダー『ウイザード』。

タイムアップ迄、付き合って貰おうかな？」

「お、ま、え、はあああ!」

大人しく食い尽くされれば良いものを!」

怒り狂い、手に持った剣を盲滅法に振り回しながら突っ込んで来た

マンコティアを、ウィザードは闘牛士よろしく、ひらりと避ける。
その横で、順平も再び鎧武となった。

ORANGE! 花道ONSTAGE!

「伊月!」

「行くよ日向!」

宙に現れた魔法陣から、ウィザードが大きな銃にも剣にも見えるものを掴み出すと、それに付いた握り拳のようなギミックを開いた。

キャモナ・スラツシユ・シエイクハンズ!

ウィザードは少し考える素振りを見せて、広げた手形に左手を当てた。

その横で、鎧武もドライバーに付いたカッティングブレードを弾く。

フレイム! スラツシユストライク! ヒー・ヒー・ヒー!!

ORANGESPARKING!!

「せい!」

「うおりゃ!!」

二人が同時に放った斬撃は、もう一度光弾を放とうとしていたマンコティアの胴体をX状に斬り払った。

「あ? 何で? 俺が、あいつ等より、劣って、ちが、あああああああああつ!?!」

二種類のエネルギーに焼かれつつ、マンコティアは爆散した。

大きな花火のように爆発し、そのまま消えたかつてのチームメイトのなれの果てが消えた跡を、ウィザードも鎧武も暫く見詰めていた。

「あーあ、負けちゃった。」

寄りにも寄って魔法使いを増やしてくれてさ、本当に無能だったな、あいつ」

セイバーストライク!

「言いたい事はそれだけかあ!」

スキヤニングチャージ!

「おうりゃあ!!」

肩を竦めていたレギオンを、左右からオーズとビーストが迫る。

光弾とキックの二段攻撃を食らい、レギオンも爆発する。が、爆炎が収まるより先に、些か気分を害したようなレギオンの声がした。

『あーもう、つまんない。ドレイク様の命令があるから今は引くけど、今度は俺が直々に相手してやるよ、古の魔法使い。そこの新米魔法使い共々ね』

インパクトの瞬間、逃げられた事を悟ったビーストが己が左手に右拳を打ち付け、悔しさを示す。

オーズの方は、解毒早々の大技でその場にへたり込んでいた。

「つつかれたああ」

「大丈夫ですか、火神君『しつかりしろ、毒は消して貰っただろう?』」
「毒は消えても、消耗した体力は戻ってねえよ。しかし、こりや暫く部活中止かな?」

変身を解いた大我が、頭を掻きつつそうぼやく。

順平こと鎧武とマンコティアの戦闘は、マンコティアが元々順平や俊への嫌がらせも兼ねて、わざと体育館内を荒らすように暴れた為、体育館の床がボロボロになっていた。

だが、それに対して答えたのは、首を鳴らしつつの岡村であった。
「心配せんでええ、へホークアイ・ホールディングスの方が今夜中に修復してくれるじやろ。」

「ここは火神も日向もおるから、会長さんがすぐ手を打ってくれるじやろ」

「そうなんですか?」

「あー、その前に、伊月をへS. A. U. Lに連れて行かないきゃかな」
健介の声に、順平と大我が「あー……」と言う顔になる。

そんな中、指輪を外した俊が、岡村に返そうとした。だが、岡村は首を横に振り、残りの指環を宝石箱ごと差し出した。

「岡村さん?」

「どうやら俺は、お前さんに渡す為にこいつらを創ったようじや。赤い指輪と二色の指環には、もうお前さんの魔力が籠っとるからの、他の人間には使えんわい」

受け取りつつ、それでも困ったように目を泳がせる中学生からの戦

友の背を、順平が宥めるように叩いた。

「お前が先に『仮面ライダー』名乗ったんだ、まあ取り敢えずは、へS・A・U・L」に行く前にカントクに報告するぞ。

今日練習出来なくなったから、明日の練習は……十倍かな？」

「……あ」

順平の言葉に出入り口を見れば、怒気でさながら某超野菜人か何かのようになっている、チームの女王様の姿があり、怯えたチームメイト達が離れた場所で揃って両手を合わせているのが見えた。

勿論、彼女の気迫の前に思わず抱き合った二年エースコンビと、気圧され元同級生の陰に隠れた古の魔法使いがいたのは言うまでもない。

日向順平、福井健介、火神大我の三人に、へS・A・U・Lからの緊急連絡が飛んだのはその直後。

海常高校から黄瀬涼太が、秀徳高校から高尾和成が連れ渡わられた事。

黄瀬を連れ去った車両を灰崎祥吾と中村真也がそれぞれの愛車で追い掛けている事、秀徳から連れ渡われそうになった和成を救い出そうとして、緑間真太郎も共に誘拐された事。

メインオペレーターから伝えられた情報に、ライダー達は困惑も大きく顔を見合わせるしかなかった。

急転

夢を、見た。

夜中に泣いていたら、祥ちゃんが起き出して。祥ちゃんに手を引かれて「父ちゃん」の部屋に行ったら、「父ちゃん」は俺達をベッドに入れてくれた。

生きている人間の温もりと、呼吸音と心音に、俺は慰められたんだ。

……お……かお……た……かお……高尾！

呼び掛ける声が、チームのエースであると気づき、高尾和成は慌てて意識を浮上させた。

目を開けると、緑間真太郎に抱き抱えられる態勢で、一気に羞恥心で焼かれる事になった。

「うな!? 真ちゃん!？」

そのまま起き上がりとうとして、腰に引き攣れた痛みを覚え、一瞬動けなくなった。

それに対して、やはりと言いたげに緑間は眼鏡を押し上げた。

「あの連中、お前を捕まえようとスタンガンを押し付けたのだよ。一応ワセリンを塗って保護したが、大丈夫か？」

「うわ、ありがとう真ちゃん」

そう言いつつ、周囲を見回した和成は、自分達がいるのがどう見ても四トン位の保冷車の貨物室で、キーホルダーに付けていたミニライトで辛うじて明るくなっているのだと気付いた。

そうして、チャリアカーを置いている高校の裏手に向かっていて、黒尽くめのサバゲーマーのような集団にいきなり囲まれた事を思い出した。取り敢えず、緑間を庇って彼らから逃げ出そうとした矢先に、腰に走った激痛で意識が飛んだのだ。

「ごめん、真ちゃん。俺の所為で逃げそびれたね」

和成の謝罪に、眼鏡を直しながら緑間は「違う」と言った。

「それは違う。高尾、奴らはお前が狙いだっただよ。」

俺がお前を放さなかったのと、騒ぎを聞きつけた学生や教師に気付

いたから、奴らは俺ごとお前を誘拐したのだよ」

相棒の言葉に和成が咄嗟に考えたのは、アラン・ホークアイとへホークアイ・ホールディングスへのテロ、及び身代金要求だった。

自宅に身代金を要求しても、大した金額になる筈も無く、また単純に高校生を拉致するのに向けられた銃火器はどう考えても本物で——SPIRITS隊の装備は、何度か間近で見える機会があったから——、そんなものまで出して来て自分を襲うなら、絶対組織的なものだと思いますのだ。

だが、そこまで考えたところで、和成は別の理由に思い当たり蒼褪めた。

自分が、へホークアイ・ホールディングスと縁が出来たのは、救出し保護者になってくれたSPIRITS隊隊長滝和也が、会長首席秘書を務めていたから。

そして、自分がSPIRITS隊に救出されたのは？

「まさか、『財団X』!？」

「高尾!？」

和成の語尾が跳ねると同時に、ガチャンツと音を立てて閉ざされていた扉が開いた。

誠凛高校での事件の後、バスケ部の面々は一部を除いてへホークアイ・ホールディングスから派遣された警備員達に付き添われ、自宅へと帰って行った。

残ったのは仮面ライダーオーズこと火神大我、仮面ライダー鎧武こと日向順平、責任者として相田リコ、レイヴに付き合う形で黒子テツヤ、そして応援としてきた福井健介と、その相棒岡村建一、そしてつい先ほど仮面ライダーとして名乗りを上げたウイザードこと伊月俊だ。

七人＋αは、小料理屋『TOKIO』のロゴが入ったワゴン車に乗り込んだ。

元々送迎用の大型ワゴンであったので、何とか収まった面々はそこに設置されている大型タブレットを使って、へS・A・U・Lの管制

センターとの会議を始めた。

俊の事を報告された主席オペレーターは、それこそ眩暈を覚えたように目頭を押さえていたが、軽く頭を振ると話を続けた。

『秀徳高校の襲撃者グループに関しては、宮地君がガジェットを車両に投げ付ける事が出来ましたので、現在警察車両が追跡中です。』

海常高校側は、現在Call No.3、No.4が現在も追跡中です』

「Call No.って?」

「警察無線で、仮面ライダーを呼ぶ際の暗号みたいなもんだと思うとけ。」

No.3が祥吾、要するに灰崎で、No.4が中村だ。大体へS・A・U・Lに登録された順にナンバーは振られるから。あ、俺No.6で、千尋がNo.7、清志がNo.8な」

首を傾げた俊に、説明してやるのは健介だ。

その横で、大我が心なしか引き攣った顔で質問する。

「なあ、狙われたのは高尾と黄瀬なんだよな?」

何でこの二人が狙われたんだ? 緑間じゃなくて、高尾が狙われたって事はへホークアイ・ホールディングスへの嫌がらせかと思っただけけど、黄瀬が捕まったって時点で訳が判らねえ」

『それについて、最新情報があるの。』

現在未確認事件に乱入する、赤い人型の乱入者が使用している武装が、超常能力者による脳波誘導型である可能性が出ています。

高尾君が拉致された理由は、彼が元々そう言う兵器の開発を行っていたセクトに、誘拐された過去がある為でしょうね。

黄瀬涼太君に関しては、実は不確定ではあるけどSPIRITS隊にある記録が残っていたのが判ったの』

「記録?」

聞き返した健介に、画面の中の弱音羽久警部補は紙製ファイルを捲りつつ言葉を続けた。

『ガイアゲートと言うのは皆判るかしら? HOPPERの使うガイアメモリに関連する特異自然現象なんだけだ。』

現在、へS・A・U・LとSPIRITS隊とが共同で管理してい

るゲートが三カ所程あるのだけど、今から十年前、最初に確保したガイアゲートに転落した子供がいたの。

咄嗟に滝さんが飛び込んで、引き揚げたから大事に至らなかったんだけど。

その、転落した子供が、黄瀬涼太君ってあるのよ』

警部補の言葉に、俊とリコ、黒子@レイヴは良く判らないと言う表情になったが、残りの面々は厳しい表情を作った。

「確か、ガイアゲートって、中に入った存在全て分解してエネルギーに変換してしまうんじゃない？」

「養父《おやし》が完全に分解される前に引き上げたから、生還が出来たのかもな」

冷や汗を拭いしつつ順平が唸ると、顎をさすりつつ健介が答える。

そして、有る事を思い付き、大我は訳が判らないとぼおつと話を聞いている相棒に目をやった。

「なあ、黒子、黄瀬の奴、何時からコピー出来るって言った？」

「え？ えーつと、小学生の二年生ぐらいから色々出来るようになってたって」

「もしかしてだけど、黄瀬のあのコピー能力って、ガイアゲートに接触してなんか能力が生えたって事なのかな？ 时期的に大体合うし」

『それか！』

急な声に、思わず全員が驚く。

無線越しに音声回線を繋いだ、灰崎祥吾の声だった。

「シヨウ!?!」

『さつき、真也兄いに頼まれて『地球《ほし》の図書館』に入った時、メモリが壊れてはじき出される寸前に、こっちに向かって伸ばされる父ちゃんの手を見たんだ。』

あれが、ガイアゲートに落ちたりヨータが見たもののだとしたら、あいつがメモリ無しで『地球の図書館』に入り込んだ理由が判った気がする』

『もう一つ、黄瀬が襲われた理由が『地球の図書館』が関わるとしたら、やっぱり関わっているのは『財団X』って事にならないか？』

同じく割り込んで来た真也の言葉に、画面の女性と古参になる健介が苦い顔になる。

だが、それに向かって否を伝えたのは別の声だった。

『残念だが、『財団X』そのものじゃなくて、奴らに技術提供を受けた自衛隊のはねっ返りらしい。』

あいつら、よつぽど未確認生命体相手にドンパチやりたらしいな！』

『きよ、本音警部それは』

『秀徳を襲った連中の車が、自衛隊高官の私有地に入りやがった。追いついて入ろうとした警察車両を、武装した自衛官らしいのが威嚇しやがる』

『自衛隊高官、ですか？』

『ああ、朱堂陸将って奴の別邸だか何だかだが、何処の特別警戒箇所だっけくらい自衛官らしい奴らがうろろしてやがる』

舌打ち交じりの警部の声に、高校生達は押し黙ってしまふ。

そんな中、口を開いたのは黒子に取り憑いているグリードだ。

『おい、その理屈で行くと、眼鏡とダジャレを狙って似たような奴らが来るんじゃないか!?』

「!!!」

「いや、俺は高尾より範囲が狭いし、後遠視とかそんな能力は」

驚く面子の中で、そう言って俊は否定しようとしたが、苦虫を噛み潰した顔で順平が「あるかもしれない」と言った。

「今回関わってる『財団X』ってのは、ぶっちゃけて言えば戦争商人で、兵器開発に使えると判断した技術は魔法からBADANの超技術まで、見境なく掻き集めてるところだ。」

あの当時は使えないってされた俺の能力も、多分伊月の『鷲の目』（イーグルアイ）も、兵器転用出来るようにさせるんだろう、……黄瀬の、『地球の図書館』を使ってな」

『冗談じゃない、黄瀬にそんな事させられるものか！ 今だって、能力が暴走気味ですっかり弱ってるのに!』

叫んだのは真也だ。

同じく、低く唸るのは健介である。

「本気で何でもありだな、『財団X』ってのは。」

自衛隊のお偉いは、何でそんなのと手を結びやがった」

「自衛隊で、未確認生命体を憎む理由と言うと、一応聞いた事があるが
のお」

「そうなんですか？ 岡村さん」

相田の疑問に、岡村の方は大きな体を可能な限り縮めて座った状態で、少し身じろぎしつつこう続けた。

「BADAN戦役の最初期に、黒いピラミッドつちゅうもんから現れたブラックサタンの奇怪人によって、富士演習場で自衛隊の戦車隊が壊滅した事件があつての、その時の事が遺恨になって、自衛隊が三つに割れたらしいんじや。」

一つは、自衛隊を辞めて遺恨を晴らす為にSPIRITS隊に入つた人達。今、統合幕僚監部においでる目黒陸将補を中心にした人ら
じやな。

もう一つは、とにかく本来の任務として、難民と化した市民の保護と救助に奔走した大多数の自衛官達。

そして、改造人間との徹底抗戦を叫んだものの、行動を取り切れな
んだ人らじや」

「行動を取り切れなかった？ 『察するところ、掛け声はデカいが、腰が重くて行動を取れなかったって事か』」

首を傾げた黒子に、下宿人が鼻を鳴らしつつ吐き捨てる。

そんな二人？ に、これはほとほと呆れたと言いたげに健介が零す。

「結構酷かつたらしいんだよな。現場で走り回っている人達は、義父《おやじ》達SPIRITS隊と連携する事をむしろ歓迎してくれてたらしいんだけど、東京から移動してた統幕にいた偉いさんは、仮面ライダーごと怪人を焼き払えとか言い出す人間がいたとかさ」

「え？ 俺ライダーとSPIRITS隊が、東京から避難しそびれた人達保護してたって聞いてたけど」

大我の言葉に、その場にいた全員がああ当時生れてなかったが、下手打つと親や身内が死んでしまったかもしれないと思ひ改めて血の

気が引く。

そして、本音警部から指示を出され、健介と順平、大我と俊とは妙な面持ちで頷いた。

丁度その頃、お台場の海浜公園で人を待っている人物がいる。

統合幕僚監部に所属する、目黒圭一陸将補は、自衛隊の副幕僚長の朱堂連太郎陸将に密談の為、ここへ出向くように連絡を受けたのだ。

護衛として、制服着用した自衛官二人を控えさせ、目黒は静かに時計を見ていた。だが、呼び出した方が時間に遅れており、そろそろ予定時刻から一五分を経過しようとしていた。

「やれやれ、普段規則の規律のと仰る人が、ここまで遅れて来るとは」「それでもないさ、下準備にちよいと時間が掛かっただけさ」

目黒のぼやきに、バラバラつと武装した集団を背に同じように武装した、三〇歳に届くかどうかと言う男が現れた。服装は、自衛隊と言うよりサバイバルゲーマーのような印象で、所属隠しらしい。

男の顔を目黒は知っている様子で、眉を顰めつつ言葉を掛けた。

「水原三佐、これはどう言うつもりかね？」

後ろにいるのは、君の部下達のようなのだが、緊急配備が掛かっている筈も無いのに何をしているのかね」

「いいえ？　これから緊急事態になるんですよ、この日本から、未確認生命体を一掃する為に！」

制帽を目深に被った自衛官達が目黒を庇うのを見て、水原と呼ばれた男はにたりと笑う。

この男は、成績は優良だが格下への加虐癖があり、本来なら退役か、とても三佐などと言う地位に上がるような人材では無かったのだが、朱堂陸将に気に入られ引き上げられた人物だ。

当然、朱堂陸将の権威を笠に、同じような精神構造の者と徒党を組み、真面目に勤務している同期や後輩に嫌がらせよろしく、示威行動を日々取っているような連中だ。

「未確認生命体の一掃!!　自衛隊の武装で戦闘になれば、BADAN 戦役と同じ事態になるだろう！」

「それがどうしました？ 国家の大事ですよ？ 多少の被害は目を瞑って貰えませんか？」

自分の隣りにいるのが人の振りした怪物だなんて、想像するのも恐ろしいじゃありませんか」

そう言う水原と言う男は、言葉とは裏腹に手にしたライフルに頬擦りせんばかりに嗤った。

その目に、目黒は深々とした溜息を吐いた。

あの日、あの時、総隊長の目に、自分達はこの男のように見えたのだろうか。だとしたら、随分やるせない。

そう思いつつ、目黒は眼鏡を押し上げた。

「言葉は立派だが、私は君と同じ目をした輩を見た事があるよ。

東北地方を、赤心寺を襲撃してきたドグマとジンドグマの改造人間。暗闇大使に操られ、破壊衝動のみに突き動かされたケダモノ共。

君は、そいつらと何ら変わりのない、社会の敵だよ」

年老いた男《目黒陸将補》の言葉に、ひくりと水原のこめかみが引き攣った。

「は、怪人とよろしくやって出世なさった方は言う事が違う！

さすがは、怪人の倅をありがたがるお人だ！ 自分の地位を守る為に人類を裏切っておいて、よくもまあ仰ることだ」

「……誰の事を言っている？」

低くなった目黒の声に、勝ち誇ったように水原はこう言い放つ。

「滝和也ですよ、滝和也！」

あの男、生粋の人間じゃないって話でしょうが、その上国家反逆罪でぶち込まれた過去があるのに何故か無罪放免になり、拳句に改造人間と戦うなんてほざいてあんた達を集めて、お山の大将やってたそうじゃないですか。

しかもあいつ、FBI辞めて親であるマミーゼネラルに保護されたんでしょうが。全く、旨い事」

自衛官にあるまじき品性下劣な男は、それ以上喋る事を許されなかった。

護衛の一人——水原と並ぶと、軽く頭一つ低く且つ細く見えた——

が、一息で水原の懐に入り、ライフルを奪いその銃床で鳩尾を強かに殴り付けたのだ。

部下達共々床に転がった水原が、怒気丸出しで顔を上げると、護衛は奪ったライフルを肩に天秤に担ぎ、被っていた制帽を脱いだ。

それは、自衛隊の制服を着込んだ一文字空だった。

はっと、標的の方を見た水原は、相手を庇って立つもう一人の護衛が、『滝和也の息子』であり危険人物第一位とされていた滝海斗であることを悟ってギリツと齒軋りした。

「こいつらっ」

顔色をどす黒くした水原と、リーダーが殴られた事に動揺する一〇人を前にして、目黒は溜息と共に言葉を紡ぐ。

「滝和也と言う人物について、信用出来るリソースがある訳でも無く、またその人の人となりも知らないでいて良くそれだけの事を言ったものだ」

「なっー！」

「第一、滝隊長はFBIを辞めた訳では無いよ。

あの人はICPOに出向し、へホークアイ・ホールディングスへSPIRITS隊長として『有事の際マミーゼネラルを抹殺』する為に、単身敵地にいたのだよ。

財団Xから、何を吹き込まれたのか知らないが、あの人に保身なんて言葉は存在しないよ。

国家反逆罪は濡れ衣だったし、あの人は何時も前線で戦っていた。朱堂陸将のように、現場も知らずにヒステリーを起こしたりする人じゃあないんだよ」

「貴様っー！」

水原が激高し、部下達が銃を向けようとしたその時だった。

「よし、その不審者十一人、大人しく武器を捨てろ！」

自衛隊高官への傷害及び恐喝未遂の現行犯で、全員逮捕する！」

鋭い声と共に、彼らを囲うように完全武装の機動隊が囲み、そしてヘルメットは着けていないがG-3Xを装備したへS・A・U・Lの新條勇真警部補が立っていた。

「ば、馬鹿な、この公園の外には、俺達の仲間が」

「不審車両なら、もちろん職務質問させて貰ったよ。誰一人身分証明出来るもの持ってなかったから、須らく近場の警察署に連行させて貰ったけどね。」

お前さん達に至っては、色々不穏な事喋ってたからなあ、警察署の取調室で、色々聞かせて貰うよ?」

優しい表情で、だがそう言い切った目は間違いなく警察官のもので、新條警部補の姿に水原は怒りで赤黒くなった顔色で自分より若輩だろう警官を睨み付ける。

「俺達は自衛隊員だ、警察なんぞに」

「なーに言ってるんですか、犯罪犯せば自衛隊も政治家もありませんよ、大体、あんた達の持つてるそれ、現物の正式銃でしょ? その時点で銃刀法違反の現行犯ですけど?」

「だったら、そこにいる二人は自衛官じゃない、身分詐称」

「俺達に、階級章と所属章は付いてませんよ」

「そ、俺達自衛官のコスプレしてるだけだし?」

足掻こうとした水原を、今の今まで黙っていた海斗と空が蹴落としに掛かる。

言われて良く見ると、確かに二人の格好は少しずつ正式の制服ではなく、本来階級章が付く部分にはただのつるつとしたプレートがついていた。

標的《目黒》にばかり目が行っていた為、護衛に注意を払わなかった事を今更ながら後悔する男は、最後の足掻きと、部下の銃を奪い、次善の策——陸将補暗殺——を実行しようとした。

だが。

「見苦しい!」

「させねえって!」

左右からの、鏡写しの回し蹴りによって再度吹っ飛んだ水原は、込められた勁もあって、再び部下達諸共を巻き込み、今度こそ昏倒した。

軽く痙攣する水原をやるせない思いで見詰めた後、目黒は今の今まで隠れていた本来の護衛である部下達を呼んだ。そして、今まで護衛

についていたライダー二人に向かい直った。

「手間を掛けたね」

「いいえ、こちらからの問い合わせの結果ですし」

今回、こんな騒ぎになったのは『特殊科学研究室』での騒動が切っ掛けで、産業スパイをやらかした自称研究者の自衛官と、消息不明になった女性研究者について志賀博士が連絡を取り付けたからだ。

目黒陸将補ら元SPIRITS隊の自衛隊関係者も、未確認生命体過激派には警戒していたものの、まさかここまで露骨に動いていたのに気付かなかった事を悔やみ、以来連絡を取り合っていたのだ。

その上、 $S \cdot A \cdot U \cdot L$ から未成年誘拐を過激派達がやらかしているらしいと言う情報が入り、目黒達は揃って頭を抱えたのだ。

そして、今回関係者——和成とその知人、真也の後輩が誘拐された事を受けて、向こうが自衛隊内のSPIRITS隊関係者への人質にするだろう目黒自身が囹になって、向こう側の人員を取り押さえる事になったのだ。

リーダーが拘束搬送されるのを目にして、すっかり戦意を無くしたらしい不良隊員達は、大人しく警官達に促されるまま歩いて行く。

彼らを護送しつつ、新條警部補は三人の方に向かって軽く敬礼すると、無線交信しながら公園の外へと向かった。

「……BADAN戦役の事を、もう少しきちんと後進達に教えるべきでした。」

二度とあつてはいけない事としてだけではなく、無知と情報不足と妄信、これが現場でどれだけ自身の、ひいては部隊の足枷になるか。

その事をはつきりと伝えなかつたばかりに、現場を書類上でしか知らない朱堂さんの暴走を許し、彼の寝言に感化される若手を出してしまった」

「目黒さん」

一度目を閉じ、だが海斗に向かい直った目黒はぴつと敬礼をした。

「自分は、これから統合幕僚監部に戻り、軽拳妄動しようとする若い者達を押さえ込みに掛かりましょう。」

どうか、連れ去られた子供達をお願いします、ライダー」

「了解です」

「後の事はお願いします」

そう言うと、まるで鳥が飛び立つように二人の青年は走り出す。その背中に、かつて自分を救出した空飛ぶライダーと、誰よりも先陣切って走っていた総隊長の面影を見出し、万感の思いと共にかつての第九分隊隊長は敬礼を解いた。

時間は、少しだけ巻き戻り、とあるマンションの一室はパソコン三台を六人の人間が囲んで、ちよつと変な熱気に包まれていた。

ここにいる面子のうち、一人を除いた面子を見れば誠凛高校——特に黒子テツヤは顔を歪めたかもしれない。

「ち、またトラップか。この管理者は結構神経質だなつと」

そう言いながら、無表情な青年が黙々とキーボードを叩く。

その横で、普段は寝こけて居る念仏黒子の青年が、人類技ではない指裁きで打ち込んでいる。画面を見ると、これまた超高速で何やら英数字で文章が作られている。

その横で、同じく人間業ではない勢いでタイピングしていた麿眉の青年がいらいらと声を掛ける。

「健太郎、アンチウイルスは？」

「今出来た、流すから待ってくれ」

「全く、どうせ『財団X』謹製なんだろうが、自衛隊も欠陥ぐらい理解して使えっつんだ。他所の奴がトラップ起動させた後、そこがそのまま『財団X』専用リンクに代わるって事ぐらい調べておけよ」

そうぼやきつつ、しかし手は全く休めず打ち込み続けている。

そんなパソコン三台の横で、黙々とプリントアウトされるA4用紙を整理する前髪で目の隠れた青年は心なしか不機嫌そうだ。

そして、一見するとヤンキーそのままの三白眼の青年が、そこにいる人数分の蓋つき紙コップ（某コーヒー店のような蓋を取らずに飲めるスタイル）と、手を汚さず食べられるスティック付きのミニケーキを持って、奥のキッチンからやって来た。

「ういっす、糖質補給用のケーキとアントシアニン補充用のブルーベ

リージュース持つて来たぞ、皆暇観て食ってくれ」

テーブルに置いたそれを、其々が手を伸ばし、各々食べ始める。

そうしておいて、ヤンキー、否山崎弘はジュースを彼らとは別のテーブルでタブレットをいじっている青年へと運んだ。

そこでタブレットを睨んでいたのは、仮面ライダー電王こと香山閃だ。

今、閃は高校の後輩である霧崎第一高校バスケット部の協力の下、『財団X』からの情報の流れを辿る形で自衛隊過激派の動きを探っている真つただ中だった。

止むを得ずとはいえ、後輩を使う事を閃は謝ったが、寧ろ花宮真は「頼って貰えなかったら、泣くところでした」

と、真顔で返していた。

実際問題として、閃は霧崎第一高校の卒業生であり、一年間とはいえ花宮達の上級生——先輩であったのは事実だ。

だが、『悪童』と綽名された花宮真が、閃を慕うのは別の理由がある。

花宮真は、中学三年から『ライアーキッドイマジン』に取り憑かれていた。

花宮には、幼い頃可愛がってくれた叔父がいた。

生真面目で、善良な正義感の強い彼は、『素晴らしき青空の会』のファンガイアハンターの若手として活動していた。

だが、花宮が五歳の時、叔父は殺人犯として逮捕された。

叔父が殺したのは、花宮の知らなかった叔母。

ファンガイアの貴族と駆け落ちした、一族でみそつかすと冷遇されていた女性。

叔父は、これまでもファンガイアと関係を持ったと見做した人間を何人も殺しており、実の姉も殺害したのだ。『人類の裏切り者』と、相手を罵りつつ。

だが、司法から自分のやった事が単なる殺人でしかなかったと突き付けられた時、叔父は現実を受け入れる事に耐えられず、自殺した。

姉を、人々の命を奪った銀製の矢じりを付けたボウガンで、己の心臓を貫いて。

それまで叔父を褒めちぎっていた親族は、彼が逮捕されるや掌を返して罵った。

そして、幼い花宮の前で、叔父のようになるな、善悪を取り違うなと言いつけた。

そんな事を言った親族達は、花宮が知らないところで「恥を知れ！」と、金色の鎧を着込んだ人間に薙ぎ倒されていたが。

大人達の矛盾と圧力に、彼らの望む「いい子」を演じていた花宮はだんだん追い詰められていた。中学生になって、自分をいじってくる『先輩』に出会って、少しだけ息を吐く事が出来ていた状態だった。

だが、その先輩が卒業し、高校進学が目前になって親族達からの過干渉がまた始まり、花宮は追い詰められていった。

そして、帝光中に負けたあの日、『ライアーキッドイマジン』が現れたのだ。

「望みを言いな、一つだけ叶えてやるよ?」

「……じゃあ、『いい子』を止めたい」

花宮の応えに、砂の塊はにたりと笑い。

『ライアーキッドイマジン』は花宮に取り憑き、そして周囲が知る花宮真となったのだ。

このイマジンは、普通のイマジン達よりも我が強いのか、他のイマジンのようにゴールデンライオンイマジンの指示に従うのではなく、自身の欲に忠実に動き回る存在だった。

結果、高校一年にして霧崎第一高校バスケット部を掌握した花宮——否『ライアーキッドイマジン』は、ラフプレーによって周囲を傷付け、『いい子ちゃん』を突き落として笑い飛ばし、大人達の前で優等生を演じて舌を出した。

そうやって、誰も彼もを傷付けていたイマジンを倒したのが、香山閃こと仮面ライダー電王だった。

『未確認生命体対策班』こと〈S・A・U・L〉に、一般協力者と言う肩書で協力する事になった閃は、校外の騒動で東奔西走する羽目になっていた為、自身の学校にイマジンがいる事に気付くのに時間が掛かったのだ。

イマジンが倒された後、自暴自棄に陥り泣き喚く花宮を前に、閃はじつとその支離滅裂な話を聞き続けた。そして、喚き疲れて肩で息をする花宮に向かってこう告げた。

「別にいいんだよ、良い子じゃなくて。」

大人の身勝手に振り回されて疲れたな。良いんだよ、大人の言い分なんて、勝手なものなんだ。ちゃんとした大人なら、子供だからって決め付けないし、子供の言う事も聞いてくれる。

そう言う事が出来ない奴は、大抵そいつ自身が出来なかった事を子供に押し付けてる奴なんだ。そんな奴、大人として敬する必要ないよ。

お前がやった事は確かに悪い事で、非難される事で、でも、それでお前がもがいてた事実を否定して良い訳じゃ無い」

閃にそう言われ、抱き締められて頭を撫でられ、花宮は今度は声を押し殺して泣いた。

それ以来、花宮は閃に対してだけ、他の人間とは少し違う対応を取るようになった。

傍目には他の人間と同じように、礼儀正しく対峙しているようだが、より感情を見せるようになったのだ。

花宮を変えた——救った閃に感謝したのは、部員であり実は縁戚である山崎弘だ。

花宮の一門の中では常識的で、また親族で唯一叔父の弁護を試みた山崎の父は、その為に縁切りされていた為、花宮は山崎が親戚である事を今まで知らなかった。

だが、山崎の方は大人達の傍で、人形のように座らされていた花宮を知っていた。——たまたま進学先が一緒になったものの、縁切りされた人間の子供が近付けば却って花宮が迷惑すると思つて距離を置こうとしたら、部活でガチ当たりした不幸体質だったりする。——

因みにバスケ部で唯一、閃に反発したのは原一哉だったが、不良よろしく絡みに行つて、ナイフを振り回すコンビニ強盗を片手でぶん投げて取り押さえた姿を目撃して以来、彼の前では大人しくしている。

「先輩、へS・A・U・Lの方はどんな感じですか？」

「あまり芳しくない、と思う。自衛隊が肝心な場所への通路を封鎖して、警察車両を通せんぼしやがるらしい。」

本音警察部がぎりぎりしてるのが会話にも出てて、正直同じ現場にいないで良かったって思っちゃまうよ」

溜息交じりに閃がそう言えば、一仕事終えてぐつとジュースを飲み干した大仏黒子——瀬戸健太郎が画面から目を放す事無くこう言った。

「私有地と言うのが更に厄介な。まあ、逆を言えば、私有地に自衛官を警備に立てていると言うのは立派な公私混同だとも言える」

「公私混同するから、私怨から武力による未確認生命体撲滅なんて事を、お題目として言えるんじゃないか？」

首を鳴らしつつ無表情な青年——古橋康次郎がぼやけば、めんどくさいと言う空気を感じもせず原一哉——目を前髪で隠した青年がこう言い放つ。

「ああ、もう、めんどくさい！」

香山先輩、あの異次元特急で乗り付けてやりやいいじゃん、こんなところで油売ってないで……イデー！」

「馬鹿野郎、そんな芸当出来たら今苦労するか！」

口の減らない同期の後頭部を叩《はた》き、花宮もずっとジュースを飲み干す。

原の言葉に、他の四人も何とも言えない顔になる。

「馬鹿だな」

「物知らず」

「デンライナーは自家用車じゃないんだって」

「イマジンが入り込んでるって言うならともかく、ただ非常線突破と言うのにデンライナーを使うのは」

困ったように閃が答えた、その時だった。

『ふむ、要は電王が出撃する口実があれば良い訳だ。

良かろう、その私有地とやらにイマジンを集めよう。何、特異点が生居ると噂を流せば、すぐさま集まって来るだろう』

第三者の声に、ぎよつとなつた六人の視線の先で、何時の間にか応

接セットのソファアールで寛いでいた赤、黄砂色、オレンジ、黒のイメージがいた。

額を押さえるウルフィマジンの横で、黒い鷲型のイメージが優雅に手を振って見せた。

殺到

ざわざわと言う耳障りな音に、黄瀬涼太は頭を一拍りして起き上がった。

体調不良から家に帰るよう言われ、付き添うと言う中村真也を待つて校門のところにといたら、突然停まった黒塗りの外車に引きずり込まれたのだ。

逃げようともがいたが相手はまるでレスラーか何かのようにながつちりとこちらをホールドし、嫌な臭いのする布で鼻と口を覆ってき

た。
何度か息をするうちに急速に意識が落ちていって、これが麻酔かと頭の片隅で思いつつ、黄瀬は意識を手放していた。

そして今、身体を起ここした黄瀬は自身が海常のジャージを脱がされ、手術着か何かのようなものに着替えさせられた上でひどく狭い場所に閉じ込められている事に気が付いた。

いや、ガラスかアクリルかは良く判らない。透明な、だが外の音声が殆ど聞こえない材質のものに四方を囲まれている事に気付いたのだ。

音は、薬物の影響か何か故の耳鳴りだろう見当を付けつつ、黄瀬は目を細めつつ周囲に居る人間達を見た。

こちらが起きた事に気付いているだろうに、誰一人として黄瀬の方を見ようとしなない白衣の集団の中で、二人だけ空気の違う人間がいた。

一人は、二十代半ばくらいだろうか、同世代だろう女性に食って掛かっている。

食って掛かっている方は、二十代半ばくらいだろうか。化粧っ気が無く、バツサリと首元で切り揃えた髪が、自身の外見に手を掛けるよ

り参考書にお金を掛けていそうな雰囲気的女性だ。
食って掛かられている方は、二十代後半、三十までは行ってないだろうそれなりに容姿の整った——ついでにそれなりにお金をつぎ込んで

いるらしい——女性だ。だが、周囲の人間須らく見下した空気を

纏っており、芸能界でも稀に良く見ると言う、空気読まない系女王様タイプに見えた。

(あ、この人自分の思い通りにならなきゃヒスる女性だ)

仕事先で腫物扱いされているのを、ちやほやされると勘違いして暴れ回った挙句、所属事務所から迄干された先輩モデルを思い出し、黄瀬は思わず肩が落ちた。

これから自分がどうなってしまうのが、げんなりしつつふつと顔を上げて白衣の集団の奥を見た黄瀬は、その光景を見てぎよつとなつた。

壁の一部に、どう見ても言い訳出来ない鉄格子が嵌められており、その奥で力無く折り重なるように倒れている大きい子で十四、五歳、小さな子は小学校低学年ぐらいだろう子供が、六、七人見えた。

そして、その鉄格子の出入り口らしい場所の横の方に立っている、自衛隊の制服らしいものを着込んだ赤い髪の緑間真太郎そっくりな人間に、である。

(緑間うち?! いや、おは朝だとしても何かおかしい?)

第一、緑間たちはおは朝に運命握られた変人だけど、あんな状態の子供を見て放置するようなヒトデナシじゃないっすよ!?! 誰だ、あいつ!?)

黄瀬のものの想いを知る由も無い、緑間そっくりな人物は仮面のように表情を変える事無くそこに立ち続けていた。

自宅に向かって、日向順平、伊月俊、相田リコの三人は歩いてきた。一見すると何時も通りだが、俊の手に見慣れない、玩具じみた大振りな指輪が付いている事と、順平が何かをすぐ取り出せるよう、ジャージのポケットに片手を突っ込んだままなのに気付く者はいない。

あと百メートルほどで自宅と言う、ちよつと人通りの途切れた当りで、ばらばらつと六人ほどの黒いサバイバルゲーム参加者のような恰好の人間が三人を囲んだ。

誰もが百八十センチ越え、筋骨逞しいレスラー体型の男達で、単純

に格闘戦に持ち込まれたら順平も俊も一瞬で抑え込まれてしまうよ
うな、嫌な圧力があつた。

「何だよ、あんた達」

機嫌の悪さを隠す事無く順平が問えば、男達のリーダー格が銃を向
けて来た。

黒光りするそれは一見するとエアガンのように見えたが、プラス
チック製の実弾銃がある事を講義で聞いている順平は、眼鏡の奥の目
を細めて男を睨んだ。

「ふざけんな、街中で何出してんだよ。」

警察呼ぶぞ、女の子がいるのに何考えてやがる」

「静かにしろ。大人しくお前とそこの優男が付いて来るなら、そこの
小娘は放置してやる。」

従わないなら……おい、何だ」

「た、隊長!？」

リーダーの男は、脅そうとした相手があからさまに顔を引き攣らせ
たのを見て、疑問に思ったその次の瞬間。部下の警告より先に、男の
意識は刈り取られていた。

サバゲーマーに身を窺しているとは言え、現職自衛官を延髄切り一
撃で仕留めた存在。それは。

「おう、てめえら何処のもんだ。」

俺のリコちゃんにぬああにするつもりだ、ゴラ」

「え、あ?」

シュゴハーっと、瘴気とも吐息ともつかないものを吐きつつ、ガ
シャンっとシヨットガン（塩弾入り）をリロードし逆光を背負って立
つのはリコの父、相田景虎だった。

乱入者に戸惑う不審者達より先に、娘の鶴の一声。

「パパ、こいつらよ! 電話で話したつけ回してる連中!」

日向君たちと一緒にならって思ったけど、凶器で脅して来たの、助け
て殺される!!」

「ぬあんだとおおおおおお!!」

……後は、ただただ殺戮の嵐だった。

蹴り、殴り、踏み躪る、親バカの逆鱗、虎の尻尾を盛大に踏んだ——彼らはそれを意図したつもりはさらさらなく、単純に標的に対する人質のつもりだったが——不審者に身を窺した自衛官達は、あつという間に叩きのめされてしまった。

満足げにその様子を眺めるリコに向かって、一応『正義の味方』の看板を背負う幼馴染み二人が声を掛けると。

「えーっと、リコさん？」

「学校を出る前に、パパに電話しておいたの。幾ら自衛官相手でも、『仮面ライダー』が戦うのは不味いんじゃないかと思って」

「景虎さんに逮捕歴が付きそうだよ!」

俊のか細い声に、からりと笑って娘はこう言い放つ。

「大丈夫大丈夫、相手銃刀法違反してるみたいだし」

「……うんまあ、もう片付いちやってみたんだし、まあいいか」

積み上がった、ガタイの良い兄ちゃん六人の上でファイティングポーズを決める元全日本バスケット選手から眼を逸らしつつ、順平は改めて自身の携帯を使い警察へ通報した。

勿論、数分後に駆け付けた警官達は、逆海老の状態で縛り上げられ泣いている男達とまだ収まらない様子の保護者と、彼を宥める娘さんに武装解除で取り上げた銃火器を前にげんがりしている高校生二人を見出し、どう報告したものかと頭を抱える事になるのだが。

「おう、日向達の方はもう蹴り付いたらしいぞ、何でもカントクさんの親父さんが蹂躪して終わったってさ」

「あー」

『怖いな親バカってなあ』レイヴ、思っても言っちゃダメな事があります」

移動するワゴンの中で、タブレットに流れる情報を見ていた福井健介が苦笑交じりにそう告げると、誠凛高校二年生コンビ+αは遠い目になる。

娘を溺愛するあまり、幼馴染み二人にすら時にモデルガン突き付ける父親を知る二人には、大体予想通りと言ったところだった。

「それより、これから火神君と福井さんはどうするんですか？」

「おう、俺達は基本待機だ、捕まっている子供がどこに居るのか、それを突き止めなきゃ話にならねえからな。清志の奴がまだ退院出来ないし、順平達は説明やら何やらで合流は難しいらしいから、俺達が戦力だな」

そう言う健介の顔は厳しい。

かつて、家族を亡くした頃の自分と変わらない年頃の子供が、親元から攫われ拳句に命の危険に晒されていると聞かされ、心中穏やかではなかった。

また、彼の義兄弟と言うべき滝家の子供には、同じような状況で保護され、メンタルケアに時間の掛かった者も大勢いたのだ。

「馬鹿どもに捕まっているのは、黄瀬と緑間、高尾以外にも小中学生が最低でも五、六人下手打つともっと拉致られて監禁されていると見られる。

まずは、その子達の安全確保しようって話になったって事だ。あの連中、超常能力を持つてるから人間じゃないって、無茶な事言いだしかねないからな」

「oh……、本気かよ」

「そんな」

絶句している大我と黒子に、これは嘆息交じりにレイヴが答える。

『この間、シヨーゴの奴と一緒にだった時に変身解いてたあいつは無視されて、俺達とタイガばかりが追い回されただろう？』

向こうさんにとって、「普通とは違う」ってのは「何やっても良い」って言う免罪符になっちゃってんじゃねえか？』っ!？」

「ま、黒子には納得いかないだろうが、ねじ一本外れた人間の発想は正気の人間には理解出来ない事ばかりってな」

健介の言葉に黒子は何か言いたげに口を開いたが、運転手の

「合流地点が見えたよ」

という声に口を閉じた。

その言葉通り、フロントガラスの向こうに何台かのパトカーに紛れるようにして、市販品とは思えない派手なデザインのバイクが見え

た。

拉致に使われた四トントラックから引きずり降ろされ、高尾和成と緑間真太郎は長銃を突き付けられ歩かされた。

歩数で考えるに、距離的には五十メートルと言ったところか、殺風景なコンクリ打ちっぱなしの空間が急に開けたと思うと、そこは白衣の集団が右往左往し、狭めの体育館くらいの広間の中心に巨大なシンダーが鎮座している。

そして、そのシンダーの中に顔見知りの青年が捕らわれているのを見て取り、和成の喉がヒュウツと音を立てた。相棒の反応に、その視線の先を見た緑間も、憔悴した様子の元同中の顔を見出しカチャツと眼鏡を押し上げた。

「ちよつと、余計な者連れて来て！ 実戦隊は何しているのよ！ 水原のゴリラはまだ帰って来ないの！」

「ゴリラだから、野生に帰って走り回ってんじゃないの」

ヒステリックな声に、吐き捨てるような女性の声が答え、間髪入れずにパアンツと、張り倒す音がした。

「生意気な事言うんじゃないわ！ あんたはR-01のシステム調整やってなさいよ！」

キンキンと声を張り上げる、自衛隊の制服の上に白衣を羽織った女性性は、苛立っているのを隠す事無く周囲の男性職員に命令する。

「さあ、未確認生命体を排除する為に、準備するの！ そうね、日向順平はまだ来てないのね、じゃあ、高尾和成をシステムに入れて頂戴。R-01が出撃するわ！」

「はあ!？」

「高尾に何をやる気なのだよ！」

驚く和成と殺気立つ緑間とを、白衣の集団が引き離そうとする。

男達の向こう側で、黄瀬が捕らえられているものよりは小さいが一人が何とか収まりそうなシンダーが、ゆっくりと口を開こうとしている。

先程リーダー格らしい女に殴られた女性が、手に持った書類ケース

で男達に殴り掛かる。

その女性の顔を見て、高尾が驚いたように顔を上げる。

「唱子^{しやうこ}さん、いや三井さん!？」

「ふざけんじやないわ、守るべき子供をあんなに酷使した挙句に、今度は滝さんところの子まで！」

あんだ達の戦争ごっここの道具に、子供を使うんじやないわよ！」

三井唱子の叫びに、男達の背後で花村咲夜一尉が馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

「子供って年じやないでしょ？ 大体あそこの餓鬼どもと黄瀬涼太は人間もどきだし、その高尾和成は元々『財団X』の研究物だったんだし、それらしく扱う事の何がいけないの？」

『大事の前の小事』って知ってる？ 日本国民一億人の為に、高々二〇人足らずの人間もどきを酷使したからってどうだって言うの？」

「子供を酷使している時点で、あんだ達が真つ当じやないのは丸解りだわ！」

声高にそう叫ぶと、三井唱子は和成と緑間を背に庇う。

そんな彼女を、花村一尉は心底どうでもいいものを見る目で睨む。

「ああ、そう言えばあんだ、『バダン協力者』の娘だっけ？ あいつらに同調してる当たり、やっぱり蛙の子は蛙って事？」

「私の父は『BADAN』に誘拐されて、協力を強要された挙句に殺されたのよ！ あんだ達こそ、自分達に逆らえない子供に暴力振るってにおいて、やってる事まるつきり『BADAN』じやない！」

それに、それにあんだ達が馬鹿にしてる滝和也って人はね！ 誰よりも優しい、『正義の味方』なのよ！ あんだ達みたいに、平地に乱起こして世の平穏を乱そうって人間が、あの人を貶めるんじやないわよ！」

三井の言葉に、花村の念入りに手入れされた細い眉が吊り上がる。また、『BADAN』と一緒に言われた自衛官達が戸惑う者といきり立つ者とに分かれる。

その時だった。

「我々のしている事は、日本と言う国にとって有益ではないのか？」

さらに後方からの声に、思わず和成と緑間は振り返る。

三井女史は、目の前の連中から目を離す事無く、こう言い切った。「この国の次世代である子供を虐待しているような組織が、この国に益を齎す訳ないでしょ？」

こいつらは、自分達がこの国で権力を握る為に、未確認生命体とか改造人間とかを排斥しようとしてるのよ。R-01の性能なら確かに未確認生命体を倒せるかもしれない。

でも、その兵装の制御に使われる子供を、何人半死半生にするつもりなの！ 自分より弱いものを踏み躪る連中が、真つ当な世界造る筈ないわ！」

「そうか」

「R-01、そんな連中の世迷言を真に受けては駄目！ 貴方は私達の切り札なのよ！」

ヒステリックに叫ぶ花村に、だが新たな声は静かに否を告げた。

「自衛隊は専守防衛の為の組織であり、国民の権益と安全を保障する組織である。

少なくとも、私の行動理念ではそう規定されており、少なくとも日本国民である存在を蔑ろにして良いとはされていない。

よって、花村一尉の発言及び命令は統合幕僚本部に報告し、判断を仰ぐべき暴言であるとみなす」

「な?」

後ろ側から、和成達を取り押さえようとしていた男達を、真つ赤な拳が打ち払う。

「うわ」

「あかい、マスクマン、だと?!」

深紅のマスクと、同じく真つ赤な全身スーツを着込んだ存在が、周囲へと威嚇を込めて視線を巡らせる。

思いもしない、我が子と等しいR-01の反乱に花村一尉は暫くはくはくと口を開け閉めしたかと思うと、般若もかくやの表情で何か言葉を発しようとした。

だが、その前にどんつと、下から上に突き上げるような衝撃が走つ

た。

「うわあ!?!」

「高尾!」

「なに!?!」

「未確認生命体反応!?!」

R-01が警戒する中、誰何の声に答えたのは引き攣った自衛官の声だった。

「し、施設内に、未確認生命体の集団が雪崩れ込んでいますっ」

「何ですって!?!」

それと同時に、けたたましいほどの音量で警報が鳴り響いた。

施設内で事態が起きる、一〇分ほど前。

外で事態を見守っていたライダー達に、特殊科学研究室から連絡が入った。

正直、良い情報では無かった。

「それは本当ですか、志度博士!?!」

思わず跳ね上がった滝海斗の声に、三々五々待機していたライダー達が顔を上げる。

スマートフォンの方こうから、憔悴した様子の老人の声が事態を肯定する。

『ああ、申し訳ない。』

南原君を捕まえた事で、こちらが気を抜いてしまったとしか言いようがない。隙を突かれて、アストロドライバーを持ち出されてしまった』

「判りました、こちらで回収可能なら、回収します。だからあまり自分を責めないで下さい」

そう言つて通話を切った海斗に、頭を掻きつつ一文字空が声を掛ける。

「マジか、アストロドライバーが盗まれたって」

「うん、どうも南原さん以外にもスパイがいたみたいで。あの人が騒ぎを起こしたのを見越して動いたのか、元々あの人が高尾だつたの

かは判らないけど」

「猫達が反応しなかったってのが奇妙だな。猫達を警戒してたか、……あ、一人猫アレルギーだって言ってたのいたな」

空の言葉に、安全の為対刃対弾仕様のライダースーツを着込んだ大我が首を捻る。

「猫がどうかしたのか…:です?」

「ああ、義親父おやじの友達おやじの袋猫が、盗人を見逃したのが変だって話。そう言えば柑橘系のコロナ使って無かったか、そいつ」

同じく準備していた健介の言葉に、それだと手を叩き、合流した黛千尋が顔を顰める。

「ネコ科は柑橘の香りが弱点だからな。狙ってたのか偶々だったのかは不明だが、猫達が近付けなかったんだろう」

「あー、まあ、やる事に一つ増えたただけだ、このままでいいんじゃないやね?」

健介の言葉に、年長者達は「あー」と言う感じで遠い目になる。

その中で、事態が見えない黒子@レイヴが手を上げた。

「あの、アストロドライバーって言うのは一体」

「宮地兄が使ってる簡易ドライバーの完成版で、和成が愛用してるフードロイド達の動力源であるアストロスイッチの本来の使用方法だな。」

小規模なラボで研究されていたんだが、そこが『ホロスコープス』に襲われてな、研究者は殆ど亡くなり、研究物を持って逃走していた関係者が、SPRITS隊に保護されたんだ。

その後、『ホークアイ・ホールディングス』が資金を出してるSPIRITS隊との共同研究室で、完成させる為に研究していたんだ」

千尋がそう言うと、海斗が言葉を足す。

「つい最近完成したんだが、しかし何の為に盗んだんだろう。」

こんな事は言いたくないが、未確認生命体を掃討する為に独自兵装を作り出したそうなのに」

「あー、考えられるのは二つ、更なる支援を『財団X』から引き出す為の交渉材料か、さもなきや、『ホロスコープス』を引っ張り出す為の餌、だろうな。」

……それが交渉目的か殲滅目的かは、判らねえけどな」

海斗に更に言葉を足した空は、本気で頭が痛いと言いたげにこめかみを押さえた。

いや、暫く目を閉じていたと思うと、焦った顔で空は仲間達を見回した。

「やばい、何か一杯未確認が集まって来てる！」

「そら？」

「確か、閃がイマジン喚けるとか言って無かったか？」

千尋の言葉に、健介と大我はぎよつとなるが、それ以上の爆弾が、暫く黙って施設がある方を見ていた海斗の口から零れる。

「イマジンだけじゃない。魔族と、グリードと、……アンノウンの気配がする」

「兄ちゃん、それって!?!」

「たまらんな、感知力No.1、No.2が言うって事は」

「狙いは、あそこに捕まっているだろう超常能力持ちの子供と、カズと黄瀬か！」

ライダー達が戦慄する中、ビツと短い音を立てて彼らが耳に付けているイヤフォンに連絡が入る。

発信者は、〈S・A・U・L〉の中央管制室からだった。

『〈S・A・U・L〉中央管制室TOP—Kより民間協力者各員、未確認生命体多数を感知、出撃を要請します』

「Call No.1、了解」

「Call No.2、了解した！」

「No.6判った！」

「Call No.7、出撃する」

『兄』達が次々に返答するのに習い、大我也慌てて名乗りを上げる。

「こ、Call No.9、出撃する、ます!?!」

「落ち着いて下さい、火神君『慌てんな、ほら、ライドベンダー起動するぞ!』」

相棒達に引っ張られる中、イヤフォンに灰崎祥吾、中村真也の声も届く。

『Call No.3、突っ込むぞ!』

『Call No.4、俺達は黄瀬と和成達の保護を優先する!』

『Call No.5、すまん、こっちはイマジン優先で撃退する』

最後に、香山閃の声が入る。

「判った、俺達は子供達の保護を最優先としつつ、未確認生命体の撃退を目指す。

センターコール、ナビゲートお願いします」

『S.A.U.L』中央管制室TOPK、了解です。

G3-Xも随時突入し、子供の保護を優先します』

海斗の声を受け、S.A.U.L』からも返答が入る。

それを受け、ライダー達はそれぞれ変身する。

黒いボディに金の角　が、　赤いボディに金の角　が、
黒い龍のバックルを持つ鎧騎士が、蝙蝠を思わせる紅い騎士が、そして三原色も目に眩しい黒い仮面ライダーが現れる。

アギト、クウガ、キバはそれぞれのバイクに、ビーストは新たなマントリングで呼び出したジャバウォックの翼で、そしてオーズはセルメダルで起動させたライドベンダーに跨ると、数百メートル先の目的地へと発進した。

まるで湧き出したように、研究エリアに現れた未確認生命体の集団に、研究者として籠っていた男達は阿鼻叫喚のパニック状態に陥った。

無論、これまで実働隊やR-01の動きをモニター越しでしか見ておらず、それこそ戦略シミュレーションの延長ぐらいにしか状況を把握していなかった彼らは、目の前で同僚を切り刻み、その血で真っ赤に染まった刃物や爪を向けて来る異形を前に、簡単に正気を吹き飛ばしてしまっていた。

絶叫しながらその場から逃げ出す者、その場にへたり込み失禁する者、デスクの下に潜り込み、身を固くする者、判っているのは、そこにいるものの中で自衛官として事態の収集を図る者はほぼいなかった。

「何やってるの、護衛の連中は!？」

いや、一人ヒステリックだが事態を（彼女なりに）収集しようとしている花村一尉がいたが、だが。

「いいねえ、いっそ無能なのに偉そうな上、欲塗れなのが気に入った。

お前なら、良いヤミーの親になる」

「な!?! あああつ!!」

ぬるりと、女の前に緑色のカミキリムシともバッタともつかない姿の怪人が現れ、彼女に向かってセルメダルを投げた。

彼女の胸に、いきなりコインの投入口が現れたかと思うと、滑るようにメダルが吸い込まれた。

そして一気に彼女の身体がメダルに覆われたかと思うと、彼女の肌は薄い焦げ茶色に染まり、硬いキッチン質で固められていく。だが、ブクブクと膨らんでいく下半身は、白く染まり動けない部下達を押し潰しかける。

その光景に、緑間真太郎は目を極限まで開き、三井唱子は絶句し、R—01は自身の開発者ハハオヤの変貌に凍り付き、そして唯一動けた高尾和成が三井と緑間の腕を引いた。

「二人とも、動いて、じっとしてたら危ない!」

「そのあんたも、早く!」

『鷹の目』で周囲を見回し、黄瀬の方へ行く道筋を探すが、色々な種の未確認がごった返しているのを見出し舌打ちする。

だが、その時だった。

和成には耳慣れた、二種類の独特な排エキーストノット気音が迫っているのに気付いて、慌てて壁際へと皆を促した。程なく、濃ミッドナイトブルーライトグリーン紺と萌黄のツートンカラーのバイクと、何処となくSFチックなデザインのバイク、そしてそれに跨った仮面ライダーHOPPERと仮面ライダー555とが飛び込んで来た。

「カズ、無事か!」

「祥ちゃん!」

「灰崎!」

「祥君!？」

知る者が見れば、かつての仮面ライダー一号、または二号を思わせるマスクを付けたHOPPERの姿はドキツとするかもしれない。実際問題として、赤いマスクマンの方は驚いた様子でメタリックなライトグリーンのスーツに赤い複眼、大きな顎クラッシャーを持つ姿を凝視している。

周囲を見回していた555が、檻に入った子供と、その反対側でシンダー状の密閉器に閉じ込められた黄瀬の姿を確認し、通信機に向かって叫んだ。

「555だ、拉致られた人間を発見したが、未確認が集中している！早く来てくれ、なんか巨大化してるのもいる！」

555に向かって、和成が声を張り上げる。

「あの女王アリっぽい、女性自衛官に緑色のグリッドがメダル入れた所為で現れたんです！」

「て事は、あれはヤミーってか、どう見てもシロアリの女王だろ、あれ!？」

どことなく引き攣ったHOPPERの言葉に、緑間とR-01が揃って身を引く。(シロアリはゴキブリの仲間)

そんな事を言いつつ、HOPPERと555は未確認生命体を殴り飛ばし、蹴り飛ばすものの、何処かにスポンブロックでもあるのかと言わんばかりに未確認は押し寄せる。……尤も、未確認同士で潰し合う個体も幾つもいる為二人でも何とかなっているが、殆ど前に進めていない。

自衛官らしかった男達はと言うと、半数は逃亡し、もう半数はボロボロになって転がされ、傍目には生死も判別出来ない。

そんな状況が好転したのは、外で待っていた面子が合流した事で、一気に未確認が動いた為だ。

「遅くなった、すまない！」

「オラオラ、俺のデイナーになる奴はいるか！」

バイクで雑魚敵を跳ね飛ばすアギトの横で、漆黒の皮翼を広げたままダイスサーベルを構え、ビーストがグールが固まるところへと突っ込んでいく。

「子供はこっちで引き受ける！ HOPPER、555、黄瀬を任せ
る、キバ、カズと三井さんと緑のを頼む！」

オーズ！ あのデカいのはヤミーだ、任せる！」

「それは良いが、あの赤いのはどうすればいい？」

「うわ、でつけえ!?!」

「し、白アリ？ 『こりやあいい、大量だぞ』」

クウガの指示に、キバは保護対象と共にいるマスクマンに困惑し、
オーズは何かに怯えて動かない巨体に素直に驚き、同じく驚く黒子の
中で、赤いグリードは舌なめずりした。

その最中、これまで動かなかった女王シロアリヤミーが、何かに弾
かれたように暴れ始めた。

「いい井伊イイヤああアアああああアア!!」

「グげっ!!」

「ぎゃあ!!」

ドツタン、バツタンとキッチン質で固まった手足を振り回して暴れ出
し、それなりに広かった筈の研究室の四分の一を占拠する女王アリの
腹部が、大きく左右に振られて残っていた機材諸共未確認生命体を薙
ぎ倒す。

叩き付けられ、踏み潰された機材が火を噴き、同時に今まで硬く黄
瀬涼太を閉じ込めていたシリンダーがゆっくりと口を開いた。

「555!」

「判ってる、黄瀬、動けるか!」

HOPPERが零れて来る未確認を払い除けるうちに、555が黄
瀬をシリンダー状の機器から助け降ろす。

その向こうで、キバとR-01に誘導され和成と緑間、三井女史が
手近な通路から外を目指す。

そしてアギトとビーストが未確認達が近付くのを防ぐ間に、二人の
G-3Xと、完全防備状態の機動隊二部隊が走り込んで来た。

「クウガ、アギト！ 子供達はこっちが引き受ける!」

「G-3X、PHO09よりセンターコール!」

拉致被害者発見、民間協力者と共に回収します!」

G3—X・PH005こと本音恭一郎の指揮で機動隊の一隊がシールドを構える中、G—3X・PH009こと新條勇真が通信機に向かつてがなる。それを受けて、中央管制室から返信が入る。

『S・A・U・L』中央管制室TOP—KよりG—3X・PH005、009へ。

被害者の保護を最優先してください。あと、負傷者も随時搬出してください』

「G—3X・PH005了解！」

「G—3X・PH009、負傷者多数、緊急搬送の手配を頼みます！」

中央管制室からの指示を受け、担架を抱えていたもう一隊の方が子供と、手近なところに倒れている自衛官達を運び出しに掛かる。

その警官達に襲い掛かろうとする未確認を、G—3Xと共にアギトとクウガが殴り飛ばす。

この時点で、事件は終息に向かっていると、その場にいる人間——警官達も、仮面ライダー達も——皆が思っていた。

朱堂と言う男が、『仮面ライダー』と言う存在にどれほどの憎悪を抱いているかを、誰も知らなかったのである。